

宮城県文化財調査報告書第238集

# 山王遺跡・市川橋遺跡の調査

— 都市計画道路（主要地方道）『泉—塩釜線』関連調査報告書Ⅷ —

平成27年10月

宮城県教育委員会  
宮城県土木部



宮城県文化財調査報告書第238集

# 山王遺跡・市川橋遺跡の調査

— 都市計画道路（主要地方道）『泉—塩釜線』関連調査報告書Ⅷ —

平成27年10月

宮城県教育委員会  
宮城県土木部



# 序 文

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災からはや 4 年半が経過しました。現在、県内陸部では、震災の影響はほとんど感じなくなり、道路・鉄道などのインフラ整備も次第に進んできました。しかし、沿岸部はいまだ復興まで時間を要する状況で、改めて沿岸部の早期復旧が急務と認識しているところです。

さて、東日本大震災の復旧・復興関連事業では、迅速な事業実施と埋蔵文化財の保護との円滑な調整を図ることが重要になりました。そのため、平成 24 年度以降、本県では埋蔵文化財の保護行政を弾力的に運用するとともに、自治法派遣による全国からの埋蔵文化財専門職員の応援、関係機関の協力によって発掘調査体制を強化し、年々増加する復興関連事業に伴う発掘調査に迅速に対応してまいりました。

本書は、平成 25・26 年度に実施した多賀城市山王遺跡・市川橋遺跡の発掘調査報告書です。この発掘調査は、復興関連事業に位置付けられた都市計画道路（主要地方道）泉一塩釜線 4 車線化工事に先立ち、他県からの派遣職員の応援などを得て、従来の宮城県発掘調査基準を弾力的に運用し、確認調査でこの事業に対応したものです。陸奥国府多賀城跡の北縁部を東西に長く発掘調査したことにより、この一帯の使われ方を理解する上でも一定の成果がありました。この地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりますが、職務環境が厳しい中、埋蔵文化財専門職員を派遣していただきました全国の自治体、円滑な調査にご尽力いただいた発掘調査作業員、関係機関の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成 27 年 10 月

宮城県教育委員会

教育長 高橋 仁



## 例　　言

1. 本書は、宮城県仙台土木事務所が担当する復興関連事業の都市計画道路（主要地方道）泉一塩釜線4車線化工事に伴い、平成25・26年度に実施した山王遺跡・市川橋遺跡（伊勢・町～八幡地区）の発掘調査（確認調査）成果をとりまとめたものである。発掘調査に関わる事業費は、同事務所より宮城県教育庁文化財保護課が執行委任され、平成25・26年度に発掘調査とその整理・報告書作成作業を行い、平成27年度に報告書作成作業を行って本報告書を刊行した。
2. 発掘調査は、宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。復興関連調査事業であることから、支援のため他県より宮城県に派遣された埋蔵文化財担当職員、東北歴史博物館職員が発掘調査に従事した。担当職員は、以下のとおりである。
  - ①平成25年度〔文化財保護課職員〕山中信宏、上山佳彦（山口県派遣）、〔東北歴史博物館職員〕柳澤和明
  - ②平成26年度〔文化財保護課職員〕阿部博志、上山佳彦（山口県派遣）、岡本泰典（岡山県派遣）、矢口裕之（群馬県派遣）、〔東北歴史博物館職員〕相原淳一
3. 各年度の整理作業、本報告書作成業務については、平成25年度は上山佳彦、山中信宏、柳澤和明、平成26年度は上山佳彦、相原淳一、平成27年度は柳澤和明が担当した。
4. 発掘調査と資料整理・報告書の作成に関しては、以下の方々と機関からご指導・ご助言を賜った（敬省略）。  
《個人》吉野武（宮城県多賀城跡調査研究所）、松本秀明（東北学院大学教授）、高橋守克（多賀城市史遊館）、  
《機関》多賀城市教育委員会、多賀城市埋蔵文化財センター、東北歴史博物館、宮城県多賀城跡調査研究所、  
JA仙台多賀城機械化センター・多賀城市立第二中学校（屋上写真撮影）
5. 土壤分析（珪藻分析および粒度分析）はパリノ・サーヴェイ株式会社に業務委託し、付章に結果を掲載した。
6. 本書における平面図は、平成23年（2011年）東北地方太平洋沖地震後の世界測地系国家座標第X系で作成した。図面中のX・Y座標値の単位はmである。
7. 本書における土色の記載は、『新版標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄、1973、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、日本色研事業株式会社発行）に依拠した。
8. 本書の遺構は種別にしたがって、以下の記号を使用した。  
豊穴住居跡（SI）、掘立柱建物跡（SB）、材木堆跡・柱列跡（SA）、井戸跡（SE）、土壙（SK）、溝跡（SD）、小溝状遺構群（SF）、道路跡・河川跡・その他の遺構（SX）
9. 土器実測図面のうち土師器内面にグレー塗り表示してあるものは、内面が黒色処理されていることを示す。
10. 軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦の分類と記載は、同一の瓦類が出土してその基準となっている多賀城跡分類（宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所1982『多賀城跡政庁跡本文編』）に依拠した。
11. 写真図版26～31に掲載した各遺物の番号は、本文中の遺物実測図図面の番号と一致する。
12. 調査担当者との協議を経て、遺構・遺物の整理、図面作成、事実記載を平成25年度に上山佳彦・山中信宏、柳澤和明が担当し、平成26年度には上山佳彦・相原淳一が担当した。これをもとに、図面・表・図版・本文の執筆・編集を平成27年度に柳澤和明が行い、各年度の発掘担当者による検討を経て、刊行した。
13. 発掘調査の記録や出土遺物は、宮城県教育委員会が保管している。なお、これら資料は、報告書刊行後に資料移管の事務手続きを経た上で、これまでと同様、東北歴史博物館にすべて管理を移管することになっている。

# 目 次

## 調査要項

第1章 調査に至る経過	1
1. 発掘調査に至る経過	1
2. 発掘調査の方法	1
3. 本報告書の作成方針	2
第2章 遺跡の概観	3
1. 遺跡の位置・地理的環境	3
2. 歴史的環境	3
3. 山王・市川橋遺跡におけるこれまでの調査	10
第3章 調査の方法と経過	11
1. 調査の方法	11
2. 平成25年度確認調査の経過	12
3. 平成26年度確認調査の経過	13
第4章 基本層序	14
第5章 山王遺跡伊勢・町地区（第1工区）の確認調査	20
1. 古代（奈良・平安時代）の遺構と遺物	20
(1) 区画溝跡	20
(2) 井戸跡	33
(3) 土壙	34
(4) 溝跡	34
(5) 小溝状遺構群（畑跡）	36
(6) 堆積層（灰色砂質シルト層）	39
2. 近世（江戸時代）以降の遺構と遺物	43
(1) SD2862 近世区画大溝跡	43
(2) SK10317 大土壙	50
3. 小括－山王遺跡伊勢・町地区における古代の土地利用	51
第6章 山王遺跡伊勢・町～八幡地区（第2・3工区）の確認調査	54
1. 第2工区の確認調査	54
2. 第3工区の確認調査	54
第7章 山王・市川橋遺跡八幡地区（第4工区）の確認調査	58
1. 古墳時代後期（栗廻式期）の主要遺構と遺物	58
(1) 区画溝跡	58
(2) 竪穴住居跡	58
2. 奈良時代（道路建設以前）の主要遺構と遺物	63
(1) 材木塙跡	63

（2）区画溝跡	67
3. 平安時代（道路期）の主要遺構と遺物	67
（1）道路跡	71
（2）竪穴住居跡	73
（3）井戸跡	73
（4）溝跡	74
4. 平安時代以降（道路廃絶以降）の主要遺構と遺物	74
（1）方形区画溝を二重に巡らせた SX10451 中世屋敷跡	74
（2）溝跡	75
5. その他の主要遺構	76
第8章 総括	77
註	78
引用・参考文献	78
付章 山王遺跡町地区の自然科学分析（パリノサーヴェイ株式会社）	81
写真図版	91
抄録	124
奥付	

## 図面目次

第1図	陸奥国府多賀城跡と方格地割、および周辺遺跡の分布図	4
第2図	多賀城跡城外の方格地割、既調査区と平成25・26年度調査区の位置図	8
第3図	第1工区基本層序柱状図	15
第4図	第2工区基本層序柱状図	16
第5図	第3工区基本層序柱状図、第1～4工区の遺構面IIレベル	17
第6図	第4工区基本層序柱状図	18
第7図	第1工区検出の主要遺構全体図（1）（折込）	21・22
第8図	第1工区検出の主要遺構全体図（2）（折込）	23・24
第9図	第1工区遺構詳細図（1）	26
第10図	第1工区遺構詳細図（2）	26
第11図	第1工区遺構詳細図（3）	27
第12図	第1工区遺構詳細図（4）	27
第13図	第1工区遺構詳細図（5）	28
第14図	第1工区遺構詳細図（6）	28
第15図	第1工区遺構詳細図（7）	29
第16図	第1工区遺構詳細図（8）	29
第17図	第1工区の古代区画溝跡断面図	30
第18図	第1工区 SE10301 井戸跡平面図・断面図	33
第19図	第1工区 SE10302 井戸跡平面図・断面図	34
第20図	第1工区の土壙断面図	35
第21図	第1工区の溝跡断面図	38
第22図	第1工区の小溝状遺構群断面図	39
第23図	第1工区における灰色砂質シルト層の分布	41
第24図	第1工区灰色砂質シルト層トレンチ断面図	42
第25図	第1工区出土の主な遺物1	44
第26図	第1工区出土の主な遺物2	45
第27図	第1工区のSD2862 近世区画大溝跡断面図	47
第28図	第1工区の近世土壙・溝跡断面図	49
第29図	第1工区出土の主な遺物3	50
第30図	第1工区における主要遺構の変遷	52
第31図	第2工区遺構配置図	55
第32図	第3工区遺構配置図	56
第33図	第3工区の加工木材出土状況平面図・断面図	56
第34図	第3工区の溝跡・河川跡・堆積層断面図	57
第35図	第4工区の主要遺構全体図（折込）	59・60
第36図	第4工区の主要遺構詳細図（折込）	61・62
第37図	第4工区の古墳時代・奈良時代区画溝跡断面図	63
第38図	第4工区の西6・西5・北3道路跡断面図	64
第39図	第4工区の材木塀跡・井戸跡・土壙・溝跡・小溝状遺構群断面図	66
第40図	第4工区出土の主な遺物1—古墳時代後期（栗廻式期）の区画溝跡、竪穴住居跡	68
第41図	第4工区出土の主な遺物2—古墳時代後期（栗廻式期）、奈良・平安時代の各遺構	69
第42図	第4工区出土の主な遺物3—平安時代の各遺構	70
第43図	第4工区の近世以降の遺構断面図	76

## 表目次

表 1	第1図掲載の遺跡	5
表 2	山王遺跡・市川橋遺跡においてこれまで行われた大規模な本発掘調査一覧	9
表 3	第1工区の区画溝跡断面図（第17図掲載）土層観察表	31
表 4	第1工区検出の土壌一覧	35
表 5	第1工区の土壌断面図（第20図掲載）土層観察表	36
表 6	第1工区検出の溝跡一覧	37
表 7	第1工区の小溝状遺構群断面図（第22図掲載）土層観察表	40
表 8	第1工区の灰色砂質シルト層トレント断面図（第24図掲載）土層観察表	43
表 9	第1工区出土遺物（第25・26・29図掲載）観察表	46
表 10-1	第1工区のSD2862近世区画大溝跡断面図（第27図掲載）土層観察表	48
表 10-2	第1工区のSD2862近世区画大溝跡断面図（第27図掲載）土層観察表	49
表 11	第4工区の西6・西5・北3道路跡断面図（第38図掲載）土層観察表	65
表 12	第4工区出土遺物（第40～42図掲載）観察表	71

## 写 真 図 版 目 次

図版 1	多賀城跡と山王遺跡・市川橋遺跡の航空写真	93
図版 2	第1工区調査区遠景（1）	94
図版 3	第1工区調査区遠景（2）	95
図版 4	第1工区調査区遠景（3）	96
図版 5	第1工区西部近景（1）	97
図版 6	第1工区西部近景（2）	98
図版 7	第1工区 SE10301 井戸跡	99
図版 8	第1工区 SE10302 井戸跡	100
図版 9	第1工区検出の主な土壌の断面	101
図版 10	第1工区検出の主な区画溝跡・溝跡の断面	102
図版 11	第1工区検出のSD2862近世区画大溝跡（1）	103
図版 12	第1工区検出のSD2862近世区画大溝跡（2）	104
図版 13	第1工区中央部近景（1）—灰色砂質シルト層の分布 1	105
図版 14	第1工区中央部近景（2）—灰色砂質シルト層の分布 2	106
図版 15	第1工区中央部近景（3）—灰色砂質シルト層下部上面の遺構検出状況 1	107
図版 16	第1工区中央部近景（4）—灰色砂質シルト層下部上面の遺構検出状況 2	108
図版 17	第2・3工区の確認調査	109
図版 18	第4工区調査区東部空撮（1）	110
図版 19	第4工区調査区東部空撮（2）	111
図版 20	第4工区調査区東部空撮（3）	112
図版 21	第4工区調査区東部空撮（4）	113
図版 22	第4工区調査区西部～中央部全景（平成25年度確認調査）	114
図版 23	第4工区検出の主要遺構（1）	115
図版 24	第4工区検出の主要遺構（2）	116
図版 25	第4工区検出の主要遺構（3）	117
図版 26	遺物写真（1） 第1工区出土の主な遺物 1	118
図版 27	遺物写真（2） 第1工区出土の主な遺物 2	119
図版 28	遺物写真（3） 第1工区出土の主な遺物 3	120
図版 29	遺物写真（4） 第4工区出土の主な遺物 1	121
図版 30	遺物写真（5） 第4工区出土の主な遺物 2	122
図版 31	遺物写真（6） 第4工区出土の主な遺物 3	123

## 調査要項

### 【平成 25 年度確認調査】

遺跡名 山王遺跡（宮城県遺跡地名表登録番号 18013）伊勢・町地区～八幡地区  
遺跡記号 F I 13 都計  
所在地 宮城県多賀城市多賀城市南宮・八幡地内  
遺跡種別 弥生時代～古墳時代の集落跡、古代都市  
調査次数 山王遺跡町地区・八幡地区都市計画道路第 2 次調査  
調査原因 都市計画道路（主要地方道）泉一塩釜線 4 車線化工事（東日本大震災復興関連事業）  
事業者 宮城県仙台土木事務所（道路部道路管理第一班）  
調査箇所 現在 2 車線で供用されている都市計画道路（主要地方道）泉一塩釜線の北側 2 車線部分  
調査面積 第 1・2・3 工区、第 4 工区西半部の約 7,000m<sup>2</sup>（長さ約 700m、幅約 10m）  
調査期間 平成 25 年 7 月 16 日～平成 25 年 12 月 18 日（実働 98 日）  
調査主体 宮城県教育委員会（高橋仁教育長）  
調査担当 宮城県教育庁文化財保護課  
調査員 〔文化財保護課職員〕山中信宏（技師）、上山佳彦（技術補佐、山口県派遣）  
〔東北歴史博物館職員〕柳澤和明（上席主任研究員）  
臨時職員 登録 28 名（発掘調査現場）  
調査協力 宮城県仙台土木事務所、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所、（株）岩田地崎建設、  
多賀城市埋蔵文化財調査センター、東北歴史博物館、宮城県多賀城跡調査研究所

### 【平成 26 年度確認調査】

遺跡名 市川橋遺跡（宮城県遺跡地名表登録番号 18008）八幡地区  
遺跡記号 E S 14 都計  
所在地 宮城県多賀城市八幡地内  
遺跡種別 弥生時代～古墳時代の集落跡、古代都市  
調査次数 市川橋遺跡八幡地区都市計画道路第 3 次調査  
調査原因 都市計画道路（主要地方道）泉一塩釜線 4 車線化工事（東日本大震災復興関連事業）  
事業者 宮城県仙台土木事務所（道路部道路管理第一班）  
調査箇所 現在 2 車線で供用されている都市計画道路（主要地方道）泉一塩釜線の北側 2 車線部分  
調査面積 第 4 工区東半部の約 600m<sup>2</sup>（長さ約 60m、幅約 10m）  
調査期間 平成 26 年 11 月 4 日～平成 26 年 12 月 15 日（実働 28 日）  
調査主体 宮城県教育委員会（高橋仁教育長）  
調査担当 宮城県教育庁文化財保護課  
調査員 〔文化財保護課職員〕阿部博志（技術主査）、上山佳彦（技術補佐、山口県派遣）、岡本泰典（技  
術主幹、岡山県派遣）、矢口裕之（技術主幹、群馬県派遣）  
〔東北歴史博物館職員〕相原淳一（上席主任研究員）  
臨時職員 登録 22 名（発掘調査現場）  
調査協力 宮城県仙台土木事務所、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所、（株）岩田地崎建設、  
多賀城市埋蔵文化財調査センター、東北歴史博物館

# 第1章 調査に至る経過

## 1. 発掘調査に至る経過

今回実施した山王遺跡伊勢・町地区～八幡地区、市川橋遺跡八幡地区の発掘調査は、都市計画道路（主要地方道）泉一塩釜線4車線化工事に伴う確認調査である。この都市計画道路泉一塩釜線（当初の名称は玉川一岩切線）に伴う本発掘調査は、当課が担当して平成4・5年度の山王遺跡八幡地区より開始し、平成7・8年度に山王遺跡町地区、平成12・14・15年度に山王遺跡伊勢地区、平成16年度に市川橋遺跡館前北地区、平成15・17年度に市川橋遺跡後山地区と多賀城跡外郭南辺南側で実施した。

この都市計画道路（主要地方道）泉一塩釜線及び近くを通る三陸沿岸道路仙塩道路は、当初4車線化で事業策定されていた。しかし、本発掘調査終了後、三陸沿岸道路は平成9年3月27日、都市計画道路は平成21年7月に暫定2車線で開業され、その後の経済状況の悪化に伴い、4車線化事業と多賀城インターチェンジ建設事業は凍結された。

平成23年3月11日の「平成23年（2011年）東北地方太平洋沖地震」（東日本大震災）の発生に伴い、福島県から岩手県沿岸部まで縦断する三陸沿岸道路が災害復興道路として位置付けられるようになった。その結果、事業凍結されていた三陸沿岸道路仙塩道路4車線化事業、多賀城インターチェンジ建設事業、都市計画道路泉一塩釜線4車線化事業が復活した。これを受け、暫定2車線で供用されていた本都市計画道路の拡張2車線工事部分についても、当課が発掘調査を担当することになった。この都市計画道路泉一塩釜線も復興関連事業として位置付けられたため、事業者と協議して、東日本大震災後に弾力的に運用している宮城県発掘調査基準を適用し、拡張2車線部分について全面的な本発掘調査は行わずに、確認調査で対応することになった。

## 2. 発掘調査の方法

### （1）基本方針

復興事業に伴う発掘調査の方法等については、文化庁主催の「東日本大震災に伴う埋蔵文化財保護に関する会議」（第1回開催は平成24年6月24日）において、被災3県（岩手・宮城・福島県）で大きな差が生じないよう協議・調整した結果、「本発掘調査の範囲については工事によって壊される範囲のみとする」基本方針が定まり、宮城県においても、宮城県発掘調査基準を弾力的に運用して発掘調査期間の短縮化を図り、復興事業を推進していくこととした。

なお、「遺跡の性格や内容等を踏まえ、各教育委員会の判断により必要に応じて遺構の掘り下げ等の調査、盛り土部分についても遺構の内容を確認する調査を実施することは可」であることも同会議で共有されている。

### （2）調査体制の強化

東日本大震災の復興事業に伴う発掘調査を迅速に進めるに当たり、宮城県教育委員会では他県・市から自治法派遣職員の応援を得て調査体制を強化している。平成24年度は17名（上半期9名・下半期17名）、平成25年度は24名、平成26年度は17名が派遣され、復興調査の推進に大きな戦力となっ

た。また、宮城県教育委員会内においても、東北歴史博物館と多賀城跡調査研究所から毎年計 3 名の調査協力を通年得ている。

### (3) 山王遺跡における発掘調査方法

三陸沿岸道路仙塩道路 4 車線化事業、多賀城インターインジ建設事業、都市計画道路泉一塩釜線 4 車線化事業は、国により東日本大震災復興事業に位置付けられた。そのため、都市計画道路泉一塩釜線 4 車線化事業に伴う発掘調査の実施に当たっては、上記方針により確認調査に留めることにし、他県職員の派遣と東北歴史博物館職員の協力を得て、発掘調査の迅速化を図った。

## 3. 本報告書の作成方針

復興調査に係る報告書の作成方針等については、主に平成 25 年度の「東日本大震災に伴う埋蔵文化財保護に関する会議（第 16 回～第 19 回）」において調整が図られてきた。最終的に 3 県で多少の違いは認められこととなったが、宮城県では報告書作成を含めた復興調査を早期に終了させるため、「復興調査に限り報告書の内容を必要最小限に止める」方針を定め、平成 26 年 2 月 7 日に県内各市町村教育委員会を対象とした「復興調査に係る連絡調整会議」において県教育委員会がこの方針を説明した。これに対し各教育委員会から賛同を得たため、平成 26 年度以降に刊行する復興調査に係る報告書については、基本的にこの方針に基づき作成することとなった。

なお、こうした復興調査関連の発掘調査報告書の作成方針については、平成 27 年 6 月 18 日に実施した宮城県市町村文化財担当者会議において資料配布している。

本報告書も復興事業に位置付けられた都市計画道路（主要地方道）泉一塩釜 4 車線化事業に先立つて行われた復興確認調査なので、上記方針に基づき、検出遺構の一覧表の作成による簡便化や、既に刊行した復興関連調査報告書（宮城県教育委員会 2014）の入稿ファイルを雛形として、報告書作成に要する時間短縮を図ることにした。

## 第2章 遺跡の概観

### 1. 遺跡の位置・地理的環境

山王遺跡は、宮城県仙台市の中心部から北東へ約10km、多賀城市街の北西部に所在する。古代の陸奥国府である特別史跡多賀城跡の南～南西部前面、標高約2～3mの水田地帯に位置する。東西約2.1km、南北約1.0km、総面積約2.1km<sup>2</sup>にも及ぶ広大な遺跡で、弥生・古墳・古代・中世にまたがる複合遺跡である。三陸沿岸自動車道仙塩道路東側に隣接する市川橋遺跡は、山王遺跡と時期を同じくする複合遺跡である。山王・市川橋遺跡は一連の複合遺跡で、三陸沿岸自動車道仙塩道路の西側を山王遺跡、東側を市川橋遺跡と呼んで登録しているにすぎない。山王・市川橋遺跡の中心部をJR東北本線が東西に横断し、遺跡の境を三陸沿岸自動車道仙塩道路が北西～南東に縦断する。また、遺跡の北側では東西方向に仙台市と塩釜市を結ぶ県道（都市計画道路）泉～塩釜線が通る。

山王・市川橋遺跡は、弥生時代から中世まで長期間にわたって断続的に営まれ、一般的には古墳時代～奈良・平安時代を中心とした遺跡として知られている。特に、山王遺跡は古代には陸奥国府多賀城跡と密接な関係を持ち、東に隣接する三陸沿岸自動車道仙塩道路東側の市川橋遺跡とともに、多賀城跡城外の方格地割<sup>註1</sup>に基づいた街並みを形成していたことが明らかになっている（宮城県教育委員会1995・1996a・1996b・1997・1998・1999・2001・2004・2007・2009、多賀城市教育委員会1999・2001～2004・2006～2008）。この一帯は、三陸沿岸自動車道仙塩道路建設以前には大部分が水田として利用されていたが、その後の城南地区など大規模宅地造成や道路整備に伴い、その景観は大きく変貌しつつある。また、平成23年（2011年）東北地方太平洋沖地震後には、凍結されていた多賀城インターチェンジ建設事業、三陸沿岸自動車道仙塩道路4車線化事業、県道（都市計画道路）泉～塩釜線4車線化事業が復興関連事業として再開された。これら道路網が再整備されるに伴い、今後さらに周辺地域を含めた開発が進むものとみられる。

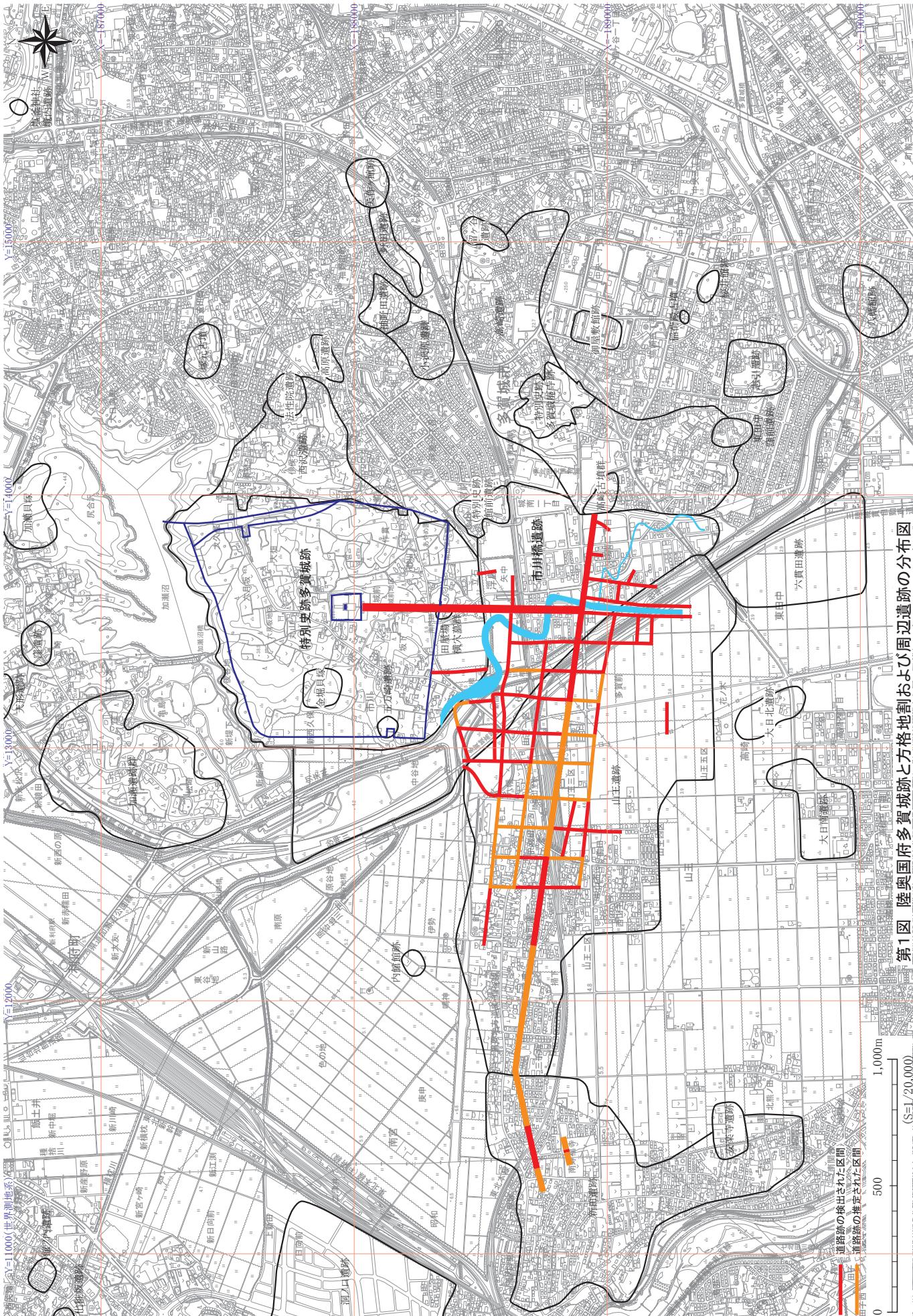
地形的にみると、遺跡は仙台平野の北端部、砂押川左岸の丘陵地から沖積地へ移行する低地上に立地している。遺跡の北～東部にかけては陸前丘陵から派生する、緩やかな起伏を持つ多賀城台地が広がる。この多賀城台地は標高50mほどで、東の塩釜・松島方面へと高度を緩やかに上げながら連続している。この台地の南西端には陸奥国府多賀城跡が所在する。山王遺跡東側の市川橋遺跡を南北に縦断した砂押川は、山王遺跡ではさらに南流し、低平な沖積地が南に広がっている。

### 2. 歴史的環境

山王・市川橋遺跡周辺には奈良・平安時代の陸奥国府多賀城跡をはじめとする多数の遺跡がある（第1図）。両遺跡を含む近年の調査成果から弥生時代～近世までの周辺の様子が次第に明らかになってきている。その概要は以下のとおりである。

#### （1）縄文時代

前期前葉の縄文海進期は山王・市川橋遺跡周辺には海が入り込んでおり、前期の金堀貝塚が多賀城跡の位置する丘陵上にある（宮城県多賀城跡調査研究所1974、東北歴史博物館1989）。海生種のハ



第1図 陸奥国府多賀城跡と方格地割および周辺遺跡の分布図

道路跡の検出された区間  
道路跡の推定された区間

遺跡名	種別	時代	遺跡名	種別	時代
特別史跡多賀城跡	国府	奈良・平安	田屋場横穴墓群	横穴墓	古墳後期
市川橋遺跡	集落 都市	旧石器・縄文・弥生・古墳・奈良・平安	金堀貝塚	貝塚	縄文前～後期
山王遺跡	集落 都市 屋敷 貝塚	弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世	西沢遺跡	集落	古代・中世
特別史跡多賀城廃寺跡	寺院	奈良・平安	法性院遺跡	散布地 寺院	古代
高崎遺跡	集落 都市 城館	奈良・平安・中世	塚元古墳	円墳	古墳後期
(特別史跡)館前遺跡	官衙	古代・中世	高原遺跡	散布地	古代・中世
新田遺跡	集落 屋敷	縄文・古墳・奈良・平安・中世	小沢原遺跡	散布地	古代・中世
内館館跡	城館	中世	袖野田遺跡	散布地	奈良・平安
化粧坂遺跡	城館	中世	野田遺跡	散布地 城館	古代・中世
館ノ内遺跡	城館	中世	矢作ヶ館跡	城館 敷地	古代・中世
天形遺跡	散布地	古代	留ヶ谷遺跡	城館	古代・中世
窪遺跡	散布地	古代	高崎古墳群	円墳	古墳中・後期
加瀬貝塚	貝塚	縄文中期・古代	御屋敷館跡	城館	中世
加瀬遺跡群	散布地	縄文中期・古代	稻荷殿古墳	円墳	古墳後期
洞ノ口遺跡	集落 城館 水田跡	奈良・平安・中世・近世	東田中窪前遺跡	散布地 城館	古代・中世
安楽寺遺跡	寺院	古代末～中世	志引遺跡	散布地 城館	旧石器・縄文・古代・中世
大日南遺跡	集落 屋敷	平安・中世	桜井館跡	散布地	古代
大日北遺跡	散布地	古代	八幡館跡	散布地 城館	古代・中世
六貫田遺跡	散布地	古代	塙釜神社 境内遺跡	散布地 製塙	縄文晚期
五万崎遺跡	墓	縄文前・中期・弥生・古墳前期			

表1 第1図掲載の遺跡

マグリ・アサリ他の貝類、エイ・マダイ・ブリ他の魚類や当該期の土器・石器が出土している。

### (2) 弥生時代

沖積地に立地する山王遺跡八幡地区（宮城県教育委員会 1994b）では、弥生時代中期樹形圓式期の遺物を含む黒色泥炭層が標高 1.8～1.9 m、地表下 1.8～2.0 m の深さで、平成 4・5 年度に発掘調査された I 区西半部から II 区東半部に集中して検出された。また、その南東 30～130 m の市川橋遺跡八幡地区では、同時期の黒色泥炭層が標高 1.2～1.4 m、地表下 3.3 m の深さで検出された。東西 31 m、南北 24 m の範囲に同時期の遺物包含層が形成され、遺物集中箇所の北側の低地に溝を巡らしていた（宮城県教育委員会 2009）。この他、弥生時代中期以前の水田跡が山王遺跡八幡地区（多賀城市調査 J 区）で検出され（多賀城市教育委員会 1997）、新田遺跡後地区では溝跡や土器などが発見されている。

しかし、これまで近辺では竪穴住居跡などは検出されず、集落跡は未発見である。周辺の丘陵上では、多賀城跡五万崎地区で樹形圓式と十三塚式の土器と石包丁が出土しており、この付近に集落の存在が想定されている。また、山王遺跡八幡地区や新田遺跡での樹形圓式期の遺物包含層や遺構面は現地表下 2 m 前後にあることから、この深度の沖積地の微高地上、山王遺跡八幡地区内にも当該期の集落跡があると想定されている。

### (3) 古墳時代

古墳時代前期塙釜式期には、市川橋遺跡の北から東の丘陵上や西側の自然堤防上の山王遺跡に集落や墓域が営まれていたことが確認されている。中期になると、山王遺跡の西側に位置する新田遺跡後地区、山王遺跡東町浦・西町浦地区、山王遺跡八幡地区などで竪穴住居跡が発見され、自然堤防上に集落が存在したことが明らかになった。八幡地区では鍛冶工房跡が確認されている。後期の栗圓式期になると山王遺跡八幡・伊勢地区や館前地区、新田遺跡後地区などでは旧河川に挟まれた微高地上からさらに多くの竪穴住居跡が発見され、大規模な集落が営まれていることが明らかになった。なかでも山王遺跡八幡地区の旧河川跡には、仏具である柄香炉、ト骨・斎串など後の律令的祭祀と共に通する先駆的な祭祀遺物、在地産の須恵器が一定量含まれていた。このことと集落内外を区画する溝の存在から、この地域の基幹的集落とみられている（宮城県教育委員会 1994a・b）。

また、古墳は横穴式石室をもつ稻荷殿古墳、多賀城跡外郭南門西側の外郭南辺築地塀跡の下層で発見された田屋場横穴墓群がある。後者は山王・市川橋遺跡の栗廻式期の拠点的大集落の首長墓とみられる（宮城県多賀城跡調査研究所 1986・2002、柳澤和明 2010a）。

#### （4）奈良時代

神亀元年（724）、陸奥国支配の根拠地である陸奥国府多賀城が市川橋遺跡北側の丘陵上に築かれる。多賀城跡は、一辺 670～1000m の不整な方形の範囲を築地塀で囲み、ほぼ中央に政庁が置かれ、周囲には実務官衙が配置されている（宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所 1982）。外郭南辺・東辺・西辺には門が開かれており、南門—政庁間や東門—西門間の道路跡も明らかになっている。

また、外郭南門の傍らには国重要文化財の多賀城碑があり、神亀元年（724）の創建と天平宝字6年（762）の修造が記されている。天平宝字6年（762）に多賀城を修造した藤原朝穢の顯彰碑とみられている（平川南 1989）。

一方、周辺では南東約 1.2km の丘陵上に多賀城付属寺院の多賀城廃寺跡があるが、他には遺構が少なく、山王遺跡や市川橋遺跡、新田遺跡、高崎遺跡で竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが散在的に検出されているにすぎない。ただし、山王遺跡や市川橋遺跡では多賀城跡外郭南門跡から南に延びる南北大路跡や外郭南辺に並行する東西大路跡が確認されており、南北大路の造営は奈良時代半ば以前に遡る可能性も考えられている（宮城県教育委員会 2001a）。また、山王遺跡八幡地区では漆作業関連遺物や、鉄滓・炉壁などが出土しており、漆や鍛冶の工房の存在が考えられている（多賀城市教育委員会 1997、宮城県教育委員会 1997）。

#### （5）平安時代

多賀城跡の南面一帯の広い範囲で、多数の遺構がみられるようになる。特に山王・市川橋遺跡には、幅 23 m の南北大路や幅 12 m の東西大路を基幹道路として、多賀城跡政庁跡—外郭南門跡中軸線や外郭南辺築地塀跡を基準とする東西・南北道路が碁盤目状に配された約 1 町四方の方格地割が施工されている。その範囲は東西約 1.5km、南北約 0.8km にも及ぶ（宮城県教育委員会 1996a・b、第 1 図）。

方格地割は南北大路跡の西側を中心に検出されていたが、近年の発掘調査では南北大路跡の東側にも広がることや、南北大路が東西大路との交差点より南には造られなかつたことが明らかになってきた（多賀城市教育委員会 2001・2002・2003・2004a・2004b）。

方格地割内は遺構の密度が高く、道路と方向を揃えた掘立柱建物跡、塀跡、区画溝跡、井戸跡などがみられる。遺物も土師器・須恵器の他に施釉陶器や硯が多くみられ、貿易陶磁器や石帶も出土するなど、一般集落跡とは様相が異なっている。このうち南北大路跡・東西大路跡交差点の北東区画では、桁行 11 間、梁行 2 間の南北棟 2 棟が 2 列に配置されたとみられる城外で最大級の建物群が検出され、城外に置かれた官衙として位置付けられている（多賀城市教育委員会 1999・2001）。また、東西大路に面する山王遺跡千刈田地区・多賀前地区の区画には、廂付きの大規模な掘立柱建物跡が発見され、貿易陶磁器や多量の施釉陶器が出土したことから、国司など上級官人の館跡と推定されている（多賀城市教育委員会 1991・1992、宮城県教育委員会 1996b・2014）。

一方、東西大路を離れた区画では、小規模な掘立柱建物跡が主体となり、鍛冶や漆作業に使用した

とみられる遺物が出土することなどから、多賀城に関わる作業域やそれを支えた人々の居住域とみられている。

方格地割が確認されていない区域は、水田などの耕作域となっている。館前遺跡には四面廂付大型建物跡を中心とする建物群があり、国司など上級官人の館跡と推定されている（多賀城市教育委員会 1980）。山王遺跡東町浦地区、高崎遺跡井戸尻地区では、万燈会に係わるとみられる土器集積遺構が発見され、国府主催の仏教儀式が行われた可能性も指摘されている（多賀城市史編纂委員会、1991）。また、市川橋遺跡中谷地地区では 100 基以上の木棺墓・土壙墓・横位合口土師器甕棺墓からなる大規模な墓域を確認している（宮城県教育委員会 2003）。山王遺跡多賀前地区や市川橋遺跡中谷地地区の方格地割の外側は、水田など耕作域となっている（宮城県教育委員会 1996a・1996b・1997）。

このように、平安時代の多賀城跡の南側には南北大路・東西大路を基準とした方格地割が展開し、多賀城とその関連施設に係わる人々が居住する古代の都市的な空間が広がっていた。それは陸奥国府・多賀城の整備・充実とも連動するものであり、律令的支配の拡大・整備の進展が背景にある。したがって、10 世紀後半頃に多賀城が衰退するとともに周辺も次第に荒廃し、衰退をともにしたとみられている。

## （6）中世

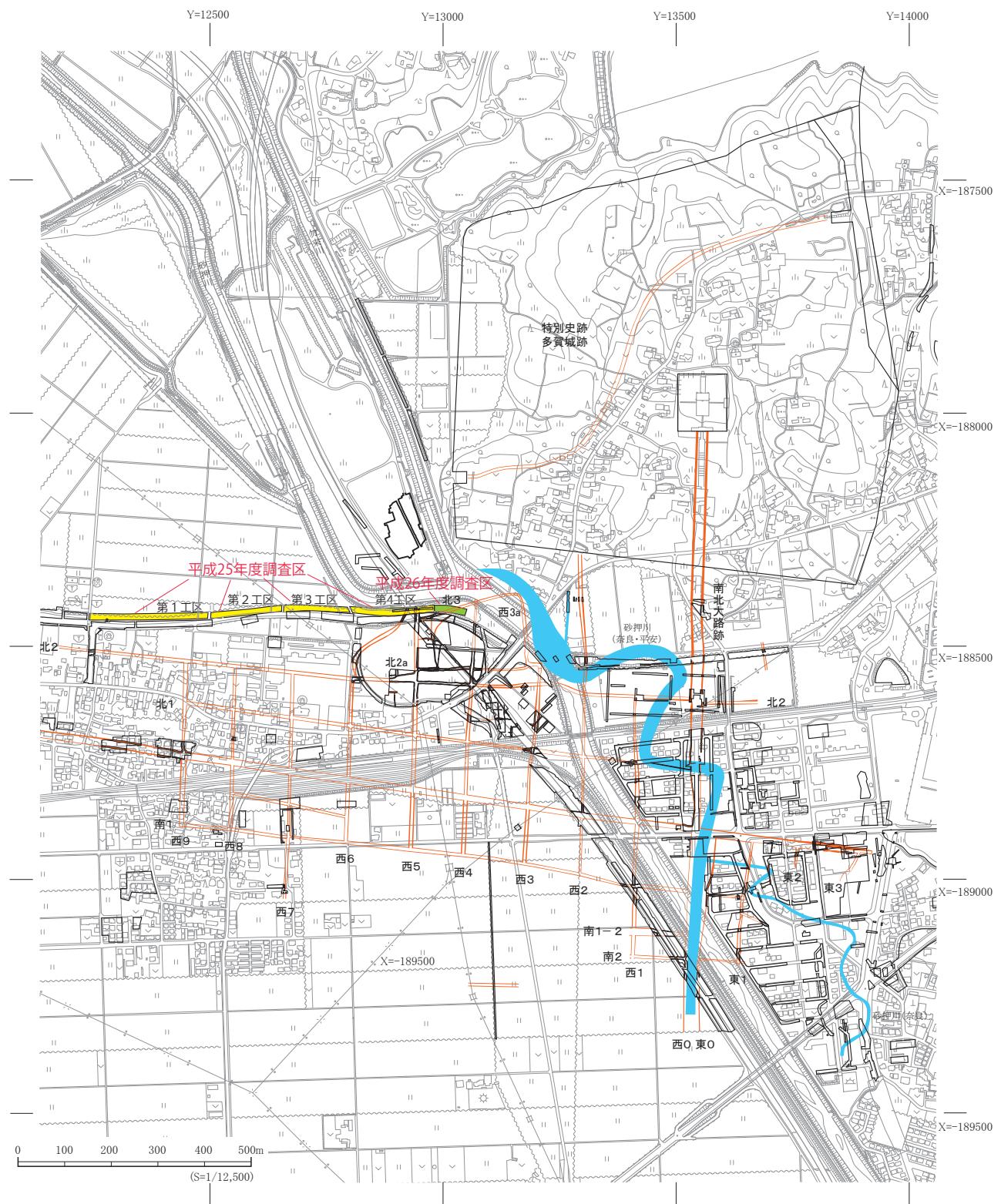
新田遺跡寿福寺地区では、大溝で区画された東西約 200 m、南北約 300 m の大規模な屋敷跡が発見されている。敷地内には大小の建物跡が計画的に配置され、施釉陶器や中国産陶磁器などの高級品が多量に出土したことから、12 世紀から 16 世紀後半頃にかけての上級武士階級の居館跡と推定されている（多賀城市教育委員会、1990）。また、洞ノ口遺跡でも周囲に溝を巡らせた屋敷跡があり、山王遺跡八幡・伏石地区でも同様の屋敷跡が発見されていることから、七北田川左岸の自然堤防上に多くの屋敷跡が隣接して存在したものと考えられている（宮城県教育委員会 1997）。

こうした屋敷跡は、洞ノ口遺跡から市川橋遺跡まで連続的に連なる様子が古地図などから知られる。これらの屋敷跡の居住者については、中世のこの付近一帯が留守氏の支配する「高用名」と「南宮庄」に含まれる地域であることから、留守氏に関わりのある武士層が想定されている（宮城県教育委員会、1990）。

なお、多賀城廃絶後の 12 世紀半ば以降、文献上に「多賀国府」の名がみられるようになる。その中枢部の比定地としては、市川橋遺跡の西約 2 km にある洞ノ口遺跡が有力視されている。周辺には新田遺跡、鴻ノ巣遺跡、東光寺遺跡、岩切城跡など中世の遺跡が密集して認められ、近辺には武士の屋敷群や寺院、市場などが配されていたとみられている（千葉孝弥 1997・2014）。しかし、発掘調査を通じて中世の多賀国府の中枢であることを示す確証はまだ得られていない。

## （7）近世

16 世紀末、山王遺跡が所在する山王・南宮一帯は、伊達家の組頭である成田氏の采邑となった。塩釜街道沿いには成田氏配下の足軽達の屋敷をはじめとする住宅が建ち並び、現在に通じる町並みが形成されていったとみられる。山王遺跡西町浦地区では、酒造業を営んだ記録が残る賀川家の宅地が調査されている（多賀城市史編纂委員会、1991）。山王遺跡町地区の調査でも 18 世紀後半～19 世紀頃の屋敷地の様子が明らかとなっている（宮城県教育委員会、1998；多賀城市教育委員会、2006）。



第2図 多賀城跡城外の方格地割、既調査区と平成25・26年度調査区の位置図

No.	遺跡名	区名	小区	調査面積	調査原因	調査年度	調査主体	報告書	備考	
1	山王遺跡	八幡地区	A～D区	13,000 m <sup>2</sup>	多賀城インター建設事業	平成元年～3・6年度	宮城県教育委員会	県第161・174集	砂押川以西。東北本線以北。県道泉塩釜線以北。	
2	山王遺跡	八幡地区	E・F・I・J・N区	14,400 m <sup>2</sup>	多賀城インター建設事業	平成2～6年度	多賀城市教育委員会	市第27・30・45集		
3	山王遺跡	伏石地区	G区	800 m <sup>2</sup>	多賀城インター建設事業	平成5・6年	宮城県教育委員会	県第161・174集		
4	山王遺跡	伏石地区		1,000 m <sup>2</sup>	多賀城インター建設事業	平成24年度	宮城県教育委員会	未報告		
5	山王遺跡	八幡地区	A・J・L・M・N区	12,000 m <sup>2</sup>	多賀城インター建設事業	平成25年度	宮城県教育委員会	未報告		
6	市川橋遺跡	八幡地区	L区	9,000 m <sup>2</sup>	多賀城インター建設事業	平成24・25年度	宮城県教育委員会	未報告		
7	山王遺跡	多賀前地区		17,500 m <sup>2</sup>	三陸縱貫自動車道（仙塩道路）建設事業	平成4～6年度	宮城県教育委員会	県第167・170・171集		東北本線以南・以北。砂押川右岸堤防西側沿い。
8	山王遺跡	多賀前地区		5,720 m <sup>2</sup>	三陸沿岸道路仙塩道路4車線化事業	平成24年度	宮城県教育委員会	県第235集		
9	山王遺跡	八幡地区	I～IV区	5,000 m <sup>2</sup>	都市計画道路玉川岩切線建設事業	平成4・5年度	宮城県教育委員会	県第162集	砂押川以西。東北本線以北。県道泉塩釜線以北。	
10	山王遺跡	八幡地区	I～IV区		都市計画道路玉川岩切線4車線化事業	平成25年度	宮城県教育委員会	未報告		
11	山王遺跡	町地区		7,100 m <sup>2</sup>	都市計画道路玉川岩切線建設事業	平成7・8年度	宮城県教育委員会	県第175集		
12	山王遺跡	伊勢地区		5,900 m <sup>2</sup>	都市計画道路玉川岩切線建設事業	平成14・15年度	宮城県教育委員会	県第198集		
13	市川橋遺跡	館前地区	矢中地区	7,505 m <sup>2</sup>	都市計画道路玉川岩切線建設事業	平成7～10年度	宮城県教育委員会	県第184集		砂押川以東。東北本線以北。県道泉塩釜線以南。
14	市川橋遺跡	館前北地区	後山地区	294 m <sup>2</sup>	都市計画道路玉川岩切線建設事業	平成16・17年度	宮城県教育委員会	県第209集		
15	市川橋遺跡	伏石地区		3,616 m <sup>2</sup>	都市計画道路玉川岩切線建設事業	平成18年度	宮城県教育委員会	県第218集		砂押川以西。東北本線以北。県道泉塩釜線以南。
16	市川橋遺跡	八幡地区	A区	620 m <sup>2</sup>	都市計画道路玉川岩切線建設事業	平成19年度	宮城県教育委員会	県第218集	砂押川以西。東北本線以北。県道泉塩釜線以北。	
17	市川橋遺跡	伏石地区	B区	240 m <sup>2</sup>	都市計画道路玉川岩切線建設事業	平成19年度	宮城県教育委員会	県第218集	砂押川以西。東北本線以北。県道泉塩釜線以南。	
18	市川橋遺跡	砂押川地区	C1～C3区	285 m <sup>2</sup>	都市計画道路玉川岩切線建設事業	平成19年度	宮城県教育委員会	県第218集	砂押川右岸堤防上。東北本線以北。県道泉塩釜線以南。	
19	市川橋遺跡	中谷地地区		7,500 m <sup>2</sup>	砂押川広域基幹河川改修事業（名古曾川遊水池造成工事）	平成12～14年度	宮城県教育委員会	県第193集	東北本線以北。県道泉塩釜線以北。砂押川中州。	
20	市川橋遺跡	高平地区	B区	2,500 m <sup>2</sup>	城南土地区画整理事業	平成10年度	多賀城市教育委員会	市第60集	砂押川以東。東北本線以南。県道泉塩釜線以南。	
21	市川橋遺跡	水入・丸山・高崎地区	C区	16,841 m <sup>2</sup>	城南土地区画整理事業	平成11～14年度	多賀城市教育委員会	市第70集		
22	市川橋遺跡	市川・高崎・浮島地区	A・D区	33,630 m <sup>2</sup>	城南土地区画整理事業	平成10～14年度	多賀城市教育委員会	市第75集		
多賀城市教育委員会 1991 『山王遺跡－第10次調査概報（仙塩道路建設に伴う八幡地区調査）－』（多賀城市文化財調査報告書第27集）										
多賀城市教育委員会 1992 『山王遺跡－第12次調査概報（仙塩道路建設に伴う八幡地区調査）－』（多賀城市文化財調査報告書第30集）										
多賀城市教育委員会 1997 『山王遺跡Ⅰ－仙塩道路建設に係る発掘調査報告書－』（多賀城市文化財調査報告書第45集）										
多賀城市教育委員会 2001 『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅰ－』（多賀城市文化財調査報告書第60集）										
多賀城市教育委員会 2003 『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ－』（多賀城市文化財調査報告書第70集）										
多賀城市教育委員会 2004 『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅲ－』（多賀城市文化財調査報告書第75集）										
宮城県教育委員会 1992 『山王遺跡－仙塩道路建設関係遺跡 平成3年度発掘調査概報－』（宮城県文化財調査報告書第147集）										
宮城県教育委員会 1994 a 『山王遺跡Ⅰ－古墳時代中期遺物包含層編－』（宮城県文化財調査報告書第161集）										
宮城県教育委員会 1994 b 『山王遺跡八幡地区的調査－県道泉塩釜線関連調査報告書Ⅰ－』（宮城県文化財調査報告書第162集）										
宮城県教育委員会 1995 『山王遺跡Ⅱ－多賀前地区構構編－』（宮城県文化財調査報告書第167集）										
宮城県教育委員会 1996 a 『山王遺跡Ⅲ－多賀前地区遺物編－』（宮城県文化財調査報告書第170集）										
宮城県教育委員会 1996 b 『山王遺跡Ⅳ－多賀前地区考察編－』（宮城県文化財調査報告書第171集）										
宮城県教育委員会 1997 『山王遺跡Ⅴ－』（宮城県文化財調査報告書第174集）										
宮城県教育委員会 1998 『山王遺跡町地区的調査－県道泉塩釜線関連調査報告書Ⅱ－』（宮城県文化財調査報告書第175集）										
宮城県教育委員会 2004 『山王遺跡伊勢地区的調査－県道『泉－塩釜線』関連調査報告書Ⅴ－』（宮城県文化財調査報告書第198集）										
宮城県教育委員会 2001 a 『市川橋遺跡の調査－県道『泉－塩釜線』関連調査報告書Ⅲ－』（宮城県文化財調査報告書第184集）										
宮城県教育委員会 2001 b 『山王遺跡八幡地区的調査2－県道『泉－塩釜線』関連調査報告書Ⅳ－ 古墳時代後期SD2050B河川跡編』（宮城県文化財調査報告書第186集）										
宮城県教育委員会 2007 『市川橋遺跡の調査－県道『泉－塩釜線』関連調査報告書VI－』（宮城県文化財調査報告書第209集）										
宮城県教育委員会 2009 『市川橋遺跡の調査 伏石・八幡地区－県道『泉－塩釜線』関連調査報告書VII－』（宮城県文化財調査報告書第218集）										
宮城県教育委員会 2014 『山王遺跡VI－多賀前地区第4次発掘調査報告書－』（宮城県文化財調査報告書第235集）										

表2 山王遺跡・市川橋遺跡においてこれまで行われた大規模な本発掘調査一覧

その内部は南北に敷地割りされ、街道に面した南の敷地が建物群と素掘りの井戸跡などで構成された居住域、北の敷地が素掘りの井戸跡や溝、土壙により疎らに構成されていた。また、山王遺跡伊勢地区でも溝で仕切られた屋敷地の一部が調査され（宮城県教育委員会、2004）、山王遺跡八幡地区では墓跡がみつかっている（宮城県教育委員会 1997）。

また、周辺の丘陵上には、多賀城跡作貫地区で発見された塩釜神社神官の屋敷跡、高崎丘陵上の留ヶ谷遺跡や高崎遺跡で発見された屋敷跡などがある（桑原滋郎・高野芳宏・千葉孝弥 1993）。

### 3. 山王・市川橋遺跡におけるこれまでの調査

山王・市川橋遺跡では、平成元年度（1989）より大規模な本発掘調査・確認調査が毎年継続的に行われてきた。その調査原因をみると、①多賀城インター建設事業、②三陸沿岸道路仙塩道路建設事業、③都市計画道路泉一塩釜線建設事業、④砂押川広域基幹河川改修事業（名古曾川遊水池造成工事）、⑤城南土地区画整理事業、⑥三陸沿岸道路仙塩道路4車線化事業、の6つがある。このうち①は宮城県教育委員会、多賀城市教育委員会、②・③・④・⑥は宮城県教育委員会、⑤は多賀城市教育委員会が本発掘調査を担当し、それぞれ発掘調査報告書を刊行してきている（表2）。この他、個人住宅や商店など民間開発事業によるものも多い。これらは多賀城市教育委員会が対応している。

その結果、前節のように本地域における弥生時代から近世にわたる様相とその変遷が次第に明らかとなってきてきた。その成果は、これら大規模な発掘調査が行われるようになった平成元年（1989）以前と比べ、多大なものがある。しかし、その反面、大規模な発掘調査によって遺跡の多くが失われてきたことも事実である。

また、平成23年3月11日の東日本大震災の発生を契機に、事業凍結されていた多賀城インター建設事業、三陸沿岸道路仙塩道路4車線化事業、都市計画道路泉一塩釜線4車線化事業もそれぞれ東日本大震災復興事業に位置付けられて復活した。この事業再開に伴い、宮城県教育委員会では復興関連事業に伴う発掘調査を平成24年度より実施してきている。

平成24年度に実施した三陸沿岸道路仙塩道路4車線化事業に伴う山王遺跡多賀前地区の発掘調査では、南1西2区、南2西1区、南2道路跡以南の様相がより明らかになり、海生種珪藻をわずかに含むイベント堆積物を3箇所で検出した。海生種珪藻を含むイベント堆積物は、同年度の多賀城インターインターチェンジ建設事業に伴う市川橋遺跡八幡地区の発掘調査でも1箇所検出した。その結果、懸案であった陸奥国府域内における貞觀地震津波の様相を解明する手がかりが得られた（宮城県教育委員会2014）。

今回報告する都市計画道路泉一塩釜線4車線化事業に伴う山王遺跡町地区・八幡地区、市川橋遺跡八幡地区の確認調査も復興調査の一つで、方格地割外・北部の様相がこれまでよりも明らかになった。

## 第3章 調査の方法と経過

### 1. 調査の方法

都市計画道路泉一塩釜線4車線化事業については、宮城県仙台土木事務所が施工を担当している。このため、事業者である宮城県仙台土木事務所と埋蔵文化財保護行政担当の宮城県教育庁文化財保護課との間で、拡張する2車線部分の取扱いについて協議が行われた。その結果、本事業が東日本大震災復興事業に位置付けられ、掘削を伴わず遺構面の損壊がない盛土工法による道路工事が行われることから、これに伴う埋蔵文化財調査については、東日本大震災に伴い弾力的に運用している宮城県発掘調査基準を適用し、本発掘調査によらず確認調査での対応を行うこととなった。このため、路線敷き部分に当たる古代を中心とする遺構面の確認調査を主体とした。

今回、確認調査を行った都市計画道路4車線化事業に伴う山王遺跡町・伊勢地区～山王・市川橋遺跡八幡地区に至る工事範囲については、西より第1工区、第2工区、第3工区、第4工区と事業者の宮城県仙台土木事務所が呼称しており、発掘調査区名もこれを使用した。遺跡としては、第1工区が山王遺跡町・伊勢地区、第4工区が山王・市川橋遺跡八幡地区に当たる。仙塩道路供用開始後は、仙塩道路より西側を山王遺跡、東側を市川橋遺跡としている。

道路工事の工程の都合上、第4工区を先に調査して引き渡す必要があることや、その他の事情も勘案して、確認調査は第4工区→第2工区→第3工区→第1工区東半部→第1工区西半部の順番に、幅約10m、長さ約700mの細長い地区（調査対象面積約7000m<sup>2</sup>）で実施した（第2図）。

ただし、第4工区の東側部分に当たる幅約10m、長さ約60m（調査対象面積約600m<sup>2</sup>）の範囲については、工事の都合から平成26年度に実施することになった。

平成25年度山王遺跡確認調査の遺跡略号は、FI13都計とした。平成26年度確認調査範囲は市川橋遺跡の範囲に含まれ、同年度に山王・市川橋遺跡八幡地区で多賀城インターチェンジ建設事業に伴う本発掘調査・確認調査を実施したため、これと区別するために遺跡略号をES14都計とした。

遺構確認とともに、第1工区から第4工区にわたり、約20mごとに柱状に古代の遺構面を部分的に掘り下げて柱状図を作成した。これら基本層序を連続的に東西方向に配置することにより、国府多賀城の方格地割の北側縁辺部における基本層序、古代の地表面レベルの違いを把握できるようにした。

各遺構については、旧調査区で既に遺構番号が与えられたものの延長遺構（溝など）や関連遺構はその遺構番号をそのまま採用した。新たに今回の調査で検出された遺構には、現場仮番号を振り、整理・報告書作成段階で、第1工区から第4工区の順に10301以降の番号に遺構略号（SE、SD、SK、SF、SXなど）を付して遺構番号を与えた（以下第2・3・4工区も同じ）。最終遺構番号は10355となった。

南隣の旧調査は、宮城県教育庁文化財保護課で電子データでの遺構実測、報告書図面作成を実施する以前の発掘調査であり、今回の第4次発掘調査に係る平面図作成、報告書図面作成は電子データで実施した。旧調査と今回の発掘調査平面図を合成して全体平面図を作成するためには、旧調査に係る平面図をスキャナーで読み込んで張り合わせて全体図を作成し、これをデジタル・トレースした。

また旧調査の平面図測量は、日本測地系第X系のX = -188880.000、Y = 13230.000を座標原点

とした東西・南北基準線をもとに、3m方眼を設定して行った山王遺跡測地系で行い、この座標原点からの東西・南北方向の距離により行っていた（たとえば山王遺跡座標原点 SOEO から南へ 450 m、東に 486 m 離れた点は S450E486 と表記）。

今回報告する平成 25・26 年度確認調査は、東日本大震災後の世界測地系国家座標第 X 系によって平面図を電子データで作成している。今回の調査にあたって、南隣の旧調査区を一部重ね合わせており、残されていた旧調査で使用した測量用釘を再測量し、これを旧調査図面に落とした上で、今回の調査平面図と旧調査平面図とを東日本大震災後の世界測地系上で統合することにした。

## 2. 平成 25 年度確認調査の経過

発掘調査に先立ち、都市計画道路（主要地方道）泉一塩釜線の既設 2 車線の北側に平行して面する拡張予定 2 車線範囲に仮り敷きされている盛土については、仙台土木事務所から委託を受けた土木業者が第 4 工区から順次除去して搬出した。平成 25 年 7 月 16 日から調査現場に入り仮設事務所設置などの諸準備を進め、7 月 19 日から表土除去作業に着手した。盛土除去が終った第 4 工区から、調査員の指示のもとに重機（バックフォー、クローラーダンプ）による盛土下層面の旧表土等除去を行い、古代の遺構面や自然堆積面（地山面）まで掘り下げる手順で進めた。

旧表土等除去後は、安全に配慮しながら並行して人力作業による遺構確認作業に取り掛かった。必要に応じて区画溝跡・井戸跡・土壙・溝跡等の遺構の時期や性格を確認するための断面断ち割りやトレンチ調査を行った。調査途中の検出状況や確認調査後の写真撮影・図面実測により、適宜記録を行った。なお、調査区の全景については、多賀城第二中学校、JA ライスセンターの協力を得て、高所からの遠景写真撮影を実施した。

検出した遺構の平面測量は、都市計画道路泉一塩釜線 4 車線化事業の八幡地区・町地区の施工に用いられる 3 級基準点（東日本大震災後の世界測地系国家座標第 X 系）を測量原点とし、発掘調査関連測量専用ソフトと自動追尾トータルステーションを用いて実施した。また、併せて随時 1/20 の土層断面図や 1/10 の個別遺構平面図・断面図を手作業で実測した。遺構や調査区の状況等の写真記録は、1,200 万画素のデジタルカメラを用いて実施した。

以上の手順を一部日程的に並行しつつ、調査区ごとに終了して次の調査区へと調査を進め、平成 25 年 12 月 18 日に調査現場でのすべての作業を完了した。調査の進捗日程は、以下のとおりである。

調査全期間	平成 25 年 7 月 16 日～平成 25 年 12 月 18 日
第 4 工区西半部	平成 25 年 7 月 19 日～平成 25 年 9 月 6 日
第 2 工区	平成 25 年 9 月 5 日～平成 25 年 10 月 9 日
第 3 工区	平成 25 年 9 月 12 日～平成 25 年 10 月 17 日
第 1 工区東半部	平成 25 年 10 月 10 日～平成 25 年 11 月 19 日
第 1 工区西半部	平成 25 年 10 月 24 日～平成 25 年 12 月 18 日

### 3. 平成 26 年度確認調査の経過

第 4 工区のうち、平成 25 年度調査で未着手であった東側部分に当たる幅約 10 m、長さ約 60 m の細長い地区（調査対象面積約 600m<sup>2</sup>）で発掘調査を実施した（第 2 図）。

平成 25 年度調査と同様に、各遺構については、旧調査区で既に遺構番号が与えられたものの延長遺構（溝など）や関連遺構はその遺構番号をそのまま採用した。新たに平成 26 年度調査で検出された遺構には、平成 25 年度の第 4 工区調査範囲と区別して 10401 以降の番号に遺構略号（SE、SD、SK など）を付して遺構番号を与えた。最終遺構番号は 10451 となった。

以下、調査経過の概要を記載する。平成 25 年度調査と同様に発掘調査に先立ち、発掘調査予定地内に仮り敷きされている盛土を仙台土木事務所から委託を受けた土木業者が除去して搬出した。

平成 26 年 11 月 4 日から調査現場に入り仮設事務所設置などの諸準備を進めるとともに、重機・クローラーによる盛土下層面の旧表土等除去を行い、古代の遺構面まで掘り下げた。11 月 10 日からは表土除去後、人力作業による遺構確認作業に着手した。検出された遺構の時期や性格を確認するため必要に応じて断面断ち割りやトレンチ調査を行った。その結果、調査区西側で奈良時代の南北方向区画溝跡、調査区中央～東側で以前の調査で確認され遺構の延長部に相当する北東方向に延びる平安時代の北 3 道路跡および付随する南北側溝を検出した。調査区中央～東側では竪穴住居跡と見られる遺構が集中して確認されたほか、材木擣跡や掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡・土壙などの遺構を確認した。平成 25 年度調査と同様な方法で、調査途中の検出状況や確認された遺構について適宜、写真撮影・図面実測を行った。調査区の全景及びブロック写真については、11 月 20 日にラジコンヘリコプターを用いて空中写真撮影を実施した。

以上により、平成 26 年 12 月 15 日に調査現場でのすべての作業を完了した。

## 第4章 基本層序

調査原因是、都市計画道路（主要地方道）泉一塩釜線4車線化工事〔2車線で供用されていた道路の北側2車線分拡張〕に伴う確認調査である。この確認調査は、陸奥国府多賀城跡の方格地割の北側を東西約760mにわたって細長いトレンチ調査を行うものであることから、方格地割の北側外縁部における古代の遺構面レベルを東西方向にみる上でも、重要な意義を持つ。そのため、各調査区において、柱状図を20m前後の間隔で作成することにした。そして、各柱状図の層序をこれまで南隣で行っていた旧調査区の基本層序（宮城県教育委員会1998）や山王遺跡八幡地区における基本層序（宮城県教育委員会1994・1997・2009）と対比させることにした。

これら調査年度の異なる報告書における基本層序は、差異が一部あるものの、基本的には共通する箇所が多い。また、時代別にみると近世が遺構面I（基本層IIa層）、古墳時代後期（栗廻式期）～古代（奈良・平安時代）が遺構面II（基本層III層）、古墳時代前期（塩釜式期）が遺構面III（基本層IV層）、弥生時代中期中葉（楕円形廻式期）が遺構面IV（基本層VI層）となる。そのため、今回の確認調査における基本層序を以下のように設定し、各区における柱状図を対比させた（第3～6図）。

0層 都市計画道路泉一塩釜線建設に伴う盛土。

I層 表土。調査区北隣が水田となる第1工区では、Ia層（耕作土）、Ib層（床土）に細分。

II層 表土直下、古墳時代後期（栗廻式期）～古代（奈良・平安時代）の遺構面IIの上を覆う自然堆積層。

IIa層 江戸時代以前の旧表土で、上面が遺構面Iとなる。黒褐色（10YR2/1）粘質土で、第1工区中央部、第4工区中央部のSX2652西6道路跡からSX2650西5道路跡にかけて分布する。旧調査の基本層2a層（宮城県教育委員会1994・1998）に相当する。

第1工区では、IIa層～III層の間は以下のように細分された。

IIb層 灰色砂質シルト層上部。灰黄褐色（10YR4/2）砂質シルト土。第1工区中央部の平安時代区画溝の上を広く覆う自然堆積層。

IIc層 灰白色火山灰（十和田a火山灰）<sup>註2</sup>。十和田カルデラを給源とする広域火山灰。降灰年代は10世紀前葉（通説では915年）。

IId層 灰色砂質シルト層下部。灰黄褐色（10YR4/2）砂質シルト土。第1工区中央部の平安時代区画溝の上を広く覆う河川氾濫による自然堆積層。粒度分析・珪藻分析により、粒度のばらつきの大きな河川氾濫堆積物で、淡水性種の珪藻が多数占める中、淡水～汽水生種、汽水生種の珪藻が微量含まれることが判明した（付章参照）。

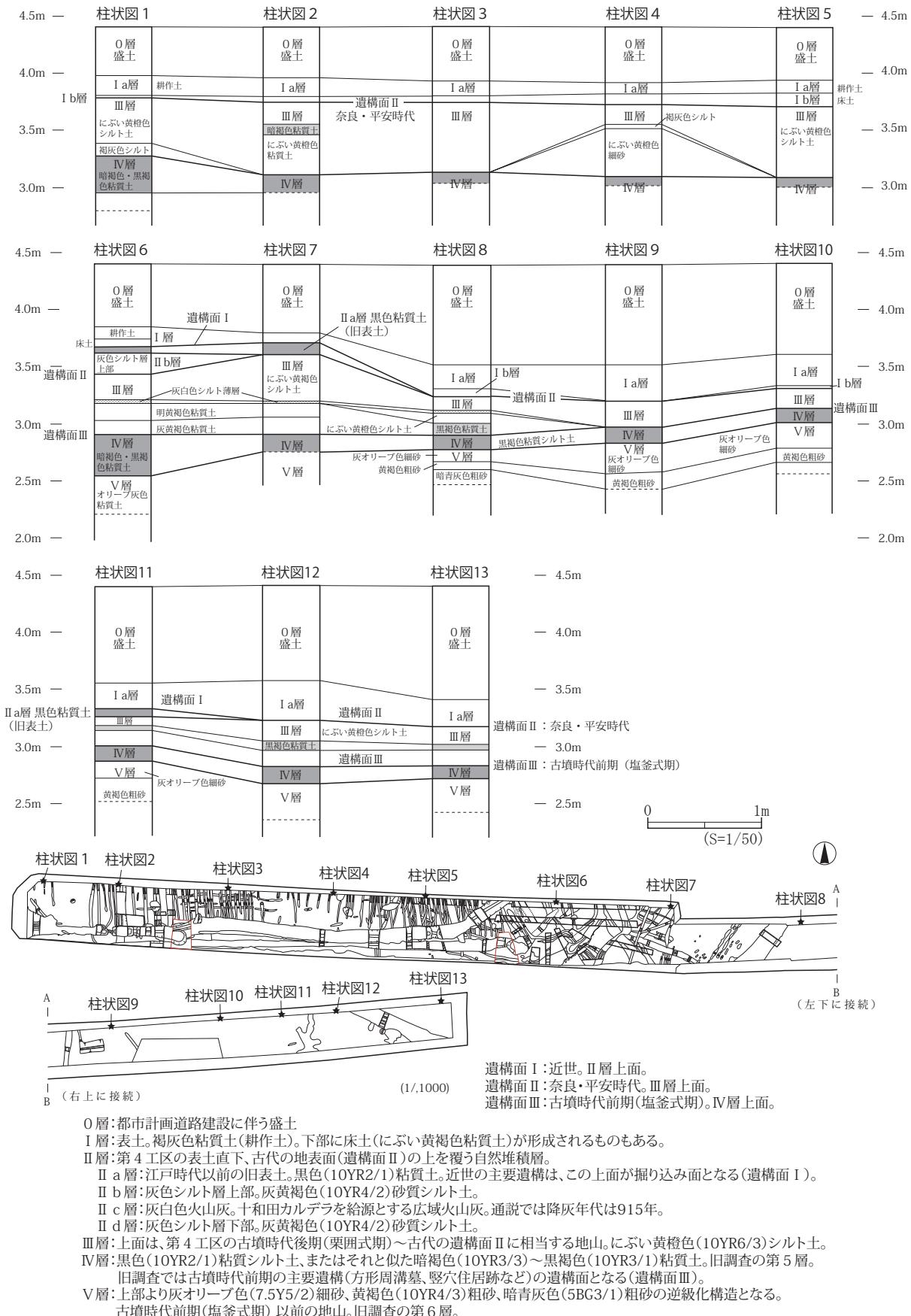
また、第4工区ではIIa層～III層の間は以下のように細分された。

IIf層 黒褐色（7.5YR2/2）粘質シルト土。10世紀前葉に降灰した灰白色火山灰を層中に含み、場所によってさらに細分された。

IIb1層 灰オリーブ色（7.5YR2/2）粘質シルト土。

IIb3層 灰白色火山灰（十和田a火山灰）。

IIb3層 灰色（5Y6/1）粘質シルト土。



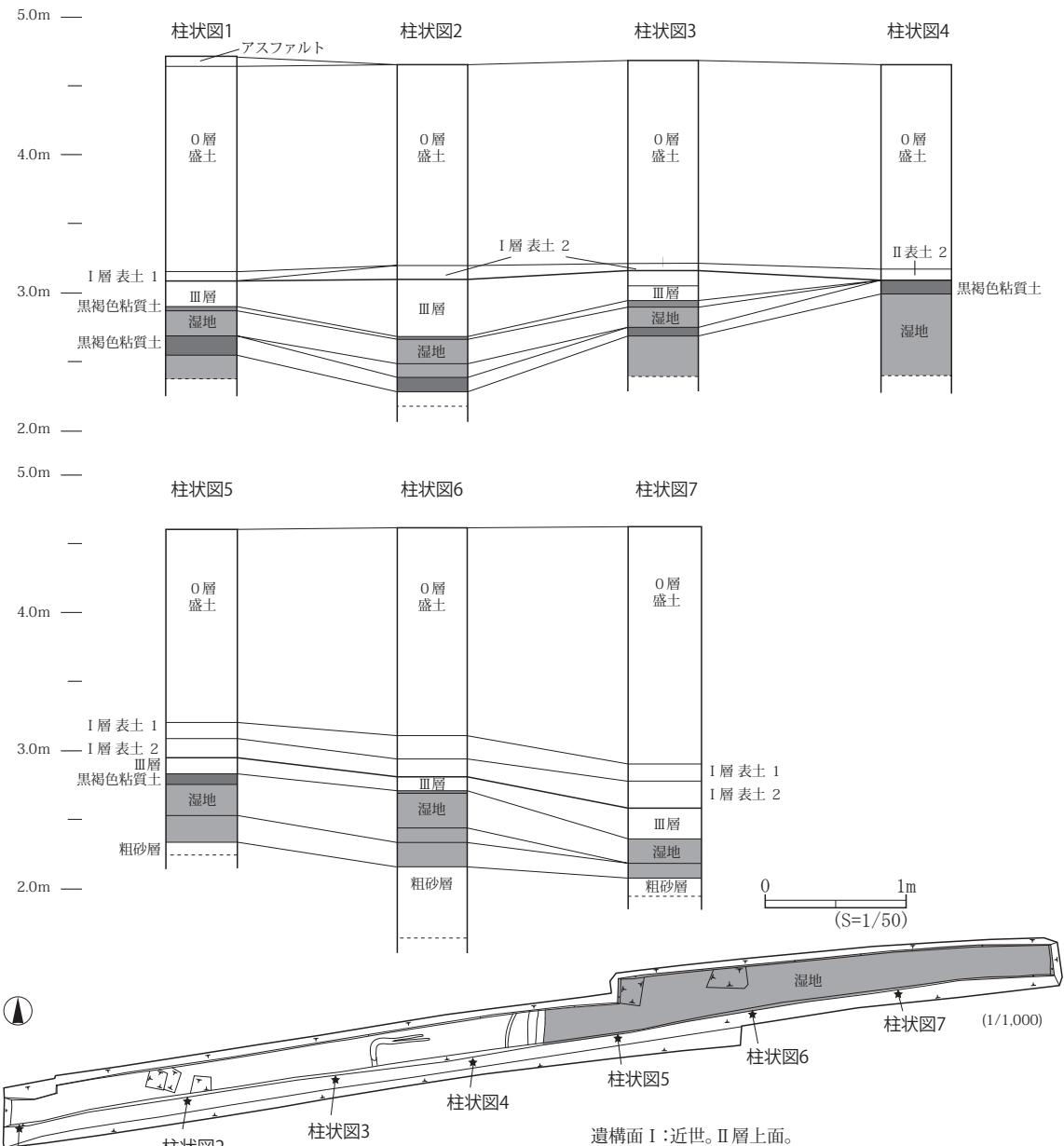
第3図 第1工区基本層序柱状図

II b4 層 褐灰色（10YR3/1）粘質シルト土。

III層 上面が遺構面IIとなる古墳時代後期（栗廻式期）～古代（奈良・平安時代）の地山。シルト土、砂質シルト土、粘質土など、場所によって複数の層に細分される。

IV層 上面が遺構面IIIとなる古墳時代前期（塩釜式期）の暗褐色～黒褐色粘質土。遺物包含層となる箇所もある。

V層 古墳時代前期（塩釜式期）以前の細砂～粗砂、もしくはシルト質土の地山。



遺構面 I :近世。II 層上面。  
遺構面 II :古墳時代後期(栗廻式期)～奈良・平安時代。III 層上面。  
遺構面 III :古墳時代前期(塩釜式期)。IV 層上面。

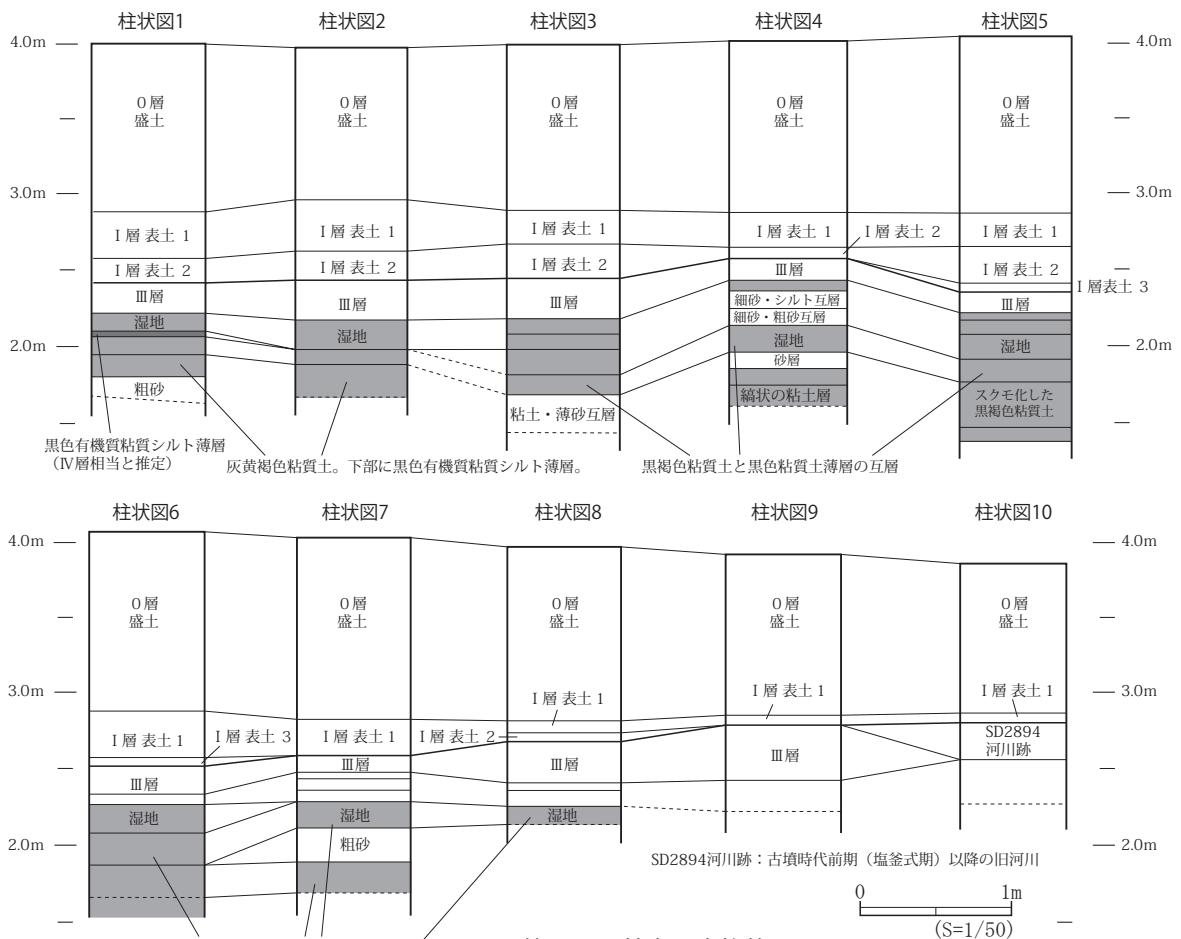
0層:都市計画道路建設に伴う盛土  
I層:表土。黒褐色粘質シルト土。表土 2 には、にぶい黄褐色粘質シルトブロックが不均一に含まれ、表土 1 には含まれない。

II層:第4工区の表土直下、古代の地表面(遺構面II)の上を覆う自然堆積層。第2工区には存在していない。

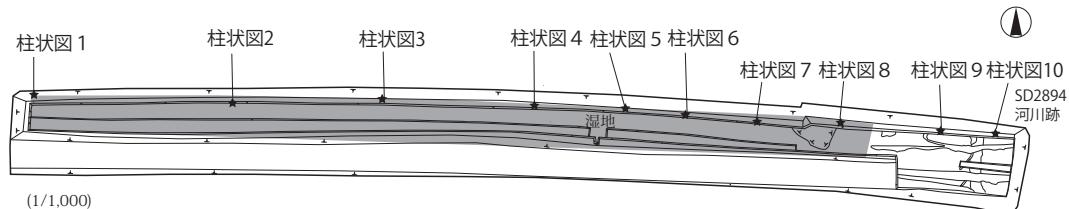
III層:上面は、第4工区の古墳時代後期(栗廻式期)～古代の遺構面IIに相当する地山。灰色(5Y4/1)シルト土。

湿地:有機質に富んだ黒褐色粘質土や灰黄色粘質土、灰色シルト土、薄砂層などが互層となる水成堆積層

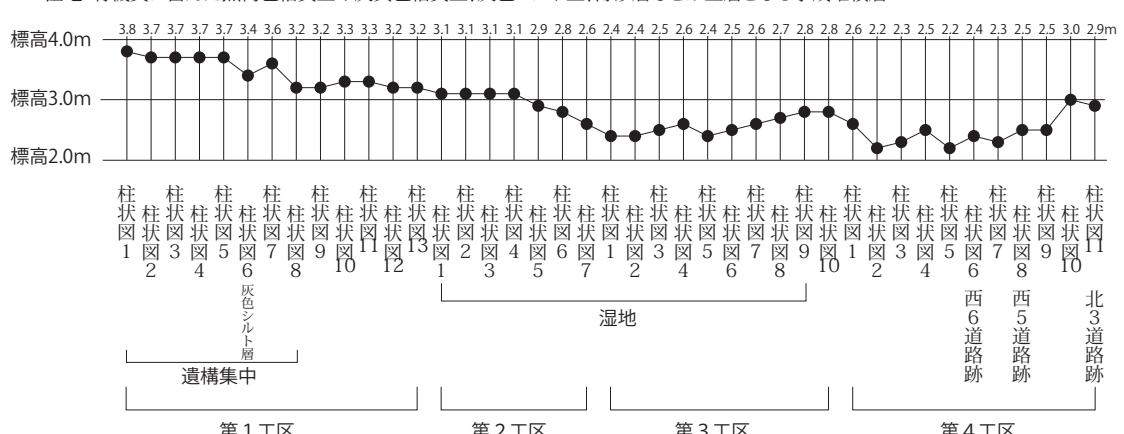
第4図 第2工区基本層序柱状図



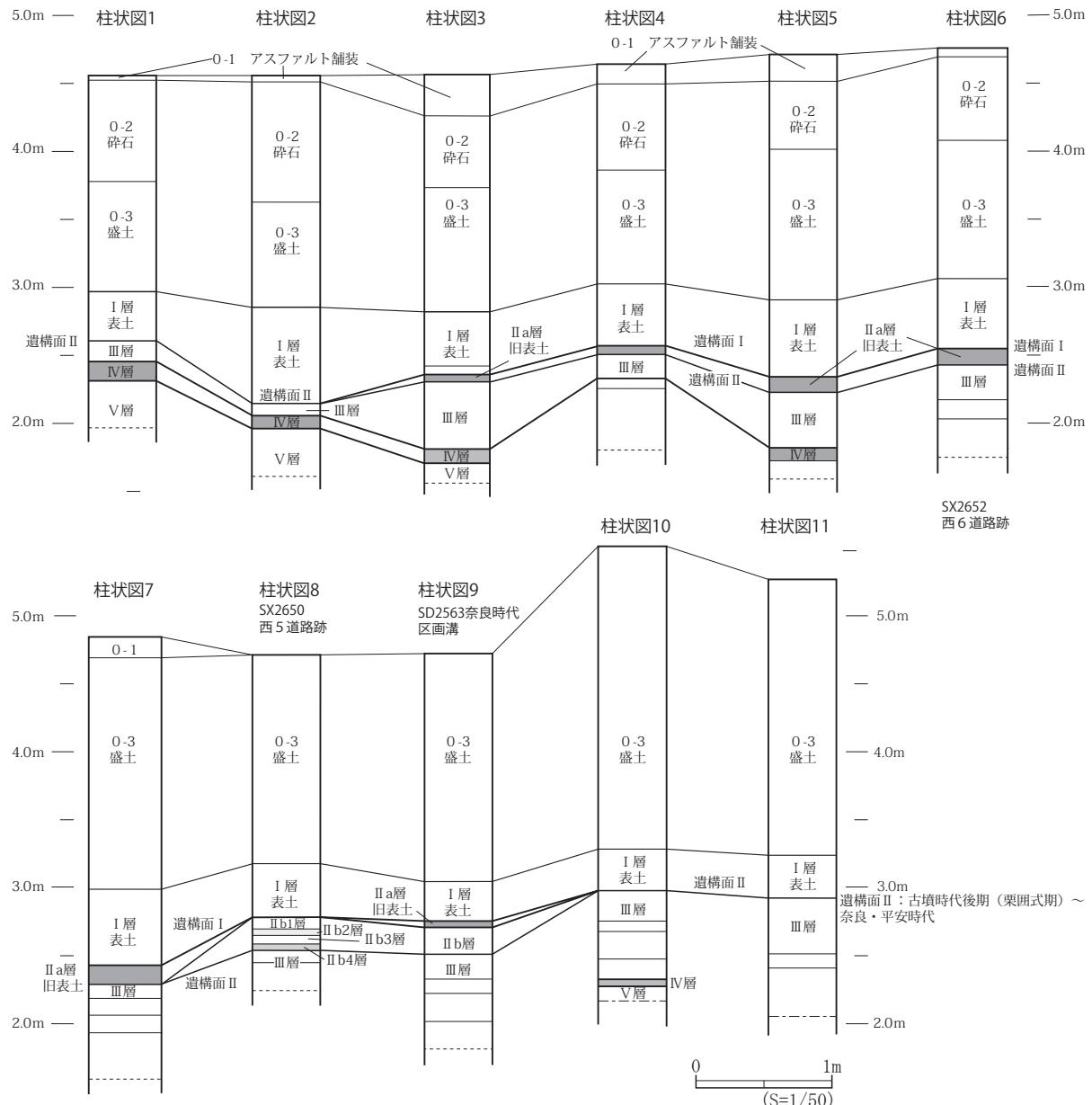
第3工区基本層序柱状図



0層:都市計画道路建設に伴う盛土  
 I層:表土。黒褐色粘質シルト土。表土2にはにぶい黄褐色粘質シルトブロックが不均一に含まれ、表土1には含まれない。  
 II層:表土直下、古代の地表面(遺構面II)の上を覆う自然堆積層。第3工区には存在していない。  
 III層:上面は古墳時代後期(築壇式期)～古代の遺構面IIで、当該期の地山。柱状図1～7の上部は灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト、  
 柱状図8・9では細砂とシルトの互層である程度は水流のある環境下にあったと考えられる。  
 湿地:有機質に富んだ黒褐色粘質土や灰黄色粘質土、灰色シルト土、薄砂層などが互層となる水成堆積層



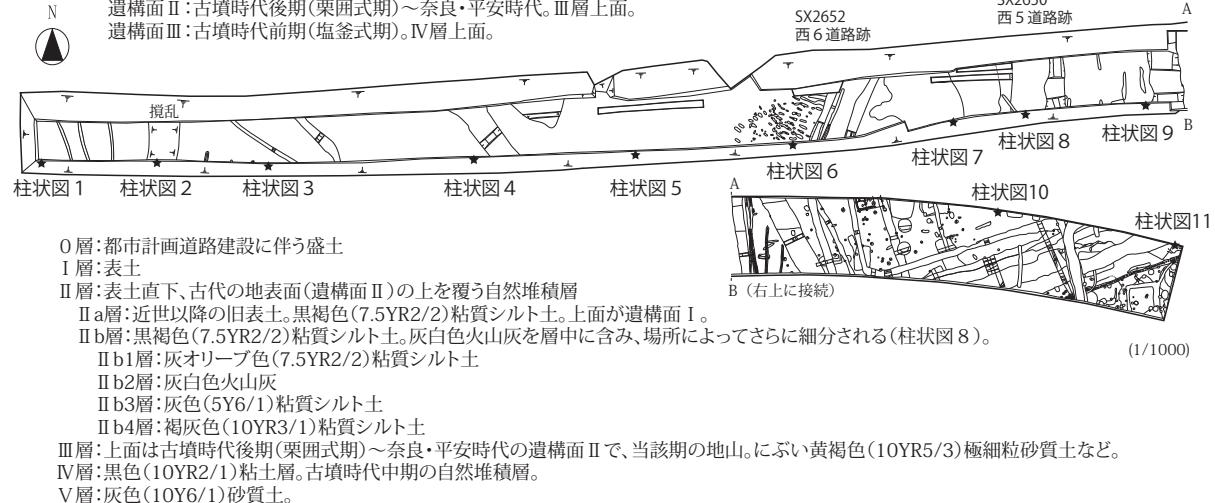
第5図 第3工区基本層序柱状図、第1～4工区の遺構面II レベル



遺構面Ⅰ：近世。Ⅱa層上面。

遺構面Ⅱ：古墳時代後期(栗廻式期)～奈良・平安時代。Ⅲ層上面。

遺構面Ⅲ：古墳時代前期(塩釜式期)。Ⅳ層上面。



第6図 第4工区基本層序柱状図

VII層 上面が遺構面IVとなる弥生時代中期中葉（樹形圓式期）の黒色泥炭質土。遺物包含層となる箇所もある。旧調査区などの深掘りの箇所で検出されている。

第1工区から第4工区まで東西約760mにわたって実施した約10m幅の細長いトレンチ調査で記録した各柱状図（第3～6図）において、古墳時代後期（栗圓式期）～古代（奈良・平安時代）の遺構面IIの標高を検討した結果、陸奥国府多賀城跡の方格地割の北側における土地利用を考える上で、以下のような知見が得られた（第5図下段）。

- ①第1工区から第4工区までの遺構面IIは、大局的にみると西側の第1工区から東側の第4工区に向けて低下している。
- ②遺構面IIの標高は、西端の第1工区柱状図1が3.8m、東端の第4工区柱状図11が2.9mで、標高差は0.9mある。
- ③第1工区で灰色砂質シルト層が堆積した箇所の柱状図6は両隣の柱状図5・7よりも低く、この箇所に河川氾濫堆積物が自然堆積した状況を裏付けている。
- ④第2工区～第3工区にかけては湿地として標高も低く、土地利用されていない状況がよく理解できる。
- ⑤第4工区では西5・西6道路が東側の居住区域よりも標高が低く、標高の低い区域を選んで道路が造営された状況がよくわかる。
- ⑥この西6道路跡の西側は西6道路跡よりもさらに標高が20cm低い。大雨など道路側溝が冠水・横溢した際に、より低い箇所に水流が流れることを意識されたためか、土地利用されていない。

## 第5章 山王遺跡伊勢・町地区（第1工区）の確認調査

第1工区西半部では、奈良・平安時代の遺構として、東西方向の区画大溝2条（北2道路跡の北約60m地点）、畑跡（東西方向→南北方向に時期変遷）、井戸跡2基（方形井戸枠、円形曲物井戸枠）、南北方向区画溝3条などを検出した。平安時代の北2道路跡の北約60mに位置する2条の東西区画溝を境に、北側が耕作域（畑）、南側（旧調査区側）が居住域となっていたことが明らかとなり、方格地割の西はずれにおける土地利用状況が明確となった。この東西区画溝は2時期あり、東で北に屈曲して延びる。屈曲部以東には畑があまり伸びず、畑の東縁もこの区画溝で区切られている。

一方、1工区東半部では、調査区東端で北西方向に延びる古代の区画溝を検出した他は、主要遺構は確認されなかった。

江戸時代の遺構として、集落北辺区画大溝1条、土壙2基、南北小溝1条を確認し、町屋の北辺区画施設の構造と変遷が明確となった。この区画大溝は、東西方向の大溝の東側で北に屈曲する。鞍部（土橋）が3箇所あり、通路となっていたとみられる。この大溝は新旧3時期あり、古い大溝は中央鞍部より東側は鞍部上面まで埋戻し、大溝としてほとんど機能していない。また、この大溝の西側延長は、調査区西隣の交差点を挟んで西側に位置する平成7・8年度の山王遺跡町地区発掘調査（宮城県教育委員会1998）で検出していた南北方向の集落西辺区画大溝と直角に接続していた可能性が高い。

### 1. 古代（奈良・平安時代）の遺構と遺物

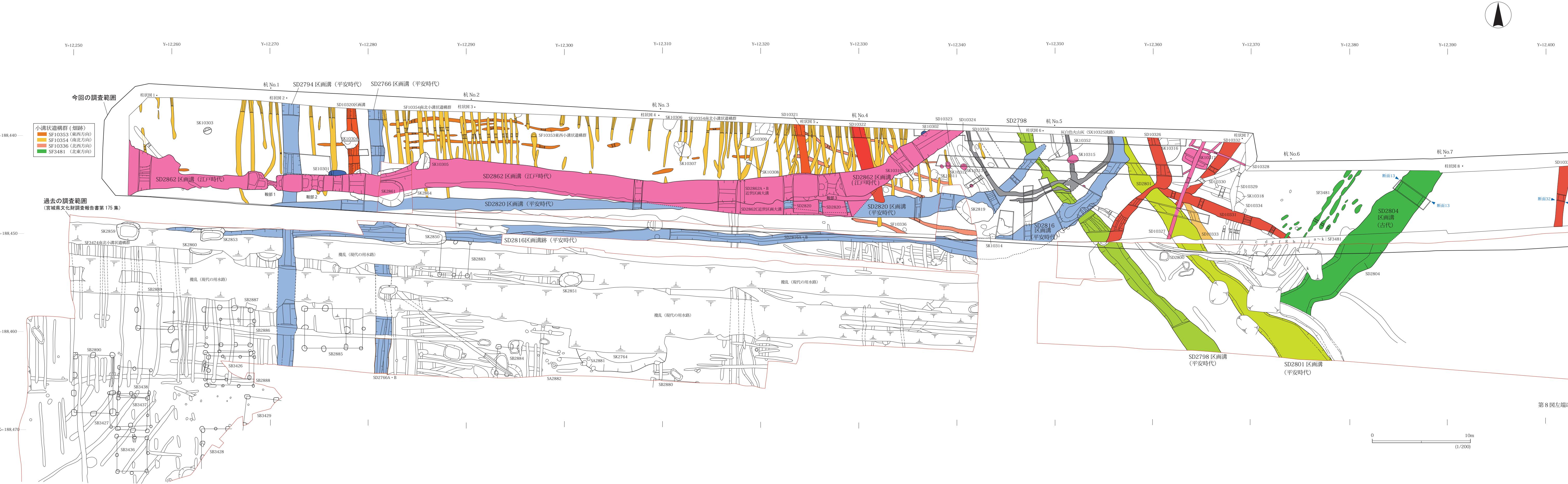
#### (1) 区画溝跡

【SD2766区画溝跡】（平面図：第7・10図、断面図：第17図②・③、第22図②、写真：図版6、10-1）

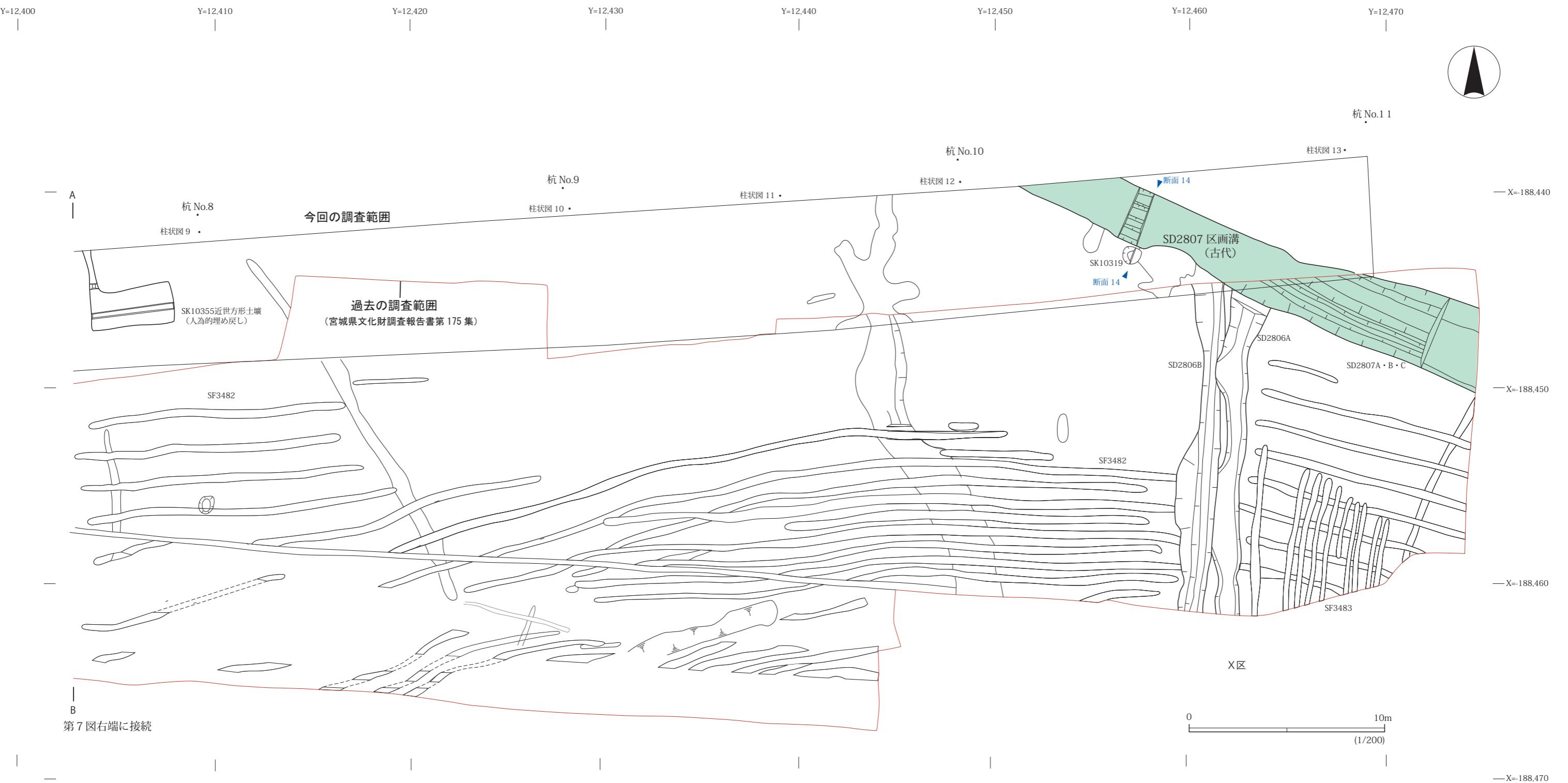
旧調査で長さ約11m検出していた南北方向の区画溝跡で、調査区西部で北側延長約6.7mを検出した。旧調査と合わせ、長さ約27m検出した。方向はほぼ北を向く。新旧2時期ある（SD2766A→SD2766B）。SD2766A・B溝跡は幅約1.1m、深さ約35cm、新しいSD2766C溝跡は幅約0.3～0.4m、深さ約20cmで、A・B溝跡の規模が大きい。いずれも自然堆積している。旧調査では、堆積土の比較から、東西方向のSD2816区画溝跡と同時期で、これに接続するとみている。東西方向のSD2816A・B区画溝跡、SD2820区画溝跡（9世紀前半）とほぼ同時期に存在したとみられ、SD2826区画大溝跡（近世）、SK2861土壙（10世紀前葉）よりも古い。SD2794区画溝跡とは約7～8m離れてほぼ併行するが、①SD2816A・B区画溝跡との新旧関係、②SD2766B溝跡2層に灰白色火山灰（十和田a火山灰；10世紀前葉）が一次堆積していたこと（旧調査）から、本溝跡はSD2794溝跡よりも古いことがわかる。

最も新しい出土遺物には、回転糸切り無調整の須恵器坏（第25図2）がある。これは底径も小さく、9世紀後葉頃に位置付けられる仙台市五本松窯C群出土の須恵器坏（仙台市教育委員会1987）と類似し、この頃のものとみられる。

【SD2794区画溝跡】（平面図：第7・9・10図、断面図：第17図①、第22図②、写真：図版5上・下、10-2）



## 工区検出の



第8図 第1工区検出の主要遺構全体図（2）

旧調査で長さ約 14 m 検出していた南北方向の区画溝跡で、調査区西部でその北側延長約 11.4 m を検出した。旧調査と合わせると長さ約 27 m 検出したことになる。幅 1.5 ~ 2.0 m、深さ約 0.8 m で、断面形は U 字状となる。方向は心々でみると北で東に約 1° 偏る。堆積層は 8 層に分かれ、自然堆積層である。6 層に灰白色火山灰ブロックが含まれることから、10 世紀前葉以前に掘削され、10 世紀前葉以降に埋没したことがわかる。旧調査、今回の調査とも遺物は出土していない。

新旧関係は、東西方向の SD2816A・B 区画溝跡（平安時代）よりも新しく（旧調査区）、東西方向の SD2820 区画溝跡（平安時代）、SD2862 区画大溝跡（近世）よりも古い。

**【SD2798 区画溝跡】**（平面図：第 7・13・14 図、断面図：第 17 図⑦、第 24 図①・②、写真：図版 15 上）

旧調査で長さ約 16.5 m 検出していた北西—南東方向の区画溝跡で、調査区中央部でその北側延長約 14 m を検出した。旧調査と合わせると、長さ約 30 m 検出したことになる。方向は北で西に約 40° 偏る。幅 0.5 ~ 2.0 m で、北側程幅狭くなっている。深さは約 40cm で、断面は浅い皿状である。2 層に分かれ、自然堆積している。新旧関係は SD2816・2820 区画溝跡、SD10326 溝跡、SX10325 流路、灰色砂質シルト層下部よりも古い。本溝と SD2801 区画溝跡は、方向が同じで 4 ~ 6 m 離れ、東西・南北方向の小溝状遺構群が両区画溝跡よりも東側にみられないことから、耕作域（畑）の東端を区画したものとみられる。後述のように、第 1 工区の遺構期の検討の結果、両区画溝跡を 9 世紀初頭頃に位置付けた。

**【SD2801 区画溝跡】**（平面図：第 7・14 図、断面図：第 17 図⑧、第 24 図①・②、写真図版：図版 10-3、15 上、16-1・3・4）

旧調査で長さ約 19 m 検出していた北西—南東方向の区画溝跡で、調査区中央部でその北側延長約 14.5 m を検出した。旧調査と合わせると、長さ約 31 m 検出したことになる。方向は北で西に約 40° 偏る。幅 1.0 ~ 4.0 m で、北側程幅狭くなっている。深さは約 20cm、断面は浅い皿状である。2 ~ 4 層に分かれ、自然堆積している。新旧関係は、SD2804 区画溝跡、SD10331・10332・10333 溝跡よりも新しく、SD2816・2820 区画溝跡、SD2800・10326・10327 溝跡、灰色砂質シルト層下部よりも古い。

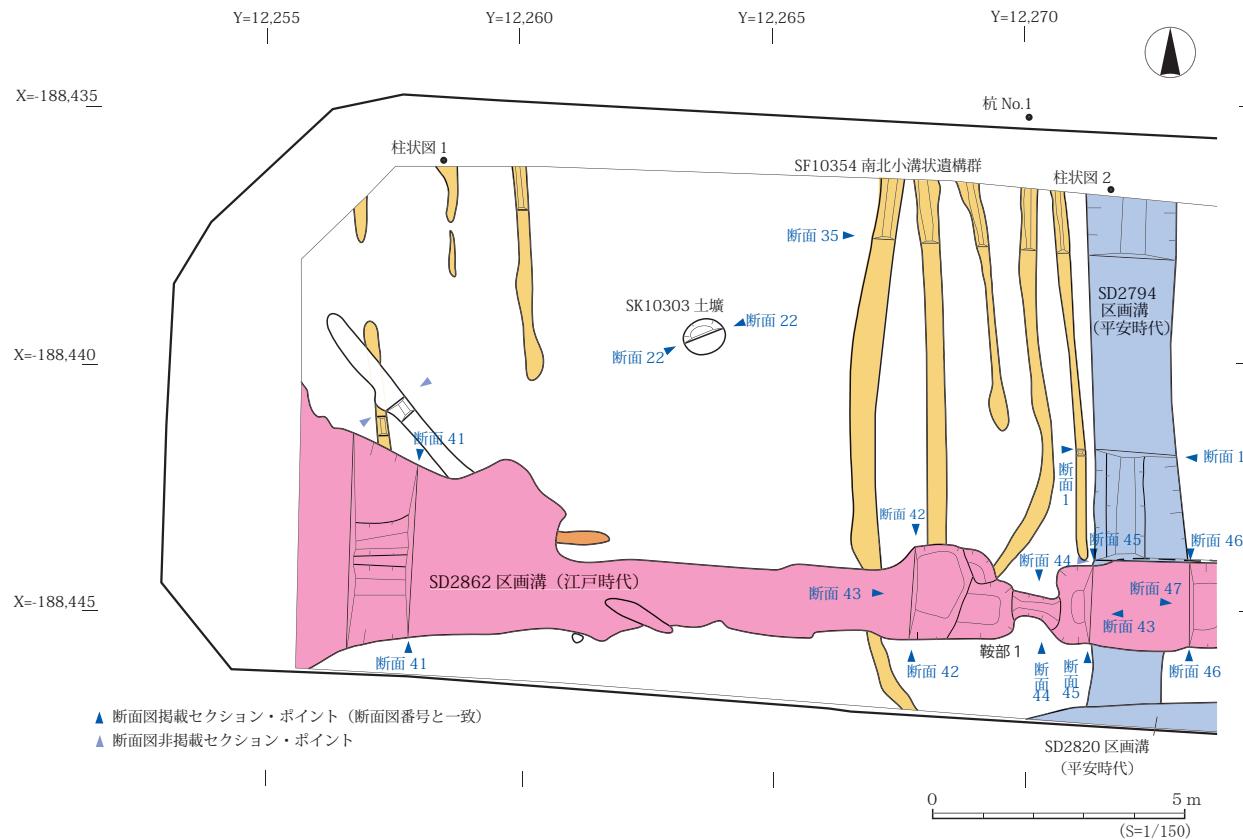
本溝と SD2798 区画溝跡は、方向が同じで 4 ~ 6 m 離れ、東西方向、南北方向の小溝状遺構群が両区画溝跡よりも東側にみられないことから、耕作域（畑）の東端を区画したものとみられる。

**【SD2804 区画溝跡】**（平面図：第 7・15 図、断面図：第 17 図⑨）

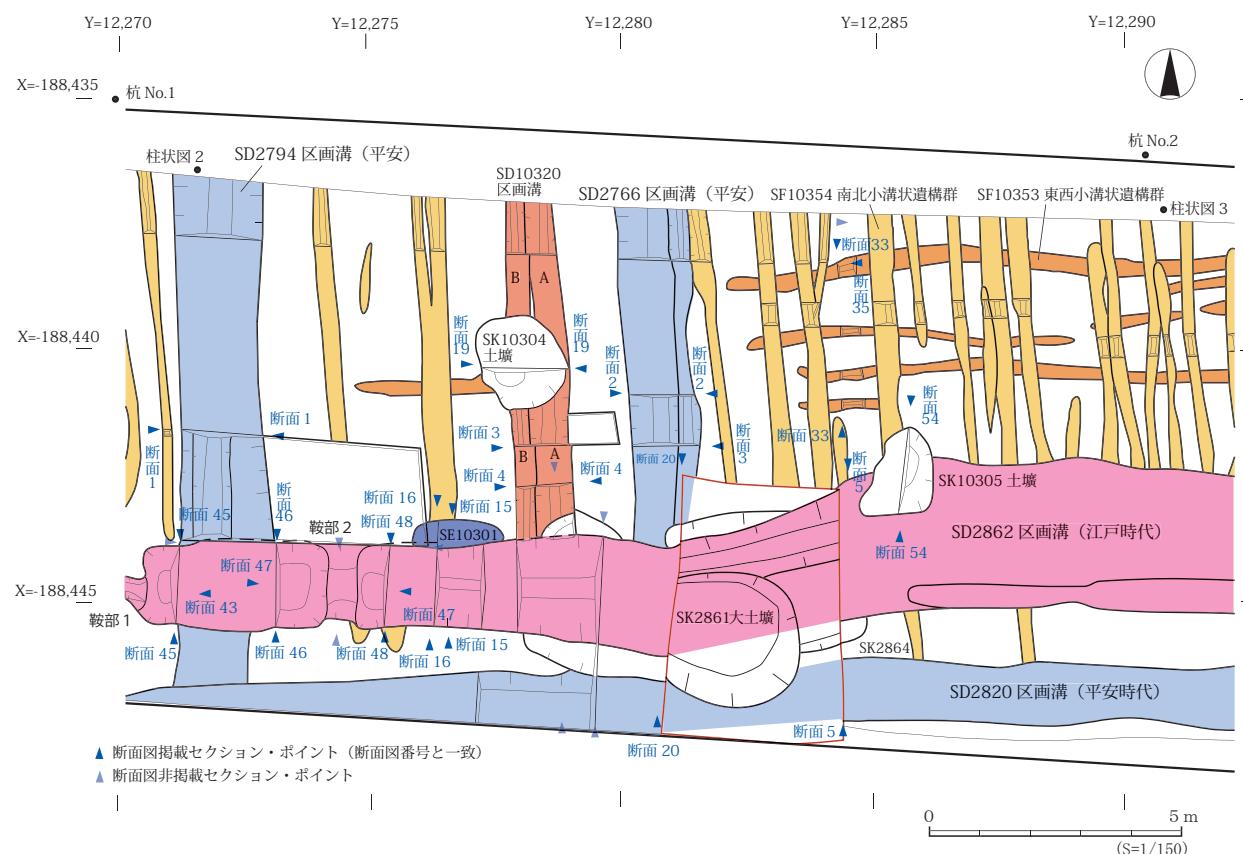
旧調査で長さ約 12 m 検出していた北東—南西方向の区画溝跡で、調査区中央部でその北側延長約 11 m を検出した。旧調査と合わせると、長さ約 21 m 検出したことになる。方向は北で東に約 44° 偏る。幅 2.5 ~ 4.0 m、深さは約 30cm で、断面は浅い皿状である。SD2801 区画溝跡よりも古く、第 1 工区で最も古い区画溝である。西側が同方向の SF3481 小溝状遺構群、東側が東西方向の SF3482 小溝状遺構群、それよりも新しい南北方向の SF3483 小溝状遺構群となっていることから、本溝跡は SF3481 小溝状遺構群（畑跡）と同時期で、耕作域（畑）の内部を区画したものとみられる。

**【SD2807 区画溝跡】**（平面図：第 8・16 図、断面図：第 17 図、写真：図版 10-4）

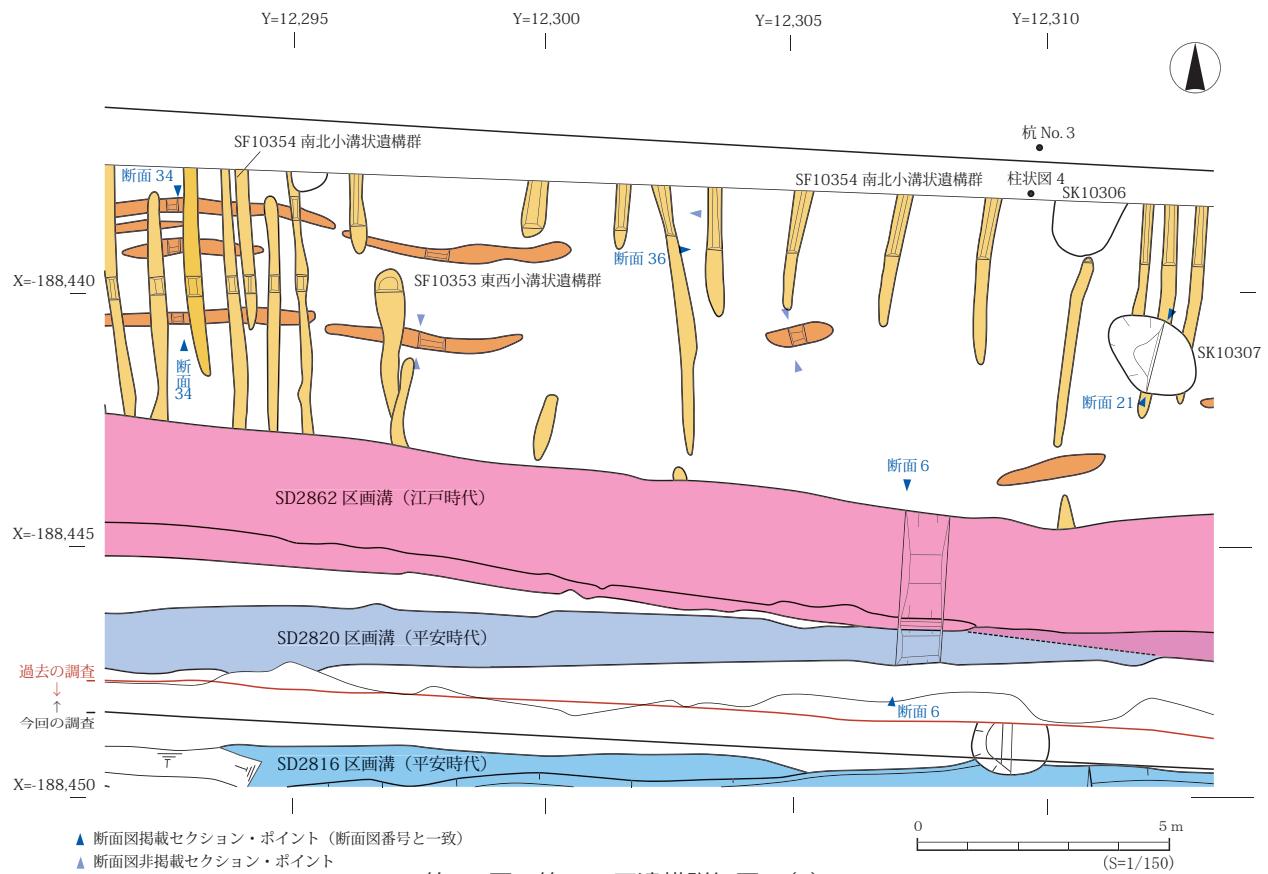
旧調査で長さ約 14 m 検出していた北西—南東方向の区画溝跡で、調査区中央部でその北側延長約 17.5 m を検出した。旧調査と合わせると長さ約 25.5 m 検出したことになる。方向は西で北に約 23° 偏る。旧調査で 3 時期の変遷（SD2807A → SD2807B → SD2807C）を確認したが、今回の調査では



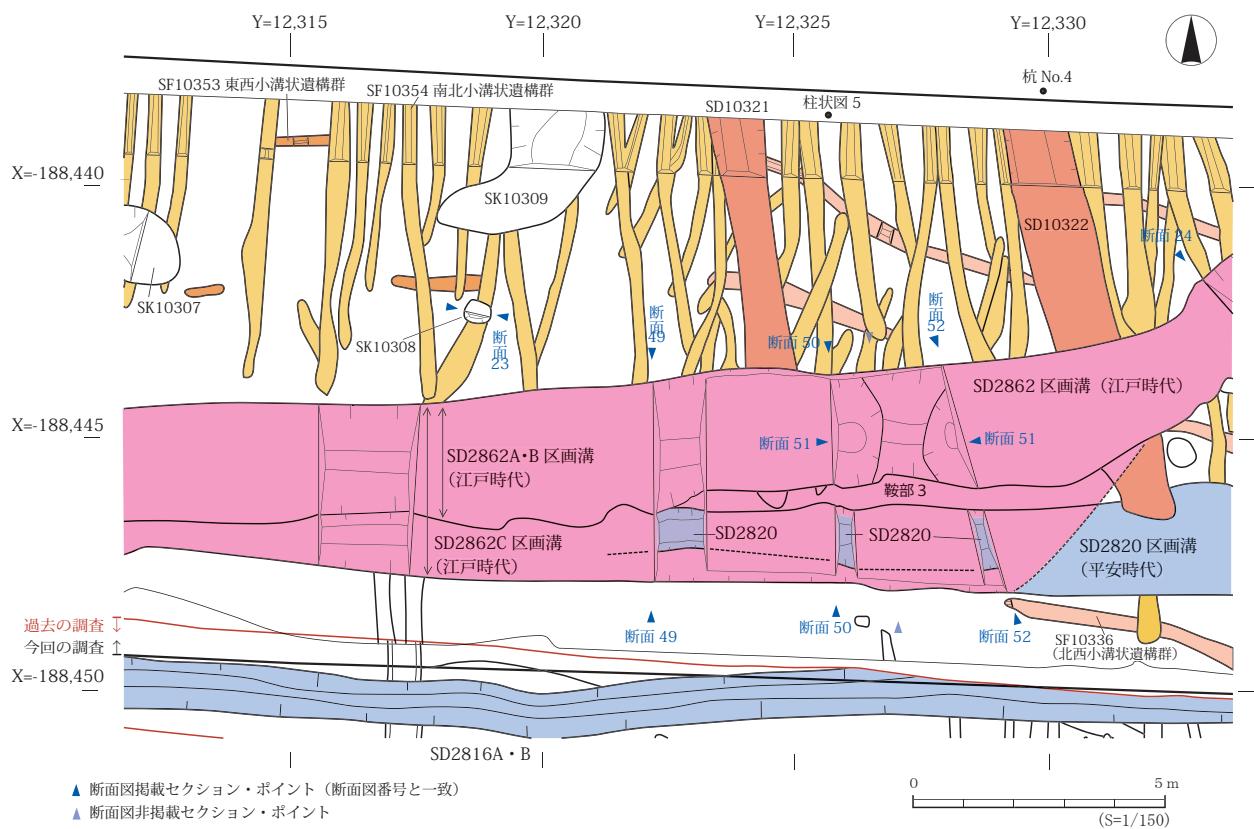
第9図 第1工区遺構詳細図 (1)



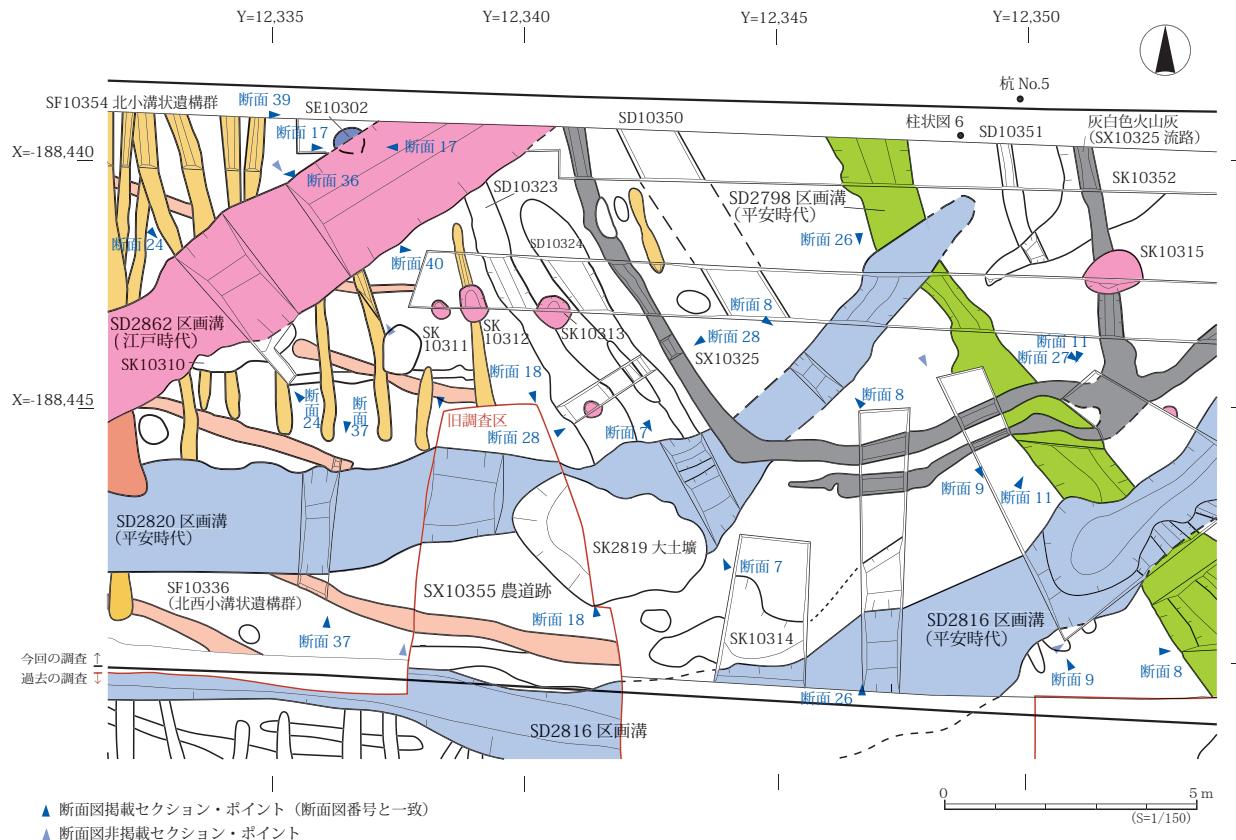
第10図 第1工区遺構詳細図 (2)



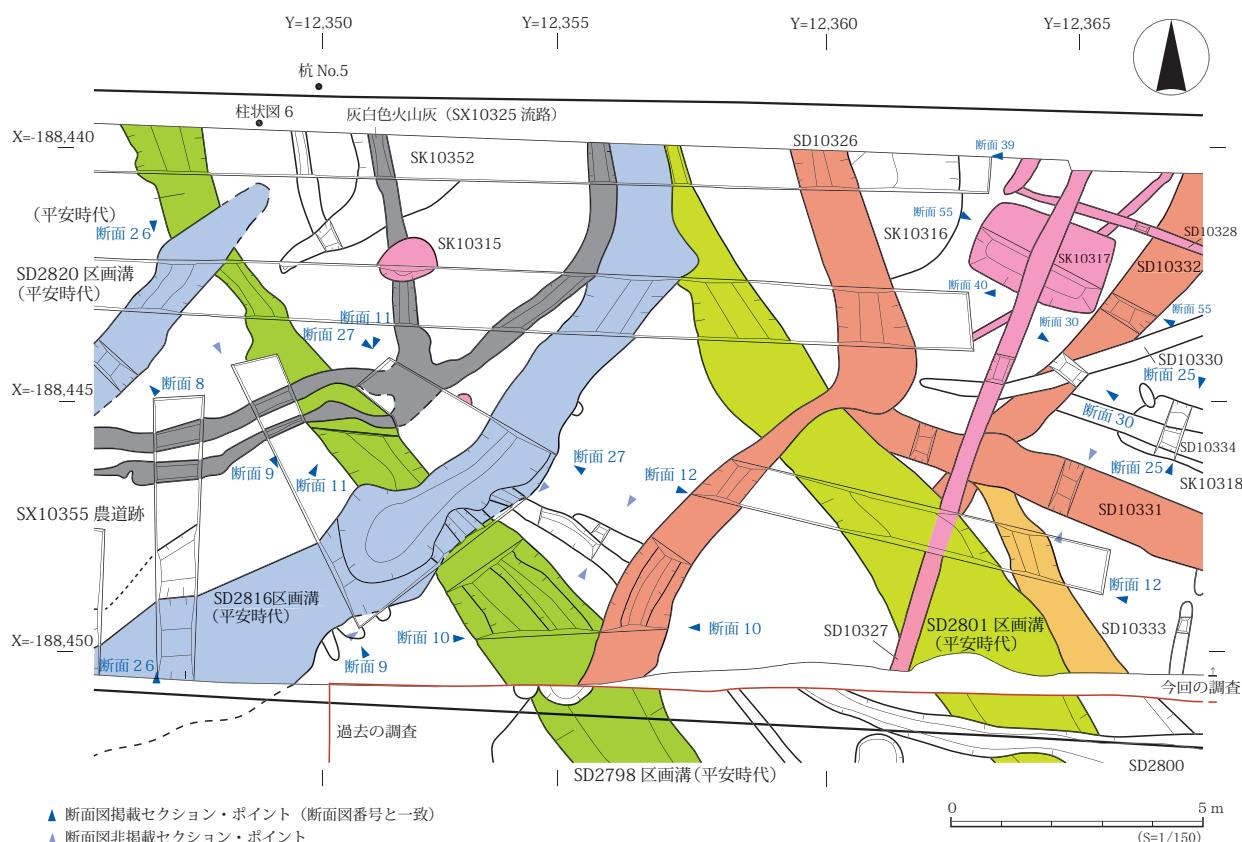
第11図 第1工区遺構詳細図 (3)



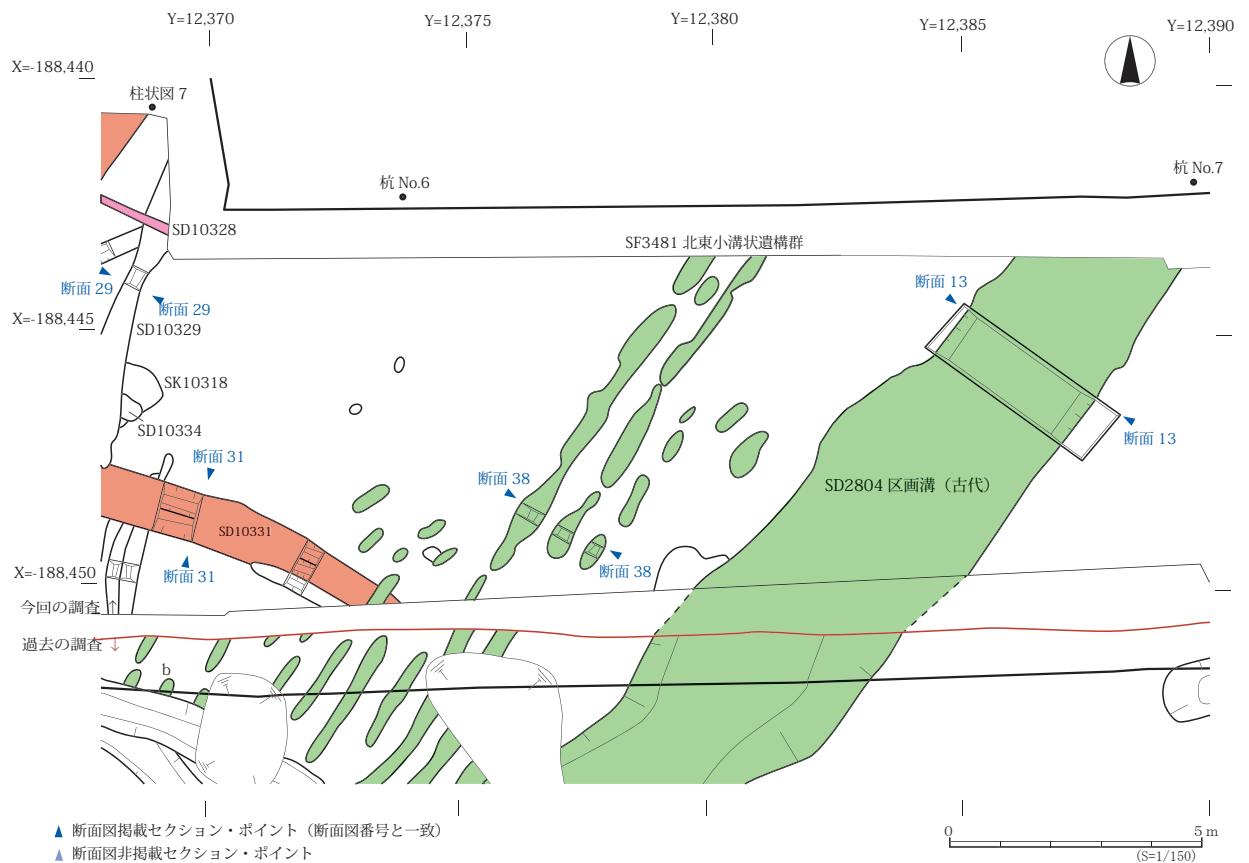
第12図 第1工区遺構詳細図 (4)



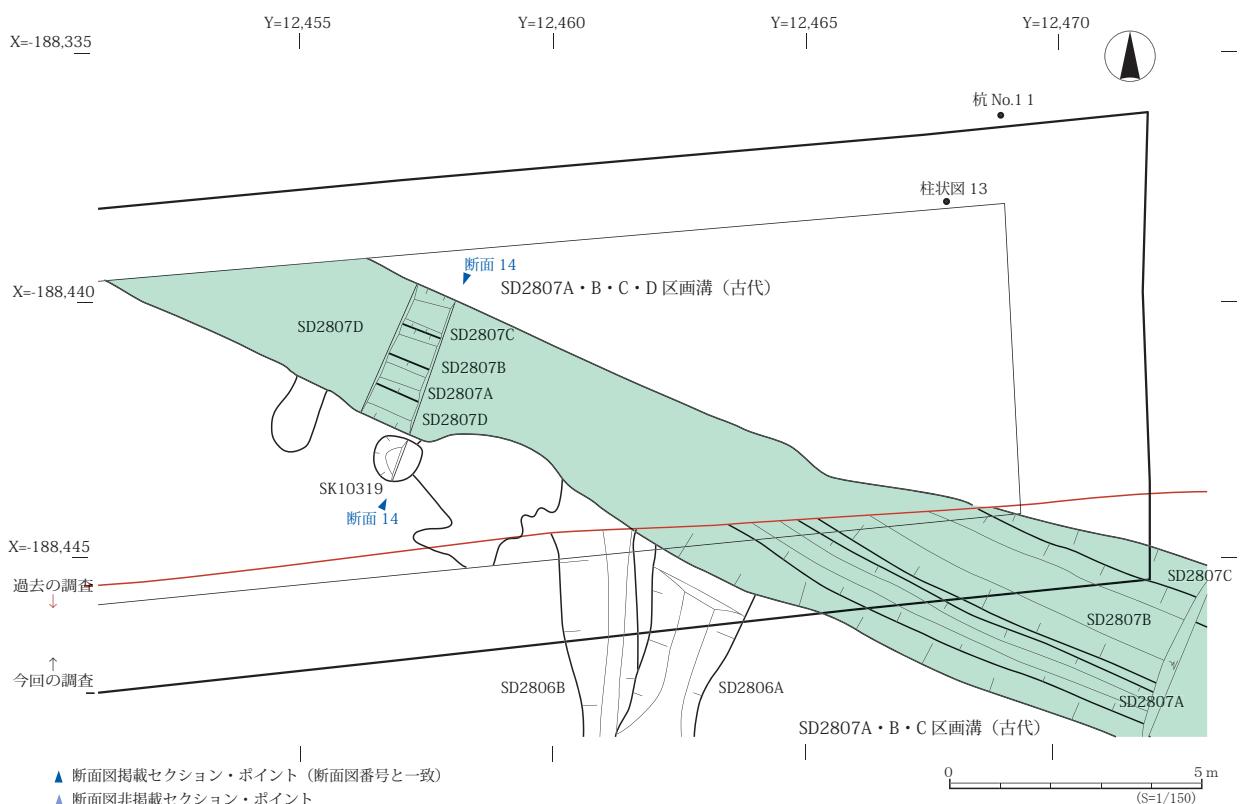
第13図 第1工区遺構詳細図 (5)



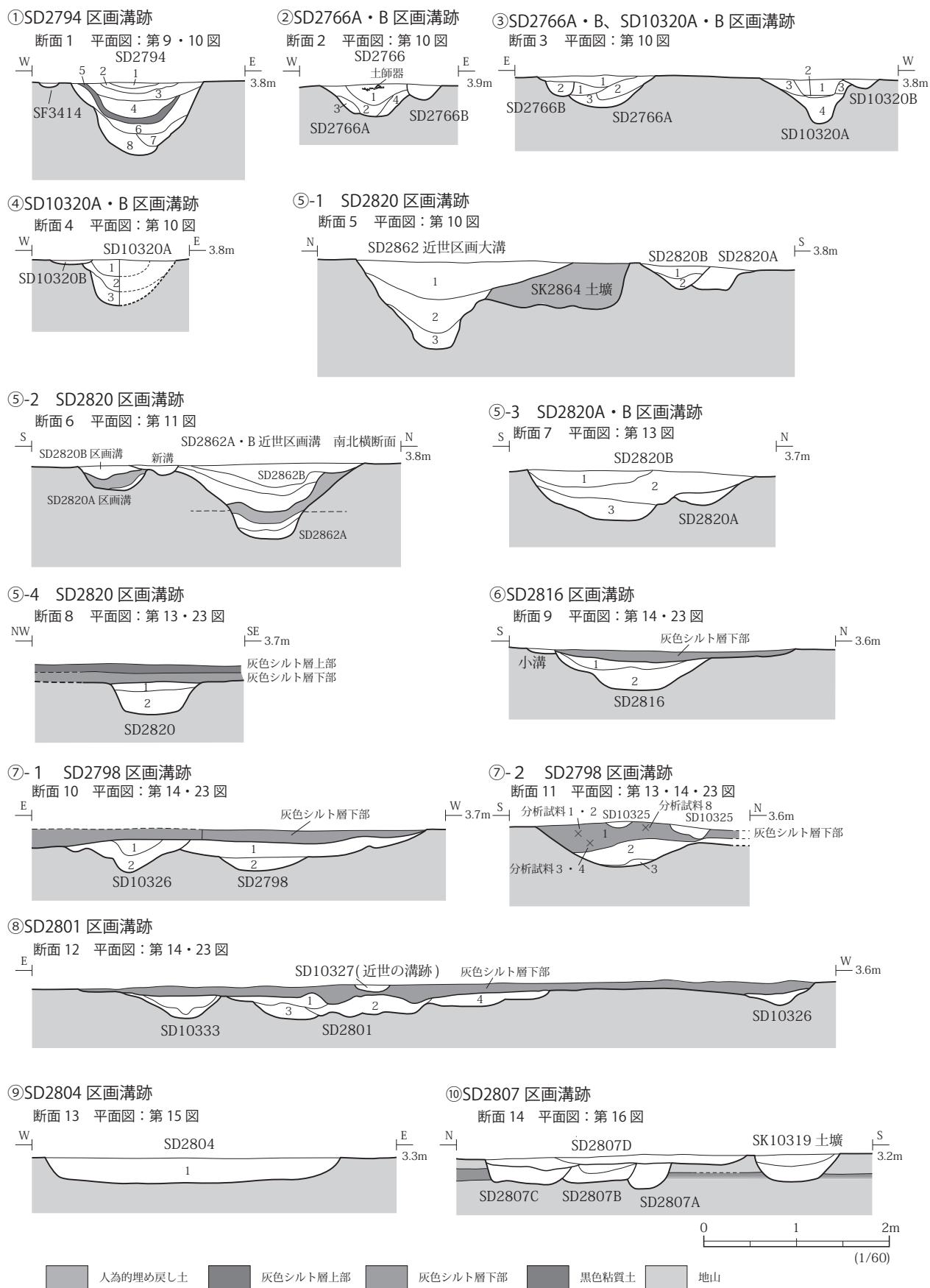
第14図 第1工区遺構詳細図 (6)



第 15 図 第 1 工区遺構詳細図 (7)



第 16 図 第 1 工区遺構詳細図 (8)



第 17 図 第 1 工区の古代区画溝跡断面図

遺構・層位		土色	土性	その他の特徴	
① SD2794 区画溝跡	1層	灰黄褐色 (10YR5/2)	粘質土	灰白色火山灰ブロックを含む。	
	2層	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	シルト		
	3層	褐灰色 (10YR5/1)	シルト	にぶい黄橙色 (10YR7/4) シルトをブロック状 ( $\phi 2\sim 5cm$ ) に含む。	
	4層	暗褐色 (10YR7/3)	粘質土	にぶい黄橙色 (10YR7/4) シルトをブロック状 ( $\phi 2\sim 5cm$ ) に含む。	
	5層	黒色 (10YR3/1)	粘質土		
	6層	黒褐色 (10YR3/1)	粘質土	茎根等の植物性有機物を含む。灰白色火山灰ブロックを含む。	
	7層	暗青灰色 (10BG3/1)	粘質土	滯水により還元状態の土壤。	
	8層	暗青灰色 (5BG4/1)	粘質土	茎根等の植物性有機物を含む。滯水により還元状態の土壤。	
② SD2766A 区画溝跡	1層	黒褐色 (10YR3/2)	粘質土	土師器含む。	
	2層	灰黄褐色 (10YR5/2)	砂質シルト		
	3層	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	砂質シルト	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 砂質シルト<地山土>をブロック状 ( $\phi 3\sim 5cm$ ) に含む。	
	4層	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	砂質シルト	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 砂質シルト<地山土>をブロック状 ( $\phi 3\sim 8cm$ ) に含む。	
③ SD2766A 区画溝跡		黒褐色 (10YR3/1)	粘質土		
	1層	黒褐色 (10YR3/1)	粘質土	灰白色火山灰ブロック ( $\phi 1cm$ ) を少量含む。	
	2層	黒褐色 (10YR3/2)	粘質土	灰白色火山灰ブロック ( $\phi 1cm$ ) を少量含む。	
	3層	褐灰色 (10YR4/1)	粘質土		
SD2766B 区画溝跡	1層	褐灰色 (10YR6/1)	砂質シルト	マンガン粒含む。	
	2層	黒褐色 (10YR3/1)	粘質土	灰白色火山灰ブロック ( $\phi 1cm$ ) を少量含む。SD2766A-1層よりも粘性強い。	
	3層	灰黄褐色 (10YR5/2)	砂質シルト		
	4層	黒色 (10YR2/1)	粘質土		
SD10320A 区画溝跡	3層	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	砂質シルト	地山ブロックを多く含む。	
	4層	灰黄褐色 (10YR4/6)	粘質シルト		
	SD10320B	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	砂質シルト		
	SD10320A	灰黄褐色 (10YR5/2)	砂質シルト		
④ SD10320A 区画溝跡	2層	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	砂質シルト		
	3層	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘質シルト		
	SD10320B	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	砂質シルト		
⑤-1 SD2820A 区画溝跡	1層	褐灰色 (10YR5/1)	粘質土		
	SD2820B 区画溝跡	1層	灰黄褐色 (10YR5/2)	粘質土	黄褐色 (10YR5/6) マンガン粒含む。
	2層	オリーブ黄色 (5Y6/3)	細砂	褐灰色 (10YR5/1) 粘質土をブロック状 ( $\phi 2\sim 10cm$ ) に含む。	
	SK2864大土壌	1層	黒褐色 (10YR3/1)	粘質土	黄褐色 (2.5Y5/4) 細砂、黒褐色 (10YR3/1) 粘質土 ( $\phi 2\sim 20cm$ ) 、にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土 ( $\phi 2\sim 20cm$ ) 、灰白色火山灰 ( $\phi 1\sim 4cm$ 少量) をブロック状に含む人為堆積土。
SD2862 近世区画溝跡	1層	褐灰色 (10YR4/1)	粘質土	茎・根等の植物性有機物など含む。	
	2層	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘質土		
	3層	オリーブ黒色 (7.5Y3/1)	粘質土		
⑤-2 SD2820 区画溝跡	1層	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘質シルト	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 砂質シルト<地山土>を少量ブロック状 ( $\phi 1\sim 2cm$ ) に含む。	
	2層	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘質シルト	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 砂質シルト<地山土>を4割程度含む混合土。	
	3層	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	砂質シルト	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土を少量含む。溝斜面の地山土の崩落流れ込み。	
SD2862A 近世区画溝跡	1層	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	地山ブロック ( $\phi 0.5\sim 4cm$ ) を含む人為堆積土。	
	2層	暗青灰色 (5BG3/1)	砂質土	細砂。	
	3層	暗緑灰色 (7.5GY4/1)	砂質土	細砂。オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 粘質土を下部に一部含む。	
SD2862B 近世区画溝跡	1層	黒褐色 (10YR3/1)	粘質土	炭化物 ( $\phi 1cm$ 以下) をごく少量含む。	
	2層	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	砂質土	細砂。暗褐色 (10YR3/3) 粘質土の薄層 (1cm以下) が互層状に含まれる。炭化物ごく少量含む。	
	3層	暗褐色 (10YR3/3)	粘質土	にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質土 (細砂) の薄層 (1cm以下) が互層状に含まれる。炭化物ごく少量含む。	
⑤-3 SD2820A 区画溝跡	1層	黒褐色 (10YR3/1)	砂質シルト	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山砂質シルトブロック ( $\phi 1\sim 3cm$ ) を含む。	
	SD2820B 区画溝跡	1層	黄灰色 (2.5Y5/1)	砂質シルト	灰白色火山灰ブロックを微量含む。
	2層	褐灰色 (10YR4/1)	砂質シルト	灰白色火山灰ブロックを微量含む。	
	3層	黒褐色 (10YR3/1)	粘質シルト	灰白色火山灰ブロックを微量含む。	
⑤-4 SD2820 区画溝跡	1層	灰黄褐色 (10YR6/2)	砂質シルト	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 砂質シルト<地山土>をブロック状 ( $\phi 3\sim 5cm$ ) に含む。	
	2層	黒褐色 (10YR2/2)	粘質土		
	上部	灰黄褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	中央部全面を覆う基本層 (灰色シルト層) の上部。	
⑥ SD2816 区画溝跡	下部	灰黄褐色 (10YR5/2)	砂質シルト	中央部全面を覆う基本層 (灰色シルト層) の下部。	
	1層	褐灰色 (10YR5/1)	粘質シルト	細砂を一部含む。炭化物小片を微量含む。	
	2層	褐灰色 (10YR4/1)	粘質土	上層は1層のシルトに近い。炭化物小片微量含む。	
⑦- 1 SD2798 区画溝跡	1層	褐灰色 (10YR4/1)	砂質シルト		
	2層	黒褐色 (10YR3/1)	砂質シルト	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山砂質シルトをブロック状 ( $\phi 1\sim 3cm$ ) に含む。	
SD10326 区画溝跡	1層	灰色 (5Y6/1)	シルト	灰色 (5Y6/1) シルトと灰色 (2.5Y7/1) 砂質土の互層堆積。	
	2層	褐灰色 (10YR5/1)	砂質シルト	灰白色火山灰ブロック ( $\phi 1\sim 2cm$ ) を含む。	
⑦- 2 SD2798 区画溝跡	1層	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	黒褐色 (10YR3/1) 粘質土ブロック ( $\phi 1\sim 2cm$ ) 、灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質土薄レンズ状ブロックを多く、白色凝灰岩粒 ( $\phi 1\sim 2mm$ ) を少し含む。	
	2層	黒褐色 (10YR3/2)	粘質シルト		
	3層	黒褐色 (10YR3/2)	粘質シルト	灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質シルト土ブロック ( $\phi 2\sim 5mm$ ) を多く含む。	
	SD10325流路	4層	灰黄褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	灰白色火山灰大ブロック ( $\phi 1\sim 10cm$ ) を多量に含む。
⑧ SD2801 区画溝跡	1層	黒褐色 (10YR3/2)	粘質シルト	しまりややあり。灰白色火山灰ブロック ( $\phi 0.5\sim 1cm$ ) を含む。	
	2層	黒褐色 (10YR3/1)	シルト質粘土	しまりあり。灰白色火山灰ブロック ( $\phi 0.5\sim 5cm$ ) 、地山ブロック ( $0.2\sim 0.5cm$ ) を含む。	
	3層	灰黄褐色 (10YR6/2)	砂質シルト	しまりややあり。灰白色火山灰ブロック ( $\phi 2\sim 5cm$ ) を含む。暗褐色粘土 ( $\phi 5\sim 10cm$ ) を含む。	
	4層	黒褐色 (10YR3/1)	シルト質粘土	しまりあまりなし。地山ブロック ( $\phi 3\sim 5cm$ ) を含む。	
SD10326	SD10326	褐灰色 (10YR4/1)	シルト質粘土	しまりややあり。地山ブロック ( $\phi 0.5\sim 2cm$ ) 少量含む。	
	SD10327	黒褐色 (10YR2/2)	粘質シルト		
SD10333	SD10333	1層	灰黄褐色 (10YR5/2)	砂質シルト	しまりまりない。暗褐色粘土ブロック ( $\phi 3\sim 5cm$ ) 、褐灰色 (10YR4/1) を含む。
	2層	灰黄褐色 (10YR6/2)	砂質シルト	しまりまりない。暗褐色粘土ブロック ( $\phi 3\sim 5cm$ ) を上部中心に含む。	
⑨ SD2804	SD2804	黒褐色 (10YR3/1)	シルト質粘土	地山ブロック ( $\phi 1\sim 2cm$ ) 、暗褐色粘土 (10YR3/3) 、灰白色火山灰ブロック ( $\phi 2\sim 4cm$ ) を含む。	
⑩ SD2807 A SD2807 B SD2807 C SD2807 D SK10319土壤	SD2807 A	褐灰色 (7.5YR4/1)	粘質土	粘性強い。	
	SD2807 B	1層	灰黄褐色 (10YR5/2)	粘質土	2層よりやや多く砂を含む。
	2層	褐灰色 (7.5YR5/1)	粘質土		
	SD2807 C	褐灰色 (10YR4/1)	粘質土		
	SD2807 D	1層	灰黄褐色 (10YR6/2)	粘質土	明褐色 (7.5YR5/6) マンガン成分を他層より多く含む。
	2層	褐灰色 (10YR5/1)	粘質土	明褐色 (7.5YR5/6) マンガン成分を含む。	
	SK10319土壤	1層	褐灰色 (10YR6/1)	粘質土	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山シルトブロックを含む。
	2層	褐灰色 (10YR4/1)	粘質土		

表3 第1工区の区画溝跡断面図（第17図掲載）土層観察表

4 時期の変遷 (SD2807A → SD2807B → SD2807C → SD2807D) を確認した。規模は D 溝が幅 3.8 m と最も幅広いが、深さは 15cm と浅い。A・B・C 溝は幅 0.5 ~ 1 m とこれよりも狭いが、深さは 30 ~ 35cm とこれよりも深い。断面は D 溝が浅い皿状、A・B・C 溝が U 字状である。新旧関係は、SD2806A・B 溝跡よりも新しい。旧調査の B 溝から口クロ土師器坏が出土したことから、耕作域（畑）の内部を区画した 9 世紀代の区画溝とみられる。

【SD2816 区画溝跡】(平面図: 第 7・11 ~ 14 図、断面図: 第 17 図⑥、第 21 図①-1・2、第 24 図②、写真: 図版 13 中、14-4・6 ~ 8、15 中、16-2・4)

旧調査区北端で長さ約 83 m 検出していた東西方向の区画溝跡 (SD2816A → SD2816B の 2 時期、幅 0.7 ~ 1.5 m、深さ 30 ~ 60cm、方向は東で南に約 1 度偏る) で、第 1 工区中央部ではそこから北東方向に曲がり、さらに北に曲がって検出した。第 1 工区中央部周辺では灰色砂質シルト層上部・下部が広がっており、これらを除去した下層の地山面で検出した。第 1 工区での検出長は長さ約 17 m で、旧調査を併せると長さ約 102 m 検出した。新旧関係は、SB2883 掘立柱建物跡、SK2893 土壙、SF3476・3479 小溝状遺構群 (以上、旧調査区)、SK10314 土壙、SD2798・2801 区画溝跡よりも新しく、SK2817・2850・2853 土壙、SK2794 区画溝跡 (以上、旧調査区)、SX10325 流路、灰白色火山灰 (十和田 a 火山灰; 10 世紀前葉)、灰色砂質シルト層下部よりも古い。

旧調査では、① SX3106 北 2 道路跡と同時期のもので、約 60 m 北に離れてこれと平行する東西方向の区画溝跡であること、② B 溝最上部に灰白色火山灰が含まれ、B 溝より回転糸切り無調整の口クロ土師器坏が出土したことなどから、9 世紀後半～10 世紀前半と位置付けている (宮城県教育委員会 1998)。しかし今回の調査では、底径の大きな回転糸切り無調整の須恵器坏 (第 25 図 4) が出土するとともに、灰白色火山灰よりも層位的に下位に位置し、9 世紀中頃とみられる灰色砂質シルト層下部に覆われることが判明した。この須恵器坏は、9 世紀第 2 四半期に位置付けられる多賀城跡第 60 次調査 SE2101B 井戸跡第 III 層出土土器群 (宮城県多賀城跡調査研究所 1993) に含まれるものと類似し、この頃のものとみられる。以上より、本溝跡は 9 世紀前半頃まで遡る可能性もでてきた。

【SD2820 区画溝跡】(平面図: 第 7・9 ~ 14 図、断面図: 第 17 図⑤-1 ~ 4、第 20 図①・③、第 21 図①-1、第 22 図③、第 27 図⑨~⑪、写真: 図版 1 ~ 4、5 下、10-5、11-8、12-1 ~ 3、15 下)

旧調査の東側拡張区 (SK2819 土壙) で一部検出していた溝跡で、第 1 工区西部～中央部の南端で長さ約 81 m 検出した。旧調査区では、西側拡張区 (SK2861 土壙) で一部検出していた SD2862 溝に接続する可能性を考えていた。今回の調査でこの SD2862 区画溝跡は本溝に接続しない近世の区画溝であり、本溝は南側の SD2816 区画溝跡と北に 3 m 前後離れてほぼ平行し (東西溝部分)、東側で同様に北東に向けて曲がることが判明した。幅 0.8 m 前後、深さ 35 ~ 50cm で、新旧 2 時期 (SD2820A → SD2820B) ある。東西溝部分での方向はほぼ東西基準線と一致する。新旧関係は、SF10354・10336 小溝状遺構群、SD2794・2798 区画溝跡よりも新しく、SK2819・2861 大土壙、SD10322 溝跡、SD2862 近世区画溝跡、SX10325 流路、灰白色火山灰 (十和田 a 火山灰; 10 世紀前葉)、灰色砂質シルト層下部よりも古い。出土した須恵器坏・高台坏 (第 25 図 6 ~ 10) は、9 世紀第 1 四半期の多賀城跡第 62 次 SI2153・2160 穫穴住居跡出土土器群 (宮城県多賀城跡調査研究所 1993) や

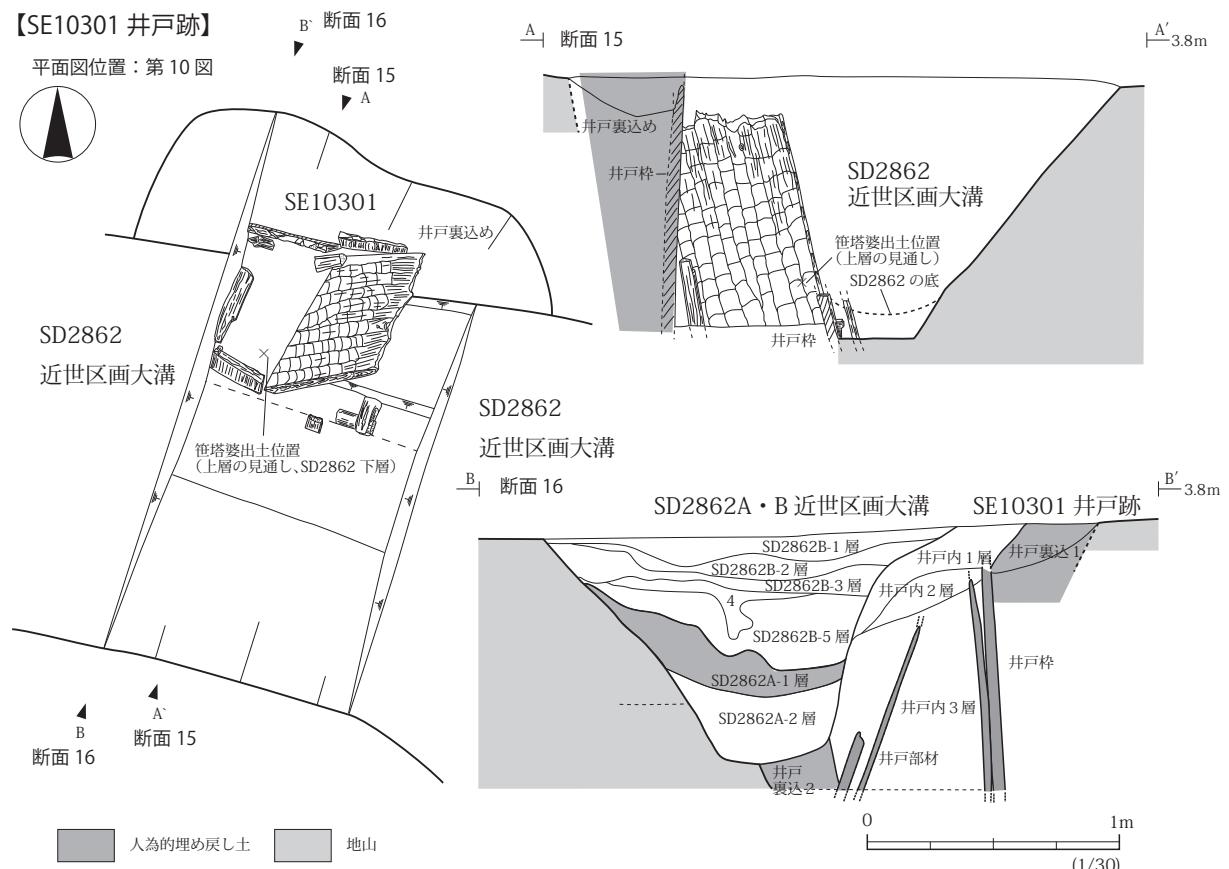
9世紀第2四半期の多賀城跡第60次調査SE2101B井戸跡第Ⅲ層出土土器群（宮城県多賀城跡調査研究所1993）との比較から、9世紀前半頃のものである。

**【SD10320区画溝跡】**（平面図：第7・10図、断面図：第17図③・④、第22図②—1、写真：図版6上・中・下、9-3、10-6、11-1）

第1工区西部で検出した南北方向の区画溝跡で、長さ約6.7m検出した。新旧2時期（SD10320A→10320B）あり、A溝が幅約1m、深さ50cmで、B溝は幅0.4m、深さ10cm前後と規模が小さくなる。方向は南北基準線と一致する。新旧関係は、SK2861大土壙、SK10304土壙、SD2862近世区画大溝跡よりも古い。遺物は出土していない。10世紀前葉のSK2861大土壙より古いことから、9世紀代の区画溝と考えられる。

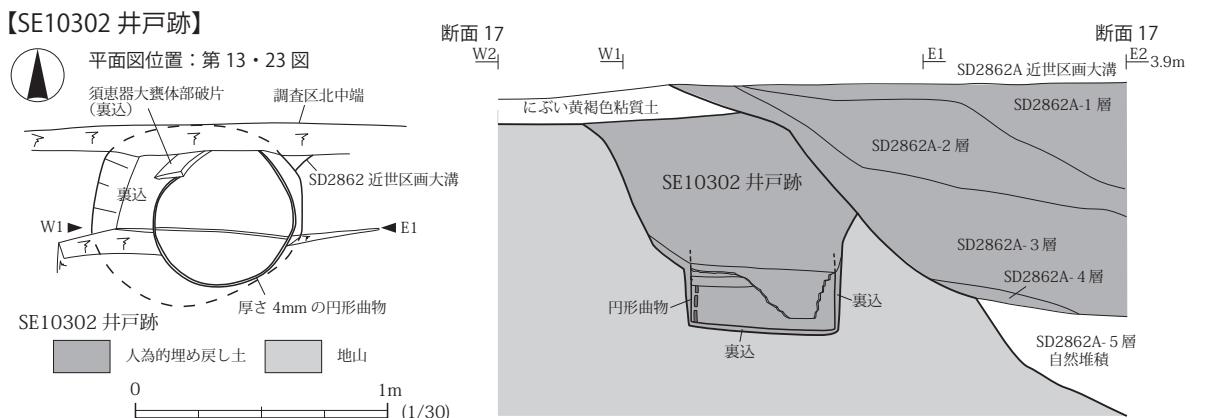
## （2）井戸跡

**【SE10301跡】**（平面図・断面図：第18図、写真：図版7）



遺構・層位		土色	土性	その他の特徴
井戸跡	裏込	1層 灰黄褐色(10YR4/2)	粘質土	井戸掘り方裏込め土。
		2層 灰黄褐色(10YR4/2)	粘質土	井戸掘り方裏込め土。井戸枠小破片含む。
	井戸内	1層 暗褐色(10YR3/4)	粘質土	井戸廃絶後堆積土。
SD2862B 近世区画大溝跡	2層 褐色(10YR5/1)	粘質土	にぶい黄橙色(10YR7/4)砂質シルト<地山>をブロック状に含む。	
	3層 黒褐色(10YR2/3)	粘質土	灰白色火山灰(Φ0.5~1cm)を少量含む。井戸枠内の埋土。	
	1層 黒褐色(10YR3/1)	粘質土	掘り直し後、自然堆積。	
	2層 にぶい黄橙色(10YR7/4)	砂質土	細砂。掘り直し後、自然堆積。	
	3層 暗褐色(10YR3/3)	粘質土	掘り直し後、自然堆積。	
SD2862A 近世区画大溝跡	4層 浅黄色(10YR8/3)	砂質土	細砂。掘り直し後、自然堆積。	
	5層 黒褐色(10YR2/2)	粘質土	浅黄色(10YR8/3)砂質土、炭化物(Φ0.5cm未満)を微量含む。掘り直し後、自然堆積。	
	1層 黒褐色(10YR3/1)	粘質土	黒褐色(10YR3/1)粘質土、にぶい黄橙色(10YR7/4)砂質シルト、暗褐色(10YR2/3)シルトの3種ブロック状混合土(3:4:3)による人為的埋戻し土。	
	2層 褐灰色(10YR4/1)	粘質土	自然堆積。	

第18図 第1工区 SE10301 井戸跡平面図・断面図



遺構・層位		土色	土性	その他の特徴
SE10302 井戸跡	裏込	黒褐色（7.5YR3/1）	粘質土	灰黄褐色（10YR4/2）シルト土ブロック（φ1~5cm）を多く含む。人為堆積土。灰白色火山灰小ブロックを特に井筒に転用された円形曲物容器と裏込土の隙間に多く含む。上部にもあり、隙間に浸透したものと判断した。
	井戸内	黒褐色（7.5YR2/2）	粘質土	灰黄褐色（10YR4/2）シルト土ブロック（φ1~4cm）を多く含む。人為堆積土。
SD2862A 近世区画大溝跡	1層	黒褐色（10YR3/1）	粘質土	黒褐色（10YR3/1）粘質土、にぶい黄橙色（10YR7/4）砂質シルト、暗褐色（10YR3/3）シルトの3種ブロック状混合土（6：3：1）による人為的埋戻し土。
	2層	黒褐色（10YR3/1）	粘質土	黒褐色（10YR3/1）粘質土、にぶい黄橙色（10YR7/4）砂質シルト、暗褐色（10YR3/3）シルトの3種ブロック状混合土（6：2：2）による人為的埋戻し土。
	3層	黒褐色（10YR3/1）	粘質土	黒褐色（10YR3/1）粘質土、にぶい黄橙色（10YR7/4）砂質シルト、暗褐色（10YR3/3）シルトの3種ブロック状混合土（3：3：4）による人為的埋戻し土。
	4層	にぶい黄褐色（10YR5/4）	砂質シルト	傾斜堆積土。
	5層	褐灰色（10YR4/1）	粘質土	自然堆積土。
井戸上位層		にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘質土	

第19図 第1工区 SE10302 井戸跡平面図・断面図

調査区西部で検出し、部分的に断ち割り調査した。SD2862 近世区画大溝跡に南半部以上を大きく壊され、井戸枠材の多くが原位置を動いていたが、縦板材を方形（内法約 60cm）に組んだ井戸跡である。新旧関係は、SF10354 小溝状遺構群よりも新しく、SD2862 近世区画大溝跡よりも古い。井戸内よりクロ土師器壊、須恵器壊・甕の破片が少数出土した。

【SE10302 跡】(平面図・断面図: 第19図、写真: 図版8、12-6)

調査区中央部北端で検出し、部分的に断ち割り調査した。井戸枠は抜き取られて残存していないが、底部に据えられた大型の円形曲物容器（直径 55cm、高さ 25cm、厚さ 4mm）が残存していた。裏込より 9 世紀前半頃のロクロ土師器坏（第 25 図 11）、井戸内埋め戻し土よりロクロ土師器甕、須恵器坏・甕の破片が少数出土した。新旧関係は、SD2862 近世区画大溝跡よりも古い。

### (3) 土壌

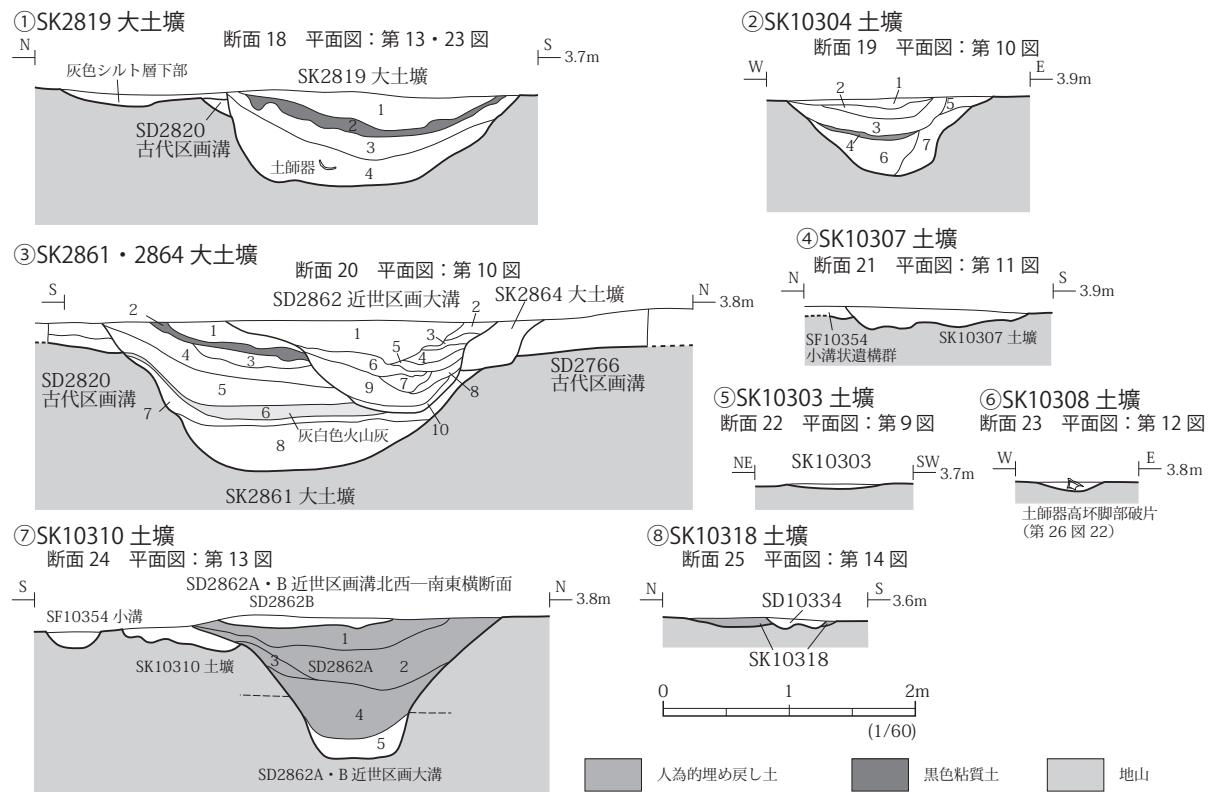
土壙 21 基を検出し、そのうち 8 基 (SK2819・2861 大土壙、SK10307・10309・10314・10316・10318・10352 土壙) が古代の土壙である (表 4)。このうち SK2861 大土壙は、旧調査の北側拡張区で東半分を調査済みで、10 世紀前葉に降灰した灰白色火山灰の上層より多量の土器が出土した。赤焼土器<sup>註3</sup>坏 16 点・高台皿 1 点、ロクロ土師器内黒坏 14 点、ロクロ土師器内黒高台坏 1 点、須恵器坏 16 点、計 48 点が図示、詳細に分析され、10 世紀前半に位置付けられている (宮城県教育委員会 1998、第 82 ~ 84 図)。確認調査のため、既調査区を清掃し、層序関係を再確認するに留めた。

#### (4) 溝跡

前述の古代の区画溝跡 9 条の他、溝跡 16 条を検出した（表 6）。このうち古代の溝跡は 8 条（SD10323・10324・10326・10331～10334・10350 溝跡）で、他に古代～近世の溝跡が 3 条（SD10321・10322・10328 溝跡）、古代以降の溝跡が 2 条（SD10329・10330 溝跡）、近世以降の溝

登録土壤名称	位置	平面図	断面図	長径	短径	深さ	形状	堆積土	出土遺物	新旧関係(旧→新)	年代
SK2819大土壤	中央部	第13・23図	第20図①	3.8m	2.6m	72cm	不整梢円形	自然	赤焼土器高台环(第25図14)	SD2820区画溝跡→灰色砂質シルト層下部→SK2819大土壤→灰白色火山灰	10世紀前葉
SK2861大土壤	西部	第10図	第20図③	5.5m	2.6m	1.2m	長梢円形	自然	赤焼土器环(第25図12)、旧調査で赤燒土器環・高台皿、ロクロ土師器内黒环(回転糸切り無調整)、ロクロ土師器内黒高台环、須恵器环(回転糸切り無調整)	SD2766・2820区画溝跡→SK2861大土壤→灰白色火山灰→SK2864大土壤→SD2862近世区画大溝跡	10世紀前葉
SK2864大土壤	西部	第10図	第17図⑤-1 第20図③	4.2m	2.9m	1.2m	長梢円形	人為	旧調査で赤焼土器・土師器・須恵器(いずれも摩滅)	SD2766・2820区画溝跡→SK2861大土壤→灰白色火山灰→SK2864大土壤→SD2862近世区画大溝跡	10世紀前葉～近世
SK10303土壤	西部	第9図	第20図⑤	0.8m	0.7m	8cm	梢円形	自然			不明
SK10304土壤	西部	第10図	第20図②	2.0m	1.6m	60cm	梢円形	自然	須恵器环、平瓦、丸瓦II B類破片	SD10320区画溝→SK10304土壤	古代以降
SK10305土壤	西部	第10図	第28図①	1.7m	1.5m	20cm	不整形	自然	赤焼土器环、ロクロ土師器甕、須恵器环、丸瓦破片	SD2862近世区画大溝→SK10305土壤	近世以降
SK10306土壤	西部	第11図		>2.2m	1.4m	不明	梢円形	自然			不明
SK10307土壤	西部	第11図	第20図④	2.0m	1.4m	15cm	梢円形	自然	ロクロ土師器环・甕、須恵器环破片	SF10354小溝状遺構群→SK10304土壤	9世紀代
SK10308土壤	西部	第12図	第20図⑥	0.5m	0.4m	7cm	梢円形	自然	古墳時代中期(南小泉式期)土師器高环脚部破片(第26図22)	SF10354小溝状遺構群→SK10308土壤	古代？
SK10309土壤	西部	第12図	第22図②-2	>3.0m	2.0m	20cm	不整形	自然	ロクロ土師器内黒环(手持ちヘラケズリ、第26図15)、ロクロ土師器甕(第26図16)、丸瓦II B類(第26図24)破片	SF10354小溝状遺構群→SK10309土壤	9世紀前半以降
SK10310土壤	中央部	第13図	第20図⑦	>1.5m	1.5m	20cm	梢円形	自然		SK10310土壤→SD2862近世区画大溝	近世以前
SK10311土壤	中央部	第13・23図		1.0m	0.8m	不明	梢円形	自然		SF10336小溝状遺構群→SF10354小溝状遺構群→SK10311土壤	古代以降近世？
SK10312土壤	中央部	第13・23図		0.6m	0.5m	10cm	梢円形	自然	ロクロ土師器环・甕、須恵器环破片	SF10354小溝状遺構群→灰色砂質シルト層上部→SK10312土壤	古代以降近世？
SK10313土壤	中央部	第13・23図		0.6m	0.6m	10cm	円形	自然		SD10323溝→灰色砂質シルト層上部→SK10313土壤	古代以降
SK10314土壤	中央部	第13・23図	第21図①-1	>5m	3m	50cm	不整形	自然		SK10314土壤→SD2816区画溝跡→灰色砂質シルト層下部→灰白色火山灰	9世紀代？
SK10315土壤	中央部	第14・23図	第24図②	1.1m	0.8m	25cm	梢円形	自然	瓦質陶器甕(近世)	SD10325溝跡→灰色砂質シルト層下部→SD10325溝跡上部→SK10315	近世
SK10316土壤	中央部	第14図	第24図①	>2.5m	2.2m	60cm	不整形	自然	ロクロ土師器内黒环(回転糸切り無調整、第25図13)、須恵器甕、甕破片	SK10316土壤→SD10326溝跡→灰色砂質シルト層下部→SD10326溝跡上部→旧表土	9世紀中頃
SK10317土壤	中央部	第14・23図	第28図②	2.6m	1.7m	1.0m	隅丸方形	人為		灰色砂質シルト層上部→SK10317土壤→SD10327溝跡	近世
SK10318土壤	中央部	第7・14図	第20図⑧	3.2m	1.2m	7cm	梢円形	自然		SK10318土壤→SD10334溝跡→SD10329溝跡；SD10334溝跡→SD10332溝跡→SD2801溝跡	古代
SK10319土壤	東部	第8・16図	第17図⑩	0.9m	0.9m	30cm	梢円形	自然			不明
SK10352土壤	中央部	第13・14図	第24図①②	>4m	2.3m	30cm	不整形	自然		SK10352土壤→灰色砂質シルト層下部→SD10325溝跡→灰白色火山灰→灰色砂質シルト層上部→旧表土(近世)	9世紀前半～中頃

表4 第1工区検出の土壤一覧



第20図 第1工区の土壤断面図

跡が1条（SD10327溝跡）、時代不明の溝跡が1条（SD10335溝跡）ある。

### （5）小溝状遺構群（畝跡）

第1工区西部～中央部にかけて、南北方向のSF10354小溝状遺構群、これより古い東西方向のSF10353小溝状遺構群、中央部で北東方向のSF3481小溝状遺構群、西部～中部で北西方向のSF10336小溝状遺構群を検出した（第7図）。

**【SF10353東西小溝状遺構群】**（平面図：第7・10～12図、断面図：第22図①—1・2、②—2、写真：図版2～6）

西部で13条の小溝を検出した。幅が10～40cm、深さ5～8cmで、断面は皿状である。間隔は10～50cm程のものが多いが、1.5m程と間が空くものも一部ある。方向はほぼ東西基準線と一致する。遺物は出土していない。新旧関係はSK10304土壌、SF10354小溝状遺構群よりも古い。同様の方向

遺構・層位		土色	土性	その他の特徴	
① SK2819土壌	1層	黒褐色（10YR2/2）	粘質土		
	2層	黒色（10YR2/1）	粘質土		
	3層	暗褐色（10YR3/3）	粘質土	黒色（10YR2/1）粘質土をブロック状（φ1～10cm）に含む。	
	4層	暗褐色（10YR3/3）	粘質土	灰黃褐色（10YR4/2）細砂と互層状に斜堆積。灰白色火山灰がブロック状（φ2～3cm）に斜め堆積。	
SD2820区画溝		黒褐色（10YR3/1）	粘質土	黒褐色（10YR3/1）粘質土、褐灰色（10YR4/1）粘質土、地山土の混合土（4:2:4）。	
		灰黄褐色（10YR4/2）	砂質シルト	中央部全面を覆う基本層。	
② SK10304土壌	1層	灰黄褐色（10YR4/2）	砂質シルト		
	2層	褐灰色（10YR4/1）	砂質シルト		
	3層	灰黄褐色（10YR5/2）	粘質土		
	4層	黒色（10YR2/1）	粘質土		
	5層	にぶい黄橙色（10YR6/3）	粘質シルト		
	6層	灰黄褐色（10YR4/2）	砂質シルト		
	7層	灰黄褐色（10YR4/2）	粘質シルト	基本起源土とにぶい黄橙色（10YR6/3）シルト（厚さ0.5～1cm）が互層状に西斜方向に自然堆積。	
③ SK2861大土壌	1層	暗褐色（7.5YR3/3）	シルト	にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土ブロック（φ1～4cm）を含む。	
	2層	黒色（10YR2/1）	粘質土		
	3層	黒褐色（10YR3/2）	粘質土		
	4層	暗褐色（10YR3/4）	粘質土		
	5層	暗褐色（10YR3/3）	粘質土		
	6層	灰白色（7.5Y8/1）	火山灰	灰白色火山灰（十和田a火山灰）。10世紀前葉に降灰。	
	7層	暗灰色（N3）	粘質土		
	8層	暗緑灰色（7.5GY3/1）	細砂		
SK2864大土壌		黄褐色（2.5Y5/4）	細砂	黒褐色（10YR3/1）粘質土（φ2～20cm）、にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土（φ2～20cm）、灰白色（7.5YR8/1）火山灰（φ1～4cm、少量）をブロック状に含む。人為的埋戻し。	
SD2862区画溝	1層	褐灰色（10YR4/1）	粘質土	茎根等の植物性有機物を含む。	
	2層	灰黄褐色（10YR5/2）	シルト	明黄褐色（10YR7/6）細砂との混合土。シルトが多く、細砂は少ない。	
	3層	灰黄褐色（10YR5/2）	シルト		
	4層	明黄褐色（10YR7/6）	細砂	灰黄褐色（10YR5/2）シルトとの混合土。細砂が多く、シルトは少ない。	
	5層	褐灰色（10YR5/1）	粘質土		
	6層	褐灰色（10YR3/1）	粘質土		
	7層	暗褐色（10YR3/3）	砂質土		
	8層	暗褐色（10YR3/3）	砂質土	明黄褐色（10YR6/6）細砂との混合土。	
	9層	灰黄褐色（10YR4/2）	粘質土		
	10層	オリーブ黒色（7.5YR3/1）	粘質土		
SD2766区画溝		褐灰色（10YR6/1）	砂質シルト	明褐色（7.5YR5/6）マンガン成分を含む	
SD2820区画溝	1層	灰黄褐色（10YR4/2）	粘質土	黄褐色（10YR5/2）マンガン成分を含む。	
	2層	褐灰色（10YR5/1）	粘質土		
④ SK10307土壌		黒褐色（10YR3/1）	シルト	炭化物ブロック（φ0.5～1cm）を含む。	
		黒褐色（7.5YR3/2）	粘質土	小溝状遺構群（畝跡）。灰黄褐色（10YR5/2）地山砂質シルトブロック（φ1～5cm）を少し含む。	
⑤ SK10303土壌		黒色（10YR3/1）	粘質シルト	にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土大ブロックを多く含む。	
⑥ SK10308土壌		にぶい黄褐色（10YR4/3）	砂質シルト		
⑦ SK10310土壌		にぶい黄褐色（10YR6/3）	砂質シルト	灰黄褐色（10YR4/2）粘質土をブロック状（φ1～2cm）に含む。	
	SD2862A近世区画大溝	1層	黒褐色（10YR3/1）	粘質土	黒褐色（10YR3/1）粘質土に、にぶい黄橙色（10YR7/4）地山砂質シルト、暗褐色（10YR3/3）シルトのブロックを含む3種混合土（6:3:1）。人為的埋戻し。
		2層	黒褐色（10YR3/1）	粘質土	黒褐色（10YR3/1）粘質土に、にぶい黄橙色（10YR7/4）地山砂質シルト、暗褐色（10YR3/3）シルトのブロックを含む3種混合土（6:2:2）。人為的埋戻し。
		3層	黒褐色（10YR3/1）	粘質土	黒褐色（10YR3/1）粘質土に、にぶい黄橙色（10YR7/4）地山砂質シルト、暗褐色（10YR3/3）シルトのブロックを含む3種混合土（1:5:4）。人為的埋戻し。
		4層	黒褐色（10YR3/1）	粘質土	黒褐色（10YR3/1）粘質土に、にぶい黄橙色（10YR7/4）地山砂質シルト、暗褐色（10YR3/3）シルトのブロックを含む3種混合土（3:3:4）。人為的埋戻し。
		5層	褐灰色（10YR4/1）	粘質土	自然堆積土。
	SD2862B大溝	黒褐色（10YR3/1）	粘質土	炭化物（φ1cm以下）ごく少量含む。掘り直し土。	
	SF10354小溝	黒褐色（7.5YR3/2）	粘質土		
⑧ SK10318土壌		灰黄褐色（10YR4/2）	粘質シルト	にぶい黄褐色（10YR5/3）地山砂質シルトブロック（φ10～15cm）を多く含む。人為堆積。	
	SD10334溝跡	灰黄褐色（10YR4/2）	粘質シルト	にぶい黄褐色（10YR5/3）地山砂質シルトブロック（φ2～8cm）を多く含む。	

表5 第1工区の土壌断面図（第20図掲載）土層観察表

の小溝状遺構群は、SD2816 東西区画溝跡以南の旧調査区でも検出している。本小溝状遺構群は、SD2816・2820 東西区画大溝によって区画された北側区域の耕作域(畑跡)と位置付けることができる。

**【SF10354 南北小溝状遺構群】**(平面図：第7・9～13図、断面図：第20図④・⑦、第22図②—1・2、第24図2、写真：図版2～6、11-1、12-3、15中・下)

西部～中央部にかけて93条の小溝を検出した。幅が15～40cm、深さ5～15cmで、断面は皿状または浅いU字状である。間隔は10～50cm程のものが多いが、SK10306 土壌周辺では1.5m程と間が空く。方向は北で西に7°前後偏する。遺物は出土していない。新旧関係はSF10353 小溝状遺構群よりも新しく、SD2766C 南北区画溝跡、SD2820 東西区画溝跡、SD10321・10322 南北溝跡、SK10305・10307～10309 土壌、SD2862 近世区画大溝跡、灰色砂質シルト層上部よりも古い。同様の方向の小溝状遺構群は、SD2816 東西区画溝跡以南の旧調査区でも検出した。本小溝状遺構群は、SD2816・2820 東西区画大溝によって区画された北側区域の耕作域(畑跡)と位置付けることができる。

**【SF3481 北東小溝状遺構群】**(平面図：第7・15図、断面図：第22図④)

中央部のSD2804 区画溝跡の西辺に沿って、後世の削平で断片的となる小溝を9条検出した。幅25～40cm、深さ15cm前後で、断面は浅いU字状である。方向はSD2804 区画溝跡と同様に、北で東に約44°偏る。同様の方向の小溝状遺構群は南隣の旧調査でも検出している。旧調査区での新旧関係は、SD10333 溝跡よりも古く、今回の調査区ではSD10333 溝跡はSD2801 区画溝跡よりも古いので、SF3481 溝跡はSD2801 区画溝跡よりも古い時期のものであることがわかる。遺物は出土していない。

登録土壌名称	位置	平面図	断面図	幅	深さ	方向	断面形	堆積土	新旧関係(旧→新)	備考	年代
SD10321溝跡	西部～中央部	第7・12図	第22図②-2	0.8～1.1m	30cm	N-7° -W	U字状	自然	SF10336小溝状遺構群→SF10354小状遺構群→SD10321溝跡→SD2862近世区画大溝跡	検出長6.6m	古代～近世
SD10322溝跡	中央部	第7・12図	第22図②-2	1.4m	10cm	N-16° -W	皿状	自然	SF10336小溝状遺構群→SF10354小状遺構群→SD2820区画溝跡→SD10322溝跡→SD2862近世区画大溝跡	検出長8.2m	古代～近世
SD10323溝跡	中央部	第7・13図	第21図② 第24図②	0.6～1.0m	17cm	N-26° -W	U字状	自然	SF10323溝跡→SD2820区画溝跡→灰色砂質シルト上層→SK10313土壌	検出長6.0m	古代
SD10324溝跡	中央部	第7・13図	第21図② 第24図②	0.2～0.5m	15～20cm	N-26° -W	U字状	自然	SD10324溝跡→SD2820区画溝跡→灰色砂質シルト上層	検出長5.7m	古代
SD10325溝跡	中央部	第7・13・14・23図	第21図② 第24図②	0.2～0.5m	15～20cm		U字状	自然	SD2798区画溝跡→SD2820区画溝跡→灰色砂質シルト層下部→SD10325溝跡→灰白色火山灰→灰色砂質シルト層上部	東西約14m、南北9m以上の範囲を複数の連結した溝群で区画	9世紀後葉～10世紀前葉
SD10326溝跡	中央部	第7・14・23図	第17図⑦-1 第17図⑧ 第24図②	0.5～1.2m	25～45cm		U字状	自然	SD10331溝跡→SD2798・2801区画溝跡→SD10326溝跡→灰色砂質シルト層下部	中央部で大きく逆「く」字状に屈曲。 検出長11.5m。口クロ土師器壺・甕、須恵器壺・壺、丸瓦。	9世紀前半
SD10327溝跡	中央部	第7・14・23図	第28図②	0.4m	5cm	N-20° -E	皿状	自然	灰色砂質シルト層上部→SK1031大土壌→SD10327溝跡	検出長10.6m	近世以降
SD10328溝跡	中央部	第7・14・23図		20cm		W-19° -N		自然	SD10329・10332溝跡→SD10328溝跡→SD10327溝跡	検出長5.8m	古代～近世
SD10329溝跡	中央部	第7・15図	第21図③	0.4～0.6m	7cm	N-17° -E	皿状	自然	SK10318土壌→SD10334溝跡→SD10329溝跡→SD10328溝跡；SD10332溝跡→SD10330溝跡→SD10329溝跡→SD10328溝跡	検出長6.2m	古代以降
SD10330溝跡	中央部	第7・14・15図	第21図③	0.4m	20cm	E-18° -N	逆台形状	自然	SD10332溝跡→SD10330溝跡→SD10327溝跡	検出長7.2m	古代以降
SD10331溝跡	中央部	第7・14・15図	第21図⑤	A:0.6m B:1m	A:20 B:30	W-18° -N		自然	SD10332溝跡→SD10331溝跡→SD2801溝跡→SD10326溝跡	検出長15m	古代
SD10332溝跡	中央部	第7・14図	第28図②	A:Bと同じ B:1～1.5m	A:30 B:30cm	N-30° -E	U字状	自然	SD10334溝跡→SD10332溝跡→SD10331溝跡→SD2801区画溝跡、SD10330溝跡→SD10328溝跡→SDSD10327溝跡	検出長9.0m	古代
SD10333溝跡	中央部	第7・14図	第17図⑧	0.6～1.2m	30cm	N-43° -W	U字状	自然	SD2804区画溝跡→SD10333溝跡→SD10331溝跡→SD2801区画溝跡→SD10326溝跡→灰色砂質シルト層下部	検出長23m。SD2798・2801区画溝跡と同様の性格。	9世紀前半
SD10334溝跡	中央部	第7・14図	第20図⑧	0.6m	10cm	W-19° -N	U字状	自然	SK10318土壌→SD10334溝跡→SD10329・1010332溝跡	検出長4.3m	古代
SD10335溝跡	東部	第7図		0.6m	15cm	N-6° -E	皿状	自然		検出長6.0m	不明
SD10350溝跡	中央部	第7・13図	第24図②	1.1m	15cm	N-30° -W	皿状	自然	SD10350溝跡→灰色砂質シルト層下部	検出長4.6m	9世紀前半

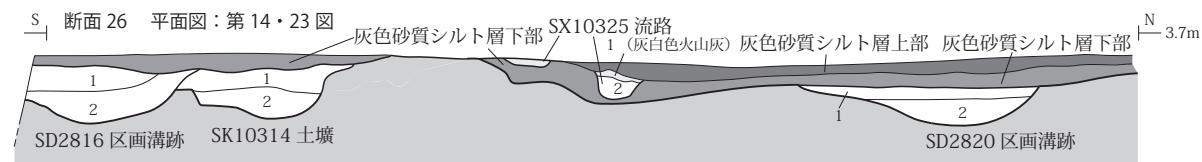
表6 第1工区検出の溝跡一覧

SD2804 区画溝跡と同時期で、この西側に展開する耕作域（畑跡）と位置付けることができる。

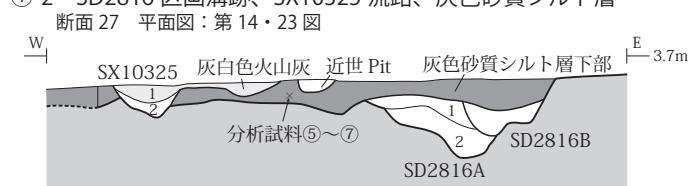
【SF10336 北西小溝状遺構群】（平面図：第 7・12・13 図、断面図：第 22 図③、写真：図版 4、5 中下、15 下）

西部～中央部にかけて 5 条の小溝を検出した。幅 20～40cm、深さ 15cm 前後で、断面は浅い U 字状である。方向は西で北に約 18° 偏る。遺物は出土していない。新旧関係は、SD10321・10322 溝跡、

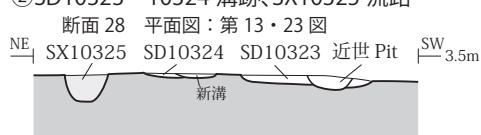
①-1 SD2816・2820 区画溝跡、SK10314 土壌、SX10325 流路、灰色砂質シルト層



①-2 SD2816 区画溝跡、SX10325 流路、灰色砂質シルト層



② SD10323・10324 溝跡、SX10325 流路



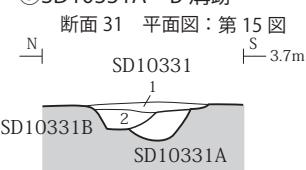
③ SD10329 溝跡



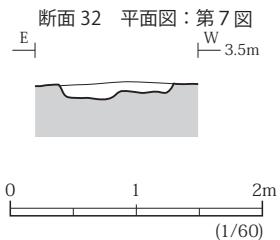
④ SD10330・10332 溝跡



⑤ SD10331A・B 溝跡



⑥ SD10335 溝跡



■ 人為的埋め戻し土 ■ 灰色砂質シルト層上部 ■ 灰色砂質シルト層下部 ■ 灰白色火山灰 ■ 旧表土 ■ 地山

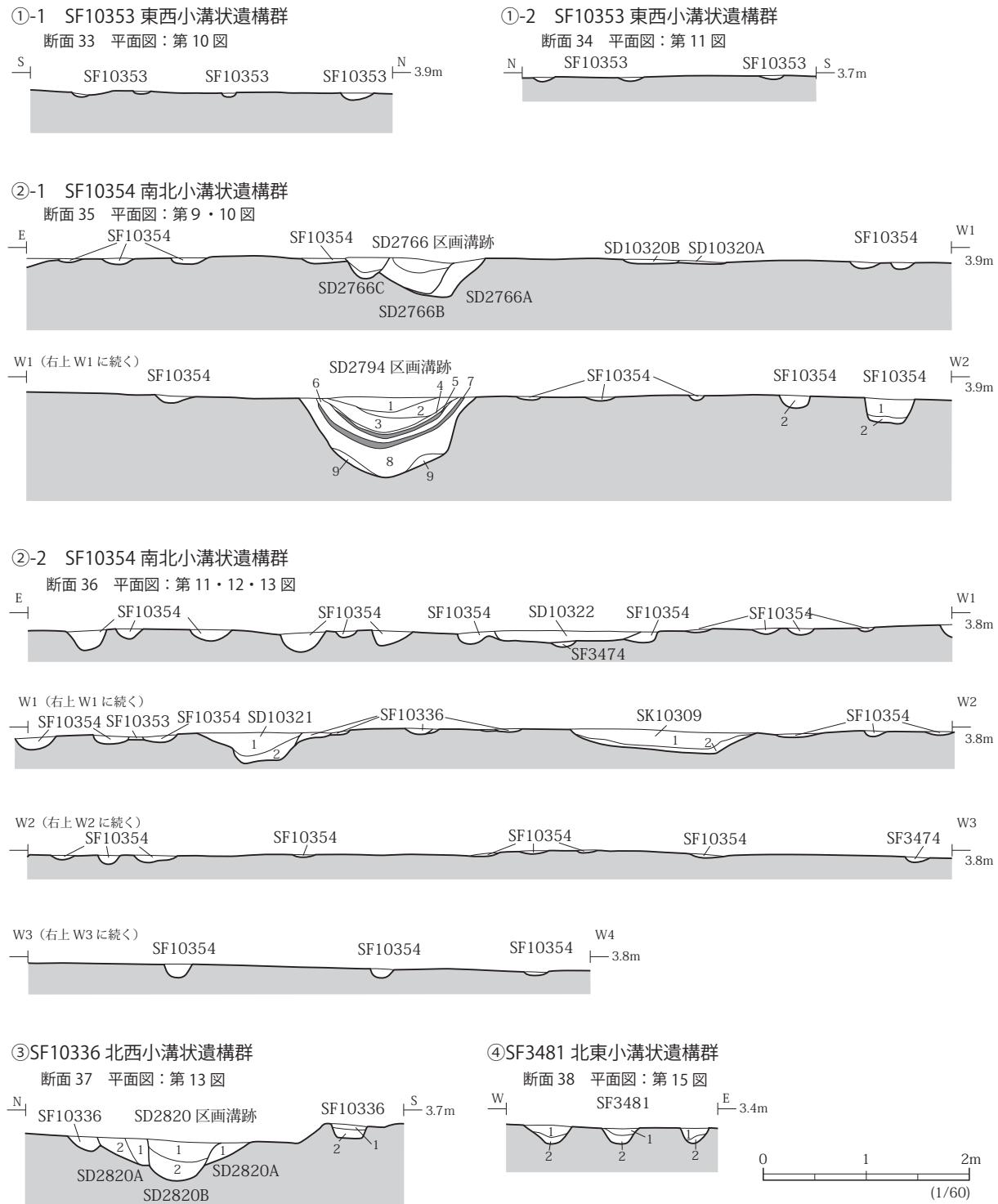
	遺構・層位	土色	土性	その他の特徴
①-1	SX10325流路	1 層 灰白色火山灰 (2.5Y8/1)	火山灰	一部、灰黃褐色 (10YR5/2) シルトブロック ( $\phi 0.5\sim2cm$ ) を少量含む。自然堆積土。
	2 層 灰黄色 (10YR5/2)	シルト	灰白色火山灰 (2.5Y8/1) ブロック ( $\phi 0.5\sim2cm$ ) を少量含む。自然堆積土。	
	SD2816区画溝跡	1 層 明灰黄色 (2.5Y5/2)	細砂	自然堆積土。
	2 層 黒褐色 (10YR3/1)	粘質土	自然堆積土。	
	SD2820区画溝	1 层 灰黄褐色 (10YR6/2)	砂質シルト	自然堆積土。
	2 层 黒褐色 (10YR2/2)	粘質土	地山の崩れをブロック状 ( $\phi 3\sim5cm$ ) に含む。自然堆積土。	
①-2	SK10314 土壌	1 層 暗灰黄色 (2.5Y4/2)	細砂	自然堆積土。
	2 层 褐灰色 (10YR4/1)	粘質土	自然堆積土。	
	SD10329 溝跡	上部 灰黄褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	中央部北半を覆う基本層上部。灰白色火山灰よりも層位的に新しい。自然堆積土。
	下部	灰黄褐色 (10YR5/2)	砂質シルト	中央部全面を覆う基本層下部。灰白色火山灰よりも層位的に古い。自然堆積土。
	SX10325流路	1 層 灰白色火山灰 (2.5Y8/1)	火山灰	一部、灰黃褐色 (10YR5/2) シルトブロック ( $\phi 0.5\sim2cm$ ) を少量含む。自然堆積土。
②	SD2816A溝跡	2 层 灰黄色 (10YR5/2)	シルト	灰白色火山灰 (2.5Y8/1) ブロック ( $\phi 0.5\sim2cm$ ) を少量含む。自然堆積土。
	SD2816B溝跡	1 层 明灰黄色 (2.5Y5/2)	細砂	自然堆積土。
	2 层 黑褐色 (10YR3/1)	粘質土	自然堆積土。	
	近世Pit	黄灰色 (2.5Y4/1)	シルト	地山ブロック ( $\phi 2\sim4cm$ ) を少量含む。自然堆積土。
	SD10332B溝跡	下部 灰黄褐色 (10YR5/2)	砂質シルト	中央部全面を覆う基本層下部。灰白色火山灰よりも層位的に古い。自然堆積土。
③	SD10323溝跡	にぶい黒褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	自然堆積土。
	SD10324溝跡	灰黄褐色 (10YR5/2)	砂質シルト	地山ブロック ( $\phi 1\sim5cm$ ) を少し含む。自然堆積土。
	SX10325流路	灰黄色 (10YR5/2)	シルト	灰白色火山灰 (2.5Y8/1) ブロック ( $\phi 0.5\sim2cm$ ) を少量含む。自然堆積土。
	新溝跡	黑褐色 (10YR5/2)	粘質土	自然堆積土。
	近世Pit	黑褐色 (10YR3/1)	粘質土	自然堆積土。
④	SD10330溝跡	黑褐色 (10YR3/1)	粘質シルト	灰黃褐色 (10YR4/2) 砂質土ブロックを少し含む。自然堆積土。
	SD10332A溝跡	2 层 灰黄褐色 (10YR4/2)	粘質シルト	自然堆積土。
	SD10332B溝跡	1 层 黑褐色 (7.5YR2/2)	粘質土	灰黃褐色 (10YR5/2) 地山砂質シルトブロックを多く含む。
		2 层 黑褐色 (7.5YR2/2)	粘質土	灰黃褐色 (10YR5/2) 地山砂質シルトブロックを側面に少量含む。
	SD10331B溝跡	1 层 黑褐色 (7.5YR3/2)	粘質土	自然堆積土。
⑤	SD10331A溝跡	2 层 黑褐色 (7.5YR3/1)	粘質土	自然堆積土。
	SD10331B溝跡	1 层 灰黄褐色 (10YR4/1)	粘質土	自然堆積土。
	2 层 灰黄褐色 (10YR4/1)	粘質土	自然堆積土。	
⑥	SD10335溝跡	黑褐色 (10YR2/2)	粘質土	自然堆積土。

第 21 図 第 1 工区の溝跡断面図

SF10354 小溝状遺構群、SD2862 近世区画大溝跡よりも古い。

### (6) 堆積層（灰色砂質シルト層）

第1工区中央部の周囲より低くなる窪んだ箇所で、古代の溝跡などの遺構面の上を覆い、自然堆積する灰色砂質シルト層を検出した。この層は北から南にかけて同心円状に分布し、10世紀前葉に降灰した灰白色火山灰（十和田a火山灰）を含むSX10325流路跡が中程に弧状に位置している（第13・



第22図 第1工区の小溝状遺構群断面図

23図)。この灰色砂質シルト層は、SX10325流路に流れ込む灰白色火山灰よりも古い下部と、新しい上部とに分層された(平面図:第7・23図、断面図:第24図、写真:図版13~16)。

### 【灰色砂質シルト層下部】

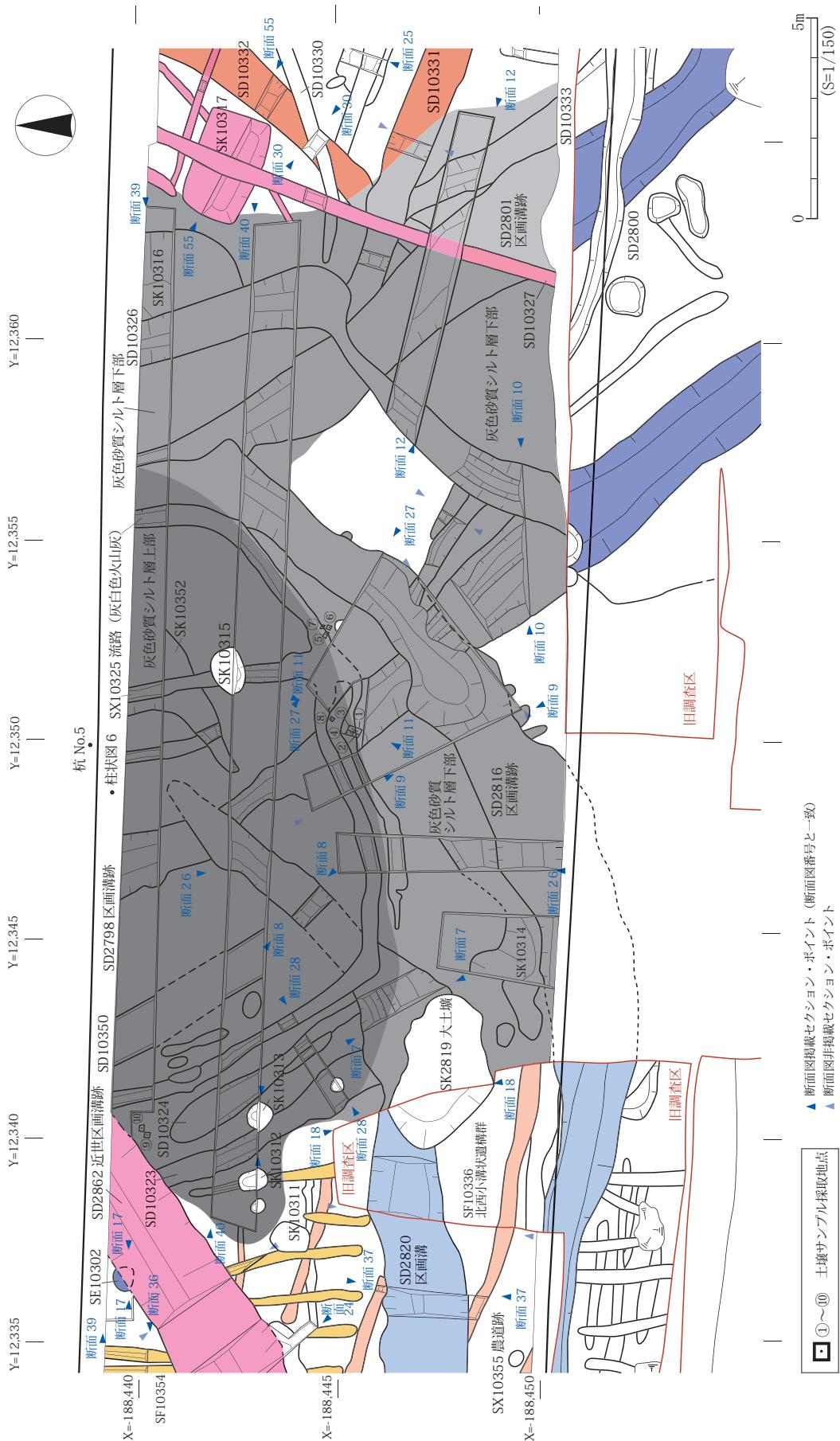
中央部の低い箇所を中心にほぼ全面に分布する。砂質シルトを主体とし、 $\phi$ 3mm程の発砲した軽石粒をやや多く含み、イベント堆積物に特徴的にみられる砂層とは層相が異なる。層厚は5~15cmで、灰白色火山灰よりも古く、SD2798・2801・2816区画溝跡、SK10316土壌など古い遺構の窪みの上を覆う。ロクロ土師器内黒坏・高台坏(第26図17)、ヘラ切りの須恵器坏(同図18)など9世紀前半頃の土器や円盤状土製品(同図27)、平瓦ⅡB類、丸瓦ⅡB類などが少数出土した。近くを流れる砂押川の氾濫堆積物の可能性も考えられたことから、貞觀11年(869)陸奥国巨大地震に伴う河川沿いの津波溯上も考慮し、珪藻分析と粒度分析を行った。「調査区の極近傍に池沼の環境が存在し、砂押川の氾濫などに伴い池沼の堆積物を押し流す形で調査区内に堆積したことなどが想定される」と指摘されている。詳細は付編を参照されたい。

### 【灰色砂質シルト層上部】

中央部北半部の低い箇所を中心に分布する。層厚は5~15cmで、灰色砂質シルト層下部を中心に、SK10352土壌、SD2798区画溝跡など低い窪みの上を覆う。近くを流れる砂押川の氾濫などに伴い、低所に流入した自然堆積層と考えられる。

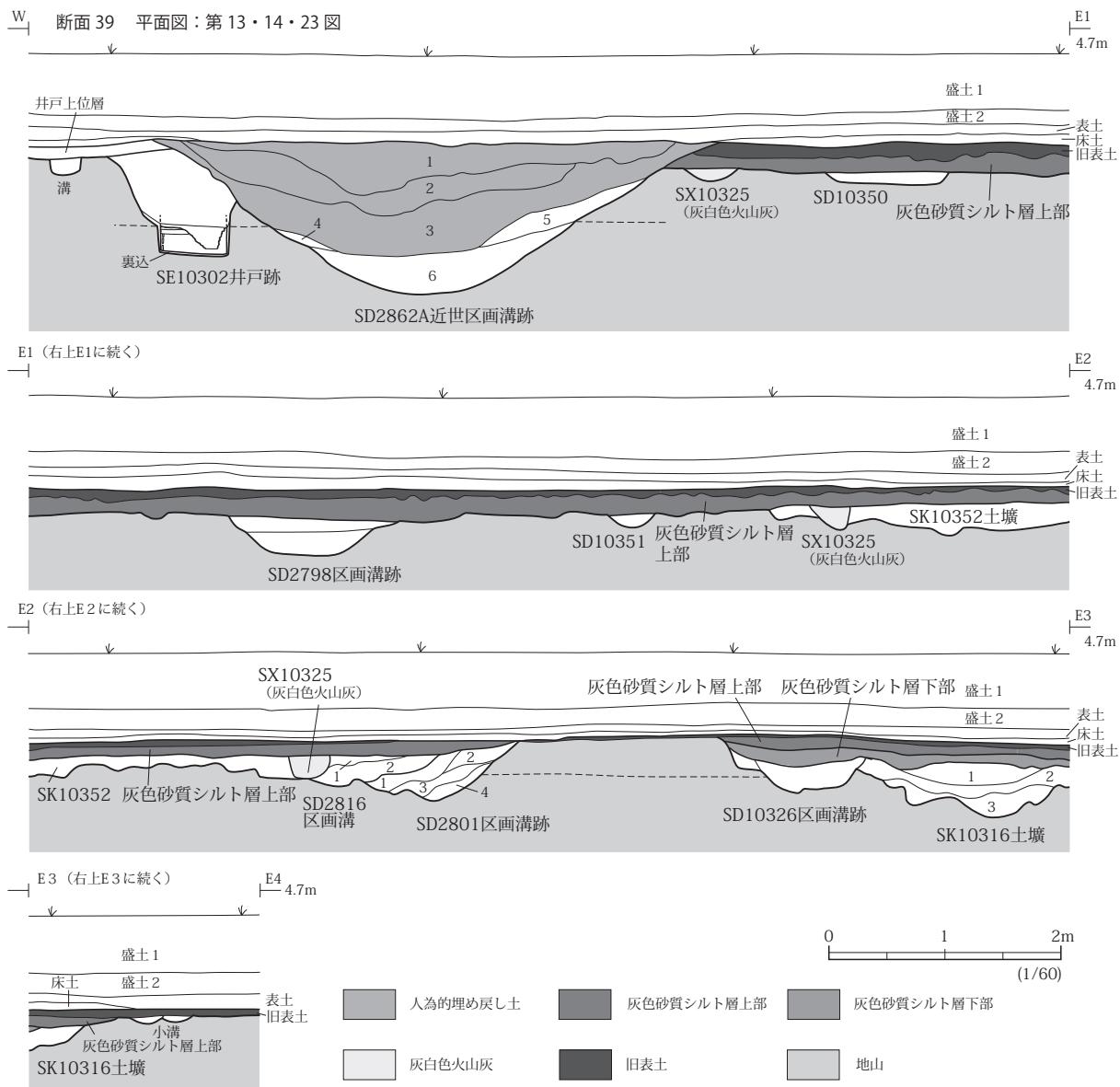
遺構・層位		土色	土性	その他の特徴
①-1	SF10353東西小溝状遺構群	黒褐色(10YR3/1)	粘質土	灰黄褐色(10YR5/2)地山砂質シルトブロック( $\phi$ 1~5cm)を多く含む。
①-2	SF10353東西小溝状遺構群	黒褐色(10YR3/1)	粘質土	灰黄褐色(10YR5/2)地山砂質シルトブロック( $\phi$ 1~5cm)を多く含む。
②-1	SF10354南北小溝状遺構群	1層 黒褐色(7.5YR3/2) 2層 黒褐色(10YR3/1)	粘質土 粘質土	灰黄褐色(10YR5/2)地山砂質シルトブロック( $\phi$ 1~5cm)を多く含む。 灰黄褐色(10YR5/2)地山砂質シルトブロック( $\phi$ 1~5cm)を多く含む。
	SD2766A区画溝跡	黒褐色(10YR3/2)	粘質土	灰白色火山灰ブロック( $\phi$ 1cm)を少量含む。自然堆積土。
	SD2766B区画溝跡	1層 褐灰色(10YR6/1) 2層 黒褐色(10YR3/1)	粘質シルト 粘質土	マンガン粒を含む。自然堆積土。 灰白色火山灰ブロック( $\phi$ 1cm)を少量含む。自然堆積土。
	SD2766C区画溝跡	1層 黒褐色(10YR3/1) 2層 黒褐色(10YR3/1)	粘質土 粘質土	灰白色火山灰ブロック( $\phi$ 1cm)を少量含む。B溝2層よりも強粘質。自然堆積土。 自然堆積土。
	SD10320A溝跡	黒褐色(7.5YR3/2)	粘質土	灰黄褐色(10YR5/2)地山砂質シルトブロック( $\phi$ 1~5cm)を少し含む。
	SD10320B溝跡	黒褐色(10YR3/1)	粘質土	灰黄褐色(10YR5/2)地山砂質シルトブロック( $\phi$ 1~5cm)を多く含む。
	SD2794区画溝跡	1層 にぶい黄橙色(10YR6/3) 2層 褐灰色(10YR4/1) 3層 暗褐色(7.5YR3/3) 4層 黒褐色(7.5YR3/1) 5層 黒色(10YR2/1) 6層 黒褐色(7.5YR3/1) 7層 黒色(10YR2/1) 8層 黑褐色(10YR3/1) 9層 暗青灰色(5B4/1)	シルト シルト 粘質土 粘質土 粘質土 粘質土 粘質土 粘質土 粘質土 粘質土	自然堆積土。 黄褐色(10YR5/6)マンガン粒、にぶい黄橙色(10YR7/4)シルトブロック( $\phi$ 2~5cm)を含む。 黄褐色(10YR5/6)マンガン粒、にぶい黄橙色(10YR7/4)シルトブロック( $\phi$ 2~5cm)を含む。 自然堆積土。 自然堆積土。 自然堆積土。 自然堆積土。 自然堆積土。 自然堆積土。 自然堆積土。 自然堆積土。
②-2	SF10354南北小溝状遺構群	黒褐色(7.5YR3/2)	粘質土	灰黄褐色(10YR5/2)地山砂質シルトブロック( $\phi$ 1~5cm)を少しまだ多く含む。
	SF10353東西小溝状遺構群	黒褐色(7.5YR3/2)	粘質土	灰黄褐色(10YR5/2)地山砂質シルトブロック( $\phi$ 1~5cm)を少しまだ多く含む。
	SD10322溝跡	暗褐色(10YR3/3)	粘質シルト	灰白色火山灰ブロック( $\phi$ 1~5cm)をやや多く含む。自然堆積土。
	SD10321溝跡	1層 黒褐色(7.5YR3/2) 2層 黒褐色(7.5YR3/2)	粘質土 粘質土	白色凝灰岩粒( $\phi$ 1~2mm)を少し含む。自然堆積。 灰黄褐色(10YR5/2)地山シルトブロック( $\phi$ 5cm前後)を多く含む。人為堆積。
	SK10309土壌	1層 黒褐色(7.5YR3/2) 2層 黒褐色(7.5YR3/2)	粘質土 粘質土	白色凝灰岩粒( $\phi$ 1~2mm)を少し含む。自然堆積。 灰黄褐色(10YR5/2)地山シルトブロック( $\phi$ 5cm前後)を多く含む。人為堆積。
③	SF10336北西小溝状遺構群	1層 黒褐色(7.5YR3/2) 2層 黒褐色(7.5YR3/2)	粘質土 粘質土	灰黄褐色(10YR5/2)地山シルトブロック( $\phi$ 1~5cm)を少し含む。 灰黄褐色(10YR5/2)地山シルトブロック( $\phi$ 1~5cm)を多く含む。
	SD2820A区画溝跡	1層 黒褐色(10YR3/1) 2層 灰黄褐色(10YR5/2)	粘質土 粘質土	黒褐色(10YR3/1)粘質土、褐灰色(10YR4/1)粘質土、にぶい黄橙色(10YR7/4)地山砂質シルトを含む3種混合土(4:2:4)。
	SD2820B区画溝跡	1層 黄灰色(2.5Y5/1) 2層 黑褐色(10YR3/1)	砂質シルト 粘質土	粘質土、褐灰色(10YR4/1)粘質土、にぶい黄橙色(10YR7/4)地山砂質シルトブロック( $\phi$ 1~3cm)を含む。
④	SF3481北東小溝状遺構群	1層 黒褐色(7.5YR3/2) 2層 黑褐色(7.5YR3/2)	粘質土 粘質土	灰黄褐色(10YR5/2)地山砂質シルトブロック( $\phi$ 1~5cm)を少し含む。 灰黄褐色(10YR5/2)地山砂質シルトブロック( $\phi$ 1~5cm)を多く含む。

表7 第1工区の小溝状遺構群断面図(第22図掲載) 土層観察表

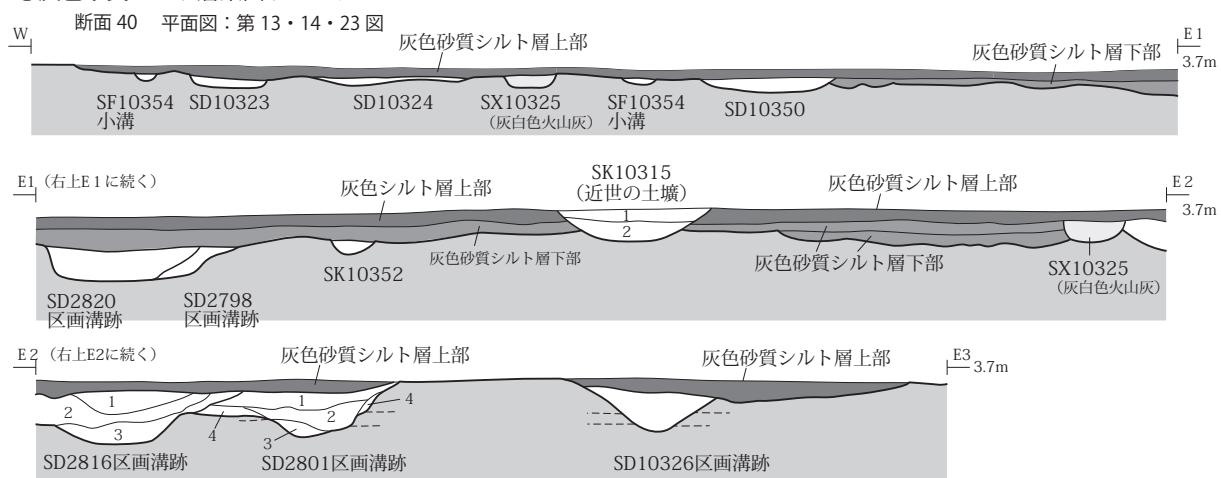


第23図 第1工区における灰色砂質シルト層の分布

①灰色砂質シルト層東西トレンチ 1



②灰色砂質シルト層東西トレンチ 2



第24図 第1工区灰色砂質シルト層トレンチ断面図

遺構・層位		土色	土性	その他の特徴
①	盛土	1層 2層	砂礫 砂	道路用地仮盛土。 道路用地仮盛土。
	表土（耕作土）	褐色（10YR4/1）	粘質土	道路用地仮盛土前の表土（現代の水田耕作土）。
	水田床土	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘質土	現代の水田耕作土下層の床土。
	旧表土	黒色（10YR2/1）	粘質土	旧表土（江戸時代以前～旧調査の所見による）
	井戸上位層	にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘質土	旧表土より新しい平安時代以降～江戸時代以前の堆積層か。
	灰色砂質シルト 層	上部 灰黄褐色（10YR4/2） 下部 灰黄褐色（10YR5/2）	砂質シルト	中央部北半を覆う基本層上部。灰白色火山灰よりも層位的に新しい。自然堆積土。
SD2862A 近世区画大溝跡	1層	黒褐色（10YR3/1）	粘質土	黒褐色（10YR3/1）粘質土、にぶい黄橙色（10YR7/4）砂質シルト、暗褐色（10YR3/3）シルトの3種ブロック状混合土（6:3:1）による人為的埋戻し土。
	2層	黒褐色（10YR3/1）	粘質土	黒褐色（10YR3/1）粘質土、にぶい黄橙色（10YR7/4）砂質シルト、暗褐色（10YR3/3）シルトの3種ブロック状混合土（6:2:2）による人為的埋戻し土。
	3層	黒褐色（10YR3/1）	粘質土	黒褐色（10YR3/1）粘質土、にぶい黄橙色（10YR7/4）砂質シルト、暗褐色（10YR3/3）シルトの3種ブロック状混合土（3:3:4）による人為的埋戻し土。
	4層	にぶい黄褐色（10YR5/4）	砂質シルト	傾斜堆積土。
	5層	灰黄褐色（10YR5/2）	砂質シルト	自然堆積土。
	6層	褐色（10YR4/1）	粘質土	自然堆積土。
SE10302 井戸跡	裏込	黒褐色（7.5YR3/1）	粘質土	灰黄褐色（10YR4/2）シルト土ブロック（φ1～5cm）を多く含む。人為堆積土。灰白色火山灰小ブロックを特に井筒に転用された円形曲物容器と裏込土の隙間に多く含む。上部にもあり、隙間に浸透したものと判断。
	内部	黒褐色（7.5YR2/2）	粘質土	灰黄褐色（10YR4/2）シルト土ブロック（φ1～4cm）を多く含む。人為堆積土。
井戸西側小溝		褐色（10YR4/1）	粘質土	にぶい黄橙色（10YR6/3）地山シルトブロック（φ3～4cm）を含む。
SX10325 流路跡		灰白色（7.5YR8/1）	火山灰他	灰白色（7.5YR8/1）火山灰ブロック、褐色（10YR5/1）粘質土、灰白色（10YR7/1）シルト、にぶい黄橙色（10YR6/3）地山シルトを含む4種混合土（2:3:3:2）。
SD10350溝跡		にぶい黄褐色（10YR5/3）	砂質シルト	
SD2798 区画溝跡	1層	灰黄褐色（10YR5/2）	砂質シルト	
	2層	黒褐色（10YR2/2）	粘質土	にぶい黄橙色（10YR6/3）地山シルトブロック（φ3～5cm）を含む。
SD10326溝跡	1層	褐色（10YR5/1）	粘質シルト	
	2層	褐色（10YR5/1）	粘質シルト	にぶい黄橙色（10YR6/3）地山シルト崩落土（φ1～3cm）が混入。
SK10316土壙	1層	灰黄褐色（10YR5/2）	砂質シルト	
	2層	灰黄褐色（10YR4/2）	砂質シルト	にぶい黄橙色（10YR6/3）地山シルトをブロック状（φ3～5cm）に含む。
E3-E4間 小溝	3層	暗褐色（10YR3/3）	粘質シルト	にぶい黄橙色（10YR6/3）地山シルトがブロック状（φ3～5cm）に崩落混入。
	褐色（10YR4/1）	粘質土	にぶい黄橙色（10YR6/3）地山シルトをブロック状（φ3～5cm）に含む。	
②	灰色砂質シルト 層	上部 灰黄褐色（10YR4/2） 下部 灰黄褐色（10YR5/2）	砂質シルト	杭No.5の東西周辺に部分的に広がり、中央部北半の古代以降面を覆う基本層の上部。灰白色火山灰よりも層位的に新しい。自然堆積土。
	SK10315 近世土壙	1層 黑褐色（10YR3/1） 2層 暗灰色（N3/）	粘質土	黒色（10YR1.7/）の炭化物を一部ブロック状（φ1～2cm）に含む。
SD10323溝跡		にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘質シルト	
SD10324溝跡		にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘質シルト	
SX10325流路跡		灰黄褐色（10YR6/2）	シルト	灰白色（2.5Y8/1）火山灰ブロック（φ2～10cm）を多く含む。
SD10350溝跡		にぶい黄褐色（10YR5/3）	砂質シルト	
SD2820 区画溝跡		黒褐色（10YR2/2）	粘質土	にぶい黄橙色（10YR7/4）シルトの地山崩落土をブロック状（φ3～5cm）に含む。
SD2798 区画溝跡		褐色（10YR4/1）	粘質土	にぶい黄橙色（10YR7/4）シルトの地山崩落土をブロック状（φ3～5cm）に含む。
SK10352土壙		にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘質シルト	
SD2816 区画溝跡	1層 灰黄色（2.5Y6/2）	細砂		
	2層 黄灰色（2.5Y4/1）	粘質シルト	灰白色（2.5Y8/1）火山灰ブロック（φ0.5～2cm）をごく少量含む（根による攪乱か）。	
	3層 暗灰黄色（2.5Y4/2）	粘質シルト	褐色（10YR4/1）粘質土、にぶい黄橙色（10YR7/4）地山シルトブロック（φ2～10cm）を含む。	
SD2801 区画溝跡	1層 褐灰色（10YR4/1）	粘質シルト		
	2層 黑褐色（10YR3/1）	粘質土		
	3層 黑褐色（10YR3/1）	粘質土	溝の壁面崩落によるにぶい黄橙色（10YR7/4）地山シルトを含む混合土。	
	4層 灰黄褐色（10YR4/2）	粘質シルト	にぶい黄橙色（10YR7/4）地山シルトブロック（φ1～5cm）を含む。	
SD10326 区画溝跡		褐色（10YR5/1）	粘質土	

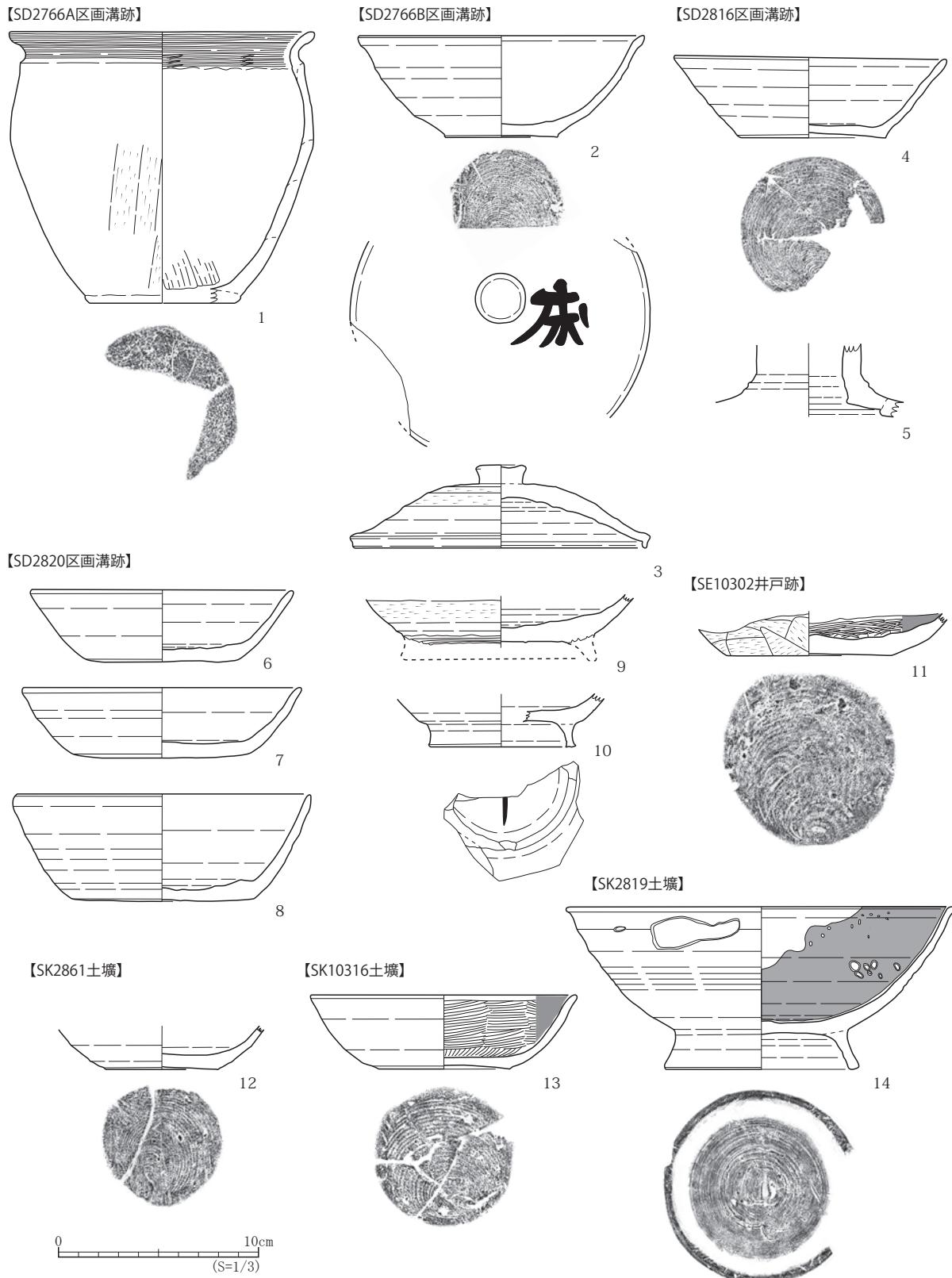
表8 第1工区の灰色砂質シルト層トレンチ断面図（第24図掲載）土層観察表

## 2. 近世（江戸時代）以降の遺構と遺物

近世の遺構として、区画大溝跡1条（SD2862）、土壙2基（SK10315 土壙、SK10317 大土壙）を検出した。この他、近世以降の溝跡には、溝跡1条（SD10327）、土壙2基（SK10305・10335）がある。

（1） SD2862 近世区画大溝跡（平面図：第7・9～13・23図、断面図：第17図⑤—1・2、第18・19図、第20図③・⑦、第24図①、第27図、写真：図版2～8、9-1、11、12、15下）

調査区西部～中央部にかけて検出した東西区画大溝跡で、東側で北東に向けて曲がり、西端では撥状に拡がる。西部に2箇所の鞍部（鞍部1・2）、中央部に1箇所の鞍部（鞍部3）があり、鞍部との位置関係を基準に、第27図に断面図を提示した。新旧3時期（SD2862A → SD2862B → SD2862C）あり、鞍部1以西では、A大溝を掘り直したB大溝を人為的に埋め戻して、C大溝としている（第27



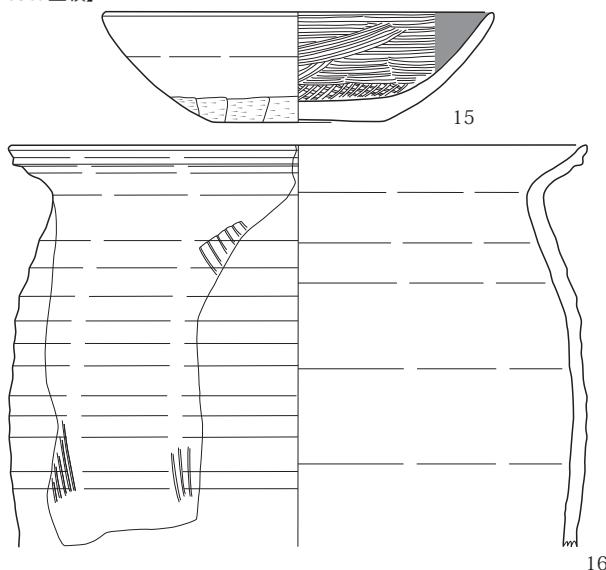
【種類】 1：非口クロ土師器甕 2・4・6～8：須恵器坏 3：須恵器蓋 5：須恵器壺 9・10：須恵器高台坏  
 11・13：ロクロ土師器内黒坏 12：赤焼土器坏 14：赤焼土器高台坏

【出土遺構】 1～3：SD2766区画溝跡 4・5：SD2816区画溝跡 6～10：SD2820区画溝跡 11：SE10302井戸跡  
 12：SK2861土壤 13：SK10316土壤 14：SK2819土壤

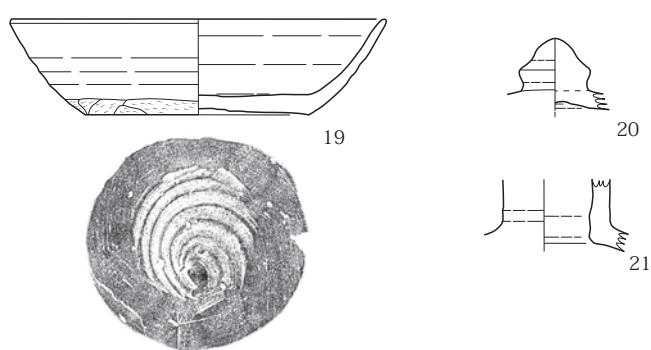
第25図 第1工区出土の主な遺物 1

図②・③)。これに対し、鞍部1・2以東ではA大溝を埋め戻してB大溝とするが(第27図⑥～⑧・⑩)、屈曲部東側の北東方向の大溝箇所ではB大溝は浅くなり、調査区北端ではA大溝を完全に埋め戻

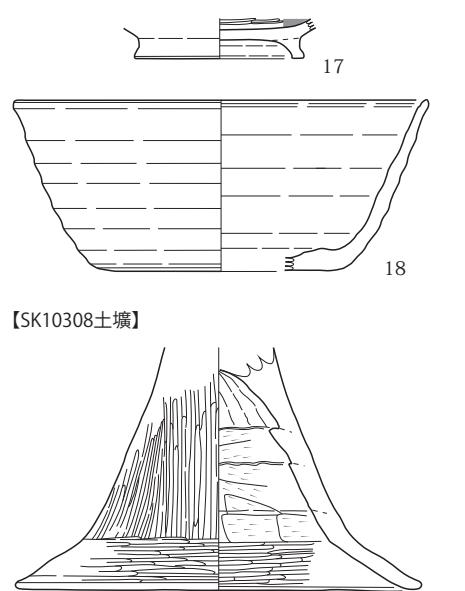
【SK10309土壤】



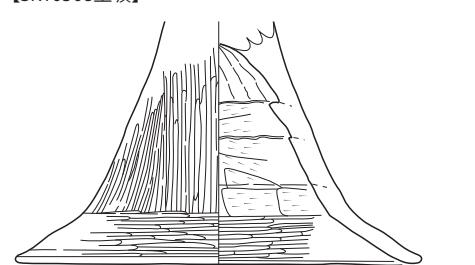
【遺構確認面】



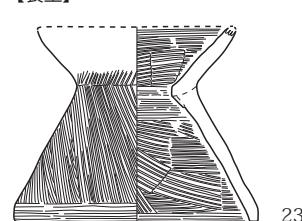
【灰色砂質シルト層下部】



【SK10308土壤】

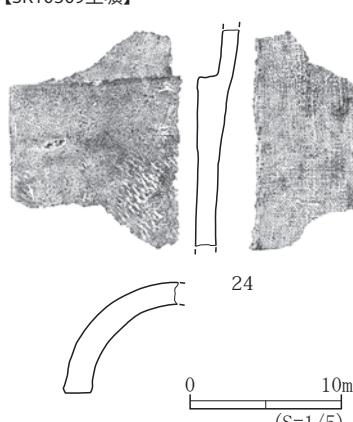


【表土】

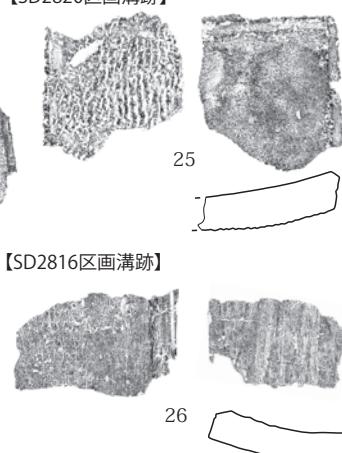


0 10cm  
(S=1/3)

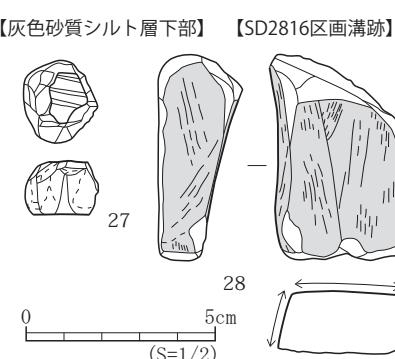
【SK10309土壤】



【SD2820区画溝跡】



【SD2816区画溝跡】



【種類】 15：ロクロ土師器内黒坏 16：ロクロ土師器甕 17：ロクロ土師器内黒高台坏 18・19：須恵器坏 20：須恵器蓋  
21：灰釉陶器壺 22：古墳時代中期（南小泉式期）土師器高坏 23：古墳時代前期（塙釜式期）土師器器台 24：有段丸瓦  
25・26：平瓦 27：円盤状土製品 28：砥石  
【出土遺構等】 15・16：SK10309土壤 17・18・27：灰色砂質シルト層下部 19～21：遺構確認面 22：SK10308土壤 23：表土  
24：SK10309土壤 25：SD2820区画溝跡 26・28：SD2816区画溝跡

第26図 第1工区出土の主な遺物 2

ししたままである（第27図⑭・⑮）。また、屈曲部の鞍部以西では溝底面高を高くし、溝幅を拡幅してC大溝としている（第27図⑨・⑪・⑬）。C大溝は鞍部1以西、及び平安時代のSD2820区画溝と交差する箇所の東側から屈曲部にかけて掘り直したが、北東方向の大溝の上面では浅くなっている。

規模はA溝跡が幅2.5m前後、深さ1.1～1.2m、B大溝跡が幅1.5～1.6m、深さ0.6～0.8m、C大溝跡が3.8～4.5m、深さ0.2～0.4mである。

新旧関係は、SE10301・10302井戸跡、SK2861・2864大土壙、SF10354・10336小溝状遺構群、SD2766・2794・2820区画溝跡、SD10320・10321・10322・10323溝跡、灰46-50色砂質シルト層上部、旧表土（近世）よりも新しく、SK10305土壙よりも古い。

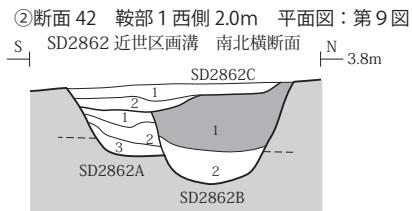
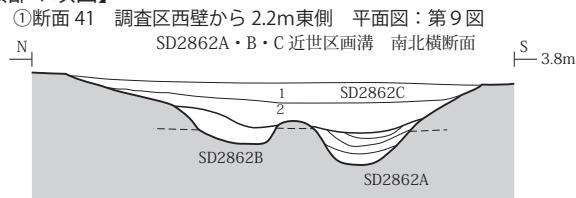
SD2862B大溝跡の出土遺物には、内朱・外黒地草花文朱描の漆器椀（第29図29、写真：図版12-7・8、28-29）、「七月十六日」墨書笹塔婆（第18図、第29図30、写真図版：図版28-30）がある。

このうち漆器椀は、大和町下草古城跡出土品（宮城県教育委員会1993・1994）と類似する。近世仙台藩の漆器については関根達人氏が編年し、下草古城跡出土漆器を16世紀末～17世紀前葉に位置付けている（東北大学埋蔵文化財調査研究センター1998）。笹塔婆は、長さ12.6cm、幅2.3cmの完形品で、上端が圭頭形、下端はやや丸味を帯びるように中央が外にわずかに膨らむ。木取は板目で、上・

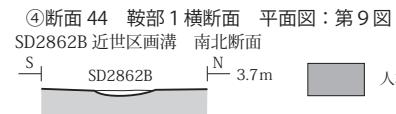
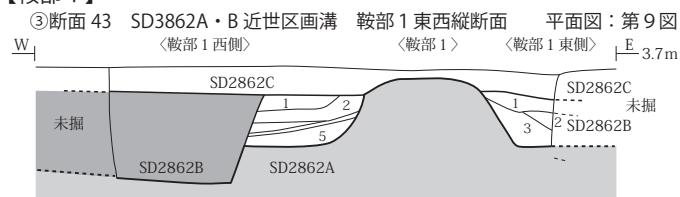
画面	No.	種類	出土遺構等	特徴	口径cm	底径cm	器高cm	残存率		登録	写真図版	
								口縁部	底部			
第25 図	1	非クロ土師器甕	SD2766A区画溝跡	外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、底部：木葉痕。内面：ハケメ→ヨコナデ、ハケメ。8世紀代。	15.4	7.2	7.2	<1/10	2/3	R20	図版26-1	
	2	須恵器環	SD2766B区画溝跡	外面：底部回転糸切り無調整。9世紀後半頃。	14.4	5.6	5.1	1/8	>1/2	R35	図版26-2	
	3	須恵器環蓋	SD2766区画溝跡最下層	外面：天井部回転ヘラケズリ、墨書「床」（異体字）。9世紀前半頃。	14.6		4.2	9/10		R60	図版26-3	
	4	須恵器環	SD2816B区画溝跡	外面：底部回転糸切り無調整。	13.8	7.3	4.1	1/2	1/2	R1	図版26-4	
	5	須恵器長頸壺	SD2816区画溝跡	外面：頸部リング状凸凹、濃緑色自然釉付着。内面：肩部3段接合。会津大戸窯跡製品か。9世紀前葉頃。						R26	図版26-5	
	6	須恵器環	SD2820区画溝跡2層	外面：底部ヘラ切り→ナデ。9世紀前半頃。	13.2	7.6	3.6	1/3	1/2	R30	図版26-6	
	7	須恵器環	SD2820区画溝跡	外面：底部ヘラ切り。9世紀前半頃。	14.0	8.8	3.6	<1/6	1/3	R5	図版26-7	
	8	須恵器環	SD2820区画溝跡2層	外面：底部ヘラ切り→ナデ。9世紀前半頃。	15.0	9.2	5.4	1/3	3/4	R29	図版26-8	
	9	須恵器高台环	SD2820区画溝跡1層	外面：底部ヘラ切り→体下部回転ヘラケズリ→付高台（高台剥落）。					4/5	R33	図版26-9	
	10	須恵器高台环	SD2820区画溝跡2層	外面：底部切り離し不明→付高台。底部に不明墨書。					1/3	R32	図版26-10	
	11	ロクロ土師器内黒环	SE10302井戸跡裏込	外面：底部回転糸切り→体下部手持ちヘラケズリ。内面：井桁状ミガキ→黒色処理。9世紀前半頃。		8.2				完形	R45	図版27-11
	12	赤焼土器環	SK2861土壙	外面：底部回転糸切り無調整。10世紀前葉頃。		5.6				完形	R36	図版27-12
	13	ロクロ土師器内黒环	SK10316土壙	外面：底部回転糸切り。内面：放射状ミガキ→黒色処理。	13.4	6.6	3.7	1/4	8/9	R43	図版27-13	
	14	赤焼土器高台环	SK2819土壙	外面：底部回転糸切り→付高台。火はね剥落痕。内面：油煙、火はね剥落痕。10世紀前半頃。	19.6	9.8	8.1	1/2	3/4	R44	図版27-14	
第26 図	15	ロクロ土師器内黒环	SK10309土壙	外面：体下部～底部手持ちヘラケズリ。内面：井桁状ミガキ→黒色処理。9世紀前半頃。	15.6	6.8	4.4	2/3		R39	図版27-15	
	16	ロクロ土師器甕	SK10309土壙	受け口状口縁。外面：平行叩き→ロクロナデ。9世紀前葉頃。	23.0				1/3		R40	図版27-16
	17	ロクロ土師器高台环	灰色砂質シルト層下部	外面：底部切り離し不明→付高台。内面：ヘラミガキ→黒色処理。		6.8				3/4	R50	図版27-17
	18	須恵器環	灰色砂質シルト層下部	外面：底部ヘラ切り→ナデ。9世紀前半頃。	16.6	9.8	6.8	わずか	2/3	R52	図版27-18	
	19	須恵器環	遺構確認面	外面：底部回転糸切り→体下部～底部周縁手持ちヘラケズリ。9世紀前半頃。	15.0	9.0	3.8	1/2	8/9	R21	図版27-19	
	20	須恵器環蓋	遺構確認面	高い宝珠状つまみ。						R67	図版27-20	
	21	灰釉陶器壺	遺構確認面	頸下部～肩部破片。外面：灰釉。猿投窓跡製品。						R62	図版27-21	
	22	土師器高环	SK10308土壙	古墳時代中期（南小泉式期）。脚部破片。脚部5/6残存。脚部径16.2cm。外面：ヘラケズリ→ヘラミガキ。内面：絞り痕→ケズリ→ヘラミガキ。						R42	図版28-22	
	23	土師器器台	表土（旧調査埋め戻し土）	古墳時代前期（塩釜式期）。底径9.6cm。器高約7.7cm。外面：ハケメ、ヨコナデ。内面：ハケメ→ナデ、ヨコナデ。						R55	図版28-23	
	24	有段式丸瓦	SK10309土壙	粘土組巻き作り、有段式。多賀城跡分類丸瓦II B類aタイプ。凸面：縄叩き→ロクロナデ。凹面：布目。						R38	図版28-24	
	25	平瓦	SD2820区画溝跡1層	一枚作り平瓦。多賀城跡分類平瓦II B類aタイプ。凸面：縄叩き。凹面：布目→ナデ。						R31	図版28-25	
	26	平瓦	SD2816区画溝跡1層	桶巻き作り平瓦。多賀城跡分類平瓦I A類。多賀城跡政府第1期〔神龟元年（724）～天平宝字6年（762）〕。凸面：四型台使用時の細布压痕→ナデ。凹面：桶巻き作り段階の模骨痕、第1次布目→ナデ。						R27	図版28-26	
	27	円盤状土製品	灰色砂質シルト層下部	須恵器甕部破片利用。完形。長さ2.2cm、幅2.0cm、厚さ1.4cm。						R49	図版28-27	
	28	砥石	SD2816区画溝跡1層	細粒砂岩製。長さ5.4cm、幅4.1cm、厚さ2.2cm。2面研磨。						R4	図版28-28	
第29 図	29	内朱・外黒地草花文朱描漆器椀	SD2862B近世区画溝跡1層	口縁部欠損、体部2/3～底部ほぼ完形破片。外面：黒漆塗の木地に、口縁部～体下部にかけて、赤漆で草花文様を施す。内面：赤漆塗。高台径6.4cm、残存高5.6cm。						R84	図版28-29	
	30	「七月十六日」墨書 笹塔婆	SD2862B近世区画溝跡下層	022形式。長さ12.6cm、幅2.3cm、厚さ0.6cm。上端が圭頭形、下端はやや丸味を帯びるように中央が外にわずかに膨らむ。木取は板目で、上・右端・左・右辺とも丁寧に面取りされている。表面墨書「□ 七月十六日」。裏面墨書不明。「七月十六日」は旧暦の送り盆にあたり、その上の一字は墨がかされていて判読困難だが、種子の可能性がある。形態・記載内容より笹塔婆とみられるが、笹塔婆の中では小型で下端がとがらない特異な形態・法量である。						R87	図版28-30	

表9 第1工区出土遺物（第25・26・29図掲載）観察表

### 【鞍部1以西】



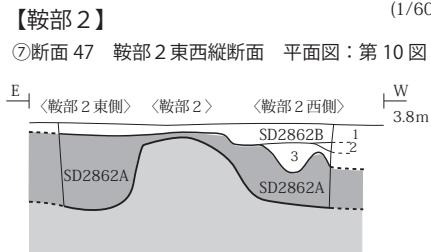
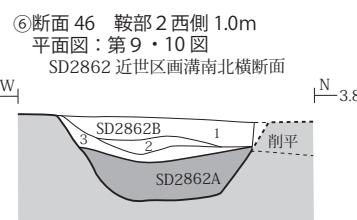
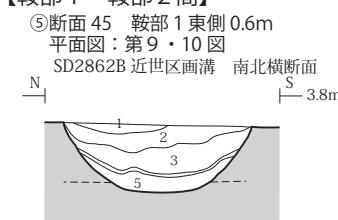
### 【鞍部1】



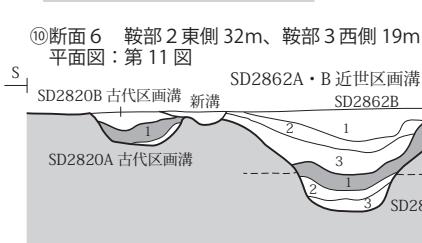
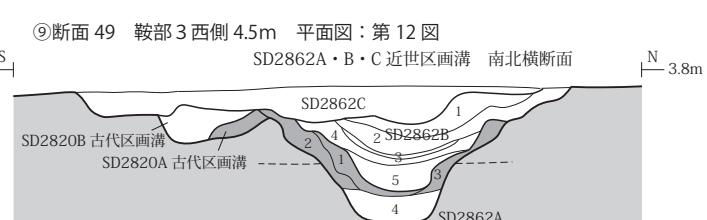
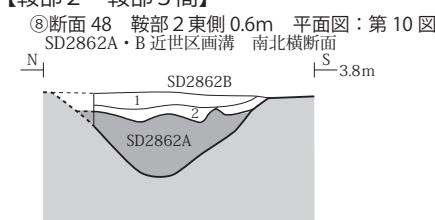
※断面図に付した断面図番号は平面図に位置を示した。

0 1 2m  
(1/60)

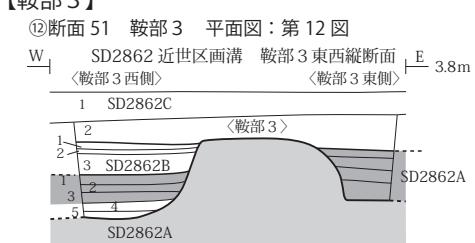
### 【鞍部1—鞍部2間】



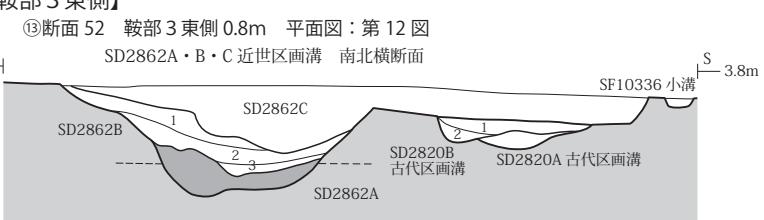
### 【鞍部2—鞍部3間】



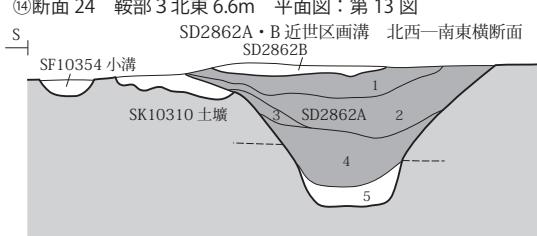
### 【鞍部3】



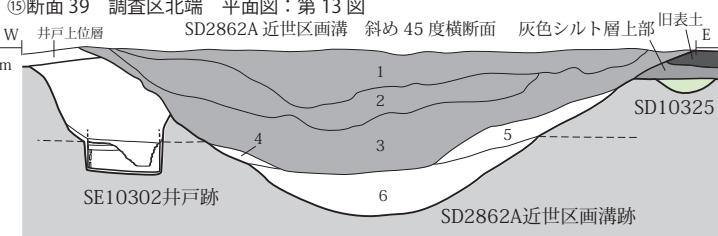
### 【鞍部3東側】



### ⑭断面24 鞍部3北東 6.6m 平面図: 第13図



### ⑮断面39 調査区北端 平面図: 第13図



第27図 第1工区のSD2862近世区画大溝跡断面図

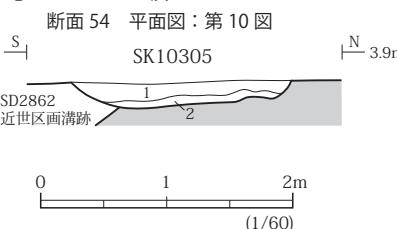
遺構・層位		土色	土性	その他の特徴
①	SD2862A近世 区画大溝跡	1層 灰色 (10YR6/1)	砂質土	細砂。自然堆積土。
		2層 褐灰色 (10YR5/1)	粘質土	自然堆積土。
		3層 灰色 (10YR6/1)	砂質土	細砂。褐灰色 (10YR5/1) 粘質土を層状に含む。自然堆積土。
		4層 褐灰色 (10YR4/1)	粘質土	自然堆積土。
②	SD2862B大溝	褐灰色 (10YR4/1)	粘質土	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山砂質シルトブロック ( $\phi$ 1~2cm) を少量含む。自然堆積土。
	SD2862C近世 区画大溝跡	1層 黒褐色 (10YR3/1)	粘質土	自然堆積土。
		2層 黒褐色 (10YR2/2)	粘質土	1層よりやや土色濃く、粘性強い。自然堆積土。
③	SD2862A近世 区画大溝跡	1層 灰色 (10YR6/1)	砂質土	細砂。自然堆積土。
		2層 褐灰色 (10YR5/1)	粘質土	自然堆積土。
	SD2862B近世 区画大溝跡	1層 暗褐色 (10YR3/3)	シルト	暗褐色 (10YR3/3) シルト、黒褐色 (10YR3/1) 粘質土、にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山砂質シルトの3種のブロック状混合土 (7:1:3)。人為堆積土。
		2層 褐灰色 (10YR4/1)	粘質土	自然堆積土。
	SD2862C近世 区画大溝跡	1層 黒褐色 (10YR3/2)	粘質土	自然堆積土。
④	SD2862A近世 区画大溝跡	2層 灰黃褐色 (10YR4/2)	粘質シルト	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山砂質シルトブロック ( $\phi$ 1~2cm) を少量含む。自然堆積土。
	SD2862B大溝	黑褐色 (7.5YR3/1)	粘質土	砂粒を少し含む。自然堆積土。
⑤	SD2862B近世 区画大溝跡 (鞍部1東側)	1層 褐灰色 (7.5YR5/1)	砂質土	自然堆積土。
		2層 黄褐色 (7.5YR3/1)	粘質土	褐色 (7.5YR5/1) 砂薄層を何枚も介在する。自然堆積土。
		3層 黄褐色 (7.5YR3/1)	粘質土	褐色 (7.5YR5/1) 砂薄層を何枚も介在する。自然堆積土。
	SD2862B (鞍部1西側)	黑褐色 (7.5YR3/1)	粘質土	にぶい黄褐色 (10YR5/3) 地山砂質土ブロック ( $\phi$ 1~10cm) を多く含む。人為堆積土。
	SD2862C大溝	黑褐色 (7.5YR3/1)	粘質土	砂粒を少し含む。自然堆積土。
⑥	SD2862B大溝	黑褐色 (10YR3/2)	粘質土	自然堆積土。
⑦	SD2862B近世 区画大溝跡	1層 にぶい黄橙色 (10YR7/4)	砂質土	細砂。自然堆積土。
		2層 黑褐色 (10YR2/2)	粘質土	浅黄色 (10YR8/3) 砂質土、炭化物を微量含む。自然堆積土。
		3層 にぶい黄褐色 (10YR5/3)	砂質土	にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質土、黒褐色 (10YR3/2) 粘質土の互層。自然堆積土。
		4層 浅黄色 (10YR8/3)	砂質土	細砂。自然堆積土。
		5層 褐灰色 (10YR4/1)	粘質土	自然堆積土。
⑧	SD2862A近世 区画大溝跡	暗褐色 (10YR3/3)	粘質土	暗褐色 (10YR3/3) 粘質土、にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山砂質シルト、黒褐色 (10YR3/1) 粘質土の3種のブロック状混合土 (6:3:1)。人為堆積土。
⑨	SD2862B近世 区画大溝跡	1層 黑褐色 (10YR3/2)	粘質土	自然堆積土。
		2層 にぶい黄橙色 (10YR7/4)	砂質土	細砂。自然堆積土。
		3層 黑褐色 (10YR2/2)	粘質土	浅黄色 (10YR8/3) 砂質土、炭化物を微量含む。自然堆積土。
⑩	SD2862A近世 区画大溝跡	暗褐色 (10YR3/3)	粘質土	暗褐色 (10YR3/3) 粘質土、にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山砂質シルト、黒褐色 (10YR3/1) 粘質土の3種のブロック状混合土 (6:3:1)。人為堆積土。
	SD2862B近世 区画大溝跡	1層 黑褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山砂質シルトブロック ( $\phi$ 1~3cm) を多く含む。人為堆積土。
		2層 黑褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山砂質シルト、黒褐色 (10YR3/1) 粘質土の2種混合土をブロック状 ( $\phi$ 1~5cm) に多く含む。人為堆積土。
		3層 にぶい黄褐色 (10YR5/4)	砂質土	細砂。人為堆積土。
		4層 褐灰色 (10YR4/1)	粘質土	自然堆積土。
⑪	SD2862B近世 区画大溝跡	1層 黑褐色 (10YR3/1)	粘質土	炭化物 ( $\phi$ 1cm以下) を微量含む。人為堆積土。
		2層 灰黄褐色 (10YR4/2)	粘質シルト	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山起源砂質シルトを薄い層状に含む。自然堆積土。
		3層 灰黄褐色 (10YR4/2)	粘質シルト	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質シルト、にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山起源砂質シルトの互層。自然堆積土。
		4層 暗褐色 (10YR3/4)	粘質土	自然堆積土。
		5層 暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山起源砂質シルトブロックを少量含む。自然堆積土。
⑫	SD2862C大溝	黑褐色 (10YR2/2)	粘質土	自然堆積土。
⑬	SD2820古代 区画大溝跡	1層 灰黄褐色 (10YR4/2)	粘質シルト	マンガン粒。自然堆積土。
		2層 灰黄褐色 (10YR4/2)	粘質シルト	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質シルト、にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山砂質シルトブロックを7:3の割合で含む人為堆積土。
⑭	SD2862A 近世区画溝跡	1層 暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	地山ブロック ( $\phi$ 0.5~4cm) を含む人為堆積土。
		2層 暗青灰色 (5BG3/1)	砂質土	細砂。自然堆積土。
		3層 暗緑灰色 (7.5GY4/1)	砂質土	細砂。オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 粘質土を下部に一部含む。自然堆積土。
	SD2862B近世 区画溝大跡	1層 黑褐色 (10YR3/1)	粘質土	炭化物 ( $\phi$ 1cm以下) をごく少量含む。自然堆積土。
		2層 にぶい黄褐色 (10YR5/3)	砂質土	細砂。暗褐色 (10YR3/3) 粘質土の薄層 (1cm以下) を互層状に含むる。炭化物微量含む。自然堆積土。
		3層 暗褐色 (10YR3/3)	粘質土	にぶい黄褐色 (10YR5/3) 細砂薄層 (1cm以下) を互層状に含む。炭化物微量含む。自然堆積土。
	SD2820A 古代区画溝跡	1層 灰黄褐色 (10YR4/2)	粘質シルト	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山砂質シルトを4割程度含む混合土。人為堆積土。
		2層 にぶい黄橙色 (10YR7/4)	砂質シルト	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土を少量含む。溝斜面の地山土の崩落流れ込み。自然堆積土。
	SD2820B溝跡	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘質シルト	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山砂質シルトブロック ( $\phi$ 1~2cm) を少量含む。自然堆積土。
⑮	SD2862A 近世区画溝跡	1層 灰黄褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山砂質シルトブロック ( $\phi$ 0.5~3cm) を含む。人為堆積土。
		2層 灰黄褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	細砂。にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山砂質シルトブロック ( $\phi$ 0.5~3cm) を含む。人為堆積土。
		3層 灰黄褐色 (10YR6/2)	砂質土	褐灰色 (10YR4/1) 粘質土、にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山砂質シルト、暗褐色 (10YR3/3) シルトの3種混合土。人為堆積土。
		4層 褐灰色 (10YR4/1)	粘質土	褐色 (10YR4/1) 粘質土、にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山砂質シルト、暗褐色 (10YR3/3) シルトの3種混合土。人為堆積土。
		5層 灰色 (7.5YR4/1)	粘質土	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山砂質シルトブロックを少量含む。人為堆積土。
		6層 褐灰色 (10YR5/1)	粘質土	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山砂質シルトブロックを少量含む。人為堆積土。
		7層 褐灰色 (10YR5/1)	粘質土	灰色 (10Y4/1) 砂質土ブロック ( $\phi$ 2~4cm) を含む。自然堆積土。
		8層 褐灰色 (10YR4/1)	粘質土	自然堆積土。
⑯	SD2862B近世 区画大溝跡	1層 黑褐色 (10YR3/1)	粘質土	炭化物 ( $\phi$ 1cm以下) をごく少量含む。自然堆積土。
		2層 黑褐色 (10YR3/1)	粘質土	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山砂質シルトブロック ( $\phi$ 2~4cm) を含む。自然堆積土。
		3層 褐灰色 (10YR4/1)	砂質シルト	自然堆積土。
		4層 暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	3層よりも粘性強い。自然堆積土。
⑰	SD2862C大溝	黑褐色 (10YR2/2)	粘質土	自然堆積土。
⑱	SD2820 古代区画溝跡	1層 灰黄褐色 (10YR4/2)	粘質シルト	マンガン粒を含む。自然堆積土。
		2層 暗褐色 (10YR2/2)	粘質シルト	自然堆積土。

表10-1 第1工区のSD2862近世区画大溝跡断面図（第27図掲載）土層観察表

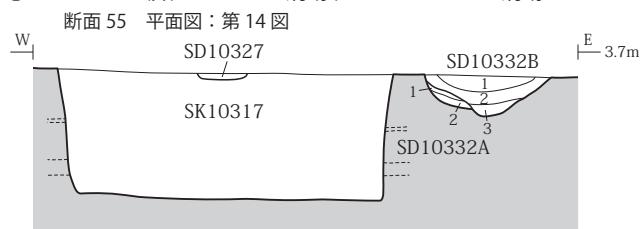
遺構・層位		土色	土性	その他の特徴
⑫ SD2862A近世区画大溝跡(鞍部3西側)	1層	褐灰色 (10YR4/1)	粘質土	褐灰色 (10YR4/1) 粘質土、にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山砂質シルト、暗褐色 (10YR3/3) シルトの3種混合土。人為堆積土。
	2層	灰色 (7.5YR4/1)	粘質土	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山砂質シルトブロックを少量含む。人為堆積土。
	3層	褐灰色 (10YR5/1)	粘質土	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山砂質シルトブロックを少量含む。人為堆積土。
	4層	褐灰色 (10YR5/1)	粘質土	灰色 (10Y4/1) 砂質土ブロック ( $\phi 2\sim4cm$ ) を含む。自然堆積土。
	5層	褐灰色 (10YR4/1)	粘質土	自然堆積土。
SD2862B近世区画大溝跡(鞍部3西側)	1層	黒褐色 (10YR3/1)	粘質土	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山砂質シルトブロック ( $\phi 2\sim4cm$ ) を含む。自然堆積土。
	2層	褐灰色 (10YR4/1)	砂質シルト	
	3層	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	3層よりも粘性強い。自然堆積土。
SD2862C大溝	1層	黒褐色 (10YR2/2)	粘質土	自然堆積土。
	2層	黒褐色 (10YR3/1)	粘質土	炭化物 ( $\phi 1cm$ 以下) をごく少量含む。自然堆積土。
⑬ SD2862A近世区画大溝跡		黒褐色 (10YR3/1)	粘質土	黒褐色 (10YR3/1) 粘質土、にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山砂質シルト、暗褐色 (10YR3/3) シルトの3種混合土。人為堆積土。
	1層	灰黃褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山砂質シルトブロック ( $\phi 1\sim2cm$ ) を含む。炭化物少量含む。自然堆積土。
	2層	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	砂質シルト	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山砂質シルトブロック ( $\phi 1\sim2cm$ ) を含む。炭化物少量含む。自然堆積土。
SD2862C大溝		灰黃褐色 (10YR5/2)	砂質シルト	
SD2820A大溝		黒褐色 (10YR3/1)	粘質土	炭化物 ( $\phi 1cm$ 以下) をごく少量含む。自然堆積土。
SD2820B古代区画溝跡	1層	灰黃褐色 (10YR4/2)	粘質シルト	マンガン粒を含む。自然堆積土。
	2層	灰黃褐色 (10YR4/2)	粘質土	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山砂質シルトブロック ( $\phi 1\sim5cm$ ) を2割程含む。人為堆積土。
⑭ SD2862A近世区画大溝跡	1層	黒褐色 (10YR3/1)	粘質土	黒褐色 (10YR3/1) 粘質土に、にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山砂質シルト、暗褐色 (10YR3/3) シルトのブロックを含む3種混合土 ( $6:3:1$ )。人為堆積土。
	2層	黒褐色 (10YR3/1)	粘質土	黒褐色 (10YR3/1) 粘質土に、にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山砂質シルト、暗褐色 (10YR3/3) シルトのブロックを含む3種混合土 ( $6:2:2$ )。人為堆積土。
	3層	黒褐色 (10YR3/1)	粘質土	黒褐色 (10YR3/1) 粘質土に、にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山砂質シルト、暗褐色 (10YR3/3) シルトのブロックを含む3種混合土 ( $1:5:4$ )。人為堆積土。
	4層	黒褐色 (10YR3/1)	粘質土	黒褐色 (10YR3/1) 粘質土に、にぶい黄橙色 (10YR7/4) 地山砂質シルト、暗褐色 (10YR3/3) シルトのブロックを含む3種混合土 ( $3:3:4$ )。人為堆積土。
	5層	褐灰色 (10YR4/1)	粘質土	自然堆積土。
SD2862B大溝		黒褐色 (10YR3/1)	粘質土	炭化物 ( $\phi 1cm$ 以下) ごく少量含む。掘り直し土。
SK10310土壤		にぶい黄褐色 (10YR6/3)	砂質シルト	灰黃褐色 (10YR4/2) 粘質土をブロック状 ( $\phi 1\sim2cm$ ) に含む。
SF3474小溝		黒褐色 (7.5YR3/2)	粘質土	
⑮ SD2862A近世区画大溝跡	1層	黒褐色 (10YR3/1)	粘質土	黒褐色 (10YR3/1) 粘質土、にぶい黄橙色 (10YR7/4) 砂質シルト、暗褐色 (10YR3/3) シルトの3種ブロック状混合土 ( $6:3:1$ ) による人為堆積土。
	2層	黒褐色 (10YR3/1)	粘質土	黒褐色 (10YR3/1) 粘質土、にぶい黄橙色 (10YR7/4) 砂質シルト、暗褐色 (10YR3/3) シルトの3種ブロック状混合土 ( $6:2:2$ ) による人為堆積土。
	3層	黒褐色 (10YR3/1)	粘質土	黒褐色 (10YR3/1) 粘質土、にぶい黄橙色 (10YR7/4) 砂質シルト、暗褐色 (10YR3/3) シルトの3種ブロック状混合土 ( $3:3:4$ ) による人為堆積土。
	4層	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	砂質シルト	傾斜堆積土。
	5層	灰黃褐色 (10YR5/2)	砂質シルト	自然堆積土。
	6層	褐灰色 (10YR4/1)	粘質土	自然堆積土。
SE10302井戸跡	裏込	黒褐色 (7.5YR3/1)	粘質土	灰黃褐色 (10YR4/2) シルト土ブロック ( $\phi 1\sim5cm$ ) を多く含む。人為堆積土。
	内部	黒褐色 (7.5YR2/2)	粘質土	灰黃褐色 (10YR4/2) シルト土ブロック ( $\phi 1\sim4cm$ ) を多く含む。人為堆積土。
SD10325溝跡		灰白色 (7.5YR8/1)	火山灰他	灰白色 (7.5YR8/1) 火山灰ブロック、褐灰色 (10YR5/1) 粘質土、灰白色 (10YR7/1) シルト、にぶい黄橙色 (10YR6/3) 地山シルトを含む4種混合土 ( $2:3:3:2$ )。
灰色砂質シルト層	上部	灰黃褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	中央部を覆う基本層。2層に分かれ、上部は灰白色火山灰よりも層位的に新しく、下部はこれよりも古い。
旧表土		黒色 (10YR2/1)	粘質土	旧表土 (江戸時代以前～旧調査の所見による)
井戸上位層		にぶい黄褐色 (10YR5/3)	粘質土	旧表土より新しい平安時代以降～江戸時代以前の堆積層か。

表10-2 第1工区のSD2862近世区画大溝跡断面図（第27図掲載）土層観察表

### ①SK10305 土壤

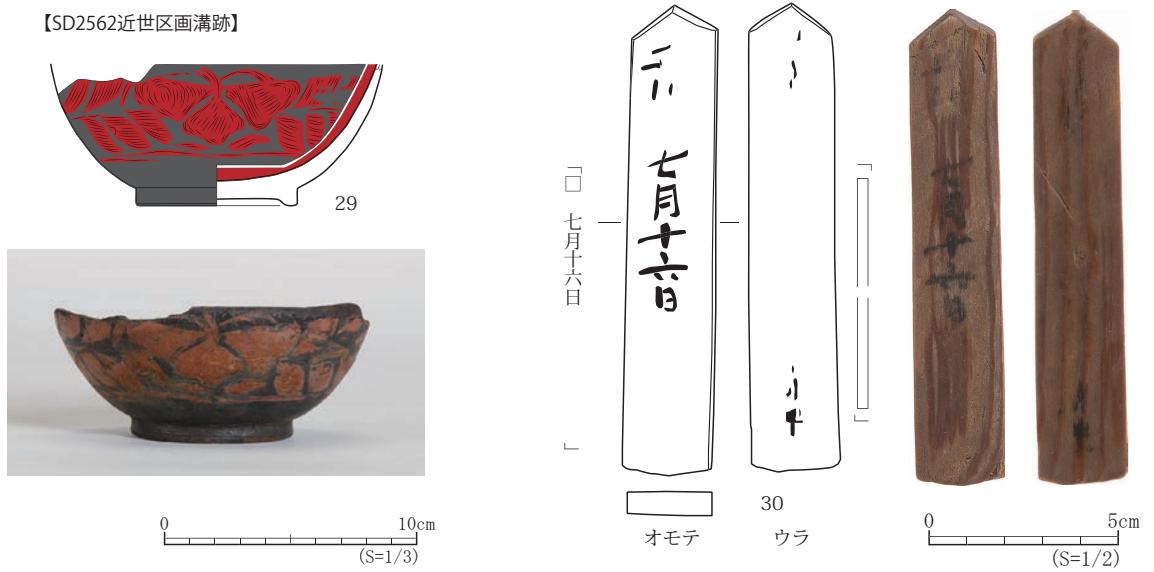


### ②SK10317 土壤、SD10327 溝跡、SD10332A・B 溝跡



遺構・層位		土色	土性	その他の特徴
① SK10305土壤	1層	黒褐色 (7.5YR3/2)	砂質シルト	やや粘性あり。自然堆積。
	2層	黒褐色 (7.5YR3/2)	砂質シルト	にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルトブロック ( $\phi 1\sim3cm$ ) をやや多く含む。自然堆積。
② SD10327溝跡		黒褐色 (7.5YR3/1)	粘質土	自然堆積。
		黒褐色 (7.5YR3/1)	粘質土	にぶい黄褐色 (10YR5/3) 地山粘質シルト土大ブロック ( $\phi 5\sim20cm$ ) をきわめて多く含む。人為堆積。
		黒褐色 (7.5YR3/1)	粘質土	
SD10332B溝跡(古代)	1層	黒褐色 (7.5YR3/2)	粘質土	
	2層	黒褐色 (7.5YR3/1)	粘質土	
	3層	黒褐色 (7.5YR3/1)	粘質土	灰黃褐色 (10YR5/2) 地山砂質シルト土ブロックを含む。
SD10332A溝跡(古代)	1層	黒褐色 (7.5YR2/2)	粘質土	灰黃褐色 (10YR5/2) 地山砂質シルト土ブロックを多く含む。
	2層	暗褐色 (10YR3/4)	粘質土	灰黃褐色 (10YR5/2) 地山砂質シルト土ブロックを側面に少量含む。

第28図 第1工区の近世土壤・溝跡断面図



第29図 第1工区出土の主な遺物 3

下端、左・右辺は、各辺とも丁寧に面取りされている。文字は両面に認められるが、日付以外は墨が薄く、判読できない。「七月十六日」は旧暦の送り盆にあたり、その上の一字は墨がかすれていて判読困難だが、種子の可能性がある。形態・記載内容より笹塔婆とみられるが、笹塔婆の中では小型で下端が尖らない特異な形態・法量である。同様の形態・法量の笹塔婆は全国的にみても類例が少なく、14世紀第2四半期～17世紀初頭に位置付けられている宮城県松島町瑞巖寺境内遺跡池跡2出土の「大日如来」墨書笹塔婆（瑞巖寺2009）、和歌山県御坊市小松原Ⅱ遺跡出土の13世紀後半の「南無阿弥陀仏」・「南無阿弥陀仏」墨書笹塔婆（御坊市遺跡調査会1991）、青森県青森市新城平岡（4）遺跡出土の近世の「十三仏」墨書笹塔婆（青森市教育委員会2012）がある。

旧調査で検出した近世集落西辺区画大溝や掘立柱建物跡、井戸跡、土壙などの年代は、18世紀後半～19世紀のものが主体を占める（宮城県教育委員会1998）。本区画溝跡は、これら近世集落跡を構成する遺構とほぼ同時期とみられ、近世集落跡の北辺を区画した大溝跡である。笹塔婆の出土した大溝の年代もこの頃と考えられる。調査地は江戸時代には宮城郡南宮村「町屋敷」〔安永3年（1774）「風土記御用書出」『宮城縣史24』、pp.428～430所収〕に相当する。ここには当時の南宮村人口237人中、「人頭」（世帯主）43人（43家族）が居住していたことが知られる。南西約400mには、「風土記御用書出」にも記される慈雲寺〔曹洞宗、本尊地蔵菩薩、正保2年（1645）開山、南宮村主の成田氏菩提寺〕がある。近世の南宮村に所在した慈雲寺は曹洞宗であり、曹洞宗の本尊である釈迦如来を示す種子「バク」、または慈雲寺本尊の地蔵菩薩を示す種子「カ」の可能性があるのかもしれない。

## （2）SK10317 大土壙（平面図：第7・14図、断面図：第28図②、写真：図版9-8、15-1）

平面形は長辺2.6m、短辺1.7mの隅丸長方形で、深さ1.0mあり、断面形は逆台形である。灰色砂質シルト層上部よりも新しく、SD10327溝跡よりも古い。遺物は出土していないが、SD2862A・B近世区画大溝跡と同様に人为的に埋め戻されていること、灰色砂質シルト層上部より新しいことから、近世の大土壙と判断した。SK10335 大土壙（第8図）も形態・規模・埋土が同様で、同時期とみられる。

### 3. 小括—山王遺跡伊勢・町地区における古代の土地利用

第1工区の南隣の旧調査（宮城県教育委員会 1998）では、遺構の新旧関係を整理し、以下の3時期（A～C期）の遺構期を設定している。

【旧調査A期】SX3106 北2道路建設前。8世紀後半～9世紀中葉。

今回の第1工区の南側約50mに位置する西北西のSD3056区画溝跡があり、これ以南は5棟の掘立柱建物跡群からなる居住区となっている。

【旧調査B期】SX3106 北2道路機能時。9世紀後半～10世紀前半。

北2道路跡の側溝には3時期あり、3時期目の道路側溝には10世紀前葉に降灰した灰白色火山灰（十和田a火山灰）が堆積している。造営時期は9世紀後半、廃絶時期は10世紀前半に位置付けている。北2道路跡の北約60mにはこれと同方向のSD2816東西区画溝跡がある。北2道路跡以北の区画は、SD2816東西区画溝とT字状に接続するSD2766南北区画溝跡によって、西側の居住域（掘立柱建物跡群）と東側の耕作域（畑跡）とに区画されている。このことから、未調査箇所ではあるが、北2道路跡とSD2766東西区画溝跡が接続すると想定されている。北2道路跡以南も居住域（掘立柱建物跡群）となっていて、それぞれの居住域を構成する掘立柱建物跡には数時期の変遷が認められている。

なお、SD2816東西区画溝跡には新旧2時期あり、B溝上部に灰白色火山灰が堆積し、それより上の窪みには基本層第2層（江戸時代以前の旧表土）が堆積している（宮城県教育委員会 1998、第90図）。したがって、10世紀前半までとしたSD2816B東西区画溝は、灰白色火山灰（十和田a火山灰）の降灰した10世紀前葉以前にはかなり埋没し、これ以降にはその機能をほぼ失っていたものと考えられる。

【旧調査C期】SX3106 北2道路廃絶後。10世紀中頃以降。

SD2816東西区画溝跡よりも新しく、当該期の土器をやや多く出土したSK2850土壤をあげている。この他、SD2816東西区画溝跡以南、SD2766南北区画溝跡以西、北2道路跡以北の区画におけるSF3471東西小溝状遺構群、SF3472南北小溝状遺構群、SF10354南北小溝状遺構群、東への振れが他よりも大きなSB3417掘立柱建物跡も本期に含められる可能性がある、としている。

今回、第1工区で検出した主要遺構の新旧関係を検討し、それに基づいて5期区分した古代の遺構期に再整理し、第30図に図示した。今回の調査でもSD2816東西区画溝跡、SD2766南北区画溝跡を検出し、旧調査の見解との対比がある程度可能となっている。旧調査のA期が3時期に細分されることになる。新旧関係を整理し、時期区分するにあたっては、区画溝跡の方向、及び灰色砂質シルト層上部・下部（河川氾濫堆積物）、10世紀前葉に降灰した灰白色火山灰（十和田a火山灰）との新旧関係を重視した。各遺構期の特徴は、以下のように整理される。

【A1期】SX3106 北2道路建設前。8世紀後半頃。

北東方向のSD2804区画溝跡とその西側にある同方向のSF3481小溝状遺構群などからなる。この区画溝跡の東側には小溝状遺構群もなく、土地利用されていないことから、耕作域（畑跡）の東側を区画した区画溝とみられる。この区画溝跡と同方向のSD10332溝跡とこれよりも新しいSD10331溝跡は、A2期のSD2801区画溝跡よりも古いことから、A1期に属する可能性がある。

年代的位置付けは、旧調査で古代の主要遺構を8世紀後半～9世紀前半の旧調査A期からとしていること（宮城県教育委員会1998）、及びA2期、A3期との関係から8世紀後半頃と推定した。

#### 【A2期】SX3106北2道路建設前後。9世紀初頭頃。

北西方向のSD2798・2801・10333・10350区画溝跡群の時期である。何を区画したのか区画対象は明確ではないが、第1工区中央部にこの方向の区画溝跡が集中している。

A1期に位置付けたSD2804北東区画溝跡よりも新しく、A3期に位置付けたSD2816・2820東西区画溝跡よりも古いくこと、ロクロ土師器が出土していることから、9世紀初頭頃に位置付けた。

#### 【A3期】SX3106北2道路建設以降？～灰色砂質シルト層下部堆積（河川氾濫）以前。9世紀前半～中頃。

東側で北に屈曲する東西方向のSD2816・2820区画溝跡の時期である。両区画溝跡は、東西区画溝箇所は心々で約3m、溝端部間で約2m離れてほぼ平行しているが、東側屈曲部より東側では間隔が心々で約4～6.5m、溝端部間で約3～5m離れ、間隔が大きくなっている。両区画溝とも新旧2時期の変遷があり（SD2816A→SD2816B、SD2820A→SD2820B）、近接する時期に位置をずらして変遷した可能性が高い。旧調査では、南側の北2道路跡以北は、SD2766南北区画溝跡以西が居住域、以東が耕作域、北2道路跡以南は居住域として利用されていた（宮城県教育委員会1998）。したがって、

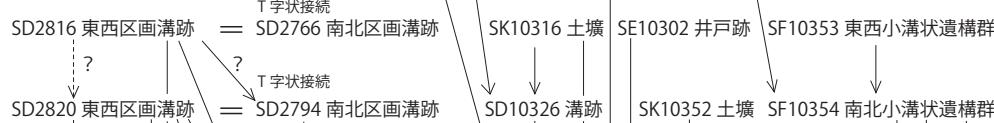
#### 【A1期】8世紀後半頃



#### 【A2期】9世紀初頭頃



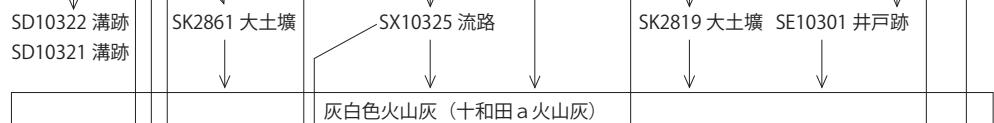
#### 【A3期】9世紀前半～中頃



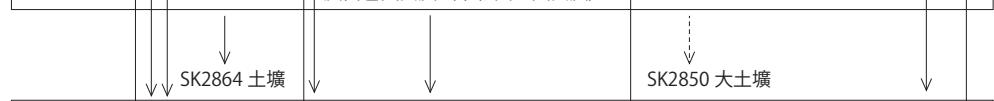
9世紀中頃



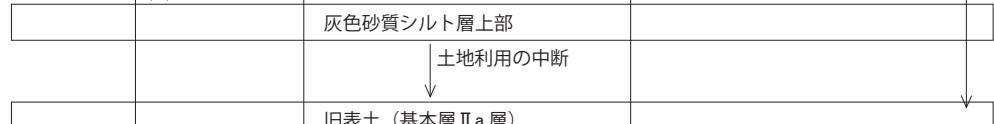
#### 【B期】9世紀後葉～10世紀前葉



10世紀前葉



#### 【C期】10世紀中頃



#### 【近世】

SD2862 近世集落北辺区画大溝

第30図 第1工区における主要遺構の変遷

両区画溝跡は、北側の耕作域、南側の耕作域・居住域とを区画していることになる。また、旧調査の成果では、SD2816B 東西区画溝跡が灰白色火山灰の降灰した 10 世紀前葉以前にかなり埋没していたことがわかっていた。今回の調査の結果、SD2816B・2820B 東西区画溝跡とも、灰色砂質シルト層下部の堆積した 9 世紀中頃にほぼ埋没していたことが明らかとなった。

また、この 2 つの東西区画溝と直交し、心々で約 9 ~ 10 m、溝端部間で約 7 ~ 8 m 離れてほぼ平行する SD2766 溝跡と SD2794 区画溝跡については、両溝跡間に小溝状遺構群があることから、北側の耕作域や南側の居住域を区画した南北区画溝とみられる。出土遺物からみてこの時期には SE10302 井戸跡、SK10352 土壙も含められる。耕作域内の井戸跡、土壙ということになる。

なお、旧調査では北 2 道路跡の造営を 9 世紀後半とみていたが、これと SD2816・2820 東西区画溝跡、SD2766・2794 南北区画溝跡が同時期ならば、北 2 道路跡の造営時期も 9 世紀前半代ということになろう。北 2 道路跡との接続箇所をはじめ、未調査部分も多く残されているので、北 2 道路跡の施工時期については、今後の課題である。

#### 【B期】灰色砂質シルト層下部堆積(河川氾濫)以降～灰白色火山灰降灰以前。9世紀後葉～10世紀前葉。

第 1 工区中央部は、その東西両側よりも標高が 20 ~ 30cm より低く（第 5 図）、河川の氾濫などにより灰色砂質シルト層下部が 5 ~ 20cm の厚さで自然堆積していた。この自然堆積層を対象に珪藻分析と粒度分析を行った結果、「調査区の極近傍に池沼の環境が存在し、砂押川の氾濫などに伴い池沼の堆積物を押し流す形で調査区内に堆積したことなどが想定される」と指摘されている（付章）。

① 10 世紀前葉に降灰した灰白色火山灰が多く堆積する SX10325 流路がこの上面にあること（第 24 図）、②灰色砂質シルト層下部から 9 世紀前半頃の土器が出土したこと（第 26 図 17・18）、③灰白色砂質シルト層下部よりも古い A 3 期の SK10316 土壙より底径の大きな回転糸切り無調整のロクロ土師器坏（第 25 図 13）が出土していることから、この河川氾濫は 9 世紀中頃のものと考えられる。汽水生種の珪藻がわずかに検出されたが、砂層が特徴的なイベント堆積物とは層相が異なるので、貞觀 11 年 (869) 陸奥国巨大地震との関係も含め、その成因などについては今後の検討課題である。

この灰色砂質シルト層下部や A 3 期の主要遺構よりも新しく、10 世紀前葉の灰白色火山灰よりも古い遺構が B 期である。これには SK2819・2861 大土壙、SE10301 井戸跡、SD10321・10322 溝跡がある。この時期に位置付けられる小溝状遺構群はなく、前の A 2 期のように耕作域（畑跡）としては利用されていないようである。

なお、SK2861 大土壙は、灰白色火山灰よりも古いため掘削は B 期に位置付けられる。灰白色火山灰よりも上の堆積層から多くの土器が出土したので、C 期まで機能していたことになる。

#### 【C期】灰白色火山灰の降灰以降～灰色砂質シルト層上部の堆積以前。10世紀中頃。

灰色砂質シルト層上部は、10 世紀前葉の灰白色火山灰よりも新しく、近世より古い時期の自然堆積物である。出土土器の特徴から、10 世紀中頃に位置付けられた旧調査区の SK2850 土壙などが C 期に属する。

## 第6章 山王遺跡伊勢・町～八幡地区（第2・3工区）の確認調査

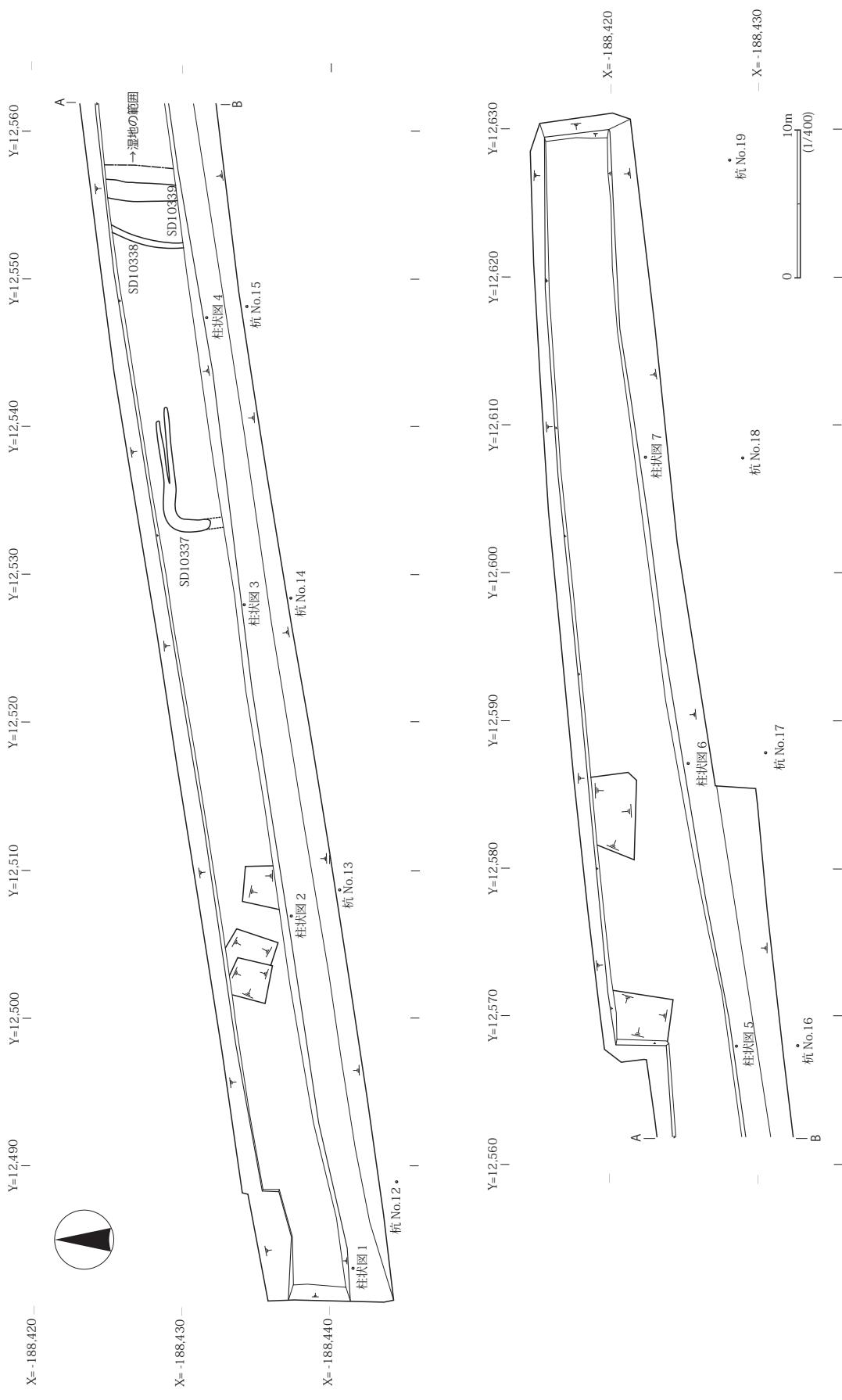
### 1. 第2工区の確認調査

第2工区の東半分は、第3工区西半分まで続く湿地であり（柱状図：第4図、写真：図版17-1・2）、遺構・遺物は発見されなかった。西半分の湿地に近い箇所で溝跡3条（SD10337～10339）を検出した（第31図）。いずれも掘り下げを行わず、時期不明である。

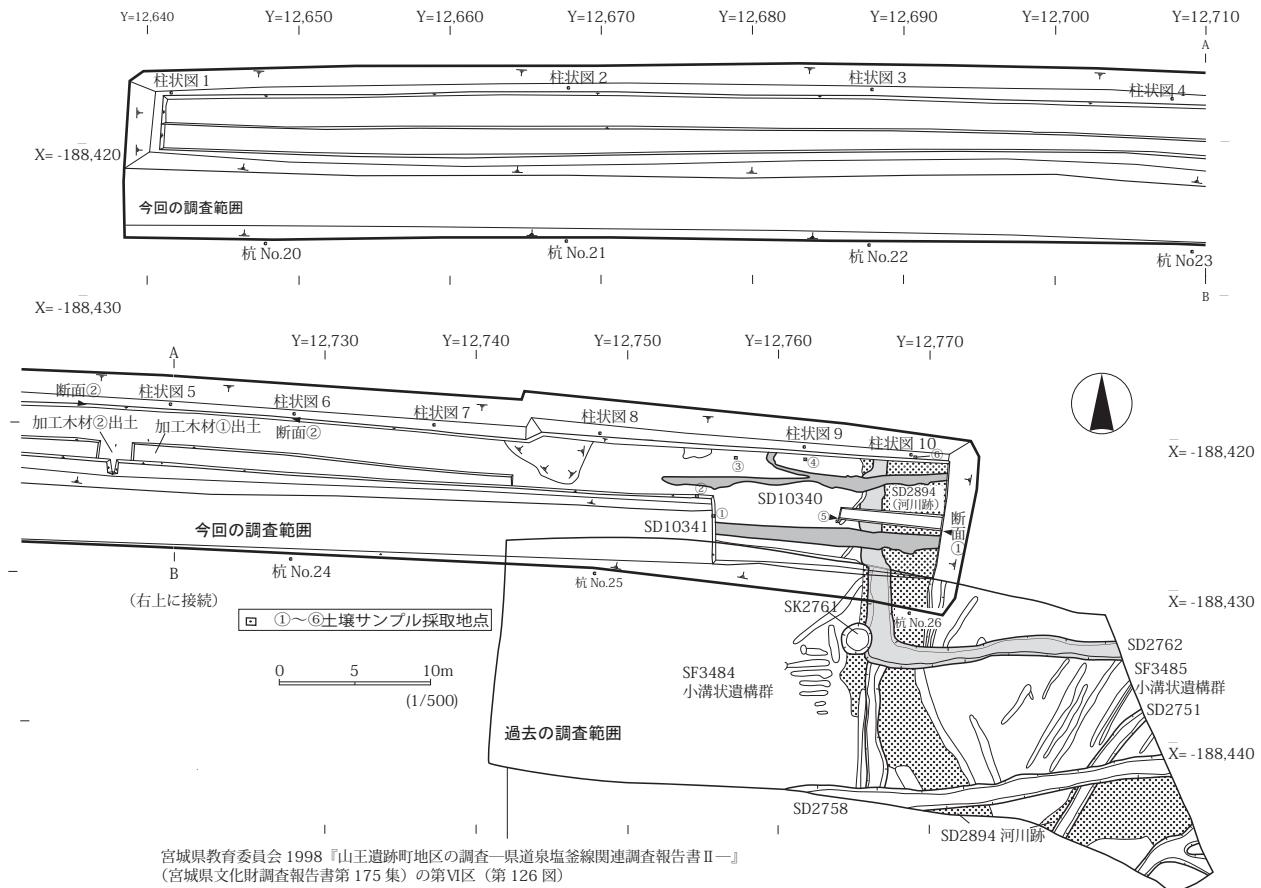
### 2. 第3工区の確認調査

第3工区の西半分は、第2工区の東半分より続く湿地であり（柱状図：第5図、写真：図版17-3・4）、遺構・遺物は発見されなかった。東半分では河川跡1（SD2894 河川跡）とこれよりも新しい溝跡3条（SD2762・10340・10341）などを検出した（平面図：第32図、断面図：第34図、写真：図版17-5・6）。SD2894 河川跡は、蛇行して南流する幅5m前後、深さ1.1mの小河川跡である。また、湿地に近い箇所の地山面で加工木材2点が出土した（第33図、写真：図版17-7・8）。これ以外には遺物は出土していない。

なお、旧調査ではSD2762溝跡からは赤焼土器壺が出土しており（宮城県教育委員会1998、第129図7）、SD2762溝跡は10世紀前葉に位置付けられる。SD10340・10341溝跡はSD2762溝跡よりも新しいので、さらに新しい時期のものである。また、旧調査前の試掘調査でSD2894河川跡の確認面からは古墳時代前期（塩釜式期）の複合口縁土師器壺が出土しており（宮城県教育委員会1998、第129図4）、古墳時代前期以降の河川跡である。

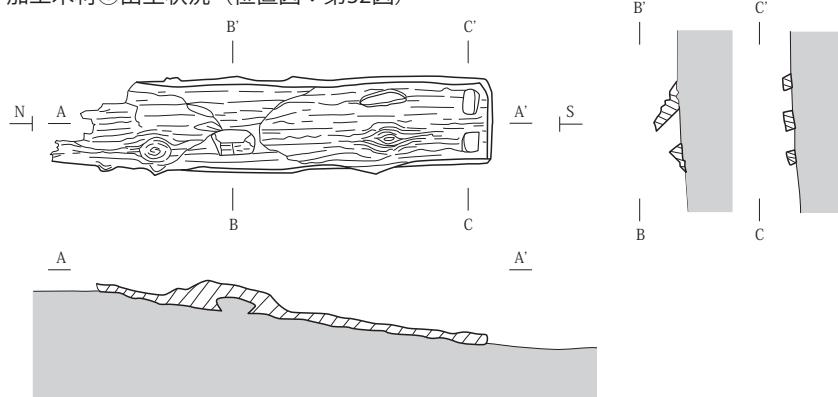


第31図 第2工区遺構配置図

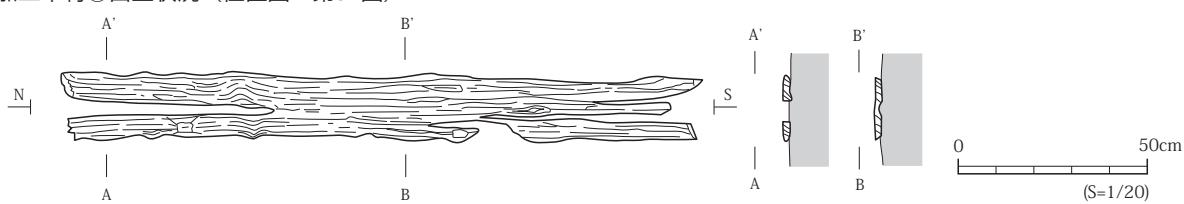


第32図 第3工区遺構配置図

加工木材①出土状況（位置図：第32図）

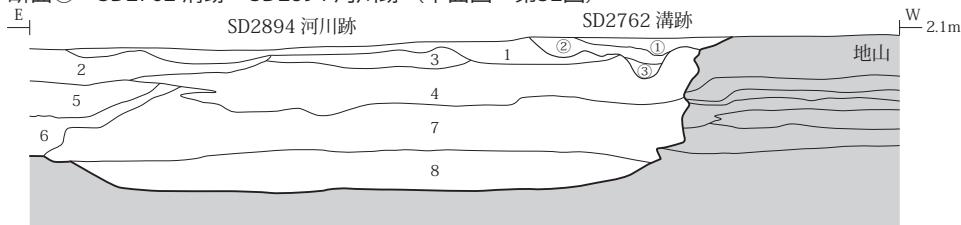


加工木材②出土状況（位置図：第32図）

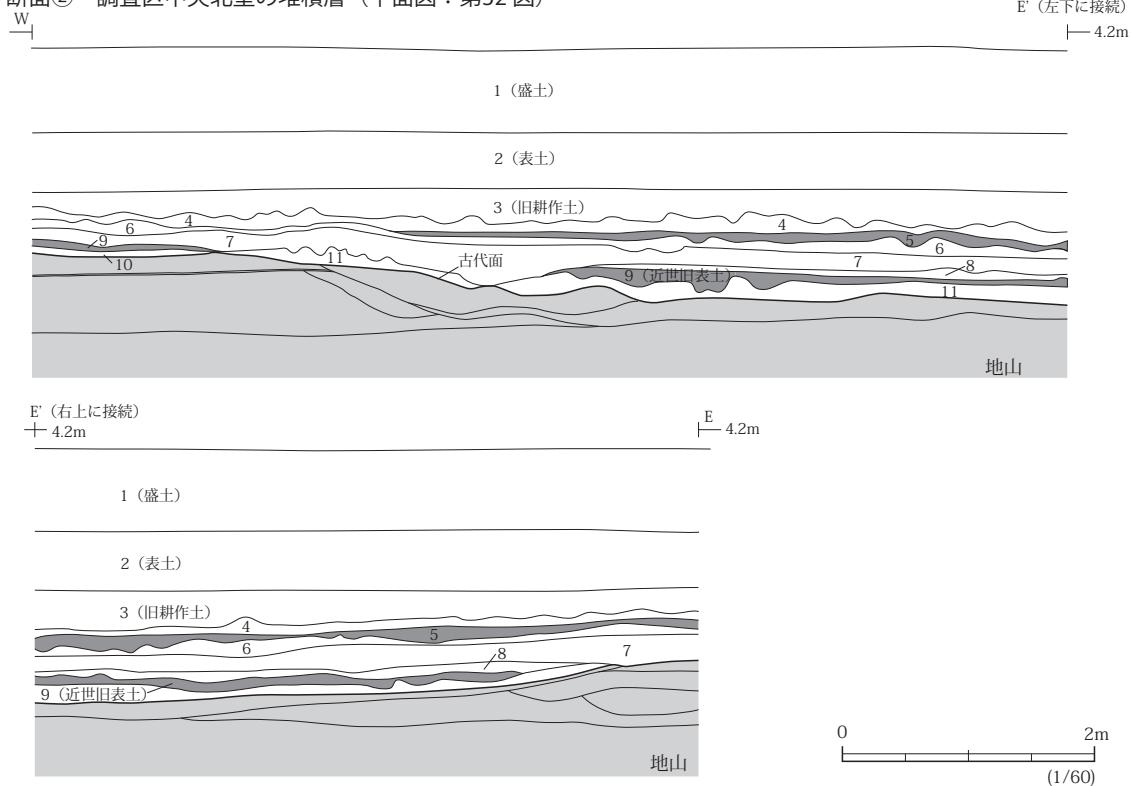


第33図 第3工区の加工木材出土状況平面図・断面図

断面① SD2762 溝跡・SD2894 河川跡（平面図：第32図）



断面② 調査区中央北壁の堆積層（平面図：第32図）



	遺構・層位	土色	土性	その他の特徴
①	SD2762溝跡	①層 黒色 (10YR4/1)	粘土	凝灰岩の粒を含む。
		②層 黒褐色 (10YR3/2)	粘質土	粗砂含む。
		③層 黒褐色 (10YR2/3)	粗砂	暗褐色粘土ブロックを含む。
②	SD2894 河川跡	1層 にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粗砂	凝灰岩小礫 ( $\phi$ 2 ~ 8 mm、白色と淡緑色の2種) を多量に含む。第2・3工区ではこの層のみ凝灰岩小礫を含む。土壤分析用試料サンプリング。
		2層 灰色 (7.5YR5/1)	砂質シルト	
		3層 灰黄色 (10YR4/2)	粗砂	
		4層 黄褐色 (10YR5/8)	粗砂	
		5層 灰色 (7.5YR5/1)	細砂	暗褐色粘土ブロック含む。
		6層 黄灰色 (2.5Y5/1)	細砂	木片含む。
		7層 黄褐色 (10YR5/6) ~ 灰色 (7.5YR5/1)	粗砂	
		8層 暗褐色 (10YR3/3)	粗砂・粘土	粗砂と粘土の互層堆積。植物遺存体 (トチの実ほか) を多く含む。
②	堆積層	1層	粘土・砂利	山土・砂利などの道路用地に撒入された盛土。重機により除去。
		2層	粘質土	盛土前の表土。重機により除去。
		3層 暗青灰色 (5B3/1)	粘質土	旧耕作土。
		4層 青灰色 (5PB5/1)	粘質土	
		5層 黒色 (10YR2/1)	粘質土	有機物により黒色化。
		6層 明黄褐色 (10YR7/6)	粘質シルト	下層の褐灰色 (10YR5/1) を部分的に含む。
		7層 褐灰色 (10YR5/1)	粘質土	中央部のくぼみ状の箇所で20~30cmの厚い堆積層となる。灰白色土 ( $\phi$ 2 ~ 5 cm長、 1 cm幅) を含む。
		8層 黄灰色 (2.5Y5/1)	粘質土	灰白色土を含む。
		9層 黒色 (10YR2/1)	粘質土	茎根など植物質有機物を含む。灰白色土を少量含む。旧表土 (近世か)。
		10層 にぶい黄褐色 (10YR6/3)	シルト	下層の河川堆積砂層との境界となる漸移層。
		11層 にぶい黄褐色 (10YR5/3)	シルト	中央のくぼみ状の箇所で15~20cmの厚い堆積となる。灰白色土を少量含む。

第34図 第3工区の溝跡・河川跡・堆積層断面図

## 第7章 山王・市川橋遺跡八幡地区（第4工区）の確認調査

第4工区で検出した主要遺構は西半部では希薄で、東半部に集中する（第35・36図、図版18～22）。東半部からは古墳時代後期栗廻式期、奈良・平安時代、中世の遺構・遺物が出土した。

なお、旧調査では、今回の調査区東半部のSD2534溝跡以西の北壁にほぼ寄せて、南北約4mの東西に細長い北側拡張トレーニングを設定し、調査していた（宮城県教育委員会1994、第96図）。今回の調査区にはこの旧調査拡張区も一部含まれ、残されていた測量釘で旧調査平面図合成に使用した。

### 1. 古墳時代後期（栗廻式期）の主要遺構と遺物

検出された主要遺構には、区画溝跡1条（SD2563）、竪穴住居跡2軒（SI10434・10436）がある（第35・36図）。いずれも東半部より検出した。区画溝跡は断ち割り調査を一部で行ったが、竪穴住居跡は平面検出に止め、断ち割り調査を行っていない。

これまでの調査の結果、山王・市川橋遺跡には当該期の大集落跡があり、6世紀末～7世紀中頃でもやや新しい頃（660年代末頃）にかけて存続したことが明らかにされている（宮城県教育委員会2009他）。本調査区はこの拠点的集落の北東縁部に当たる。

#### （1）区画溝跡

【SD2563 区画溝跡】（平面図：第35・36図、断面図：第37図①、出土土器：第40図31～34、写真：図版19上、20上、23-1、29-31～34）

長さ約12.5m検出した南北区画溝跡で、南隣の旧調査区で長さ約15.5m検出しているので、併せて長さ約29.5m検出したことになる。新旧3時期（SD2563A→SD2563B→SD2563C）ある。幅はA溝跡が0.8m以上、B・C溝跡は2.5～3.5m、深さはA溝跡が40cm、B溝跡が50cm、C溝跡が30cmである。断面形はA溝跡が逆台形状、B溝跡がU字状、C溝跡が皿状である。方向はいずれも北で西に約25°偏る。旧調査では時期の細分は述べられていないが、図示された断面図（宮城県教育委員会1994、第115図）からは3時期あると判断される。旧調査での各溝跡の規模・断面形も同様である。新旧関係は、SX2561北3道路跡（路面、SD2551北側溝跡、SD2550南側溝跡）よりも古い。

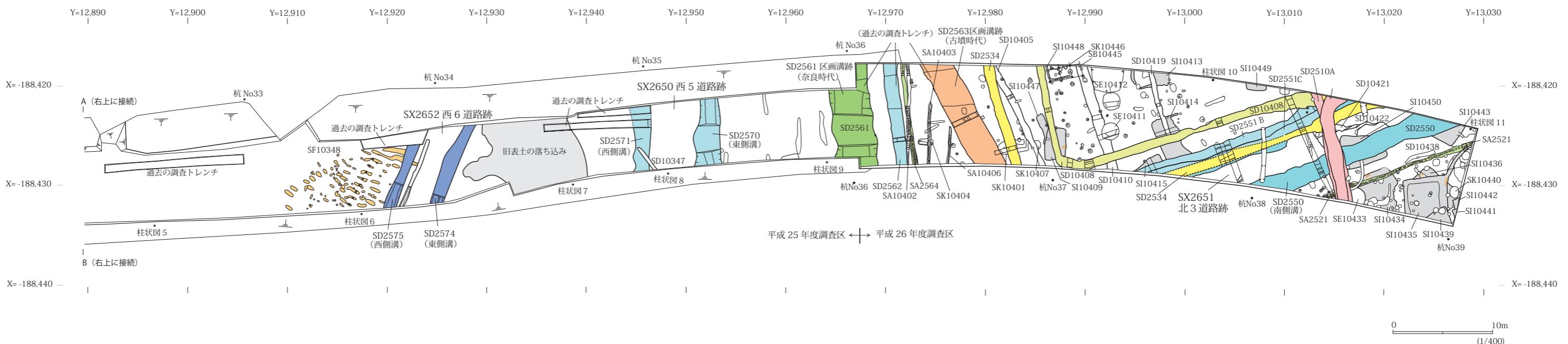
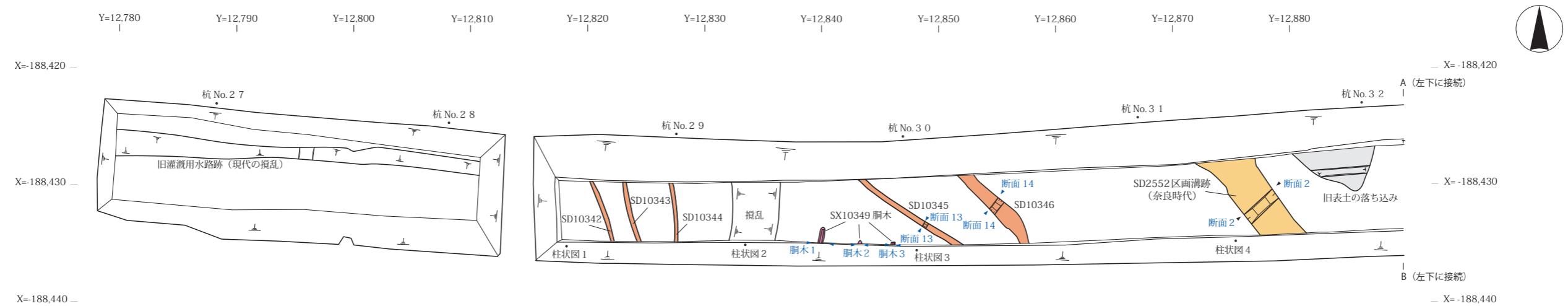
須恵器環H蓋（31・32）・大甕（34）、非口クロ土師器甕（33）など栗廻式期の土器が少数出土した。旧調査でも当該期の非口クロ土師器有段内黒环・鉢・甕、須恵器環・魂・平瓶・甕、ミニチュア土器环・鉢などが出土した（宮城県教育委員会1994、第117図1～15、第118図1・2）。

#### （2）竪穴住居跡

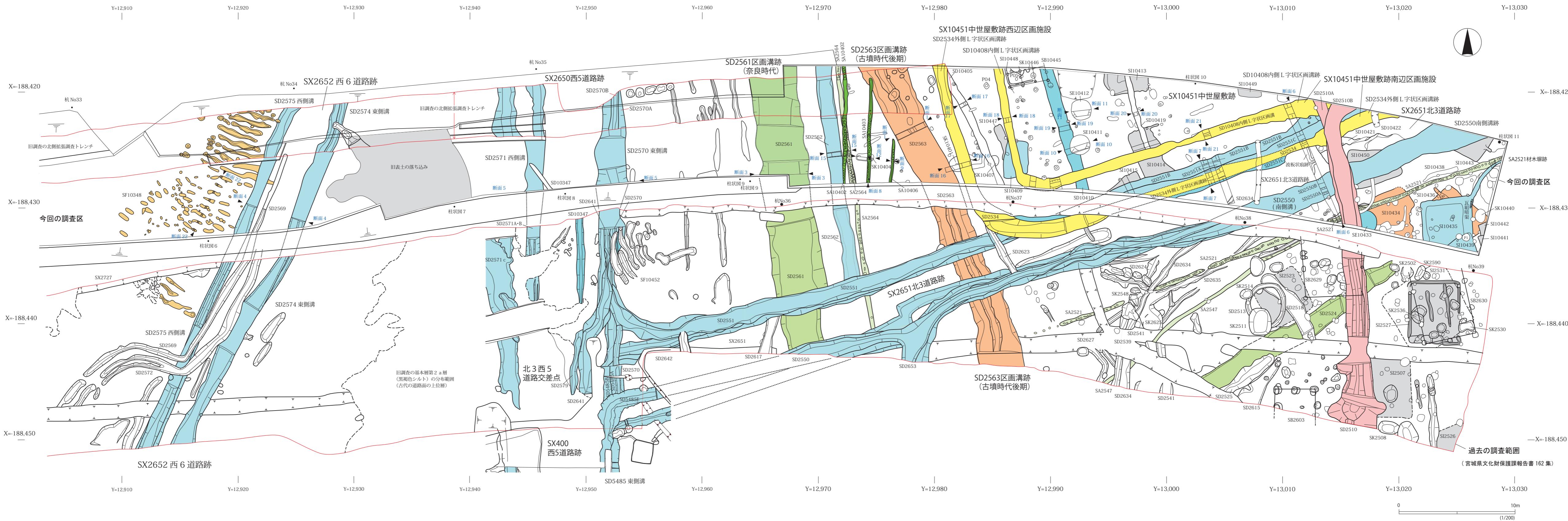
【SI10434 竪穴住居跡】（平面図：第35・36図、出土土器：第40図35～39、写真：図版19下、21中）

床面近くまで削平を受け、残りはあまりよくない。比較的残る北辺は長さ3.5m以上で、方向は東で北に約22°偏る。床面より栗廻式期の非口クロ土師器長胴甕（35）・甕（36・37）・甕（39）、埋土より非口クロ土師器甕（38）が出土した。新旧関係は、SA2521材木塀跡（奈良時代）、SE10433井戸跡（9世紀前半頃）よりも古い。

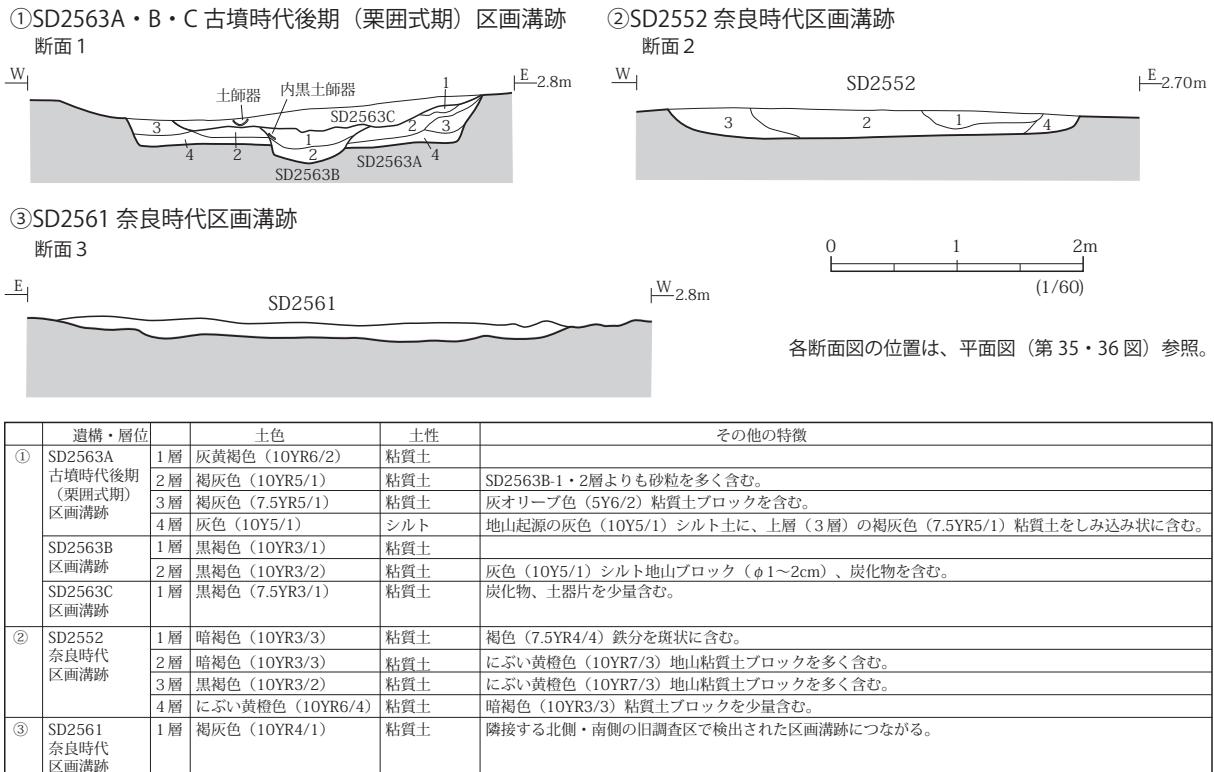
【SI10436 竪穴住居跡】（平面図：第35・36図、出土土器：第41図40・41、写真：図版19下、21中・下）



第 35 図 第 4 工区の主要遺構全体図



## 5図 第4工区の主要遺構詳細図



第37図 第4工区の古墳時代・奈良時代区画溝跡断面図

床面近くまで削平を受け、残りはあまりよくない。北辺は長さ4.2m以上で、西で北に約40°偏る。床面より古墳時代後期（栗団式期）の非口クロ土師器長胴甕（40・41）が出土した。新旧関係は、SI10435 穫穴住居跡（平安時代）よりも古い。

## 2. 奈良時代（道路建設以前）の主要遺構と遺物

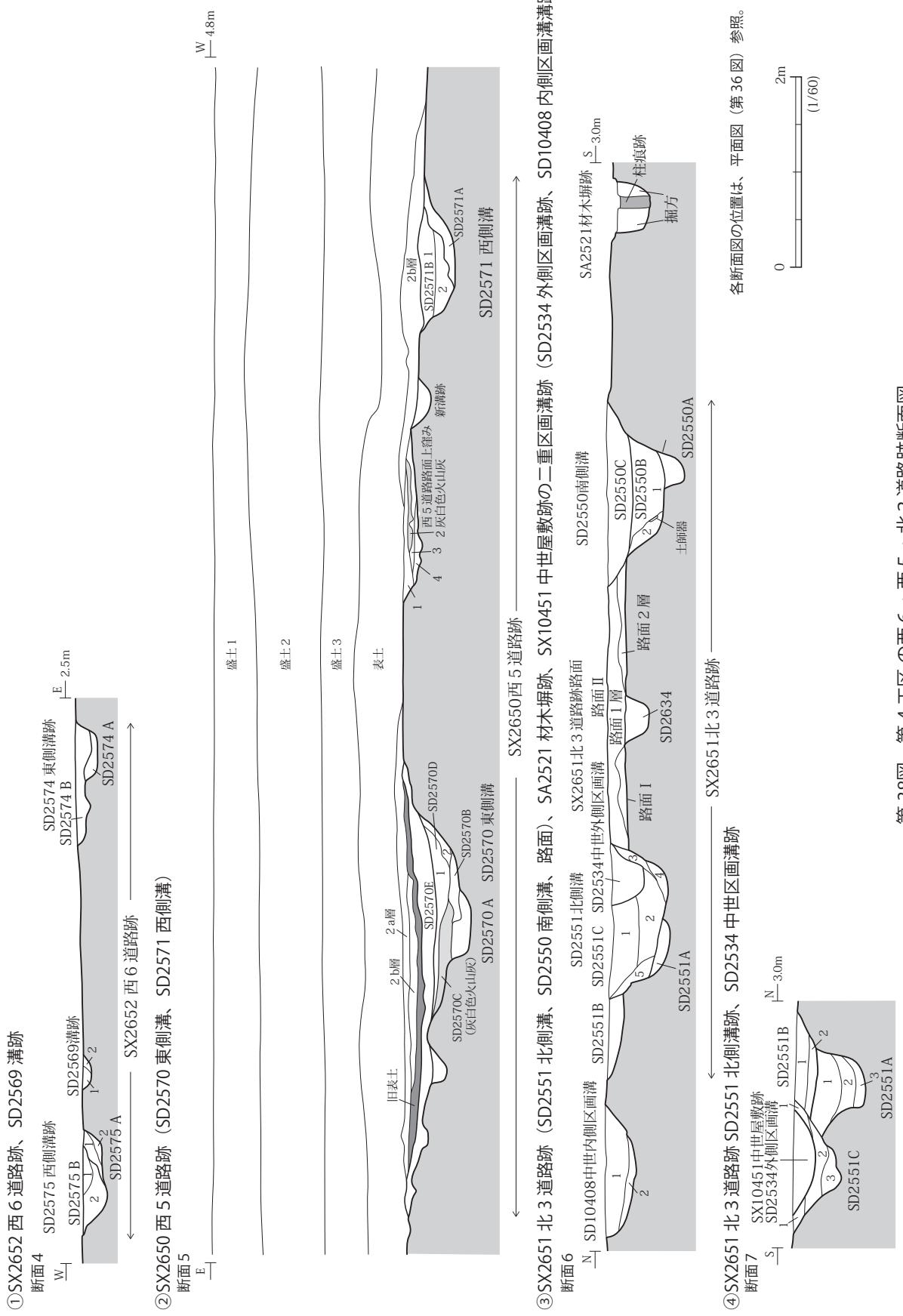
検出された奈良時代の主要遺構には、材木塀跡5条（SA2521・2564・10402・10403・10406）、区画溝跡2条（SD2552・2561）がある（平面図：第35・36図）。

旧調査では、SD2561 南北区画溝跡とその内側のSA2564 南北材木塀跡、及びSD2524（2525）北東区画溝跡とその内側のSA2547・2521 北東材木塀跡とで区画していたと推定されていた（宮城県教育委員会 1994）。

SA2564・10403・10406 材木塀跡、SD2561 区画溝跡の南側延長は、多賀城インターチェンジ建設地（山王遺跡八幡地区）の発掘調査でも検出されている。また、本調査区・旧調査区で検出したSD2552 溝跡は、南側の多賀城インターチェンジ建設地で検出された奈良時代のSD180 区画溝跡の北側延長にあり、規模・方向も一致することから、SD180 区画溝跡に接続するとみられている。SD180 区画溝跡は多賀城市教育委員会も同地区で調査し、新旧2時期あり、古いSD180A 区画溝跡からは古墳時代後期（栗団式期）の土器、新しいSD180 B 区画溝跡からは奈良時代の土器群が比較的まとまって出土した（多賀城市教育委員会 1991b）。

### （1）材木塀跡

【SA2521 北東材木塀跡】（平面図：第35・36図、断面図：第38図③、写真：図版19・21、23-5）



各断面図の位置は、平面図（第36図）参照。

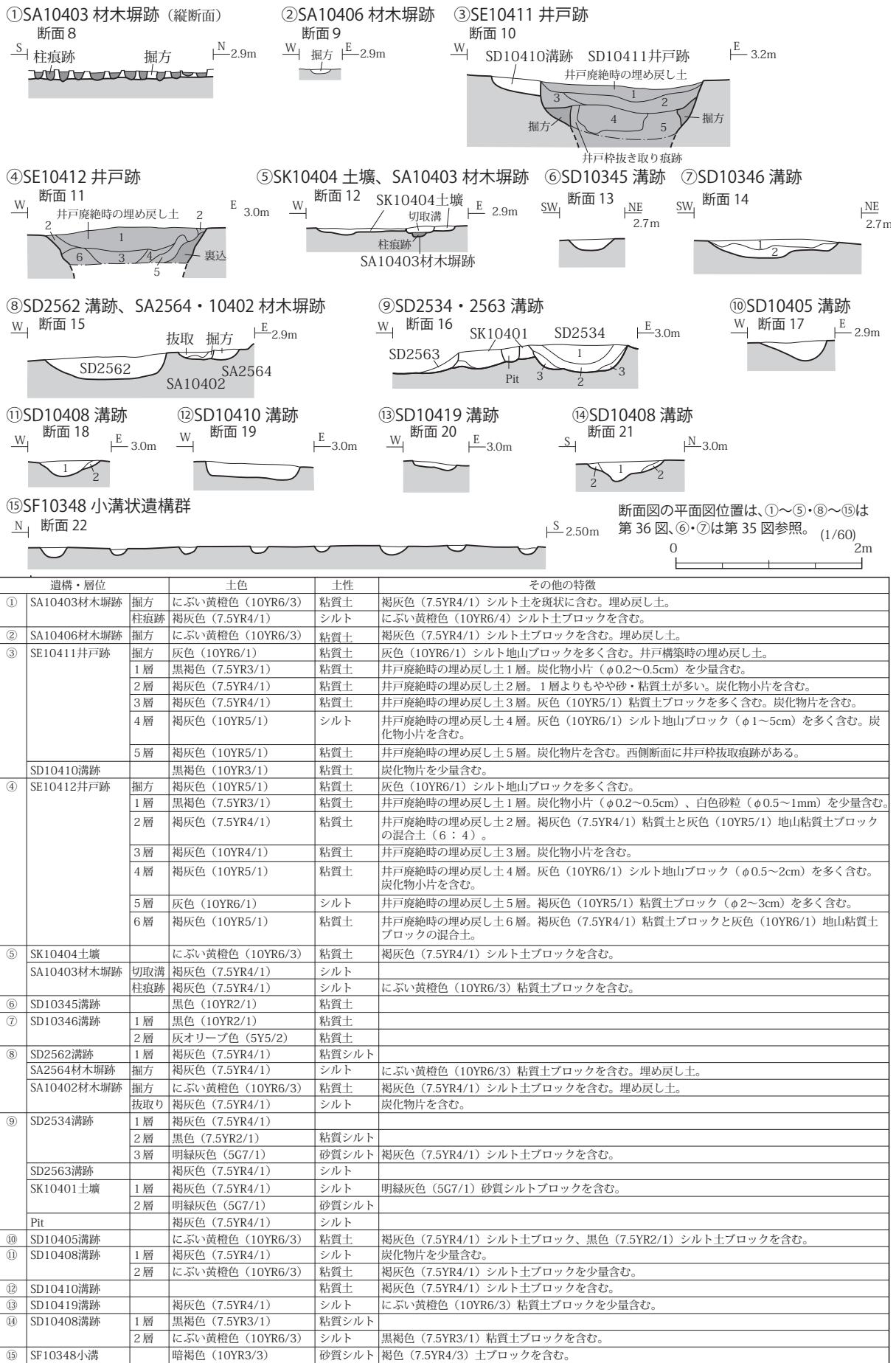
旧調査区で長さ約24m検出し、その北東延長を長さ約16m検出した。合わせて長さ約44m検出したことになる。直線的な材木塀跡で、方向は東で北に約21°偏る。掘方は幅30~50cm、深さ35cm前後、断面U字状の布掘で、径10cm前後の柱痕跡が5~10cm程の間隔で並んで検出された。新旧関係はSI10434 穫穴住居跡（古墳後期）、SA2547 材木塀跡（奈良）よりも新しく、SI10435 穫穴住居跡（平安）、SE10433 井戸跡（平安）、SD2510 溝跡（近世）よりも古い。遺物は出土していない。

#### 【SA2564 南北材木塀跡】（平面図：第35・36図、断面図：第39図⑧、写真図版：図版20上）

旧調査区で長さ約12m検出していたが、その北側延長を長さ約10.3m検出した。合わせて長さ約23m検出したことになる。直線的な材木塀跡で、方向は北で西に約8°偏る。同時期とみられる西側

	遺構・層位	土色	土性	その他の特徴
①	SD2575A西側溝跡	1層 灰白色(7.5YR5/2)	細砂質土	
		2層 灰色(5Y4/1)	粘質シルト	
	SD2575B西側溝跡	1層 灰色(7.5Y5/1)	粘質シルト	
		2層 黒褐色(10YR3/1)	粘質シルト	地山起源の浅黄色(7.5Y7/3)極細砂土ブロック(φ2~4cm)を含む。
②	SD2569溝跡	1層 灰色(10Y5/1)	粘質シルト	
		2層 灰白色(7.5YR7/2)	細砂質土	
	SD2570A東側溝跡	灰色(10Y6/1)	粘質シルト	下部は青灰色(5BG5/1)粘土ブロックを含む。
	SD2570B東側溝跡	灰色(7.5Y5/1)	粘質シルト	地山起源の浅黄色(7.5Y7/3)極細砂土ブロック(φ4~7cm)を含む。
③	SD2570C東側溝跡	灰色(10Y5/1)	粘質シルト	地山起源の浅黄色(7.5Y7/3)極細砂土ブロック(φ1~3cm)、灰白色火山灰ブロック(φ0.5~3cm)を含む。
	SD2570D東側溝跡	1層 灰色(10Y6/1)	粘質シルト	
		2層 灰白色(7.5YR6/1)	粘質シルト	
	SD2570E東側溝跡	灰オリーブ色(7.5YR6/2)	粘質シルト	
	SD2571A西側溝跡	灰オリーブ色(7.5YR6/2)	砂質土	
	SD2571B西側溝跡	1層 黒褐色(7.5YR6/1)	粘質土	
		2層 暗青灰色(5PB4/1)	粘質土	
	新溝跡	褐色(7.5YR5/1)	粘質土	
	道路路面上縫み	1層 灰オリーブ色(7.5YR6/2)	粘質シルト	褐色(7.5YR4/3)マンガン成分が上層よりしみ込んだ痕跡がみられる。
		2層 灰白色(2.5Y5/1)	火山灰	灰白色火山灰(十和田a火山灰)の一次堆積層。
		3層 灰色(10Y6/1)	粘質シルト	褐色(7.5YR4/3)マンガン成分をブロック状(φ0.5~2cm)に含む。
		4層 褐灰色(10YR5/1)	粘質シルト	
④	盛土	1層 明黄褐色(10YR7/6)	粘質土	旧調査終了後、都市計画道路建設時の道路用地仮盛土上部。砂利を含む混合土。
		2層	粘質土	旧調査終了後、都市計画道路建設時の道路用地仮盛土中部。にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土を含む。
	3層	粘質土		旧調査終了後、都市計画道路建設時の道路用地仮盛土下部。φ2~20cmの石を含む。
	表土	暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)	粘質土	現代の水田耕作土。
⑤	2a層	灰色(7.5Y6/1)	粘質土	
	2b層	灰色(7.5Y5/1)	粘質土	下部に旧表土の黒色(N2)粘質土ブロックを一部含む。
	旧表土	黒色(N2)	粘質土	江戸時代以前の旧表土か。
	SD2551A北側溝跡	オリーブ褐色(2.5Y4/6)	砂質シルト	地山ブロックを多く含む。埋め戻し土。
⑥	SD2551B北側溝跡	黒褐色(10YR5/1)	粘質土	
	SD2551C北側溝跡	1層 黒褐色(10YR4/4)	砂質シルト	地山粒・炭粒・焼土粒を含む。
		2層 黑褐色(10YR3/2)	粘質土	岩粒を含む。自然堆積土。
		3層 暗褐色(10YR3/3)	砂質シルト	炭化物粒を含む。
		4層 黑褐色(10YR3/2)	砂質シルト	地山小ブロックを含む。
	5層 暗褐色(10YR3/3)	砂質シルト	地山粒を含む。	
	SD2550A南側溝跡	オリーブ褐色(2.5Y4/6)	砂質シルト	地山ブロックを多く含む。埋め戻し土。
	SD2550B南側溝跡	1層 黑褐色(10YR3/2)	粘質土	木炭を含む。自然堆積土。
	2層 黒褐色(10YR4/4)	粘質シルト	地山小ブロックを含む。自然堆積土。	
	SD2550C南側溝跡	暗褐色(10YR3/3)	粘質シルト	灰色ブロック、木炭、遺物を含む。
⑦	SD2634溝跡	暗褐色(10YR3/3)	粘質土	路面Iに伴う堆積土。
	路面I嵩上げ整地	1層 にぶい黄褐色(10YR5/3)	砂質シルト	路面I-1層。馬骨片を含む。
		2層 にぶい黄橙色(10YR7/4)	粘質土	路面I-2層。馬骨片を含む。
	SD10408区画溝跡	1層 黑褐色(10YR3/2)	砂質シルト	木炭、地山粒を含む。
	2層 暗褐色(10YR3/3)	砂質シルト	地山ブロックを含む。埋め戻し土。	
	SD2534溝跡	黒褐色(10YR3/1)	砂質シルト	地山ブロックを含む。埋め戻し土。
	SA2521材木塀跡	掘方 にぶい黄橙色(10YR7/4)	粘質土	地山ブロックを含む。埋め戻し土。
		柱痕 暗褐色(10YR3/3)	粘質土	柱痕跡。地山粒を含む。
	SD2551A北側溝跡	1層 黒褐色(10YR4/1)	粘質土	
		2層 黑褐色(10YR3/1)	粘質土	上の1層よりも砂粒を多く含む。
		3層 灰色(10Y6/1)	砂質シルト	灰色(10Y6/1)地山砂質シルトと黒褐色(10YR3/1)粘質土の混合土。埋め戻し土。
⑧	SD2551B北側溝跡	1層 灰黄褐色(10YR5/2)	粘質土	
	2層 黑褐色(10YR6/1)	粘質土		
	SD2551C北側溝跡	1層 黑褐色(10YR3/1)	粘質土	
		2層 黑色(10YR2/1)	粘質土	旧表土を含む。埋め戻し土。
		3層 黑褐色(10YR4/1)	粘質土	地山ブロックを含む。
	SD2534中世区画溝	黒褐色(10YR4/1)	粘質土	

表11 第4工区の西6・西5・北3道路跡断面図（第38図掲載）土層観察表



第39図 第4工区の材木堀跡・井戸跡・土壙・溝跡・小溝状遺構群断面図

の SD2561 区画溝跡とは約 3.3 m 離れてほぼ平行している。掘方は幅 30 ~ 40cm、深さ 20cm、断面 U 字状の布掘で、径 10cm 前後の柱痕跡が 10cm 程の間隔で並んで検出された。新旧関係は、SA10402 材木塀跡、SX2651 北 3 道路跡（路面、SD2551 北側溝跡、SD2550 南側溝跡）、SD2562 溝跡よりも古い。遺物は出土していない。

【SA10402 南北材木塀跡】（平面図：第 35・36 図、断面図：第 39 図⑧、写真：図版 19 上、20 上）

今回、新たに長さ約 10 m 検出した南北方向の材木塀跡で、北にさらに延びる。SD2562 溝跡に壊され、南隣の旧調査区では検出されていない。ほぼ直線的な材木塀跡で、方向は南北基準線とほぼ一致する。掘方は幅 30 ~ 40cm、深さ 10cm、断面 U 字状の布掘で、径 10cm 前後の柱痕跡が 5 ~ 10cm 程の間隔で並んで検出された。新旧関係は、SA2564 材木塀跡（奈良）よりも新しく、SD2562 溝跡（平安）よりも古い。SA2564 材木塀跡をほぼ同位置で造り替えたものとみられる。遺物は出土していない。

【SA10403 南北材木塀跡】（平面図：第 35・36 図、断面図：第 39 図①、写真：図版 20 上、23-4）

長さ約 6 m 検出した南北方向の材木塀跡で、方向は SA10402・10406 材木塀跡と同様に、南北基準線とほぼ一致し、SA10402 材木塀跡の東側に約 1.8m 離れて平行し、その東には同じく 1.8 m 離れて SA10406 材木塀跡がある。SA10402・10403・10406 材木塀跡は同時に存在した可能性もある。掘方は幅 35cm 前後、深さ 10cm、断面 U 字状の布掘で、径 10cm 前後の柱痕跡が 5cm 程の間隔で並んで検出された。新旧関係は SK10404 土壙より新しい。遺物は出土していない。

【SA10406 南北材木塀跡】（平面図：第 35・36 図、断面図：第 39 図②、写真：図版 19 上、20 上）

長さ約 3.7 m 検出した南北方向の材木塀跡で、方向は SA10402・10403 材木塀跡と同様に、南北基準線とほぼ一致し、SA10403 材木塀跡の東側に約 1.8m 離れて平行する。主要遺構との重複はない。遺物は出土していない。

## （2）区画溝跡

【SD2552 北西区画溝跡】（平面図：第 35・36 図、断面図：第 37 図②、写真：図版 23-6）

南隣の旧調査区で長さ約 20 m 検出して北西区画溝跡の北側延長を約 11 m 検出した。合わせて約 27 m 検出したことになる。幅 3.0 ~ 3.5 m、深さ 30cm、断面形は皿状で、自然堆積土である。方向は北で西に約 39° 偏る。非口クロ土師器内黒蓋（第 41 図 42、図版 30-42）が出土した。

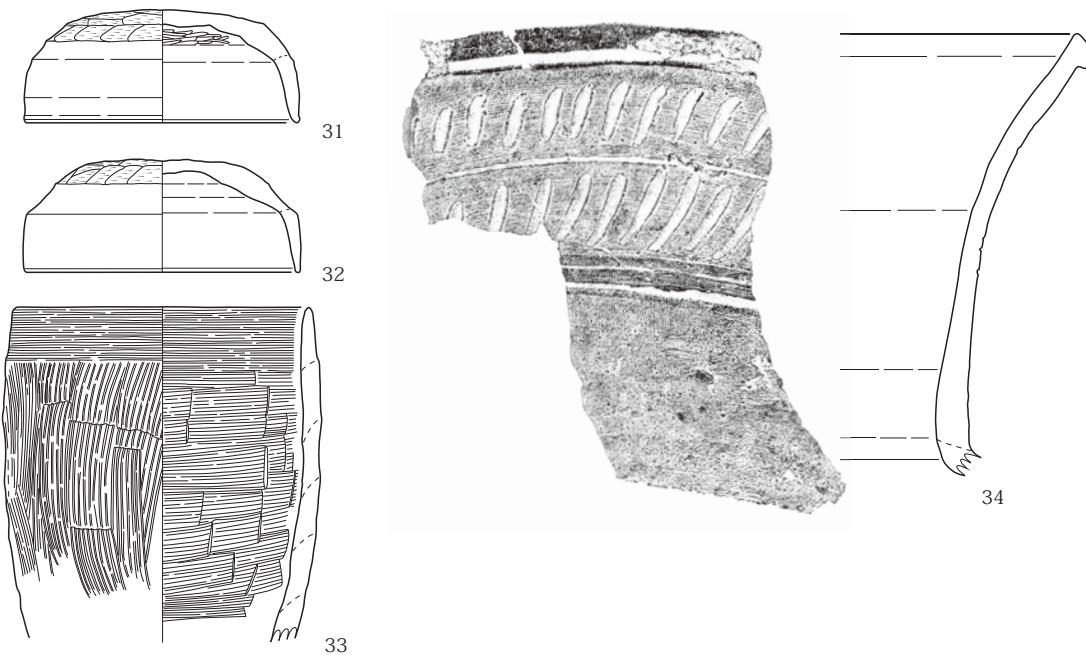
【SD2561 南北区画溝跡】（平面図：第 35・36 図、断面図：第 37 図③、写真：図版 22 上・中、23-7）

南隣の旧調査区で長さ約 12 m 検出して南北区画溝跡の北側延長を約 10.5 m 検出した。合わせて約 25 m 検出したことになる。幅 4 m 前後、深さ 10cm、断面形は皿状で、自然堆積土である。北で西に約 8° 偏る。東側に約 3.3 m 離れて平行する SA2564 南北材木塀跡（奈良時代）と同時期のものとみられる。新旧関係は SX2651 北 3 道路跡（平安時代）よりも古い。遺物は出土していない。

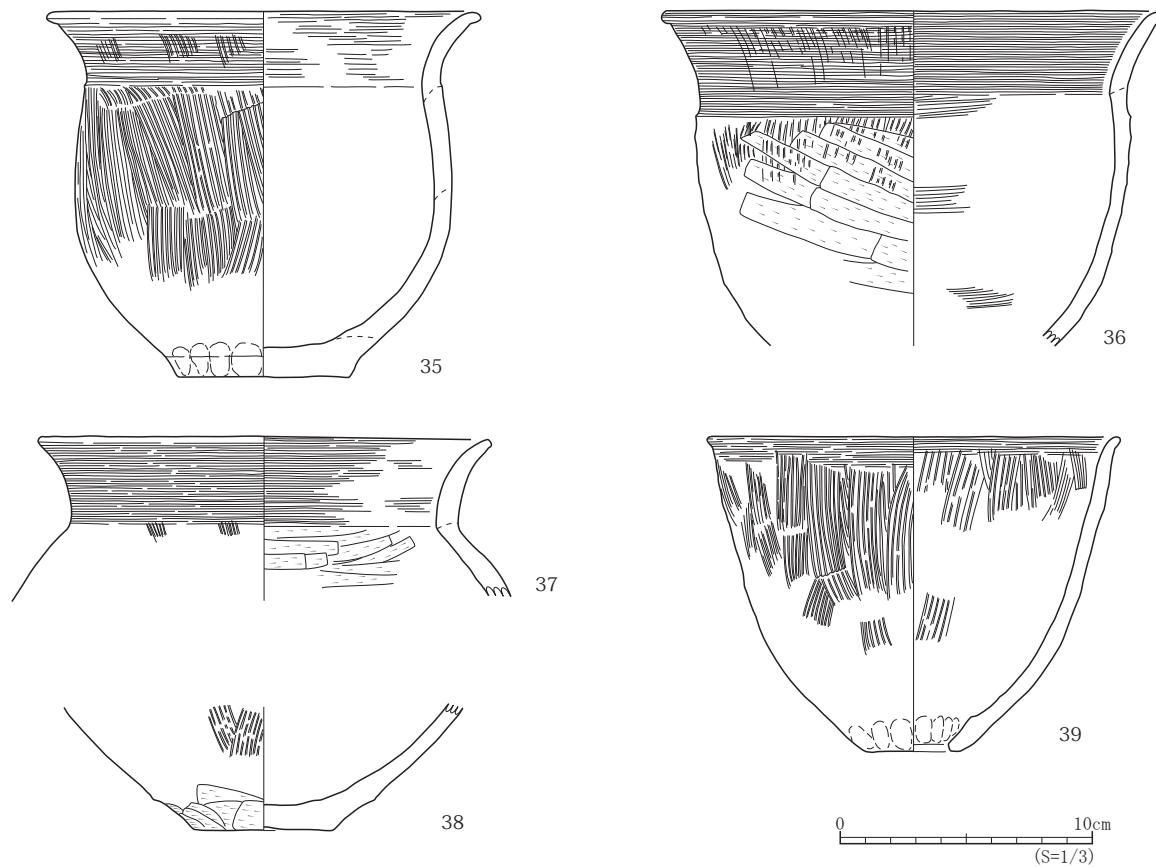
## 3. 平安時代（道路期）の主要遺構と遺物

検出された平安時代の主要遺構には、道路跡 3（SX2650 西 5 道路跡、SX2652 西 6 道路跡、SX2651 北 3 道路跡、竪穴住居跡 3 軒（SI10409・10435・10439）、井戸跡 1 基（SE10433）、溝跡 2 条（SD2562・10410）などがある（平面図：第 35・36 図）。

【SD2563古墳時代後期（栗圓式期）区画溝跡】



【SI10434古墳時代後期（栗圓式期）竪穴住居跡】

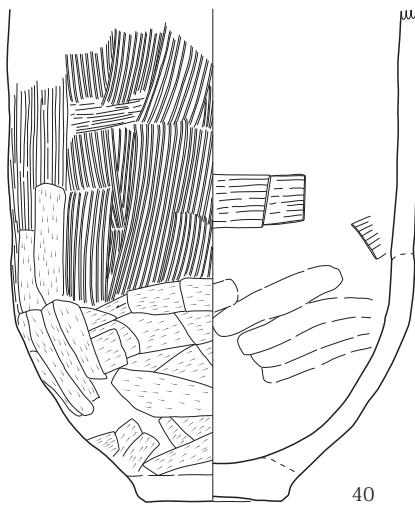


【種類】31・32：須恵器環H蓋 33・39：栗圓式期土師器甌 34：須恵器大甌 35～38：栗圓式期土師器甌

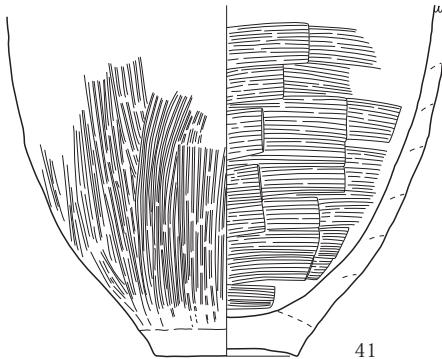
【出土遺構】31～34：SD2563古墳時代後期（栗圓式期）区画溝跡 35～39：古墳時代後期（栗圓式期）SI10434竪穴住居跡

第40図 第4工区出土の主な遺物 1—古墳時代後期（栗圓式期）の区画溝跡、竪穴住居跡

【SI10436古墳時代後期（栗圓式期）竪穴住居跡】

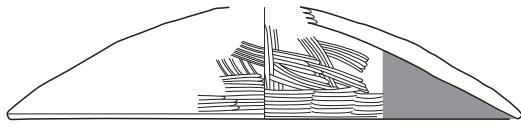


40

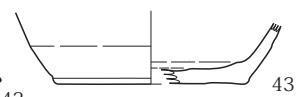


41

【SD2552奈良時代区画溝跡】

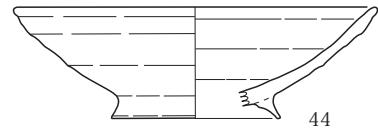


【西5道路跡SD2570C東側溝跡】



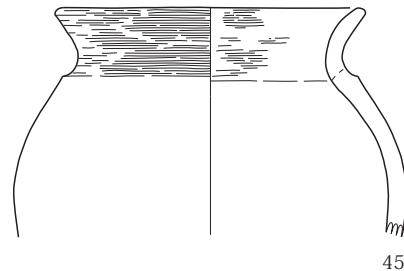
43

【SX2651北3道路跡路面整地中】



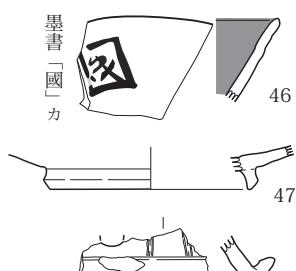
44

【SX2651北3道路跡路面1層】

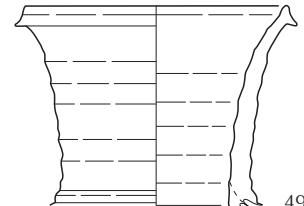


45

【北3道路跡SD2550南側溝跡】

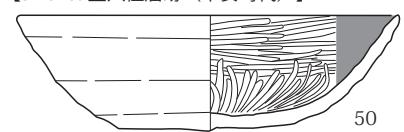


46  
47  
48

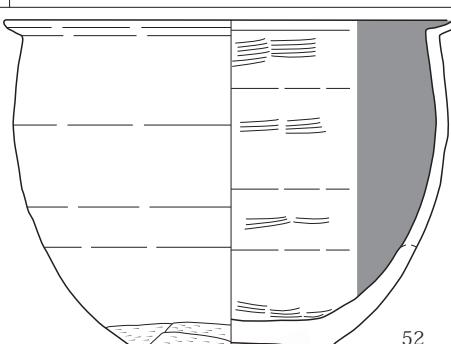


49

【SI10409竪穴住居跡（平安時代）】



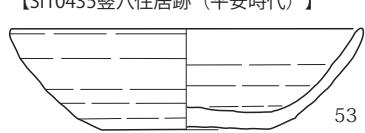
50



52

51

【SI10435竪穴住居跡（平安時代）】



53



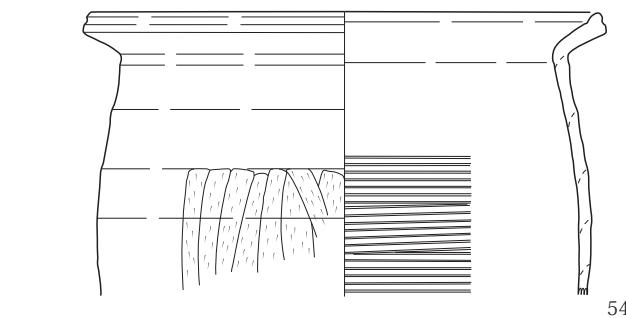
0 10cm  
(S=1/3)

【種類】40・41：栗圓式期土師器長胴甕 42：非口クロ土師器内黒蓋 43・51・53：須恵器坏 44：赤焼土器高台坏 45：非口クロ土師器甕 46・50：ロクロ土師器内黒坏 47：灰釉陶器塊 48：円面硯 49：須恵器長頸壺 52：ロクロ土師器内黒甕

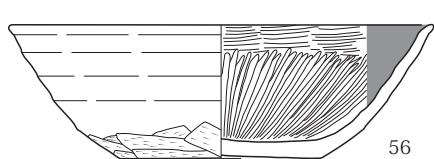
【出土遺構】40・41：SI10436竪穴住居跡 42：SD2552奈良時代区画溝跡 43：西5道路跡SD2570C東側溝跡 44：SX2651北3道路跡路面整地中 45：北3道路跡路面1層 46～49：北3道路跡SD2550南側溝跡 50～52：SI10409竪穴住居跡 53：SI10435竪穴住居跡

第41図 第4工区出土の主な遺物2—古墳時代後期（栗圓式期）、奈良・平安時代の各遺構

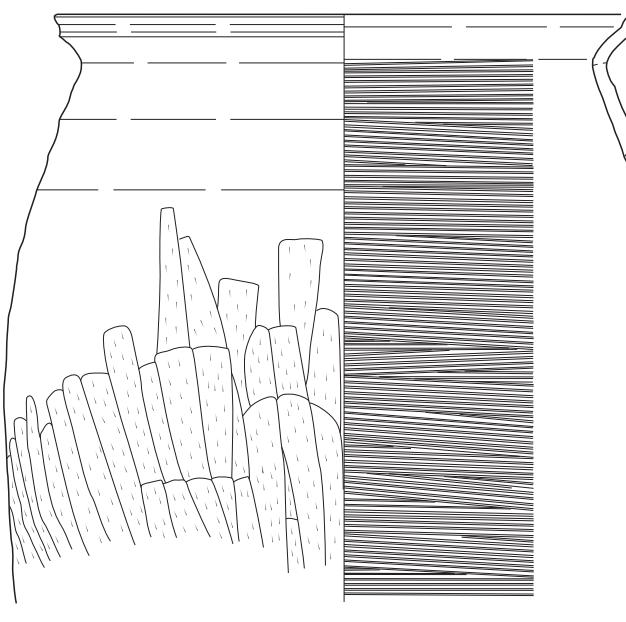
【SI10439豊穴住居跡（平安時代）】



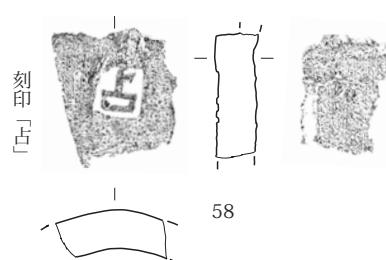
【SE10433井戸跡（平安時代）】



【SD2534中世屋敷外側区画溝跡】

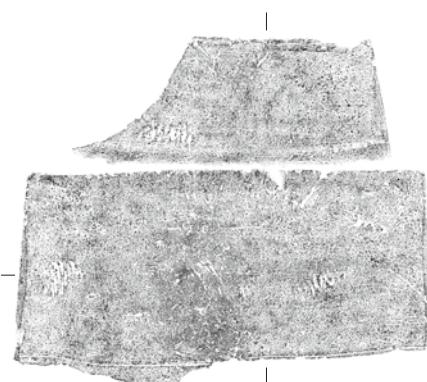


【SD10408中世内側区画溝跡】

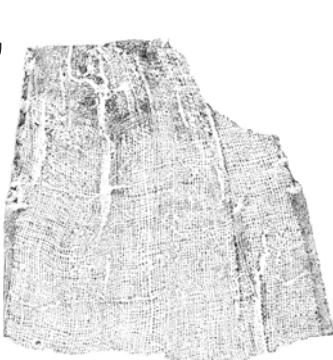


0 10cm  
(S=1/3)

【SI10435豊穴住居跡（平安時代）】

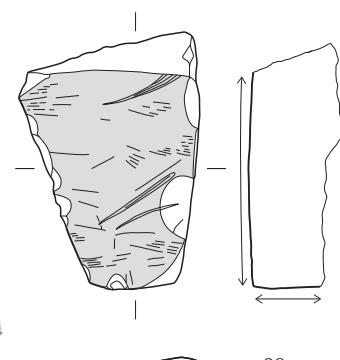


59

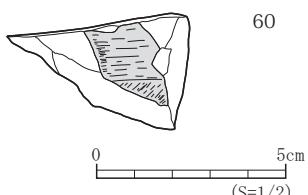


0 10m  
(S=1/5)

【北3道路跡SD2550南側溝跡】



60



0 5cm  
(S=1/2)

【種類】54・55：ロクロ土師器甕 56：ロクロ土師器内黒坏 57：ロクロかわらけ小皿 58：刻印「占」丸瓦 59：丸瓦II B類 60：砥石  
【出土遺構】54・55：SI10439豊穴住居跡 56：SE10433井戸跡 57：SD2534中世屋敷外側区画溝跡 58：SD10408中世内側区画溝跡  
59：SI10435豊穴住居跡 60：北3道路跡SD2550南側溝跡

第42図 第4工区出土の主な遺物3—平安時代の各遺構

## (1) 道路跡

【SX2650 西5道路跡】(平面図: 第35・36図、断面図: 第38図②、出土遺物: 第41図43、写真: 図版22上・中、24-6~8)

南隣の旧調査区で、北3西5道路跡交差点から北に延びるSX2650西5道路跡を長さ約9m検出していたが、その北側延長を約7m検出した。交差点より約18mにわたってSX2650西5道路跡を検出したことになる。南北方向の道路跡で、SD2570東側溝跡でみると、方向はほぼ南北基準線と一致する。断ち割り調査により、SD2570東側溝跡で5時期(SD2570A→SD2570B→SD2570C→SD2570D→SD2570E)、SD2571西側溝跡で2時期(SD2571A→SD2571B)の変遷を確認した。このうち、SD2570C東側溝跡に10世紀前葉に降灰した灰白色火山灰ブロックが含まれていた。路面中央部は窪み、中層に灰白色火山灰が自然堆積していた。SD2570A東側溝跡—SD2571A西側溝跡の心々間距離でみると、路幅は5.0m以下となる。道路跡廃絶後にはSF10452小溝状遺構群が作られている。

なお、旧調査ではSD2570東側溝跡で同様に5時期、SD2571西側溝跡に3時期の変遷を確認した。

図面	No.	種類	出土遺構等	特徴	口径cm	底径cm	器高cm	残存率		登録	写真図版	
								口縁部	底部			
第40図	31	須恵器環H蓋	SD2563区画溝跡	古墳時代後期(栗園式期)。外面: ヘラ切り→天井部手持ちヘラケズリ。生焼け。田辺編年TK209型式、佐藤隆編年陶邑IV古段階(TK209型式)併行。7世紀前半。	10.9		4.5	2/5	完形	R15	図版29-31	
	32	須恵器環H蓋	SD2563区画溝跡	古墳時代後期(栗園式期)。外面: ヘラ切り→天井部手持ちヘラケズリ。胎土に海綿骨針を含む。生焼け。田辺編年TK209型式、佐藤隆編年陶邑IV古段階(TK209型式)併行。7世紀前半。	11.0		4.5	2/5	完形	R14	図版29-32	
	33	非クロコ土師器甌	SD2563区画溝跡	古墳時代後期(栗園式期)。口縁部内傾。体下部欠損。外面: 体上部~下部ハケメ→口縁ヨコナデ。内面: ハケメ→口縁ヨコナデ。	11.6		>13.3	1/4		R16	図版29-33	
	34	須恵器大甌	SD2563区画溝跡	古墳時代後期(栗園式期)。口縁部破片。外面: 斜行平行沈線文。					わずか	R25	図版29-34	
	35	非クロコ土師器長胴甌	SI10434堅穴住居跡床面	古墳時代後期(栗園式期)。口縁部S字状外反。外面: ハケメ→口縁ヨコナデ。体下部指才サエ。内面: 口縁ヨコナデ。	17.1	6.8	14.5	1/4	完形	R21	図版29-35	
	36	非クロコ土師器甌	SI10434堅穴住居跡床面	古墳時代後期(栗園式期)。口縁部S字状外反。外面: ハケメ→口縁ヨコナデ。体下部ハラケズリ。内面口縁ヨコナデ。	20.0		>13.3	1/4		R10	図版29-36	
	37	非クロコ土師器甌	SI10434堅穴住居跡床面	古墳時代後期(栗園式期)。口縁部: S字状外反。外面: 体部ハケメ→口縁ヨコナデ。内面: 体部ハラケズリ→口縁ヨコナデ。	14.0	8.8	3.6		完形	R12	図版29-37	
	38	非クロコ土師器甌	SI10434堅穴住居跡埋土	古墳時代後期(栗園式期)。外面: ハケメ、体下部ハラケズリ。		5.6			完形	R20	図版29-38	
	39	非クロコ土師器甌	SI10434堅穴住居跡床面	古墳時代後期(栗園式期)。無底式。孔径2.8cm。両面: 口縁ヨコナデ、体部ハケメ、体下部指才サエ。	16.4	3.8	12.5	1/4	完形	R11	図版29-39	
第41図	40	非クロコ土師器長胴甌	SI10436堅穴住居跡床面	古墳時代後期(栗園式期)。外面: ハケメ→体下部手持ちヘラケズリ。内面: ハケメ、指ナデ。		5.4	>14.4			完形	R19	図版30-40
	41	非クロコ土師器長胴甌	SI10436堅穴住居跡床面	古墳時代後期(栗園式期)。外面: ハケメ。内面: ハケメ。		5.6			完形	R8	図版30-41	
	42	非クロコ土師器内黒蓋	SD2552区画溝跡確認面	奈良時代区画溝跡。外面: ハケメ→ヘラミガキ。内面: ヘラミガキ→黒色処理。8世紀前葉~末。	20.4		>4.5		1/4	R79	図版30-42	
	43	須恵器环	西5道路跡SD2570C東側溝跡1層	外面: 底部ヘラ切り→ナデ。9世紀前半。		7.4			1/4	R77	図版30-43	
	44	赤焼土器高台环	北3道路跡路面	付高台。10世紀前半。	14.4	6.6	4.4	1/4	わずか	R4	図版30-44	
	45	非クロコ土師器甌	北3道路跡路面1層	口縁~体下部破片。両面: 口縁ヨコナデ、体部摩滅。	15.6				完形	R13	図版30-45	
	46	ロクロ土師器内黒环	北3道路跡SD2550B南側跡1層	外面: 体部に正位墨書「國」。内面: ヘラミガキ→黒色処理。						R7	図版30-46	
	47	灰釉陶器塊	北3道路跡SD2550C南側溝	体下部~高台部破片。高台径8.4cm。三日月高台。内面灰釉ハケ塗り。猿投窯製品。黒笛90号窯式。9世紀後半。					<1/3	R5	図版30-47	
	48	円面硯	北3道路跡SD2550C南側溝	脚部小破片。透かし十継位刻線。						R6	図版30-48	
第42図	49	須恵器長頸甌	北3道路跡SD2550C南側溝跡確認面	頸下部: リング状凸帯。会津大戸窯跡製品。9世紀中葉。	10.4		>8.2	1/4		R24	図版30-49	
	50	ロクロ土師器内黒环	SI10409堅穴住居跡埋土	外面: 底部ヘラ切り→ナデ。内面: 放射状ミガキ。9世紀後葉。	15.1	7.0	4.8		完形	R3	図版30-50	
	51	須恵器环	SI10409堅穴住居跡埋土	外面: 底部ヘラ切り→ナデ。9世紀前半。	16.4	8.2	5.4	2/3	2/3	R9	図版31-51	
	52	ロクロ土師器内黒甌	SI10409堅穴住居跡埋土	口縁部短く外反。外面: ロクロナデ→底部回転糸切り→体下部手持ちヘラケズリ。内面: ロクロナデ→ヘラミガキ→黒色処理。	18.0	7.8	13.0	1/2	完形	R22	図版31-52	
	53	須恵器环	SI10435堅穴住居跡床面	底部: 回転糸切り無調整。9世紀後葉。	14.0	6.6	4.0	1/2	2/3	R2	図版31-53	
	54	ロクロ土師器長胴甌	SI10439堅穴住居跡埋土	口縁部受け口状。外面: 体下部手持ちヘラケズリ。内面: カキメ。	21.2		>11.2	1/3		R18	図版31-54	
	55	ロクロ土師器長胴甌	SI10439堅穴住居跡埋土	口縁部受け口状。外面: 体下部手持ちヘラケズリ。内面: カキメ。	23.0		>23.4	1/3		R17	図版31-55	
	56	ロクロ土師器内黒环	SE10433井戸跡埋土	外面: 体下部~底部手持ちヘラケズリ。内面: 放射状ミガキ→黒色処理。9世紀中頃。	16.8	8.0	5.3	1/4	完形	R23	図版31-56	
	57	ロクロかわらけ小皿	SD2534中世屋敷跡外側区画溝跡最上層(灰白色火山灰上位層)	体部~口縁部が丸味を持ち、口縁部内傾。器厚8mmと分厚いが、口唇部尖る。底部: 回転糸切り無調整。底径/口径比0.75と大きい。淡黄色。胎土に砂粒・ガラス粒含む。	8.0	6.0	1.8	9/10	完形	R1	図版31-57	
	58	刻印丸瓦	SD10408中世内側区画溝	多賀城跡政府第二期[天平宝字6年(762)~宝亀11年(780)]の刻印「占」丸瓦。						R27	図版31-58	
	59	有段式丸瓦	SI10435堅穴住居跡暗渠	多賀城跡分類丸瓦IIタブタイプ。粘土紐巻き作り。凸面: 紋印き→ロクロナデ。凹面: 布目。						R26	図版31-59	
	60	砥石	北3道路跡SD2550南側溝	凝灰岩質極細粒砂岩製。破片。長さ4.8cm、幅6.8cm、厚さ3.1cm。2面研磨。						R28	図版31-60	

表12 第4工区出土遺物(第40~42図掲載)観察表

SD2570 東側溝跡に灰白色火山灰（十和田 a 火山灰；10世紀前葉）が堆積しているので、旧調査の SD2570D 東側溝跡と今回調査の SD2570C 東側溝跡が対応していることになる。

今回の調査では、SD2570C 東側溝跡（灰白色火山灰降灰期）から9世紀前半頃のヘラ切りの須恵器坏（43）が1点出土した。溝埋没時よりも古い時期の遺物の混入ということになる。

【SX2652 西6道路跡】（平面図：第35・36図、断面図：第38図①、写真：図版23-8、24-5）

南隣の旧調査区では長さ約20m検出したが、今回の調査ではその北側延長約11mを検出した。合わせて長さ約32m検出したことになる。北東一南北方向の南北道路跡で、SD2575 西側溝跡の心々でみると、方向は北で東に約23°偏る。断ち割り調査により、SD2574 東側溝跡で新旧2時期（SD2574A→SD2574B）、SD2575 西側溝跡で新旧2時期（SD2575A→SD2575B）の変遷を確認した。旧調査でも東西両側溝跡で新旧2時期の変遷を同様に確認している。SD2574B 東側溝跡—SD2575B 西側溝跡の心々間距離でみると、路幅は4.5m以下となる。路面幅はSX2650 西5道路跡よりも明らかに小さい。遺物は出土していない。

新旧関係はSF10348 小溝状遺構群よりも新しく、SD2569・2572 溝跡よりも古い。

【SX2651 北3道路跡】（平面図：第35・36図、断面図：第38図③・④、写真：図版18～21、24-1～4）

南隣の旧調査区で、北3西5道路跡交差点から東に延びるSX2651 北3道路跡を長さ約52m検出していったが、その北側延長を約32m検出した。交差点より約76mにわたってSX2651 北3道路跡を検出したことになる。北北東一南南西方向の東西道路跡で、SD2551 北側溝跡の心々でみると、方向は東で北に約17°偏る。断ち割り調査により、SD2551 北側溝跡で3時期（SD2551A→SD2551B→SD2551C）、SD2550 南側溝跡で3時期（SD2550A→SD2550B→SD2550C）の変遷を確認した。

新旧関係は、古墳時代後期（栗廻式期）のSD2563 区画溝跡、奈良時代のSD2561 区画溝跡とSA2564 材木塀跡よりも新しく、道路廃絶以降（中世）のSD2534L 字状区画溝跡、及びそれよりもさらに新しいSD2510 南北溝跡よりも古い。

出土遺物（第41図、図版30-44～49）には、SD2550B 南側溝跡出土の墨書「國」？ロクロ土師器内黒土師器坏（46）、SD2550C 南側溝跡出土の猿投窯跡群製品の黒瓦90号窯式期灰釉陶器塊（47）、円面硯（48）、SD2550 南側溝確認面出土の須恵器長頸壺（49）、路面整地層中出土の赤焼土器高台坏（44）、非ロクロ土師器甕（45）などの破片が少数ある。

旧調査では、SD2551 北側溝跡で5時期（SD2551A→SD2551B→SD2551C→SD2551D→SD2551E）、SD2550 南側溝跡で5時期（SD2550A→SD2550B→SD2550C→SD2550D→SD2550E）の変遷を確認している。このうちSD2551D 北側溝跡、SD2550D 南側溝跡に灰白色火山灰（十和田a火山灰；10世紀前葉）が含まれることから、D期が10世紀前葉であることが明らかにされている。また旧調査では、北3道路跡C期のSD2550 C南側溝跡に底部回転糸切り無調整のロクロ土師器内黒坏（宮城県教育委員会1994、第108図1）、記号刻印のある多賀城跡政府第IV期〔貞觀11年（869）陸奥国巨大地震復興期～終末〕の平瓦II C類（前掲同書、第109図6）が含まれていた。

したがって、SX2651 北3道路跡C期は、貞觀11年（869）陸奥国巨大地震の復興期に位置付けられ

る。それ以前の SX2651 北 3 道路跡 A・B 期、及びこれに接続する北 3 西 5 道路交差点以南の西 5 道路跡については、多賀城跡城外に方格地割りが形成された当初の 9 世紀前半に造営されたとみてよい。

以上より、SX2651 北 3 道路跡についての今回の調査と旧調査の成果は、以下のように対比される。

遺構期	時期	旧調査	今回の調査
A 期	9 世紀前半	A 北・南側溝跡、路面 I	A 北・南側溝跡、路面 I
B 期	9 世紀前半～貞觀 11 年（869）	B 北・南側溝跡	
C 期	貞觀 11 年（869）～10 世紀前葉	C 北・南側溝跡、路面 II	B 北・南側溝跡、路面 II
D 期	10 世紀前葉（灰白色火山灰）	D 北・南側溝跡	
E 期	10 世紀前葉～中頃	E 北・南側溝跡	C 北・南側溝跡

## （2）竪穴住居跡

3軒とも断ち割り調査を行っていないので、カマドの有無・場所、深さ等詳細は不明である。

【SI10409 竪穴住居跡】（平面図：第 35・36 図、出土遺物：第 41 図 50～52、写真：図版 21 上）

床面まで削平され、西半分が遺存するにすぎない。西辺は長さ 3.3 m あり、北で東に約 6° 傾む。底部ヘラ切りで内面放射状ミガキのロクロ土師器内黒坏（50）、底部回転糸切りで体下部手持ちヘラケズリのロクロ土師器内黒甕（52）、ヘラ切りの須恵器坏（51）が出土した。出土土器の特徴からみて 9 世紀前半～中頃のものである。

新旧関係は、SI10447 竪穴住居跡よりも新しく、SD10408L 字状区画溝跡（道路廃絶以降）よりも古い。

【SI10435 竪穴住居跡】（平面図：第 35・36 図、出土遺物：第 41 図 53、第 42 図 59、写真：図版 21 下）  
南辺を除くほぼ全形を検出した。床面近くまで削平され、周溝掘方が見え始めた状態で、残りはよくない。北・西・東辺にはカマドは付設されていないが、カマドの有無は不明である。北辺長 4.4 m、西辺長 3.3 m 以上の方形で、北東隅から外延溝が北東に 4.0 m 長く延び、東周溝北寄りから外延溝にかけた箇所は有段丸瓦（59）を用いた瓦組暗渠としている。用いられた丸瓦Ⅱ B 類は焼成からみると多賀城跡多賀城跡政庁第Ⅱ期〔天平宝字 6 年（762）～宝亀 11 年（780）〕のものである。中央の床面より回転糸切り無調整の須恵器坏（53）が 1 点出土した。9 世紀後葉頃のものである。

新旧関係は、SI10436 竪穴住居跡（古墳時代後期栗廻式期）、SA2521 材木塀跡（奈良時代）よりも新しく、SI10439 竪穴住居跡（平安時代）よりも古い。

【SI10439 竪穴住居跡】（平面図：第 35・36 図、出土遺物：第 42 図 54・55、写真：図版 21 下）

調査区南東隅で住居跡の北東部を検出したもので、規模等詳細は不明である。東辺の方向は北で西に約 22° 傾む。新旧関係は、SI10435 竪穴住居跡（平安時代）より新しく、これよりも新しい 9 世紀後葉頃のものと考えられる。

## （3）井戸跡

【SE10433 井戸跡】（平面図：第 35・36 図、出土遺物：第 42 図 56、写真：図版 21 中・下）

1/4 強を検出し、平面形は直径約 2 m の円形になると推定される。断ち割り調査を行っていないが、平面形状、掘方と自然堆積土がドーナツ状となる堆積土の状況から、井戸跡と判断した。検出面よりロクロ土師器内黒土師器坏（56）が 1 点出土した。器形・調整（底径大、外面体下部～底部手持ち

ヘラケズリ、内面放射状ヘラミガキ）からみて、9世紀中頃を中心とする頃とみられる。SI10434 穫穴住居跡〔古墳時代後期（栗廻式期）〕、SA2521 材木塀跡（奈良時代）よりも新しく、SD2510 溝跡（道路廃絶以降）よりも古い。

#### （4）溝跡

【SD2562 溝跡】（平面図：第35・36図、断面図：第39図⑧、写真：図版19上、20上）

南隣の旧調査区で長さ約6.5m検出していた南北溝跡で、北側延長を約10m検出した。合わせて約18.5m検出したことになる。幅1～1.5m、深さ30cm、断面形は浅いU字状で、方向は北で西に約8°偏る。遺物は出土していない。新旧関係は、SA10402 材木塀跡（奈良時代）よりも新しく、SD2551 北側溝（平安時代）より古いかこれと同時期である。

【SD10410 溝跡】（平面図：第35・36図、断面図：第39図⑫、写真：図版21上）

長さ約11m検出した南北溝跡で、南隣の旧調査区で検出していないが、方向からみてSD2551 北側溝跡と重複するとみられる。幅1～1.5m、深さ15cm、断面形は浅い逆台形状で、方向は北で西に約17°偏る。遺物は出土していない。新旧関係は、SB10445 掘立柱建物跡、SE10411 井戸跡、SD10408 内側方形区画溝跡（北3道路廃絶以降）よりも古い。また、位置関係からみてSD2551 北側溝（平安時代）より古いかこれと同時期で、SD2534L 字状区画溝跡（中世）よりも古いたと推定される。

SD2562・10410南北溝跡はSD2551 北側溝跡よりも古いたが、旧調査区のSX2651 北3道路跡路面上で検出されなかったこと、SX2650 西5道路跡のSD2570 東側溝跡から東に16～17m間隔で相互に離れた直線的な南北溝跡であることから、西5・北3道路跡のある段階に北3西5区を区画した区画溝跡の可能性も考えられる。

### 4. 平安時代以降（道路廃絶以降）の主要遺構と遺物

平安時代のSX2651 北3道路跡廃絶以降の主要遺構には、方形区画溝跡2条（SD2534・10408）を巡らせた中世の屋敷跡1（SX10451）、それよりも新しい近世の溝跡1条（SD2510）がある。

#### （1）方形区画溝を二重に巡らせた SX10451 中世屋敷跡

3～4mの間隔を置いて平行する2条のL字状区画溝跡（SD2534 外側方形区画溝跡、SD10408 内側方形区画溝跡）を検出した。二重の方形区画溝跡で区画する中世屋敷跡の南西隅に当たる。このSX10451 屋敷跡の内部構成は不明だが、南北方向のSD10408 内側区画溝跡に接してこれとほぼ同方向のSB10445 掘立柱建物跡がある。この建物跡は総柱建物跡で、古墳時代後期もしくは古代の竪穴住居跡よりも新しい。掘方は直径20～30cmの円形と小さく、柱間も1.1mと狭く、古代末以降、中近世の掘立柱建物跡と似ている。近接しすぎているものの、本屋敷跡と同時期の可能性もある。

【SD2534 外側方形区画溝跡】（平面図：第35・36図、断面図：第38図③・④、第39図⑨、写真：図版18～20）

南隣の旧調査区で検出していたL字状区画溝跡の北側延長を約11m、東側延長を断片的に約25m検出した。区画南西隅の屈曲箇所より北に15m、東に約35m検出したことになる。方向は、南北溝跡部分が北で西に約16°偏り、東西溝跡部分が東で北に約17°偏る。両方向の溝跡で方形に区画され

る区画南西隅はほぼ直角となる。南北溝跡部分は幅 1 ~ 1.2 m、深さ 30cm、断面形は逆台形状で、東西溝跡部分は幅 0.6 ~ 1 m、深さ 35cm、断面形は逆台形状で、屈曲部分の幅は 1.5 m 前後とやや幅広い。

新旧関係は、SX2651 北 3 道路跡（SD2551 北側溝跡；平安時代）、SK10401 土壙、SD10405 溝跡よりも新しく、SD2510A・B 溝跡（近世）よりも古い。

旧調査では口クロ・非口クロ土師器が多く出土し、他に赤焼土器、須恵器、円面硯、土製カマド、瓦などの破片が少数出土した。

今回の調査では、ロクロかわらけ小皿（第 42 図 57）が出土し、これが本屋敷跡の上限年代を示す。このロクロかわらけは、底部が回転糸切り無調整で、器厚が 8mm と分厚く、底径／口径比が 0.75 と大きい。体部は丸味を持ちながら立ち上がり、口縁部が内傾して口唇部が尖る。13 世紀後半頃に位置付けられている仙台市宮城野区中野高柳遺跡 SX1397 遺物包含層上層出土のロクロかわらけ小皿（宮城県教育委員会 2006）に類似し、この頃のものとみられる。

【SD10408 内側方形区画溝跡】（平面図：第 35・36 図、断面図：第 38 図③、第 39 図⑪・⑭、写真：図版 19・21 上）

方形の SX10451 屋敷地南西部の内側 L 字状区画溝跡で、直角の屈曲部分から北に長さ約 11 m、東に長さ約 26 m 検出した。方向は、南北溝跡部分が北で西に約 11° 偏り、東西溝跡部分が東で北に約 17° 偏る。両方向の溝跡で方形に区画され区画南西隅は約 84° の角度をなし、直角に近い。南北溝跡部分は幅 0.7 m、深さ 15cm、断面形は皿状、東西溝跡部分は幅 0.7 ~ 1.5 m、深さ 20cm、断面形は皿状で、外側の SD2534 方形区画溝跡よりも規模がやや小さい。東西部分の溝跡より丸瓦小破片（58）が出土した。新旧関係は、SX2651 北 3 道路跡（SD2551 北側溝跡；平安時代）、SI10409・10414 穫穴住居跡、SD10410・10419 溝跡よりも新しく、SD2510A・B 溝跡（近世）よりも古い。

なお、これまでの調査では方形区画溝跡で区画された中世の屋敷跡を 4 箇所検出している。山王遺跡八幡地区では、位置をずらして重複する新旧 2 時期の屋敷跡が検出され、「古い屋敷跡」が 12 世紀、「新しい屋敷跡」が 16 世紀に位置付けられている（宮城県教育委員会 1997）。16 世紀の屋敷跡は留守氏関連の屋敷跡に位置付けられ、山王遺跡伏石地区（同前）、市川橋遺跡八幡地区「北の屋敷跡」（宮城県教育委員会 1994）でも検出されている。今回検出した SX10451 中世屋敷跡は新たに検出された屋敷跡で、山王遺跡八幡地区の「古い屋敷跡」よりも新しい可能性がある。

## （2）溝跡

【SD2510 溝跡】（平面図：第 35・36 図、写真：図版 18、19、20 中・下、21 中）

旧調査区で長さ約 15 m 検出していた南北溝跡の北側延長を約 12 m 検出した。合わせて長さ約 28.5 m 検出し、さらに調査区外北に延びる。新旧 2 時期（SD2510A → SD2510B）あり、幅は SD2510A 溝跡が 1.0 ~ 1.3 m、SD2510B 溝跡が 0.9 ~ 1.7 m ある。今回の調査では断ち割りしていないため、深さ、断面形は不明である。方向は北で西に約 10° 偏るが、調査区北端で SD2510A 溝跡は西側に、SD2510B 溝跡は東側に曲がり始めている。遺物は出土していない。

なお、さらに南に位置する八幡地区の多賀城インターチェンジ建設に伴う復興調査では、この溝跡より近世後期（18 世紀後半頃）の近世陶磁器が出土しており、江戸時代後期の溝跡とみられる。

新旧関係は、奈良時代の SA2521・2547 材木塀跡、SD2524 区画溝跡、平安時代の SD2651 北3道路跡(路面、SD2551 北側溝、SD2550 南側溝)、古墳時代後期～平安時代いずれかの時期に属する SI2507・10450 穫穴住居跡、SB2629 掘立柱建物跡、中世の SX10451 屋敷跡 (SD2534 外側方形区画溝跡、SD10408 内側方形区画溝跡) よりも新しい。

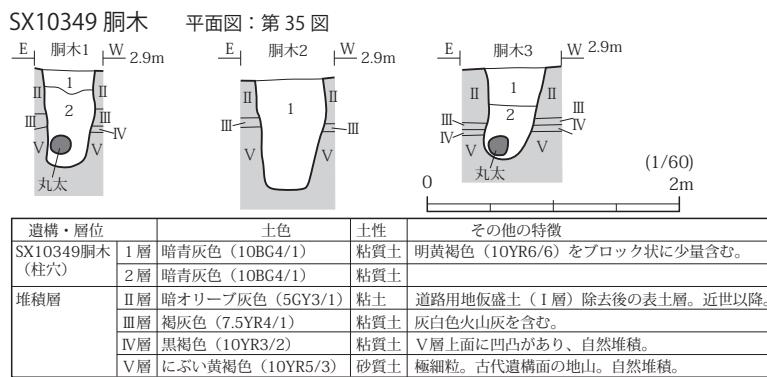
## 5. その他の主要遺構

その他の主要遺構には、竪穴住居跡 10 軒 (SI10413～10415・10441・10442・10443・10447～0450)、建物跡 1 棟 (SB10445)、井戸跡 2 基 (SE10411・10412)、畑跡 1 箇所 (SF10348 小溝状遺構群)、土壙 4 基 (SK10401・10407・10440・10446)、溝跡 7 条 (SD10342～10346・10405・10419)、胴木 (SX10349) などがある (平面図: 第 35・36 図)。

10 軒の竪穴住居跡はいずれも床面近くまで削平され、残りが悪く、掘り下げていないので、遺物も出土していない。このうち、SI10443・10450 穫穴住居跡は、平安時代の SX2651 北3道路跡よりも古いので、古墳時代後期 (栗廻式期) または奈良時代の竪穴住居跡である。また、SI10441・10442 穫穴住居跡は古墳時代後期 (栗廻式期) の SI10436 穫穴住居跡よりも新しいので、古墳時代後期 (栗廻式期) ～平安時代いずれかの時代の竪穴住居跡である。他の 6 軒の竪穴住居跡もこの時代幅にしか限定できない。SF10348 小溝状遺構群は、平安時代の SX2652 西6道路跡よりも古いので、古墳時代後期栗廻式期～平安時代いずれかの時代の畑跡である。SB10445 建物跡は平安時代以降の建物跡で、前述のように、SX10451 中世屋敷跡に伴う可能性もあるのかもしれない。SE10411・10412 井戸跡は、平安時代もしくは中世の SX10451 屋敷跡に伴う井戸跡と考えられる。

**SX10349 胴木** (平面図: 第 35 図、断面図: 第 43 図、写真図版: 図版 25-7・8)

第 4 工区西半部中央の近接する 3 箇所で、近世以降の基本層第 II 層上面を掘り込む胴木を検出した。細長く深い掘方の底面近くに長い丸太材を据えて、埋め戻した後に、上に構造物を築いたものであろう。胴木は主に近世以降、軟弱地盤の地盤沈下を防ぐために用いられたものである。



第 43 図 第 4 工区の近世以降の遺構断面図

## 第8章 総括

### 1. 山王遺跡伊勢・町地区（第1工区）

第1工区西半部では、北2道路跡の北約60mに位置し、東端で北に曲がる東西区画溝跡2条、小溝状遺構群（畑跡）4箇所、井戸跡2基（方形井戸枠、円形曲物井戸枠各1基）、南北方向区画溝3条などの奈良～平安時代の遺構を検出した。平安時代の遺構が大半を占め、9世紀前半には北2道路跡の北約60mに位置する東西区画溝跡を境に、北側が耕作域（畑）、南側（旧調査区側）が居住域・耕作域（畑）となっていた。また、9世紀中頃の河川氾濫と考えられる自然堆積層の堆積を契機に東西区画溝と畑が廃絶したことが明らかとなり、方格地割の西はずれにおける土地利用状況が明確となった。

この他、近世集落跡の北辺区画大溝跡1条、土壙2基、南北小溝1条を確認し、近世町屋の北辺区画施設の構造と変遷が明確となった。また、漆器椀や旧暦の盂蘭盆会関連とみられる笊塔婆が出土した。

### 2. 山王・市川橋遺跡八幡地区（第4工区）

第4工区で検出した主要遺構は東半部に集中し、西半部では希薄である。東半部からは古墳時代後期（栗廻式期）、奈良時代、平安時代、中世の遺構・遺物が出土した。

#### （1）古墳時代後期（栗廻式期）

山王・市川橋遺跡には当該期の拠点的大集落跡があり、6世紀末～7世紀中頃でもやや新しい頃（660年代末頃）にかけて存続したことが明らかにされている（宮城県教育委員会 2009、柳澤和明 2010b 他）。本調査区はこの拠点的集落の北東縁部に当たり、第4工区では区画溝跡1条（SD2563）、竪穴住居跡2軒（SI10434・10436）を検出した。

#### （2）奈良時代

材木塀跡5条（SA2521・2564・10402・10403・10406）、区画溝跡2条（SD2552・2561）を検出した。いずれも道路による方格地割形成以前の区画施設である。

#### （3）平安時代

道路跡3（SX2650 西5道路跡、SX2652 西6道路跡、SX2651 北3道路跡、竪穴住居跡3軒（SI10409・10435・10439）、井戸跡1基（SE10433）、溝跡2条（SD2562・10410）を検出した。このうち、SX2651 北3道路跡については、5期区分された旧調査の成果と対比し、これが方格地割の形成される9世紀前半のA期、貞觀11年（869）陸奥国巨大地震当時のB期、その復興期の9世紀後葉のC期、灰白色火山灰（十和田a火山灰）の降灰した10世紀前葉頃のD期、10世紀前葉～中頃と考えられるE期に区分した。その結果、西3北3道路交差点以南の西3道路跡と以東の北3道路跡が9世紀前半の方格地割I期に造営され、方格地割III期まで存続したことが明らかとなった。

#### （2）中世

方形区画溝跡で二重に区画されたSX10451 中世屋敷跡の南西部となるL字状方形区画溝跡2条（SD2534 外側方形区画溝跡、SD10408 内側方形区画溝跡）を検出した。13世紀後半頃の屋敷跡とみられ、新たに検出したものである。

## 註

- 註1 陸奥国府多賀城跡の方格地割の変遷については、これまで多賀城跡城外で行われてきた大規模発掘調査や関連する研究成果（高倉敏明 1992、菅原弘樹 1993、千葉孝弥 1993・1994a・1994b・1995、高野芳宏・菅原弘樹 1997、平川南 1999、山中章 2000、鈴木孝行 2006）を受け、近年では方格地割Ⅰ期（8世紀末～9世紀初頭頃）、方格地割Ⅱ期（9世紀初頭～中葉頃）、方格地割Ⅲ期（9世紀後葉～10世紀前葉頃）、方格地割Ⅳ期（10世紀前葉以降）の4時期にわたって段階的に変遷し、Ⅱ期とⅢ期の間を多賀城跡第Ⅳ期〔貞觀11年（869）陸奥国巨大地震後の復興期〕の開始期である貞觀11年（869）とするという見解で一致している（鈴木孝行 2010、武田健市 2010a・b、千葉孝弥 2010、村松稔 2013、柳澤和明 2013a・b）。
- 註2 灰白色火山灰は、十和田a火山灰と一般に呼ばれる広域火山灰と同じだが、宮城県では灰白色火山灰と呼び習わしてきた。これは、十和田カルデラのマグマ水蒸気爆発（過去2,000年間に日本列島で起きた最大の火山噴火）によって、東北地方の広範囲に分布する広域火山灰である。噴火年代は、通説（町田洋他 1981）では915年〔『扶桑略記』延喜15年（915）7月13日条「出羽国言上雨灰高二寸、諸郷農桑枯損由」〕。考古学的には912年（秋田県大館市道目木遺跡埋没家屋の年輪年代）～934年（陸奥国分寺七重塔の焼失年代；『日本紀略』承平6年閏正月15日条）の間となる。
- 註3 旧調査報告書（宮城県教育委員会 1994・1998）や本報告書で「赤焼土器」と記載している土器は、宮城県多賀城跡調査研究所が多賀城跡の継続的な発掘調査・研究を通して初めて明らかにし、その後もこの名称を使用してきている「須恵系土器」のことである。本書では「須恵系土器」の代わりに「赤焼土器」の名称を使用する。

## 引用・参考文献

- 青森市教育委員会 2012『石江遺跡群発掘調査報告書V』（青森市埋蔵文化財調査報告書第112集）  
鎌倉市教育委員会 2013「甘縄神社遺跡群（No.177）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書29 平成24年度発掘調査報告書（第1分冊）』 pp.317～396  
桑原滋郎・高野芳宏・千葉孝弥 1993「第6章 掘り出された近世の様子」『多賀城市史 第2巻 近世・近現代』 pp.212～238  
御坊市遺跡調査会 1991『小原II遺跡（湯川氏館跡）発掘調査概報VII』  
佐藤洋 2003「2陸奥のかわらけ（2）陸奥南部一宮城県一」東北中世考古学会編『中世奥羽の土器・陶磁器』（高志書院） pp.29～36  
瑞巖寺 2009『瑞巖寺境内遺跡 新宝物館建設に伴う発掘調査報告書』  
菅原弘樹 1993「多賀城周辺の様子」『日本歴史』第544号 pp.87～95  
鈴木孝行 2010「多賀城外の方格地割」『考古学ジャーナル』第604号 pp.14～18  
仙台市教育委員会 1997『五本松遺跡「川内・南小泉線」関連遺跡発掘調査報告書』（仙台市文化財調査報告書第99集）  
仙台市教育委員会 2005『仙台市洞ノ口遺跡—第1次・2次・4次・5次・7次・10次発掘調査報告書』（仙台市文化財調査報告書第281集）  
高倉敏明 1992「多賀城周辺の計画的地割について」『条里制研究』第8号（条里制古代都市研究会） pp.36～54  
多賀城市教育委員会 1980『館前遺跡—昭和54年度発掘調査報告—』（多賀城市文化財調査報告書第1集）  
多賀城市教育委員会 1990『市川橋遺跡—平成元年度発掘調査報告書—』（多賀城市文化財調査報告書第21集）  
多賀城市教育委員会 1990『新田遺跡（第4・11次調査報告）』（多賀城市文化財調査報告書第23集）  
多賀城市教育委員会 1991a『山王遺跡—第9次発掘調査報告書—』（多賀城市文化財調査報告書第26集）  
多賀城市教育委員会 1991b『山王遺跡—第10次調査概報（仙塩道路建設に伴う八幡地区調査）—』（多賀城市文化財調査報告書第27集）

- 多賀城市教育委員会 1992『山王遺跡—第12次調査概報（仙塩道路建設に伴う八幡地区調査）—』（多賀城市文化財調査報告書第30集）
- 多賀城市教育委員会 1995a『高崎遺跡—第11次発掘調査報告書—』（多賀城市文化財調査報告書第37集）
- 多賀城市教育委員会 1997『山王遺跡I—仙塩道路建設に係る発掘調査報告書—』（多賀城市文化財調査報告書第45集）
- 多賀城市教育委員会 1999『市川橋遺跡—第23・24次調査報告書—』（多賀城市文化財調査報告書第55集）
- 多賀城市教育委員会 2001『市川橋遺跡—城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書I—』（多賀城市文化財調査報告書第60集）
- 多賀城市教育委員会 2002『市川橋遺跡—城南土地区画整理事業に係る発掘調査略報4—』（多賀城市文化財調査報告書第67集）
- 多賀城市教育委員会 2003『市川橋遺跡—城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II—』（多賀城市文化財調査報告書第70集）
- 多賀城市教育委員会 2004a『市川橋遺跡—第34・35・37・38次調査報告書—』（多賀城市埋蔵文化財調査報告書第74集）
- 多賀城市教育委員会 2004b『市川橋遺跡—城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書III—』（多賀城市文化財調査報告書第75集）
- 多賀城市史編纂委員会 1991『多賀城市史 第4巻 考古資料』
- 高野芳宏・菅原弘樹 1997「第六章第五節 古代都市多賀城」多賀城市史編纂委員会編『多賀城市史 第1巻 原始・古代・中世』（多賀城市） pp.335～367
- 武田健市 2010a「多賀城廃寺と多賀城南面の様子」『第36回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』 pp.115～134
- 武田健市 2010b「多賀城と城下の木簡出土遺構」木簡学会多賀城特別研究集会『古代東北の城柵と木簡』 pp.1～25
- 千葉孝弥 1993「多賀城周辺の道路遺構」『古代交通研究』第2号（古代交通研究会） pp.35～40
- 千葉孝弥 1994a「多賀城周辺遺跡の様相」『第20回古代城柵官衙遺跡検討会資料』 pp.57～62
- 千葉孝弥 1994b「多賀城周辺の道路遺構」『季刊考古学』第46号 pp.56～59
- 千葉孝弥 1995「多賀城城外の道路と方格地割り」『古代文化』第47卷第4号 pp.45～54
- 千葉孝弥 1997「第十章 考古学からみた中世の多賀城」『多賀城市史 第1巻 原始・古代・中世』 pp.549～591
- 千葉孝弥 2010「多賀城周辺の古代道」『月刊文化財』560号（特集 古代道路の意義と保存・活用） pp.34～37
- 千葉孝弥 2014「考古学から見た多賀国府」平川新・千葉正樹編『講座 東北の歴史 第二巻 都市と村』（清文堂） pp.13～40
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1998「考察編—仙台城二の丸跡の考古学的調査—」『東北大学埋蔵文化財調査年報9』 pp.89～234
- 東北歴史資料館 1989『宮城県の貝塚』（東北歴史資料館資料集25）
- 平川南 1989「第七章 碑文の検討」「終章 碑文の語るもの」安倍辰夫・平川南編 1989『多賀城碑—その謎を解く』（雄山閣出版） pp.236～264・288～296
- 町田洋・新井房夫・森脇広 1981「日本海を渡ってきたテフラ」『科学』51 pp.562～569
- 宮城県教育委員会 1990『山王遺跡—仙塩道路建設関係遺跡八幡地区調査概報—』（宮城県文化財調査報告書第138集）
- 宮城県教育委員会 1992『山王遺跡—仙塩道路建設関係遺跡 平成3年度発掘調査概報—』（宮城県文化財調査報告書第147集）
- 宮城県教育委員会 1993『下草古城跡ほか』（宮城県文化財調査報告書第154集）
- 宮城県教育委員会 1994a『山王遺跡I—古墳時代中期遺物包含層編—』（宮城県文化財調査報告書第161集）
- 宮城県教育委員会 1994b『山王遺跡八幡地区的調査—県道泉塩釜線関連調査報告書I—』（宮城県文化財調査報告書第162集）

- 宮城県教育委員会 1994c『下草古城跡ほか』(宮城県文化財調査報告書第160集)
- 宮城県教育委員会 1995『山王遺跡Ⅱ—多賀前地区遺構編—』(宮城県文化財調査報告書第167集)
- 宮城県教育委員会 1996a『山王遺跡Ⅲ—多賀前地区遺物編—』(宮城県文化財調査報告書第170集)
- 宮城県教育委員会 1996b『山王遺跡Ⅳ—多賀前地区考察編—』(宮城県文化財調査報告書第171集)
- 宮城県教育委員会 1997『山王遺跡V—第1分冊(八幡地区)ー』、『山王遺跡V—第2分冊(伏石地区・考察)ー』(宮城県文化財調査報告書第174集)
- 宮城県教育委員会 1998『山王遺跡町地区の調査—県道泉塩釜線関連調査報告書Ⅱー』(宮城県文化財調査報告書第175集)
- 宮城県教育委員会 1999『発掘ダイジェスト—山王・市川橋遺跡ー』
- 宮城県教育委員会 2001a『市川橋遺跡の調査—県道『泉—塩釜線』関連調査報告書Ⅲー』(宮城県文化財調査報告書第184集)
- 宮城県教育委員会 2001b『山王遺跡八幡地区の調査2—県道『泉—塩釜線』関連調査報告書IV—古墳時代後期SD2050B河川跡編』(宮城県文化財調査報告書第186集)
- 宮城県教育委員会 2003『市川橋遺跡』(宮城県文化財調査報告書第193集)
- 宮城県教育委員会 2004『山王遺跡伊勢地区の調査—県道『泉—塩釜線』関連調査報告書Vー』(宮城県文化財調査報告書第198集)
- 宮城県教育委員会 2006『中野高柳遺跡IV—宮城県仙台港背後地土地区画整理事業関連調査報告書IVー』(宮城県文化財調査報告書第204集)
- 宮城県教育委員会 2007『市川橋遺跡の調査—県道『泉—塩釜線』関連調査報告書VIー』(宮城県文化財調査報告書第209集)
- 宮城県教育委員会 2009『市川橋遺跡の調査 伏石・八幡地区—県道『泉—塩釜線』関連調査報告書VIIー』(宮城県文化財調査報告書第218集)
- 宮城県教育委員会 2014『山王遺跡VI—多賀前地区第4次発掘調査報告書ー』(宮城県文化財調査報告書第235集)
- 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所 1982『多賀城跡 政庁跡 本文編』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1974『宮城県多賀城跡調査研究所年報1973 多賀城跡』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1992「第60次調査」「第61次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991 多賀城跡』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1993「第62・63次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1992 多賀城跡』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1995「III. 現状変更に伴う調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1994 多賀城跡』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1996「第66次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1995 多賀城跡』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2002「第72次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報2001 多賀城跡』
- 村松稔 2013「多賀城跡城外の災害痕跡について」『第39回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』 pp.61～72
- 柳澤和明 2010「多賀城市山王・市川橋遺跡における住社式～栗園式期集落跡の様相」『宮城考古学』第12号(宮城県考古学会) pp.59～85
- 柳澤和明 2012a「多賀城の墓制」『考古学研究』第58卷第4号(考古学研究会) pp.67～86
- 柳澤和明 2012b「日本三代実録」より知られる貞觀十一年(八六九)陸奥国巨大地震・津波の被害とその復興』『歴史』第119輯(東北史学会) pp.27～58
- 柳澤和明 2013a「発掘調査より知られる貞觀一一年(八六九)陸奥国巨大地震・津波の被害とその復興」『史林』第96卷第1号(京都大学史学研究会) pp.5～41
- 柳澤和明 2013b「発掘調査からみた貞觀11年(869)陸奥国巨大地震の被害と復興」『宮城考古学』第15号(宮城県考古学会) pp.81～98
- 柳澤和明 2014「2013年出土の木簡 宮城・山王遺跡(町地区)」『木簡研究』第36号 pp.115～116

## 付章 山王遺跡町地区の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社（斎藤崇人・堀内誠示・芝口怜・金井慎司）

### はじめに

山王遺跡は、宮城県多賀城市山王・南宮に所在し、仙台平野の北端部、砂押川右岸、七北田川左岸の沖積低地上に位置する。山王遺跡は、弥生時代から近世まで断続的に営まれてきた複合遺跡であり、これまで継続的に発掘調査が行われており、多くの成果が得られている。平成25年度の発掘調査では、調査区東側に9世紀と考えられる区画溝が検出されている。

本報告では、平成25年度発掘調査において検出された区画溝を広範囲に覆う、上下2枚の灰色砂質シルト層が比較的広範囲に分布することが確認された。貞觀11年（869年）の陸奥国巨大地震では、本遺跡付近を流れる砂押川や七北田川を津波が遡上した可能性があり、この灰色砂質シルト層下部もこれに起因する河川氾濫による堆積層の可能性が考えられている。今回、上記の可能性を検討することを目的として、珪藻分析と粒度分析を実施する。

### 1. 試料

対象とする灰色砂質シルト層は、9世紀の区画溝を覆う形で検出され、上下2層に分層されている。この区画溝のある箇所は、西側の畠地よりも低く、水がたまりやすい地形となっている。なお、灰色砂質シルト層下部は、10世紀前葉（西暦915年）に降灰した十和田a火山灰よりも層位的に下位であることから、9世紀前半の区画溝よりも新しく、10世紀前葉より古い時期に堆積したと推定される。

試料は、都市計画道路1工区で採取されており、中央付近の断面11（灰色砂質シルト層下部が流入したSD2798区画溝跡1層、第17図⑦-2）より試料1・2・3・4・8、それよりもやや東側の断面27（第21図①-2）で試料5・6・7、調査区最も西側の近世区画溝北端東隣り区画で試料9・10が採取された。分析は、これら採取された灰色砂質シルト層下部10点の中から、試料1、試料5、試料9の計3点が選択された。これらの3点について、同一試料を分割して、珪藻分析、粒度分析を実施する。

### 2. 分析方法

#### （1）珪藻分析

湿重約5gをビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4～5回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数した。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200個体が検出できた後は、示準種などの重要な種類の

見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努める。珪藻の同定と種の生態性については、Horst Lange-Bertalot (2000)、Hustedt (1930-1966)、Krammer and Lange-Bertalot (1985-1991)、Desikachary (1987)などを参考にする。群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の3適応性についても生態分類し表に示す。

堆積環境の変遷を考察するために、珪藻化石が100個体以上検出された試料について珪藻化石群集変遷図を作成する。出現率は化石総数を基数とした百分率で表し、1%以上の出現率を示す分類群についてのみ表示する（図中の●印は、総数が100個体以上産出した試料うち1%未満の種を、+印は総数100個体未満の場合の産出を示す）。図中には、海水生・汽水生・淡水生種の相対頻度と淡水生種を基数とした塩分・pH・流水の相対頻度について図示する。

## (2) 粒度分析

粒度分析はJIS A 1204(社団法人地盤工学会,2009)に準ずる。試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩でふるい分けをする。このふるい通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

日本工業規格「土の粒度試験方法」(JIS A 1204-2009)に準じ、ふるい分析と浮ひょう比重法による沈降分析によって対象試料の粒度を求める。

## 3. 結果

### (1) 硅藻分析

結果を表1、第1図、代表的な硅藻写真を図版1に示す。分析を実施した試料1、試料5、試料9のいずれも、硅藻化石の産状が近似する。3試料には、比較的多くの硅藻化石が含まれており、すべての試料から200個体以上が検出された。化石の保存状態は、殻の一部が破損した殻は認められるものの、溶解の痕跡は認められないことから、状態としては、普通(良好)～不良である。

検出された分類群は、淡水生種を主として、極々低率に淡水～汽水生種および汽水生種を伴う種群で構成される。3試料とも、淡水生種が最優占種群(100個体以上検出)であることから、淡水生の群集の生態学的特徴(3適応性：塩分・pH・流水)について整理した場合、以下のような傾向が認められる。

まず、塩分に対する適応性は、淡水中の塩類濃度の違いにより区分したもので、ある程度の塩分が含まれたほうがよく生育する種類は好塩性種とし、少量の塩分が含まれていても生育できるものを不定性種、塩分が存在する水中では生育できないものを嫌塩性種として区分している。これは、主に水域の化学的な特性を知る手がかりとなるが、単に塩類濃度が高いあるいは低いといったことが分かるだけでなく、塩類濃度が高い水域というのは概して閉鎖水域である場合が多いことから、景観を推定する上でも重要な要素である。結果は、貧塩～不定性種が優占しており、全体の55～75%を占めている。他は、貧塩～嫌塩性種が5～10%、不明種が25～35%程度の産出率を示している。

次に、pHに対する適応性とは、アルカリ性の水域に特徴的に認められる種群を好アルカリ性種、逆

表1 珪藻分析結果(1)

種類	生態性			環境 指標種	図版1	試料		
	塩分	pH	流水			試料1	試料5	試料9
<i>Nitzschia lorenziana</i> Grunow	Meh			E2	1-8	-	1	1
<i>Nitzschia sigma</i> (Kuetz.) W. Smith	Euh-Meh			E2	1-11	-	-	1
<i>Navicula coccineiformis</i> Gregory	Ogh-Meh	ind	r-ph	0, U		-	-	1
<i>Pseudostaurosira brevistriata</i> (Grun.) Williams & Round	Ogh-Meh	al-il	l-ph	U	1-7	-	1	2
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.) Mueller	Ogh-Meh	al-il	ind	U	1-9	1	-	-
<i>Amphora ovalis</i> var. <i>affinis</i> (Kuetz.) Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	1-4	-	-	4
<i>Aulacoseira crassipunctata</i> Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph	M, U	1-1	27	22	18
<i>Aulacoseira distans</i> (Ehr.) Simonsen	Ogh-hob	ac-il	l-bi	N, U		8	11	1
<i>Aulacoseira granulata</i> (Ehr.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	M, U	1-2	47	35	38
<i>Aulacoseira granulata</i> var. <i>angustissima</i> (Muell.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	M, U		2	-	1
<i>Aulacoseira islandica</i> (Muell.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	U		3	-	1
<i>Aulacoseira italicica</i> (Ehr.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	U		4	1	2
<i>Aulacoseira</i> spp.	Ogh-unk	unk	l-ph	U		19	17	14
<i>Caloneis silicula</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	0		-	1	1
<i>Cyclotella</i> spp.	Ogh-unk	unk	l-ph			13	17	7
<i>Cymbella naviculiformis</i> Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	0		-	-	1
<i>Cymbella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk			2	1	1
<i>Diploneis ovalis</i> (Hilse) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind			-	1	-
<i>Diploneis parma</i> Cleve	Ogh-ind	ind	ind	0		-	1	-
<i>Diploneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk			2	2	1
<i>Epithemia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk			2	5	1
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>minor</i> (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	0		1	1	1
<i>Eunotia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk			1	3	3
<i>Fragilaria ulna</i> (Nitzsch) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	0, U		2	1	-
<i>Fragilaria</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk			3	3	2
<i>Frustulia vulgaris</i> (Thwaites) De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U		1	-	-
<i>Geissleria ignota</i> (Krasske) Lange-Bertalot et Metzeltin	Ogh-ind	ind	ind	RB		1	-	-
<i>Gomphonema acuminatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	0		-	1	-
<i>Gomphonema angustatum</i> (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	U		1	2	1
<i>Gomphonema angustum</i> C. Agardh	Ogh-ind	al-il	ind	U		-	1	-
<i>Gomphonema parvulum</i> (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U		-	3	-
<i>Gomphonema</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk			2	2	1
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA, U	1-10	8	7	12
<i>Hantzschia vivax</i> (W. Smith) M. Preagallo	Ogh-ind	al-il	ind	U		1	-	-
<i>Lemnicola hungarica</i> (Grun.) Round & Basson	Ogh-ind	al-il	ind	U	1-3	-	9	-
<i>Luticola mutica</i> (Kuetz.) D. G. Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA, S	1-5	13	8	9
<i>Meridion circulare</i> var. <i>constrictum</i> (Ralfs) Van Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	K, T		-	1	-
<i>Navicula confervacea</i> (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RB, S		-	1	9
<i>Navicula contenta</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA, T	1-6	3	2	7
<i>Navicula contenta</i> fo. <i>biceps</i> (Arn.) Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	RA, T		8	3	1
<i>Navicula elginensis</i> var. <i>neglecta</i> (Krass.) Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	U		-	1	2
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk			-	-	1
<i>Neidium alpinum</i> Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA		-	1	-
<i>Neidium ampliatum</i> (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph	0		1	-	1
<i>Neidium iridis</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-bi	0		-	1	-
<i>Neidium</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk			1	3	-
<i>Nitzschia amphibia</i> Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	S		-	2	-
<i>Nitzschia brevissima</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB, U		2	1	-
<i>Nitzschia debilis</i> (Arn.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB, U		1	1	-
<i>Nitzschia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk			1	3	-
<i>Pinnularia acrosphaeria</i> W. Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	N, O, U		1	-	5
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA		3	1	-
<i>Pinnularia borealis</i> var. <i>linearis</i> M. Peragallo	Ogh-ind	ind	ind	RA		1	-	-
<i>Pinnularia borealis</i> var. <i>rectangularis</i> Carlson	Ogh-ind	ind	ind	RA		1	-	-

に酸性水域に生育する種群を好酸性種、中性の水域に生育する種を不定性種としている。これも、単に水の酸性・アルカリ性のいずれかがわかるだけでなく、酸性の場合は湿地であることが多いなど、間接的には水域の状況を考察する上で必要不可欠である。結果は、アルカリ性種が35～50%、酸性種が5～10%、不定性種15～20%、不明種が25～35%産出している。

流水に対する適応性は、流れのある水域の基物（岩石・大型の藻類・水生植物など）に付着生育する種群であり、特に常時流れのあるような水域でなければ生育出来ない種群を好流水性種、逆に流れ

表1 珪藻分析結果(2)

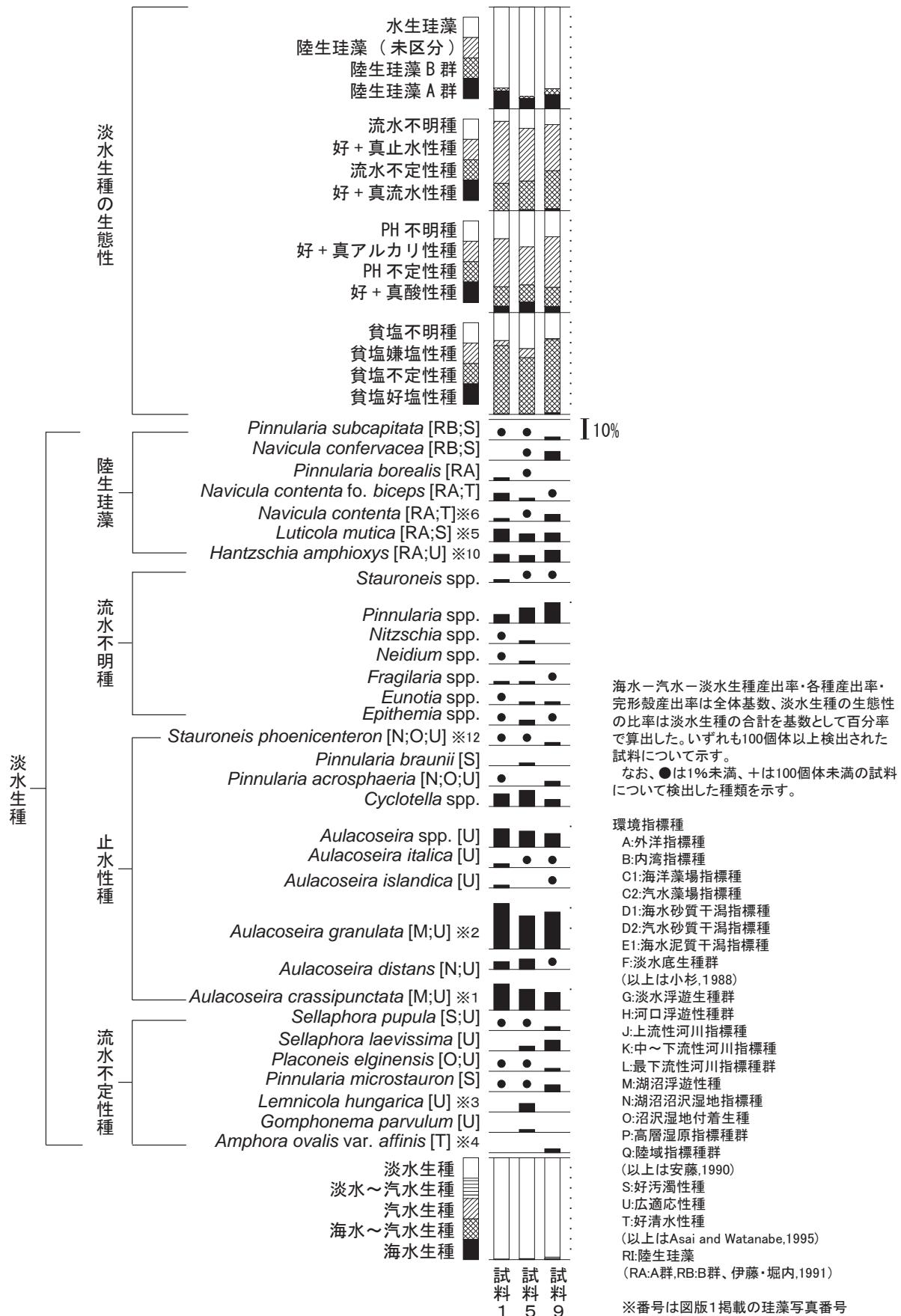
種類	生態性			環境指標種	図版1			
	塩分	pH	流水			試料1	試料5	試料9
<i>Pinnularia braunii</i> (Grun.) Cleve	Ogh-hob	ac-bi	l-ph	S		-	3	-
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	0		-	1	-
<i>Pinnularia gibba</i> var. <i>dissimilis</i> H. Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	ind	0		-	1	-
<i>Pinnularia gibba</i> var. <i>linearis</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind	0		-	1	-
<i>Pinnularia microstauron</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S		1	1	7
<i>Pinnularia rupestris</i> Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind	0		1	1	-
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB, S		2	1	3
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	0		1	-	-
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk			9	16	21
<i>Placoneis elginensis</i> (Greg.) Cox	Ogh-ind	al-il	ind	0, U		1	1	3
<i>Rhopalodia gibba</i> (Ehr.) Mueller	Ogh-ind	al-il	ind	0, U		-	-	2
<i>Sellaphora bacillum</i> (Ehr.) D. G. Mann	Ogh-ind	al-il	ind	U		-	-	1
<i>Sellaphora laevissima</i> (Kuetz.) D. G. Mann	Ogh-ind	ind	ind	U		-	5	11
<i>Sellaphora pupula</i> (Kuetz.) Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S, U		1	1	4
<i>Stauroneis anceps</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T		1	-	-
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	N, 0, U	1-12	2	2	3
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> fo. <i>gracilis</i> (Ehr.) Hustedt	Ogh-ind	ind	l-ph	N, 0, U		1	-	-
<i>Stauroneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk			3	2	1
<i>Staurosira construens</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	U		-	-	1
<i>Surirella angusta</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U		-	-	1
<i>Surirella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk			-	1	-
海水生種						0	0	0
海水～汽水生種						0	0	1
汽水生種						0	1	1
淡水～汽水生種						1	1	3
淡水生種						209	213	204
珪藻化石総数						210	215	209

#### 凡例

塩分:塩分濃度に対する適応性	pH:水素イオン濃度に対する適応性	流水:流水に対する適応性
Euh :海水生種	al-bi:真アルカリ性種	l-bi:真止水性種
Euh-Meh:海水生種-汽水生種	al-il:好アルカリ性種	l-ph:好止水性種
Meh :汽水生種	ind :pH不定性種	ind :流水不定性種
Ogh-Meh:淡水生種-汽水生種	ac-il:好酸性種	r-ph:好流水性種
Ogh-hil:貧塩好塩性種	ac-bi:真酸性種	r-bi:真流水性種
Ogh-ind:貧塩不定性種	unk :pH不明種	unk :流水不明種
Ogh-hob:貧塩嫌塩性種		
Ogh-unk:貧塩不明種		

#### 環境指標種

- A:外洋指標種 B:内湾指標種 C1:海水藻場指標種 C2:汽水藻場指標種  
D1:海水質干潟指標種 D2:汽水砂質干潟指標種  
E1:海水泥質干潟指標種 E2:汽水泥質干潟指標種 F:淡水底生種群(以上は小杉,1988)  
G:淡水浮遊生種群 H:河口浮遊性種群 J:上流性河川指標種 K:中～下流性河川指標種  
L:最下流性河川指標種群 M:湖沼浮遊性種 N:湖沼沼澤湿地指標種 O:沼澤湿地付着生種  
P:高層湿原指標種群 Q:陸域指標種群(以上は安藤,1990)  
S:好汚濁性種 U:広適応性種 T:好清水性種(以上はAsai & Watanabe,1995)  
R:陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内,1991)



第1図 主要珪藻化石群集

のない水域に生育する種群を好止水性種として区分している。流水不定種は、どちらにでも生育できる可性性もあるが、それの大半は止水域に多い種群である。なお、好流水性種と流水不定性種の多くは付着性種であるが、好止水性種には水塊中を浮遊生活する浮遊性種も存在する。浮遊性種は、池沼あるいは湖沼の環境を指標する。結果は、止水性種が優占し、全体の45～60%を占めている。他は、流水不定性種が25～35%、不明種が10～20%程度の産出率を示している。

なお、淡水生種の中には、水中から出て陸域の乾いた環境下でも生育する種群が存在し、これらを陸生珪藻と呼んで、水中で生育する種群と区分している。陸生珪藻は、陸域の乾いた環境を指標することから、古環境を推定する上で極めて重要な種群である。水生珪藻と陸生珪藻の比率は、水生珪藻が80～90%、陸生珪藻が10～20%である。

多産または特徴的に認められた種は、淡水生種で止水性種の *Aulacoseira crassipunctata*、*Aulacoseira distans*、*Aulacoseira granulata*、*Aulacoseira* spp.、*Stauroneis phoenicenteron*、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*、*Luticora mutica*、流水不明種の *Pinnularia* spp. 等である。

## (2) 粒度分析

結果を表2、第2図に示す。粒度は、国際土壤学会(現国際土壤科学連合)における土性区分において、いずれの試料もLiC(軽埴土)に分類された。なお、礫は試料5において、4.75mm～9.5mm篩にわずかに混入した。試料5で最も粗粒質であり、試料9で最も細粒質である。

## 4. 考察

珪藻分析結果から推定される堆積時の環境について述べる。特徴種の生態性または生育環境についてみると、淡水生種で止水性種の *Aulacoseira crassipunctata* は、植物に付着して生育し、電解質成分の少ない貧栄養の泥炭池に出現する(Krammer & Lange-Bertalot, 1991)。また、腐植性の水域からしばしば出現するとされる(吉川, 2006)。*Aulacoseira distans* は臨時性浮遊生物(tychoplankton)であり、通常は湖沼の底や湖岸付近において水中の基物に付着生育する種とされ(Van Landingham, 1970)、酸性水域の指標種とされるほか(Round, 1961)、山地の湖沼に認められ冷水型の種であるとの報告もある(Hustedt, 1930)。*Aulacoseira granulata* は浮遊性であり、富栄養水域の岸近くに認められることが多いとされる(Stoermer & Yang, 1968)。本種は、浮遊性のため、ある程度の水深のある池沼に優占的に認められる場合が多い種である。さらに、*Stauroneis phoenicenteron* は、比較的、広範に止水域に認められる種であるが、Cholnoky(1968)は最適pHを6.8に持つ種類であるとしている。本種も湿地や池沼・湖沼の縁辺等の止水域に生育する種である。

陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*、*Luticora mutica* は、水中や水底の環境以外のたとえばコケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壤の表層部など大気に接触した環境に生活する一群(小杉, 1986)である。特に、*Hantzschia amphioxys*、*Luticora mutica* は、離水した場所の中で乾燥に耐えうることのできる群集とされる(伊藤・堀内, 1989, 1991)。

なお、珪藻化石群集の特徴としては、生態性が異なる種群が認められることと、検出種数が多いことから、混合群集の様相を呈している。

表2 粒度分析結果

試料名	土色	粒径組成				土性 (JIS法)	礫含量 (%)	備考
		粗砂 (%)	細砂 (%)	シルト (%)	粘土 (%)			
試料1	2.5Y3/3 暗オリーブ褐	17.1	30.8	17.8	34.3	LiC	N.D.	
試料5	2.5Y4/3 オリーブ褐	15.1	35.8	17.8	31.3	LiC	0.1>	
試料9	2.5Y4/2 暗灰黄	11.2	28.7	22.4	37.7	LiC	N.D.	

1) 土性：国際土壤学会(現国際土壤科学連合)における土性区分。

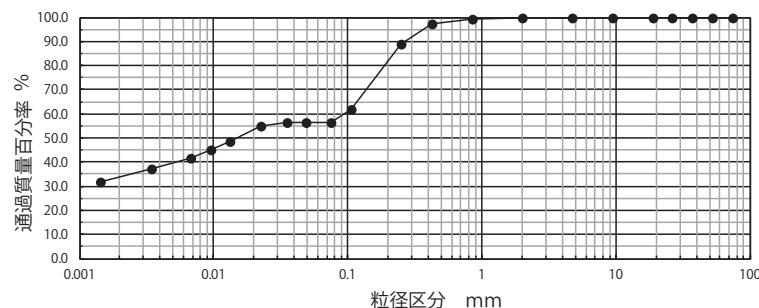
LiC…軽埴土(粘土25~45%、シルト0~45%、砂10~55%)

2) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修,1967)による。

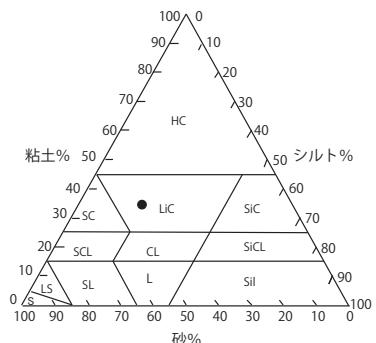
3) N.D. : 未検出。

粒径加積曲線

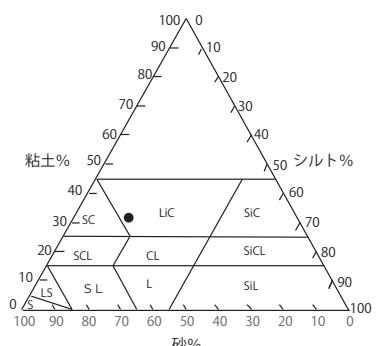
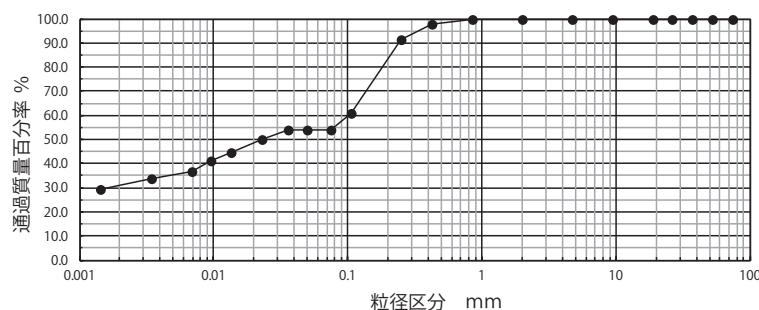
試料1



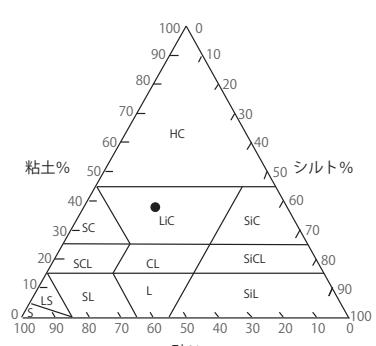
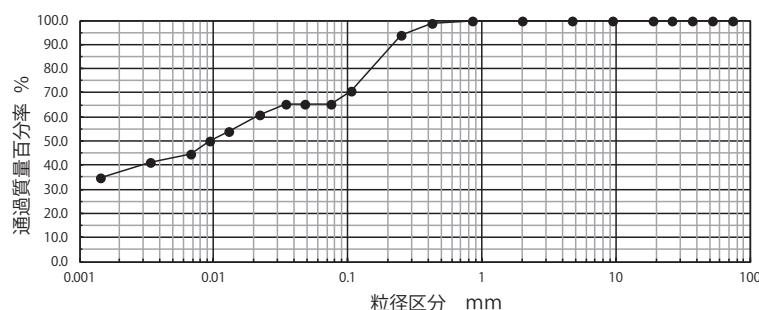
三角図表 (国際法)



試料5



試料9



第2図 粒度分析結果

以上より、試料を採取した灰色砂質シルト層の堆積環境について、珪藻化石の生態性と群集構成からは、弱酸性の水を湛えた池沼の環境下にあったものと推定される。ただし、陸生珪藻などを含む混合群集であることから、周辺から土砂等が流れ込んだ可能性が考えられる。

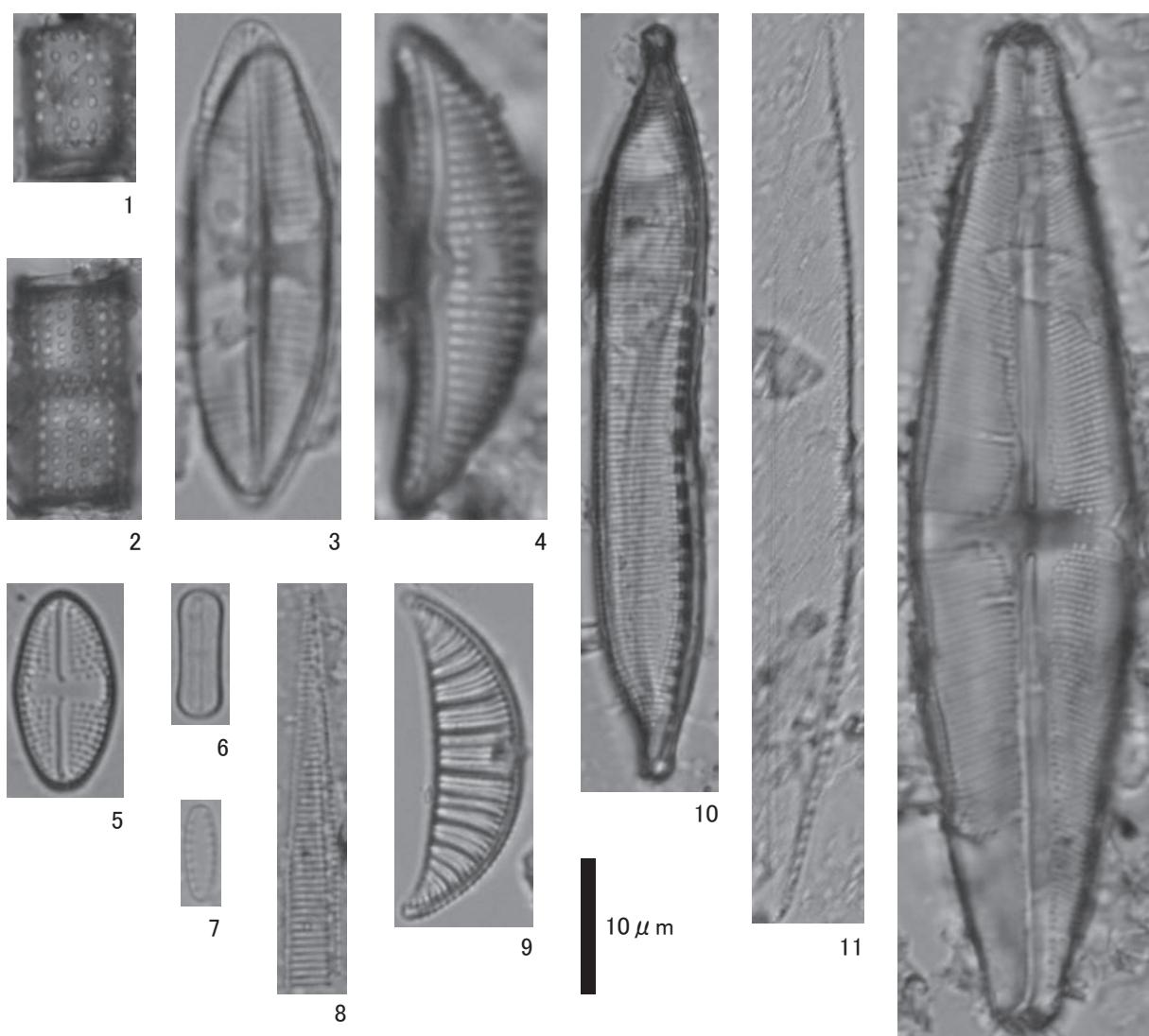
一方、土壤の特性についてみると、試料確認時において、試料1及び試料5では、孔隙が多く、同様の糸根状の斑紋が認められているが、試料9では他の2試料ほど斑紋が明瞭に見られない。斑紋とは、土壤孔隙が一時的に飽和されて還元状態になるが、停滞水の消失により孔隙に空気が入り、酸化状態となるような条件下で酸化還元が繰り返され形成される。また、斑紋の多くが、地下水位の上昇・下降に起因する乾湿の繰り返しにより生成されることも知られている。これらのことから、試料1・5のほうが、堆積後などに乾湿を繰り返すような環境にあった可能性がある。粒度分析をみると、試料1の方がやや細粒であるが、試料1・5のいずれも同様の加積曲線を描いており粒径は類似している。これ対し、試料9は、シルト・粘土画分が約60%と多く、他の2試料と比べると細粒質である。本調査区の東側に砂押川が流れしており、砂押川より近い方から試料5と試料1が隣接し、少し離れて試料9が採取されている。よって、粒径の差が給源からの距離に起因するならば、細粒質な試料9採取地点よりも、試料1・5採取地点のほうが給源に近い可能性があり、灰色砂質シルト層が砂押川から供給された可能性が指摘される。

以上の結果より、珪藻分析からはある程度の水深のある池沼の環境が、粒度分析では砂押川からの氾濫堆積の可能性が指摘された。発掘調査状況をみると、灰色砂質シルト層が堆積する場所は、西側の畠地よりも低く、水がたまりやすい地形であることが確認されている。よって、本地区に水の影響があったことは容易に想像がつくものの、区画溝を広範囲に覆う状況をみると池沼であったとは考えにくい。

松本（1996）によると、砂押川は山王遺跡から約1km上流地点まで小規模ながら自然堤防を形成しているが、遺跡周辺およびさらに下流側では顕著な自然堤防の発達は見られないとされている。よって、可能性としては調査区の極近傍に池沼の環境が存在し、砂押川の氾濫などに伴い池沼の堆積物を押し流す形で調査区内に堆積したことなどが想定される。

なお、調査所見では津波の遡上の可能性も想定されている。津波によってもたらされた堆積物の判定は非常に困難であるが、経験的には、1) 海域の珪藻群集が数～20%程度かそれ以上認められる、2) 海水生の種群の中に新第三系からの二次化石は認められない、3) 陸域の群集と海域の群集が混在している点で海進時の群集に似るが、海進期に特徴的に見られる種は検出されない、4) 海域に生育する種群の産出の特徴は、沿岸部の汽水生種の比率が高く、次いで沿岸・内湾性の海水生種を主体に構成され、外洋性の種群は少ない傾向にある、5) 分析試料の層相は、粗粒砂等の粗粒な堆積物で、淘汰は良い傾向にあるなどの特徴が挙げられる。今回の場合、海域に生育する種群の産出は少ないものの、極めて僅かであるが汽水生種（汽水泥質干潟指標種）が認められることから、上記の4に近い傾向にあるとみることができ、このことから氾濫の要因として津波の可能性も考慮しておく必要がある。なお、今後、結果を解析する際のバックデータとして、縄文時代以降の本地域における、堆積層中の珪藻化石群集の変化も明らかにしておく必要があると言える。

図版1 硅藻化石



1. *Aulacoseira crassipunctata* Krammer  
〔試料1、淡水生種・止水性種、貧塩不定種 (Ogh-ind)、湖沼浮遊性種 (M)、広適応性種 (U) 〕
2. *Aulacoseira granulata* (Ehr.) Simonsen  
〔試料1、淡水生種・止水性種、貧塩不定種 (Ogh-ind)、湖沼浮遊性種 (M)、広適応性種 (U) 〕
3. *Lemnicola hungarica* (Grun.) Round & Basson  
〔試料5、淡水生種・流水不定性種、貧塩不定種 (Ogh-ind)、広適応性種 (U) 〕
4. *Amphora ovalis* var. *affinis* (Kuetz.) Van Heurck  
〔試料9、淡水生種・流水不定性種、貧塩不定種 (Ogh-ind)、広清水性種 (T) 〕
5. *Luticola mutica* (Kuetz.) D.G.Mann  
〔試料1、淡水生種・陸生珪藻、貧塩不定種 (Ogh-ind)、陸生珪藻A群 (RA)、好汚濁性種 (S) 〕
6. *Navicula contenta* Grunow  
〔試料1、淡水生種・陸生珪藻、貧塩不定種 (Ogh-ind)、陸生珪藻A群 (RA)、好清水性種 (T) 〕
7. *Pseudostaurosira brevistriata* (Grun.) Williams & Round  
〔試料9、淡水生種・汽水生種 (Ogh-Meh)、広適応性種 (U) 〕
8. *Nitzschia lorenziana* Grunow  
〔試料9、汽水生種 (Meh)、汽水泥質干潟指標種 (E2) 〕
9. *Rhopalodia gibberula* (Ehr.) Mueller  
〔試料1、淡水生種・汽水生種 (Ogh-Meh)、広適応性種 (U) 〕
10. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow  
〔試料1、淡水生種・陸生珪藻、貧塩不定種 (Ogh-ind)、陸生珪藻A群 (RA)、広適応性種 (U) 〕
11. *Nitzschia sigma* (Kuetz.) W.Smith  
〔試料9、海水生種・汽水生種 (Euh-Meh)、汽水泥質干潟指標種 (E2) 〕
12. *Stauroneis phoenicenteron* (Nitz.) Ehrenberg  
〔試料1、淡水生種・陸生珪藻、貧塩不定種 (Ogh-ind)、湖沼沼澤湿地指標種 (N)、沼澤湿地付着生種 (O)、広適応性種 (U) 〕

## 引用文献

- Asai, K. and Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, 35 – 47.
- 安藤一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.
- Desikachari, T. V., 1987, *Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean*. Madras science foundation, Madras, Printed at TT. Maps and Publications Private Limited, 328, G. S. T. Road, Chromepet, Madras-600044. 1-13, Plates : 401-621.
- Horst Lange-Bertalot., 2000, *ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA: Annotated diatom micrographs*. Witkowski, A., Horst Lange-Bertalot, Dittmer Metzeltin: *Diatom Flora of Marine Coasts Volume 1*. 219 plts. 4504 figs, 925 pgs.
- Hustedt, F., 1930, *Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete*. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1, 920p.
- Hustedt, F., 1937-1938, *Systematische unt okologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. I ~ III*. Arch. Hydrobiol. Suppl., 15, 131-809, 1-155, 274-349.
- Hustedt, F., 1959, *Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete*. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2, 845p.
- Hustedt, F., 1961-1966, *Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete*. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3, 816p.
- 伊藤良永・堀内誠示, 1989, 古環境解析からみた陸生珪藻の検討—陸生珪藻の細分—. 日本珪藻学会第 10 回大会講演要旨集, 17.
- 伊藤良永・堀内誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 日本珪藻学誌, 6, 23-44.
- 小杉正人, 1986, 陸生珪藻による古環境の解析とその意義—わが国への導入とその展望—. 植生史研究, 1, 9-44.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1985, *Naviculaceae. Bibliotheca Diatomologica*, 9, 250p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1986, *Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa*, 2(1): 876p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1988, *Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa* 2(2): 596p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1990, *Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa* 2(3): 576p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1991, *Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa* 2(4): 437p.
- 松本秀明, 1996, 山王遺跡の地質学的背景. 宮城県文化財調査報告書第 171 集 山王遺跡IV—多賀前地区考察編一, 宮城県教育委員会・建設省東北地方建設局, 146-154.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修, 1967, 新版標準土色帖.
- Round, F. E., 1961, The diatom of a core from Esthwaite Water. *The Phytologist*, 60, 43-59.
- Stoermer, E. F. and Yang, J. J., 1968, A preliminary report on the fossil diatom flora from Lake Huron sediments. Proc. 11th Conf. Great Lake Res., Internat. Assoc. Great Lakes Res. 257-267.
- 社団法人地盤工学会, 2009, *JIS A 1204:2009, 土の粒度試験方法. 地盤材料試験の方法と解説*—二分冊の 1 —, 115-124p.
- Van Landingham, S.L., 1970, Origin of an early non-Marine Diatomaceae Deposit in Broad water County, Montana, U. S. A. *Diatomaceae II Nova Hedwigia Heft* 31, 449-473.
- 吉川俊一, 2006, 京都市、沢ノ池の堆積物中の珪藻類について. 日本珪藻学会誌, 23, 91-104.

# 写 真 図 版





昭和24年(1949)当時の遺跡周辺航空写真 - 米軍撮影 R365-7 (縮尺約1/16,000)

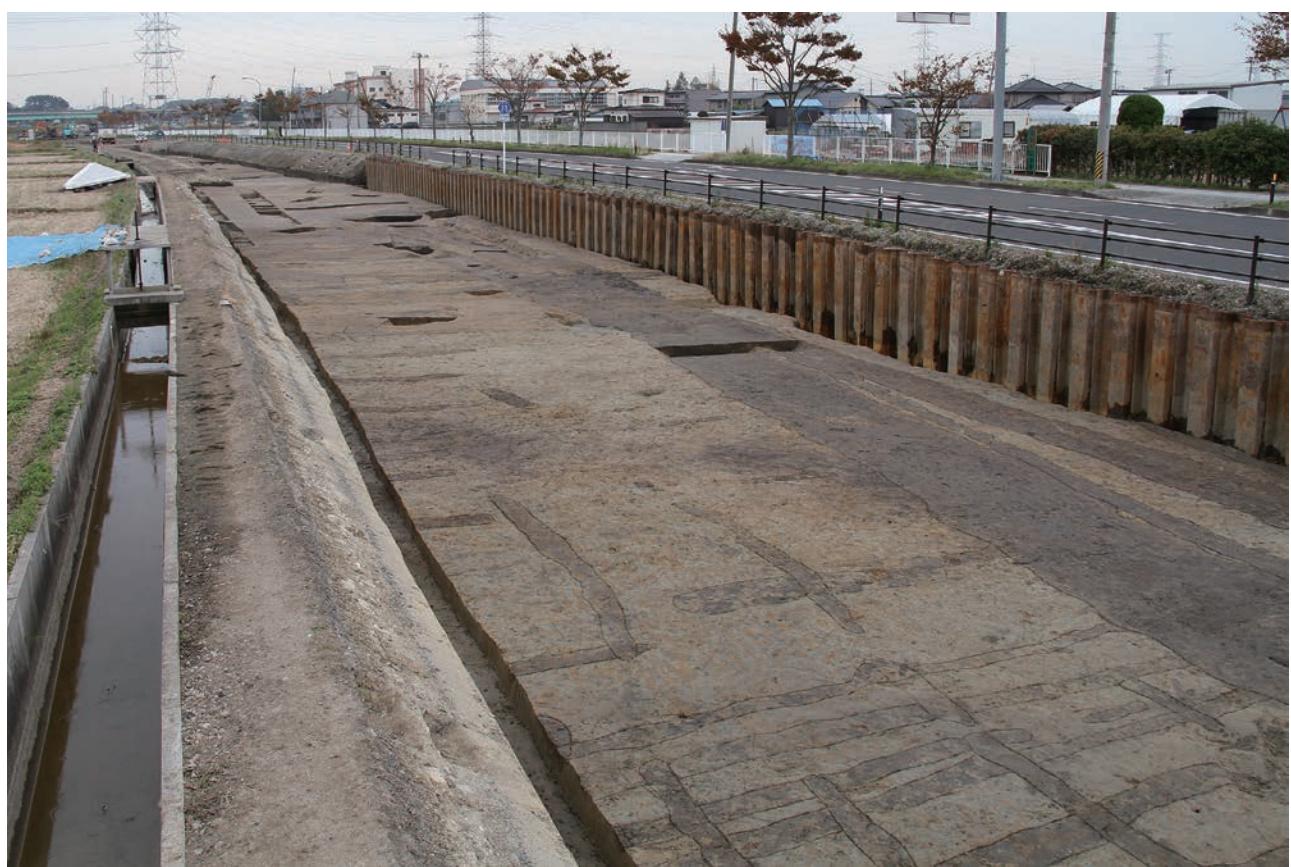


平成5年(1993)の遺跡周辺航空写真 - 建設省国土地理院撮影 C3-22 (縮尺約1/16,000)に、多賀城跡と城外道路跡、旧河川跡を合成

図版1 多賀城跡と山王遺跡・市川橋遺跡の航空写真



第1工区調査区遠景（西隣のJA仙台多賀城機械化センター屋上より）



第1工区調査区遠景（西より）

#### 図版2 第1工区調査区遠景（1）



第1工区調査区西部遠景（西隣のJA仙台多賀城機械化センター屋上より）



第1工区調査区西部遠景（東より）

### 図版3 第1工区調査区遠景（2）



第1工区調査区西部～中央部遠景（西より）



第1工区調査区中央部～東部遠景（西より）

図版4 第1工区調査区遠景（3）



SD2862 近世区画大溝跡鞍部 1 付近と  
北側の SD2794 区画溝跡、SF10353・  
10354 小溝状遺構群（南から）



SD2862 近世区画大溝跡鞍部 3 付近、  
SD2820 平安時代区画溝と北側の SD  
10321 溝跡、SF10354・10336 小溝  
状遺構群（北から）



SD2862 近世区画大溝跡鞍部 3 付近、  
SD2820 平安時代区画溝と北側の  
SD10321・10322 溝跡、SF10354・  
10336 小溝状遺構群（南西から）

図版 5 第 1 工区西部近景（1）

SD2862 近世区画大溝跡と北側の SD  
2794・2766 区画溝跡、SK10304 土壌、  
SF10354 小溝状遺構群など（南から）



SD2862 近世区画大溝跡と北側の SE  
10301 井戸跡、SK10304 土壌、SD  
2766 区画溝跡、SD10320 溝跡、SF  
10354 小溝状遺構群など（南から）



SD2862 近世区画大溝跡と北側の SE  
10301 井戸跡、SK10304 土壌、SD  
2794・2766 区画溝跡、SD10320 溝  
跡、SF10354 小溝状遺構群など  
(南東から)



図版6 第1工区西部近景（2）



SD2862 近世区画大溝跡に壊される SE  
10301 井戸跡の検出状況（西から）



SD2862 近世区画大溝跡断面とこれに  
壊される SE10301 井戸跡の検出状況  
(東から)



SD2862 近世区画大溝跡断面とこれに  
壊される SE10301 井戸跡、SD2862 近  
世区画大溝下部出土の「七月十六日」  
墨書笹塔婆出土状況（南東から）

SD2862 近世区画大溝跡出土の「七月十六日」墨書笹塔婆

図版7 第1工区 SE10301 井戸跡

SD2862 近世区画大溝跡に壊される SE  
10302 井戸跡の検出状況（南上から）



SD2862 近世区画大溝跡に壊される SE  
10302 井戸跡の検出状況（南から）



SD2862 近世区画大溝跡に壊される SE  
10302 井戸跡の断面（南から）



図版8 第1工区 SE10302 井戸跡



SK2861 大土壌、SD2862 近世区画大溝跡断面（東から）、断面 20



SK2819 土壌断面（西から）、断面 18



SK10304 土壌とそれよりも古い SD10320 溝跡断面（南から）、断面 19



SK10309 土壌断面（北から）、断面 36



SK10315 土壌断面（南から）、断面 40



SK10308 土壌断面（南から）、断面 23



SK10319 土壌断面（北北西から）、断面 14



SK10317 近世大土壌断面（南南西から）、断面 55

図版9 第1工区検出の主な土壌の断面



SD2766 区画溝跡断面（南から）、断面 2



SD2794 区画溝跡断面（北から）



灰色砂質シルト層上部に覆われる SD2801 区画溝跡他断面（北から）



SD2807 区画溝跡断面（北西から）



SD2820 区画溝跡断面（西から）、断面 5



SD10320 溝跡断面（北から）、断面 3



SD10330 溝跡（右）、SD10332 溝跡（左）断面（南西から）、断面 30



灰色シルト層下部に覆われる SD10333 溝跡断面（北から）、断面 55

図版 10 第 1 工区検出の主な区画溝跡・溝跡の断面



SD2862 近世区画大溝跡鞍部 1、SD2794 溝跡（南から）、断面 42・45



SD2862 近世区画大溝跡鞍部 1 西側断面（東から）、断面 42



SD2862 近世区画大溝跡鞍部 2 断面（南から）、断面 46・48



SD2862 近世区画大溝跡鞍部 2 断面（南から）、断面 46・47・48



SD2862 近世区画大溝跡鞍部 2 断面（北から）、断面 46・47・48



SD2862 近世区画大溝跡鞍部 2 西側断面（北東から）、断面 46・47



SD2862 近世区画大溝跡、SK2861 大土壤断面（東から）、断面 20



SD2862 近世区画大溝跡、SD2820 平安時代区画溝跡、SK2864 土壤断面（西から）、断面 5

図版 11 第 1 工区検出の SD2862 近世区画大溝跡（1）



図版 12 第 1 工区検出の SD2862 近世区画大溝跡（2）



灰色砂質シルト層上部・下部に覆われる中央部から西部を望む1（東から）



灰色砂質シルト層上部・下部に覆われる中央部から西部を望む2（東から）



灰色砂質シルト層上部・下部に覆われる中央部（西から）

図版 13 第1工区中央部近景（1）—灰色砂質シルト層の分布1



中央部における灰色砂質シルト層上部・下部の分布（東から）



中央部における灰色砂質シルト層上部・下部の分布（北東から）



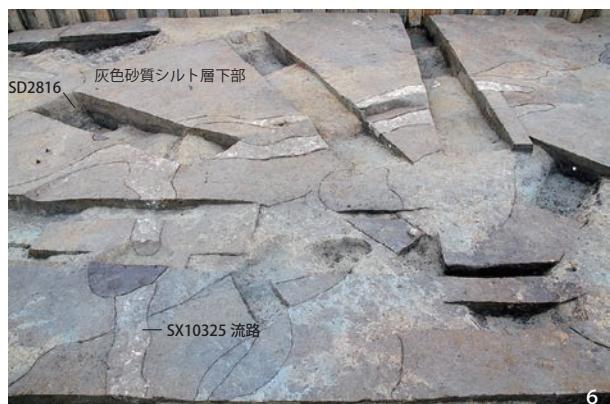
灰色砂質シルト層に覆われる中央部（西から）



中央部における灰色砂質シルト層上部・下部の分布（南東から）



灰色砂質シルト層下部より新しいSK2819大土壤断面（南西から）、断面 18



灰色砂質シルト層下部より新しい溝跡と古い溝跡の検出状況（北から）



灰色砂質シルト層下部より新しい流路と古い溝跡の検出状況（北から）



灰色砂質シルト層下部より新しいSD10325溝跡の検出状況（北から）

図版 14 第1工区中央部近景（2）—灰色砂質シルト層の分布 2



図版 15 第1工区中央部近景（3）—灰色砂質シルト層下部上面の遺構検出状況1



灰色砂質シルト層下部上面での遺構検出状況 4 (東から)



灰色砂質シルト層下部上面での遺構検出状況 5 (南から)



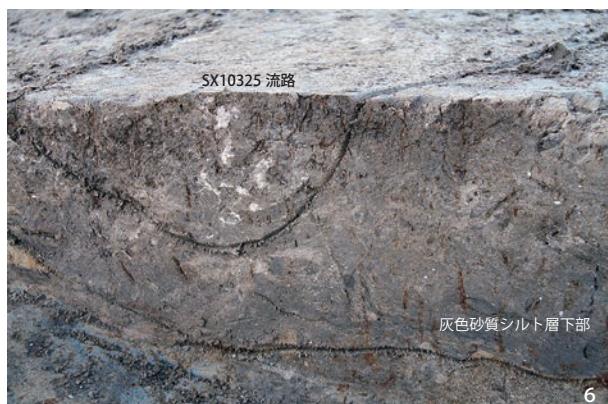
灰色砂質シルト層下部上面での遺構検出状況 6 (南西から)



灰色砂質シルト層下部上面での遺構検出状況 7 (南から)



灰色砂質シルト層下部より新しい SX10325 流路断面 (南西から)、断面 27



灰色シルト層下部より新しい SX10325 流路断面 (北東から)、断面 27



灰色砂質シルト層下部が流入した SD2798 溝跡と新しい SX10325 流路断面 (東から)、断面 11



灰色砂質シルト層下部が流入した SD2798 溝跡と新しい SX10325 流路断面拡大 (東から)、断面 11

図版 16 第1工区中央部近景 (4) — 灰色砂質シルト層下部上面の遺構検出状況 2



1

第2工区西半部の確認調査状況（西から）



2

第2工区東半部（湿地）の確認調査状況（東から）



3

第3工区の確認調査状況（西から）



4

第3工区西半部の北壁断面（南西から）



5

第3工区東部の遺構検出状況（東から）



6

第3工区東部のSD2894河川跡断面（北東から）、断面①



7

第3工区中央部の加工木材出土状況（北東から）



8

第3工区中央部の加工木材出土状況（真上から）

図版 17 第2・3工区の確認調査

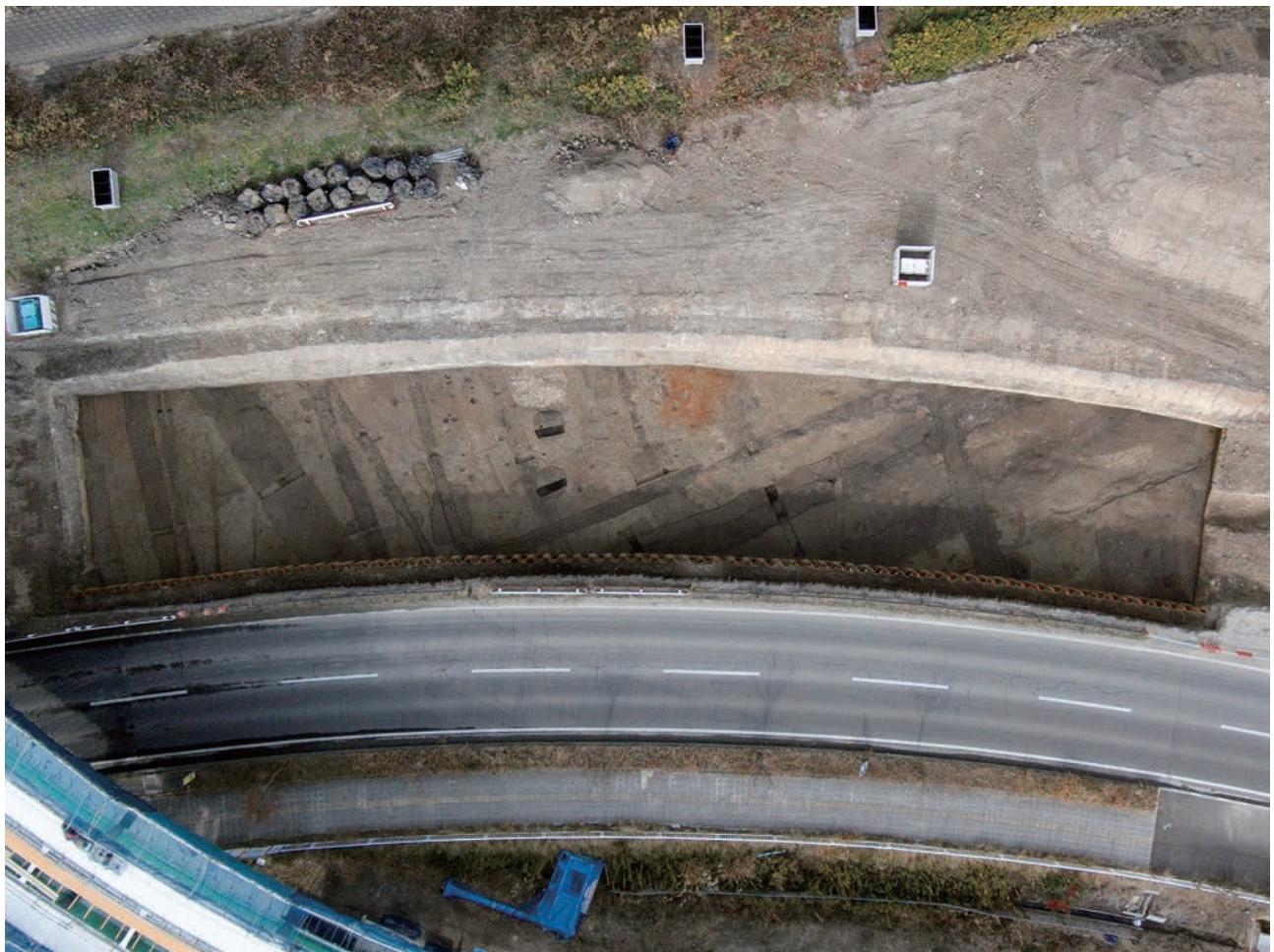


第4工区東半部平成26年度調査区空撮（東上空より）



第4工区東半部平成26年度調査区空撮（やや北上空より）

図版18 第4工区調査区東部空撮（1）



第4工区東半部平成26年度調査区空撮（やや北上空より）



第4工区東半部平成26年度調査区近景（東より）

図版19 第4工区調査区東部空撮（2）



図版 20 第4工区調査区東部空撮 (3)

SX10451 中世屋敷跡西辺・南辺内側区  
画溝跡 (SD10408)、SD10410 区画溝跡  
SI10409・10413～10415・10447 竪穴  
住居跡、SE10411・10412 井戸跡  
(真上南から)



奈良時代の SA2521 材木塀跡、平安時代  
の SX2651 北3道路跡 SD2551 北側  
溝・SD2550 南側溝、SI10434・10435  
・10436・10439・10441・10442・  
10443 竪穴住居跡、SE10433 井戸跡、  
SD2510 溝跡 (真上南から)



SI10434・10435・10436・10439・  
10441・10442・10443 竪穴住居跡、  
SA2521 材木塀跡、SX2651 北3道路跡  
SD2550 南側溝 (真上東から)



図版 21 第4工区調査区東部空撮 (4)

第4工区西半部全景（東から）



第4工区中央全景  
SD2561 奈良時代区画溝跡（奥）、SX  
2650 西 5 道路跡（手前）（北西から）



第4工区西部～中央全景（北西から）



図版22 第4工区調査区西部～中央部全景（平成25年度確認調査）



SD2563 古墳時代後期（栗廻式期）区画溝跡断面（南東から）、断面1



SI10434 古墳時代後期竪穴住居跡土師器甕・甑出土状況（南東から）



SI10436 古墳時代後期竪穴住居跡土師器甕出土状況（南東から）



奈良時代の SA10403 材木塀跡（東から）



奈良時代の SA2521 材木塀跡断面（西から）、断面6



奈良時代の SD2552 区画溝跡断面（南から）、断面2



奈良時代の SD2561 区画溝跡（北から）



平安時代以前の SF10348 小溝状遺構群と SX2652 西6道路跡（南西から）

図版23 第4工区検出の主要遺構（1）



SX2651 北 3 道路跡路面断ち割り下の波板状压痕（南東から）



SX2651 北 3 道路跡路面断面（南西から）、断面 6



SX2651 北 3 道路跡の SD2551 北側溝断面（北東から）、断面 7



SX2651 北 3 道路跡の SD2550 南側溝断面（南西から）、断面 6



SX2652 西 6 道路跡とそれよりも古い SF10348 小溝状遺構群（南から）



SX2650 西 5 道路跡とその断面（北西から）



SX2650 西 5 道路跡の SD2571 西側溝断面（北西から）



SX2650 西 5 道路跡の SD2570 東側溝断面（北から）

図版 24 第 4 工区検出の主要遺構（2）



SI10409 壁穴住居跡と SX10451 中世屋敷跡西辺区画溝跡（南から）



SI10409 壁穴住居跡の土器・丸瓦出土状況（南から）



3

SE10411 井戸跡とその断面（南から）、断面 10



4

SE10412 井戸跡とその断面（南から）、断面 11



5

SX10451 中世屋敷跡の SD2534 西辺外側区画溝跡（南から）、断面 16



6

SX10451 中世屋敷跡の SD10408 西辺内側区画溝跡（南から）、断面 18



7

SX10349 胴木（北から）



8

SX10349 胴木の胴木 1（北から）

図版 25 第4工区検出の主要遺構（3）



【種類】 1：非口クロ土師器甕 2・4・6～8：須恵器壺 3：須恵器蓋 5：須恵器壺  
9・10：須恵器高台壺

【出土遺構】 1～3：SD2766区画溝跡 4・5：SD2816区画溝跡 6～10：SD2820区画溝跡

10b ※写真図版中の番号は、第25・26図掲載の遺物実測図番号と一致

図版 26 遺物写真（1）第1工区出土の主な遺物 1



【種類】11・13・15：口クロ土師器内黒坏 12：赤焼土器坏 14：赤焼土器高台坏 16：口クロ土師器甕  
17：口クロ土師器内黒高台坏

【出土遺構等】11：SE10302井戸跡 12：SK2861土壤 13：SK10316土壤 14：SK2819土壤 15・16：SK10309土壤

17・18：灰色砂質シルト層下部 19～21：遺構確認面

※写真図版中の番号は、第25・26図掲載の遺物実測図番号と一致

図版 27 遺物写真（2）第1工区出土の主な遺物 2



22



23

土器 S = 1/3



24



25



26

瓦 S = 1/5



27



28

土製品・砥石 S = 1/2



29

漆器 S = 1/3



30

筐塔婆 S = 1/2

【種類】22：古墳時代中期（南小泉式期）土師器高坏 23：古墳時代前期（塙釜式期）土師器器台 24：有段丸瓦 25・26：平瓦

27：円盤状土製品 28：砥石 29：漆器 30：「七月十六日」墨書筐塔婆

【出土遺構等】22：SK10308土壙 23：表土 24：SK10309土壙 25：SD2820区画溝跡 26・28：SD2816区画溝跡

27：灰色砂質シルト層下部 29・30：SD2862近世区画溝跡

※写真図版中の番号は、第25・26・29図掲載の遺物実測図番号と一致

図版 28 遺物写真（3）第1工区出土の主な遺物 3



31



32



33



34



35



36



37



38



39a



39b

S = 1/3

【種類】31・32：須恵器壺H蓋 33・39：栗圓式期土師器甌 34：須恵器大甌 35～38：栗圓式期土師器甌

【出土遺構】31～34：SD2563古墳時代後期（栗圓式期）区画溝跡 35～39：古墳時代後期（栗圓式期式）SI10434竪穴住居跡

※写真図版中の番号は、第40図掲載の遺物実測図番号と一致

図版 29 遺物写真 (4) 第4工区出土の主な遺物 1



40



41



43



47



44



49



46 墨書「國」力



48



42b



50b



42a



50a S = 1/3 (46のみ実大)

【種類】40・41：栗圓式期土師器長胴甕 42：非口クロ土師器内黒蓋 43：須恵器坏 44：赤焼土器高台坏 45：非口クロ土師器甕  
46・50：ロクロ土師器内黒坏 47：灰釉陶器塊 48：円面硯 49：須恵器長頸壺

【出土遺構】40・41：SI10436竪穴住居跡 42：SD2552奈良時代区画溝跡 43：西5道路跡SD2570東側溝跡 44：SX2651北3道路跡  
路面整地層 45：北3道路跡路面1層 46～49：北3道路跡SD2550南側溝跡 50：SI10409竪穴住居跡

※写真図版中の番号は、第41図掲載の遺物実測図番号と一致

図版 30 遺物写真 (5) 第4工区出土の主な遺物 2



51



53



52



54



55



56



57



59



60

土器（51～57） S = 1/3  
瓦（58・59） S = 1/5 （58の拡大除く）  
砥石（60） S = 1/2

【種類】51・53：須恵器坏 52：ロクロ土師器内黒甕 54・55：ロクロ土師器甕 56：ロクロ土師器内黒坏 57：ロクロかわらけ小皿  
58：刻印「古」丸瓦 59：丸瓦ⅡB類 60：砥石

【出土遺構】51・52：SI10409竪穴住居跡 53：SI10435竪穴住居跡 54・55：SI10439竪穴住居跡 56：SE10433井戸跡

57：SD2534中世屋敷外側区画溝跡 58：SD10408溝跡 59：SI10435竪穴住居跡 60：北3道路跡SD2550南側溝跡

※写真図版中の番号は、第41・42図掲載の遺物実測図番号と一致

図版31 遺物写真（6） 第4工区出土の主な遺物3

## 報告書抄録

ふりがな	さんのういせき・いちかわばしいせきのちょうさーとしけいかくどうろいすみしおがませんかんれんいせきはつくつちょうさほうごくしょVII—									
書名	山王遺跡・市川橋遺跡の調査－都市計画道路（主要地方道『泉一塩釜線』関連遺跡調査報告書VII－）									
副書名	都市計画道路（主要地方道『泉一塩釜線』関連遺跡調査報告書VII－）									
巻次	VII									
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書									
シリーズ番号	第238集									
編著者名	柳澤和明・上山佳彦・相原淳一									
編集機関	宮城県教育委員会									
所在地	〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町3-8-1 Tel.022-211-3682									
発行年月日	西暦 2015年10月30日									
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 。' "	東経 。' "	調査期間	調査面積	調査原因			
さんのういせき 山王遺跡	みやぎけん 宮城県 たがじょうし 多賀城市 なんぐう・はちまん 南宮・八幡 ちなん 地内	042099	18013	38° 18' 05" ～ 38° 18' 09"	140° 58' 24" ～ 140° 58' 46"	平成25年7月 16日～12月 18日、平成 26年11月4日 ～12月15日	確認調査 7,600m <sup>2</sup> (長さ約760 m×幅約10 m)	主要地方道『泉一塩釜線』4車線化 工事（東日本大震災復興関連事業）		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項					
山王遺跡 町・伊勢地区	古代地方都市 の北西外縁部	奈良～ 平安時代	区画溝跡5条、井戸跡2基、小溝状遺構群(畾跡) 2箇所	非クロコ土師器甕、ロクロ土師器内黒 坏・高台坏、須恵器坏・高台坏・蓋・ 甕・長頸甕、赤焼土器坏・高台坏、平 瓦、丸瓦	陸奥国府多賀城跡の方格地割の西は すれにおける8世紀後半～10世紀中 頃の土地利用状況が明確となった。					
	集落跡 (近世町屋)	江戸時代	北辺区画大溝跡1条、 土壤2基、小溝跡1条	内朱・外黒地草花文朱描漆器椀、 「七月十六日」墨書き塔婆	①町屋の北辺区画施設の構造と変遷 が明確化、②塔婆は孟蘭盆会関連。					
山王遺跡 八幡地区～ 市川橋遺跡 八幡地区	拠点の大集落 跡	古墳時代 後期 栗団式期	区画溝跡1条、竪穴住居 跡2軒	栗圓式期土師器長頸甕・甕、須恵器坏 H蓋・大甕	6世紀末～7世紀中頃でもやや新し い頃（660年代末頃）にかけて存続 した拠点の大集落跡の北東縁部					
	陸奥国府多賀 城跡の城外	奈良時代	材木堆跡5条、区画溝跡 2条	非クロコ土師器内黒蓋・甕	陸奥国府多賀城跡城外の方格地割形 成以前の区画施設					
	古代地方都市 の北縁部	平安時代	道路跡3（西5・西6・ 北3）、竪穴住居跡3軒 井戸跡1基、溝跡2条	非クロコ土師器甕、ロクロ土師器内黒 坏・内黒甕・甕・墨書き「國」坏、須恵 器坏・長頸甕・甕、赤焼土器坏・高台 坏、灰釉陶器塊、円面鏡、刻印「占」・ 有段丸瓦、平瓦、砥石	西3北3道路交差点以南の西3道路 跡と以東の北3道路跡が9世紀前半 の方格地割I期に造営され、方格地 割III期まで存続したことが明らかと なった。					
	屋敷跡	鎌倉時代	二重の方形区画溝跡2条	ロクロかわらけ小皿	二重の区画溝で方形に区画された13 世紀後半頃の屋敷跡南西部					
		その他	竪穴住居跡10軒、建物 跡1棟、井戸跡2基、烟 跡1箇所、土壤4、溝跡 7条、胴木3							
<b>【古墳時代後期（栗団式期）】</b> 市川橋遺跡八幡地区の第4工区は、6世紀末～7世紀中頃でもやや新しい頃（660年代末頃）の拠点的集落の北東縁部に当たり、区画溝跡を検出した。										
<b>【奈良時代】</b> 山王・市川橋遺跡八幡地区（第4工区）で、陸奥国府多賀城跡城外の方格地割形成以前の区画施設（材木堆跡、区画溝跡）の北側延長を検出した。										
<b>【平安時代】</b> 山王遺跡町・伊勢地区の第1工区では、北2道路跡の北約60mに位置する9世紀前半の東西区画溝跡を境に、北側が耕作域（畑）、南側（旧調査区側）が居住域となっていた。9世紀中頃、河川氾濫とみられる自然堆積層の堆積を契機に、区画溝、畑が廃絶したことが明らかとなり、方格地割の西はすれにおける土地利用状況が明確となった。 山王・市川橋遺跡八幡地区の第4工区で、西5・西6・北3道路跡を検出した。SX2651北3道路跡は、5期区分された旧調査の成果と対比し、これが方格地割が形成される9世紀前半のA期、貞觀11年(869)陸奥国巨大地震当時のB期、その復興期の9世紀後葉のC期、灰白色火山灰の降灰した10世紀前葉のD期、10世紀前葉～中頃と考えられるE期に区分した。その結果、西3北3道路交差点以南の西3道路跡と以東の北3道路跡が9世紀前半の方格地割I期に造営され、方格地割III期まで存続したことが明らかとなった。										
<b>【鎌倉時代】</b> 市川橋遺跡八幡地区の第4工区で、方形区画溝跡で二重に区画された屋敷跡の南西部となるL字状方形区画溝跡2条を検出した。13世紀後半頃の屋敷跡とみられ、新たに検出した屋敷跡である。										
第1工区から第4工区までの東西約760mにわたって実施した幅約10mの細長いトレーニング調査で、古墳時代後期（栗団式期）～古代（奈良・平安時代）の遺構面IIの標高を検討した結果、陸奥国府多賀城跡の方格地割の北側における土地利用を考える上で参考となる以下の知見が得られた。 ①第1工区から第4工区までの遺構面IIは、大局的にみると西側の第1工区から東側の第4工区に向けて低下している。②遺構面IIの標高は、西端が3.8m、東端が2.9mで、標高差は0.9mある。③第1工区で灰色シルト層が堆積した箇所は両隣よりも低く、この箇所に河川氾濫堆積物が自然堆積した状況を裏付けている。9世紀中頃の灰色シルト層下部の粒度・珪藻分析では、河川氾濫による堆積物で淡水生種の珪藻が主体を占め、わずかに汽水生種の珪藻が含まれることが判明した。④第2工区～第3工区にかけては湿地として標高も低く、土地利用されていない状況がよく理解できる。⑤第4工区では西5・西6道路が東側の居住区域よりも標高が低く、標高の低い区域を選んで道路が造営された状況がよくわかる。⑥この西6道路跡の西側は西6道路跡よりもさらに標高が20cm低い。大雨など道路側溝が冠水・横溢した際に、より低い箇所に水流が流れることを意識したためか、土地利用されていない。										

---

---

宮城県文化財調査報告書第 238 集  
山王遺跡・市川橋遺跡の調査

—都市計画道路（主要地方道）『泉—塩釜線』関連調査報告書Ⅷ—

平成 27 年 10 月 30 日印刷  
平成 27 年 10 月 30 日発行

発行 宮城県教育委員会  
〒 980-8423  
仙台市青葉区本町 3 丁目 8 番 1 号  
印刷 株式会社 東北プリント  
〒 980-0822  
仙台市青葉区立町 24 番 24 号

---

---





